

年報

令和6年度（2024年度）



Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

2024 年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学

理事長・学長 麻原きよみ

2024 (R6) 年度の年報が発行されました。2024 (R6) 年度を振り返ってみますと、2023 (R5) 年度に実施した学部入学試験において、一般試験の出願倍率が低下しました。このことを受け 2024 (R6) 年度当初から、全学的な入試改革に取り組みました。結果、学部出願倍率を大幅に改善することができました。また、草間朋子初代学長からのナイチンゲール記章の寄贈を受け、本学エントランスに特設コーナーを設けました。さらに、本学の MVV (ミッション・ビジョン・バリュー) を検討しました。一方、2026 (R8) 年度より、大学院博士後期課程に DNP コースを設置することを決定いたしました。このように 2024 (R6) 年度は、本学の来し方を振り返りながら本学のあり方を捉え直し、将来に向けた方向性を考えることのできた年ではないかと思います。

大学評価には、公立大学法人評価、学校教育法で定められた機関別認証評価と義務ではありませんが分野別評価があります。もう一つ、大学自身が行う教育研究、社会貢献、運営に関する自己点検・評価があり、これが年報に当たります。2022 (令和 4) 年度の大学機関別認証評価では、本学の年報について、教員個人レベルから委員会レベル、全学レベルまで組織的に毎年度実施して、内部質保証の充実に努めていると高く評価されました。一方、公立大学法人の第 4 期中期計画は、今までの中期計画と異なり 72 項目の評価指標が設けられました。2024 (令和 6) 年度は第 4 期中期計画の初年度であり、評価指標達成のための進捗管理によって PDCA サイクルを回しながら、質の高い教育研究活動や社会貢献、効果的効率的な大学運営を推進するために、内部質保証推進の体制と方法の整備を行いました。これらの大学評価において、進捗管理・推進の要となり、PDCA サイクルを駆動させたのは自己点検・評価委員会です。

2025 (R7) 年 2 月 21 日の中央教育審議会「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～(答申)(中教審第 255 号)」では、新たな認証評価制度に移行することが示されました。評価方法や内容が変化しようとも、本学の目的および使命を果たすために本学が絶えず改善・向上に取り組んでいることを常に自己点検・評価することが重要であり、その内容を社会に対してきちんと説明し、示すことの必要性は変わりません。

2024 (令和 6) 年度の年報をお読みいただき、忌憚のないご意見、ご指導賜りたくどうぞよろしくお願い申し上げます。

2024 年度 大分県立看護科学大学 トピックス

理事長・学長に麻原きよみ氏が就任

理事長・学長に麻原きよみ氏（写真）、事務局長（理事）に阿部剛氏が4月1日に就任しました。また、次年度から学外理事に井原健二氏（大分大学医学部附属病院院長）と宇都宮徹氏（大分県立病院院長）、教育研究審議会学外委員に津村弘氏（大久保病院院長）の就任が決定しました。



保健師・助産師・NP、合格率 100%

保健師・助産師国家試験、NP 資格認定試験に全員合格しました。看護師国家試験は1名を除き全員合格でした。3月18日の卒業・修了式で、学部生85名、大学院生32名が卒業・修了しました。



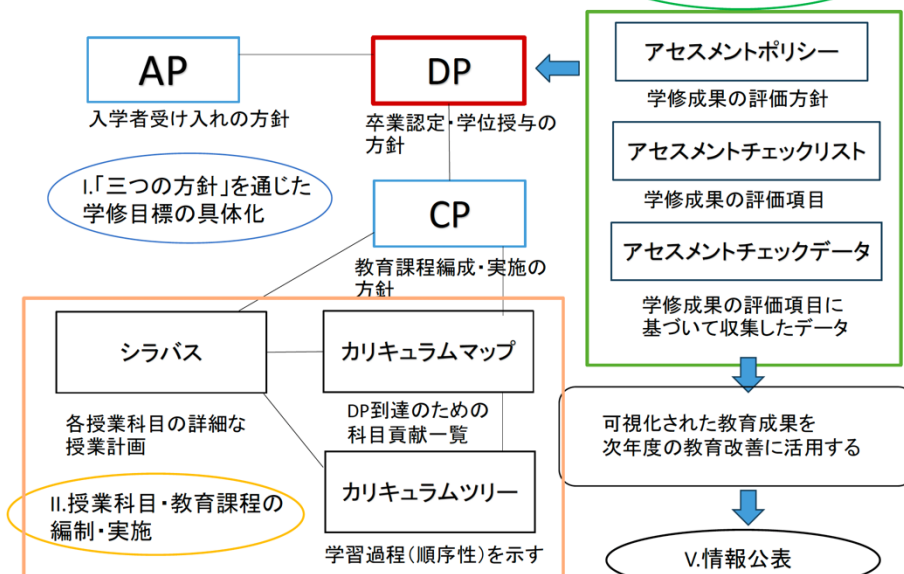
法人評価（第3期中期計画）で高評価

7月11日の大分県地方独立行政法人評価委員会で、6年間の第3期中期計画（2018-2023）の業務実績が評価され、教育研究の質の向上、業務運営の改善及び効率化、財務内容の改善の3つの大項目でS評価を頂きました。

【参考：大項目評価の結果】

I	II	III	IV	V
教育研究等の質の向上	業務運営の改善及び効率化	財務内容の改善	自己点検・評価及び情報提供	その他業務運営
S 非常に優れている	S 非常に優れている	S 非常に優れている	S 非常に優れている	S 非常に優れている
A 良好	A 良好	A 良好	A 良好	A 良好
B おおむね良好	B おおむね良好	B おおむね良好	B おおむね良好	B おおむね良好
C 不十分	C 不十分	C 不十分	C 不十分	C 不十分
D 重大な改善事項あり	D 重大な改善事項あり	D 重大な改善事項あり	D 重大な改善事項あり	D 重大な改善事項あり

教学マネジメント指針に基づいた 本学の教学マネジメント・教学IR



教学マネジメント・教学IR アセスメントチェックデータを公表

4年間の看護師基礎教育の評価として、1～3年次の学生は自己の学修成果を把握するために、ディプロマポリシー（以下、DP）の自己評価を教務情報システム（キャンパススクエアのキャリアアカルテ）に入力しました。2、3年生は、各学年における大項目別のDP平均値が前年度よりも高くなりました。4年次生については、旧カリキュラムにおけるDP評価を質問紙形式で行いました。旧カリキュラムDPに示す能力の項目の全項目において平均4点以上※でした。アセスメントチェックリストに沿って、多角的な教育成果を可視化、一元化し、教育研究審議会を経て学内で情報共有を行いました。また、令和6年度教学マネジメントⅡ研修を行い、学生のDP自己評価結果の共有、学生のDP達成に向けた教育について情報提供を行いました。また、学生を対象とした教育に関するアンケート結果も改善に向けて共有を行いました。教育の学習成果についてはホームページに掲載しました。※とても身に付いた（5点）／全く身に付かなかった（1点）の5段階評価、回答者78名（91.8%）

入試改革でV字回復

学長の提案で入試改革 TG（リーダー：影山隆之教授）が設置され、受験生増加について検討し、大学入学共通テストの科目指定変更、小論文の導入、県内高校訪問、高校生対象の公開講座（下の写真）、オンライン個別進学相談会、高校教諭対象進学説明会、デジタルメッセージ、スマホポップアップメッセージ、コメンテーターガイド等の導入・改善に取り組んだ結果、入学試験出願倍率は昨年の 3.1 倍（前期入試 1.7 倍）から 5.6 倍（4.0 倍）と V 字回復を果たしました。



MVV の策定を開始

学長が若手教員を中心とした MVV タスクグループを立ち上げ、本学の MVV（ミッション、ビジョン、バリュー）の検討を開始し、3 月の TG の答申を受け、教育研究審議会に原案が示されました。次年度中に確定し、HP 等で公表を予定しています（下の図は現案）。



大学院 DNP コースの新設の方針が決定

学長が博士課程後期に DNP（Doctor of Nurse Practice）コースの新設を提案して TG を立ち上げて検討を進め、3 月の答申を受け、教育研究審議会で新設の方向性が承認されました。今後、理事会・経営審議会の承認後、2026 年 4 月の開設を目指して準備を進めていく予定です。

3）カリキュラム（科目構成）

コース	専攻領域	授業科目	配当		単位数		修了要件
			年次		必修	選択	
共通	基盤分野	理論看護学				2	基盤分野科目から 2 科目以上（4 単位）
		看護科学研究方法Ⅰ（量的）				2	
		看護科学研究方法Ⅱ（質的）				2	
		システマティックレビュー				1	
DNP コース	DNP 専門科学	DNP 特論Ⅰ（DNP の役割、組織変革とリーダーシップ）	1 または 2		2		DNP 特論に関する必修科目を 3 科目（6 単位）及び DNP 特別演習（2 単位）
		DNP 特論Ⅱ（医療の質評価と改善、政策）	1 または 2		2		
		DNP 特論Ⅲ（プロジェクト研究）	1 または 2		2		
		DNP 特別演習	1, 2 または 3		2		
		DNP 特別研究	1～3		6		合計 18 単位以上

ナイチンゲール記章を展示

第 49 回フローレンス・ナイチンゲール記章を受章した草間朋子初代学長より本学に記章を寄贈して頂きました。記章は大学エントランスに展示することになり、草間氏にもご臨席を賜り（Zoom）、12 月 18 日に寄贈式が執り行われました。



第 4 期中期計画の管理体制を整備

第 4 期中期計画（2024-2029）の数値目標等の進捗状況を管理する目標管理シートを作成し、自己点検・評価委員会が取りまとめ、4 回の内部質保証推進会議で進捗状況等が確認され、承認されました。

大分県立看護科学大学 第 4 期中期計画 評価指標 進捗状況					
項目	評価項目	目標値	目標達成率（%）	備考	
(1) 総括					
① 教育の内容及び到達目標					
(11) 学習態度	4 年間の看護基礎教育を履修し、ディプロマポリシー（以下 DP）第 1 力の達成状況	DNP に関するアンケートにおいて 4 年次生の 80%以上が DP の第 1 力の達成状況を「満足」または「やや満足」と回答（第 4 期中間年度）	100%	-	
(12) 専門知識及び技能	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
(13) 社会貢献能力	卒業生が、卒業後、社会貢献活動に積極的に参加し、社会貢献能力を身に付ける（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、社会貢献活動に積極的に参加し、社会貢献能力を身に付ける（第 4 期中間年度）	100%	-	
② 教育の質の向上					
(21) 教育の質の向上	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
(22) 教育の質の向上	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
③ 教育の質の向上					
(31) 教育の質の向上	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
(32) 教育の質の向上	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
④ 教育の質の向上					
(41) 教育の質の向上	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
(42) 教育の質の向上	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
⑤ 教育の質の向上					
(51) 教育の質の向上	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
(52) 教育の質の向上	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
⑥ アカデミック・ポリシー（以下 AP）に基づいた優秀な学生の育成					
(61) アカデミック・ポリシー（以下 AP）に基づいた優秀な学生の育成	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
(62) アカデミック・ポリシー（以下 AP）に基づいた優秀な学生の育成	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
(63) アカデミック・ポリシー（以下 AP）に基づいた優秀な学生の育成	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
⑦ 学生の支援					
(71) 学生の支援	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
(72) 学生の支援	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	
(73) 学生の支援	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	卒業生が、卒業後、看護職に就くための必要知識及び技能を身に付け、看護実践に活用できる（第 4 期中間年度）	100%	-	

村嶋幸代前学長が名誉学長に

村嶋幸代前学長（写真中央）に佐藤樹一郎大分県知事から名誉学長の称号が 10 月 18 日に授与されました。また、村嶋幸代名誉学長からの 500 万円の寄付金を原資にして大学院生を対象とした「村嶋名誉学長学資支援奨学金制度」を創設しました。



教員・学生が学会賞等を受賞

石田佳代子准教授（看護アセスメント学）が日本職業・災害医学会で奨励賞を受賞しました。また、篠原彩助教（看護研究交流センター、下の写真）が日本老年社会学会第66回大会で論文賞を受賞しました。さらに、秦さと子教授（基礎看護学）と樋口幸准教授（助産学）が第12回看護理工学会学術集会で優秀演題賞をW受賞しました。一方、第65回日本母性衛生学会で大学院修士（助産学コース）の森楓さんが学術論文優秀賞を受賞しました。



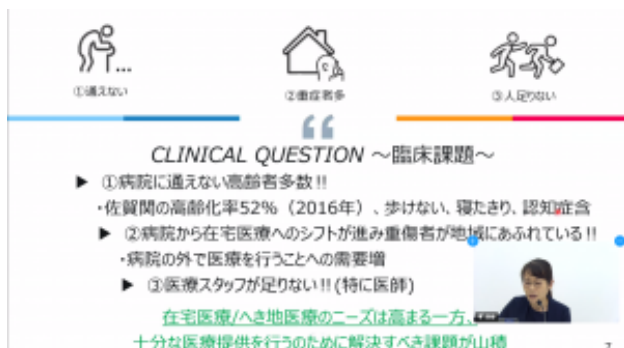
トビタテ！留学 JAPAN に採択

「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラム～ダイバーシティコース 2024 年度の派遣留学生として、本学の4年次生が選ばれました。ダイバーシティコースは、専門領域における課題解決に取り組む留学計画を立てて応募するもので、看護学生としてピアサポートを学びたいという目標を掲げてチャレンジしました。



看護国際フォーラムを開催

第25回看護国際フォーラム「診療看護師（NP）と拓く看護の未来 ―地域におけるシームレスな取り組み―」を大分県看護協会との共催で10月26日（土）にオンラインで開催しました。参加者は300名を超え、国内外で活躍する3名の講師による講演に加え、その後の総合討論でも活発な意見交換が行われました。



学長賞を新設

学長の提案で今年度より、その年に教育・研究・大学運営・社会貢献で功績のあった教職員に対して学長賞を授与することになり、今年度は、入試改革で功績のあった影山隆之教授（精神看護学、写真左）と佐藤英氏（教務学生 G、写真右）に授与されました。



インドネシア看護協会の視察

インドネシア看護協会会長 Dr. Harif Fadilah ご一行が7月29日に来学されました。本学の紹介や NP についての説明や意見交換の後、実習室をご案内いたしました。より高度な実践能力を持つ看護職の育成に関する連携を前提とした活発な意見交換が行われました。



教員相互の授業参観の導入を決定

FD/SD 委員会が、自律的な授業改善、教育での相互協力、人間科学と看護学の各科目間の連動を意識した教育の一助とするため、次年度から教員相互の授業参観を開始することになりました。



2024 年度年報・目次

トピックス

1. 学内行事	1
2. 入学試験等	5
3. 学生の状況と進路	12
4. 授業等	17
5. 研究室活動	109
6. 研究助成・事業助成等	133
7. 研究業績	141
8. 社会貢献	159
9. 教学・事務組織	178
10. 名簿	226

1 学内行事

1-1 学年暦

令和6年度 学 年 暦

4月

- 8 入学式
- 9 全学オリエンテーション
- 10 新入生オリエンテーション
- 10 授業開始（2～4年次生）
- 9～19 履修登録
- 11 授業開始（1年次生）
- 17 予防的家庭訪問実習開始
- 23. 24 健康診断

5月

- 7～31 在宅看護論実習，地域看護学実習（4年次生）
- 17 キャンパスクリーンデー
- 18. 19 若葉祭

6月

- 19 開学記念日
- 10～28 総合看護学実習（4年次生）

7月

- 13 オープンキャンパス
- 16 夏期休業開始（1～3年次生）
- 17 大学院特別選抜試験
- 21 夏期休業開始（4年次生）
- 22～8/1 小児看護学（保育所）実習（3年次生）

8月

- 23 大学院入学試験

9月

- 2 夏期休業終了（1～3年次生）
- 2～11/22 老年看護学実習，成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ，小児看護学実習，母性看護学実習，精神看護学実習（3年次生）
- 3 二学期授業開始（1～3年次生）
- 5 夏期休業終了（4年次生）
- 21 公開講座

10月

- 1 後期授業開始（4年次生）
- 26 看護国際フォーラム

11月

- 21 卒業研究論文要旨提出締切（4年次生）
- 23 学校推薦型選抜試験および社会人選抜試験
- 29 卒業研究論文提出締切（4年次生）

12月

- 1 三学期授業開始（1～3年次生）
- 2. 3 卒業研究発表会
- 9～23 看護アセスメント学実習（2年次生）
- 24 冬期休業開始

1月

- 7 冬期休業終了
- 18. 19 大学入学共通テスト
- 20～31 基礎看護学実習（1年次生）

2月

- 16 看護師国家試験
- 25 一般選抜試験（前期）および私費外国人留学生選抜試験
- 26 進級試験（2年次生）
- 28 三学期、後期授業終了

3月

- 1 春期休業開始
- 12 一般選抜試験（後期）
- 18 卒業式・修了式

1-2 オープンキャンパス

7月13日（土）に午前と午後の2部構成で開催した。学長挨拶、大学紹介、入試概要説明、授業料・奨学金等の説明、在校生による合格体験談・メッセージ、模擬授業、研究室ごとの体験企画、進学相談、大学・研究室紹介パネル展示を実施した。開催に先立ち、Instagram 広告及び Google ディスプレイ広告に出稿し、広報活動を行った。当日は午前部に高校生 159 名、保護者 100 名、午後の部に高校生 115 名、保護者 70 名で合計 444 名の参加があった。昨年度より約 100 名の増加となった。参加者からは「合格体験談」や「在校生メッセージ」が進路を選ぶ際の参考になったという意見が多かった。また、今年度、新しい取り組みとして、約 60 名の在學生に協力を要請し、学生ツアーガイドを実施した。参加者は在學生と交流することで本学の魅力や大学生活がイメージできたようであった。

来年度は今年度好評であったプログラムを継続していくとともに、当日参加できない方に向けて、キャンパスツアーは随時行っていることを、大学ホームページや SNS (Facebook、Instagram、LINE) で積極的に周知していく予定である。

1-3 看護国際フォーラム

第 26 回看護国際フォーラムを令和 6 年 10 月 26 日（土）に大分県看護協会と共催で Zoom ウェビナーで開催した。テーマを「診療看護師(NP)と拓く看護の未来 地域におけるシームレスな取り組み」とし、米国から 1 名の講師が録画プレゼンテーション、国内から 2 名の講師がライブプレゼンテーションをした。講演後の総合討論には、国内講師 2 名がライブ参加し、活発な質疑と討論が行われた。参加者は 240 名と大盛況であり、参加者背景は高校生、診療看護師や看護管理者を含む看護職、教員の他、企業からの参加もあった。参加者アンケートの結果では講演内容・総合討論の満足度は、それぞれ 99.1%、98.0%であり、全体として参加者の満足度は高かった。

1-4 国際交流

MOU 締結校である韓国の蔚山大学、仁荷大学、およびインドネシアのムハマディア大学と以下の国際交流を実施した。

1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護過程学生受入れと交流

受入れ学生を昨年度から 2 名増員し、蔚山大学から学部生 8 名と同行教員 2 名を 7 月 15 日から 7 月 19 日までの 5 日間受入れ、県内 3 カ所の施設訪問や学内での学生交流を実施した。令和 6 年度の学内交流では、学生が日本の文化や看護教育についてプレゼンテーションする企画を立て、事前学習・事前準備を行い当日の交流に臨んだ。実施後の蔚山大学学生へのアンケートでは、施設見学や学生との交流について、全員が「満足」と回答していた。

2) 蔚山大学校医科大学への本学学生派遣と交流

4月～5月に学部2・3・4年次生から派遣希望者を募集し、派遣学生も昨年度から2名増員し、8名を選出した。8月19日から8月23日までの5日間、本学の学部2年次生3名、4年次生5名の計8名が同行教員2名と共に韓国の蔚山大学校医科大学看護学部を訪問した。現地では大学での講義や周辺地域の施設見学等に参加し、プログラム全体を通しての経験について、全員が「満足」と回答した。参加学生は学生交流プログラムの目的、および派遣前に学生自身が立てた目標を達成できた。

3) 韓国の仁荷大学校医科大学看護過程学生受入れと交流

2023年度にCOVID-19感染拡大の影響で令和3年度から延期となっていた韓国インハ大学医学部看護学科の本学訪問が実現したが、今年度も継続してインハ大学学生を受入れた。インハ大学の学部生7名と教員1名を2月9日から13日の5日間受入れ、県内3箇所の施設訪問と学内での学生交流を実施した。本学全学年から交流希望学生を募集し、1～3年次生計7名の学生が交流に参加した。双方の参加学生は交流内容について全員が「満足」と回答していた。

4) インドネシアのムハマディア大学とのオンライン学生交流

インドネシアのムハマディア大学と、国際交流の一環として国際看護学演習の授業時間を活用し、9月26日（木）にオンライン学生交流を実施した。本学から2年次生50名、UMYから75名が参加し、双方の大学で2名ずつのペア、4名ずつのグループに分かれてオンライン交流に臨んだ。互いの文化や看護について学ぶ貴重な機会となった。

1-5 若葉祭

若葉祭を5月18日（土）、19日（日）に開催した。テーマは阜福（こうふく）であり、参加者は約510名であった。屋内ステージでは、学生の軽音楽、会場参加型ゲーム、富士見ヶ丘地区の方々の歌、外部有志者のダンスなど学内外の多くの方々が参加するイベント企画で賑わった。また献血車や地震体験車の設置、災害体験、メンタルチェックなど外部の専門機関と学生による協働企画もあり、参加者の関心を高めていた。

コロナ禍以降の若葉祭再開から2年目であるが学生を中心とした運営で盛会に終了した。

1-6 公開講座

9月21日（土）に対面（大分県立看護科学大学講堂）とオンラインで同時開催した。今年度のテーマは「医療的ケア児とその家族を取り巻く社会～医療的ケア児とその家族に対する法律の施行後の実態～」と題して、本学小児看護学研究室教授の草野淳子氏は「医療的ケア児を取り巻く社会的状況

及び在宅でのケア体制」、大分県教育庁特別支援教育課指導班指導主事の首藤武範氏は「医療的ケア児の学校生活の充実に向けた体制づくり」についてそれぞれ講演した。告知のチラシは、県内の小学校、中学校、高等学校、保育施設、病院や各種施設等に配布した。参加者の年代は10代から60代以上と幅広かった。また、職業も医療従事者に限らず、高校生、会社員、大学教職員など様々で、総勢104名の参加があった。終了後のアンケートでは、「大変良かった」「良かった」が94%と高い評価が得られた。参加理由は「テーマに興味があったから」が最も多く95%であり、情報源は「大学からの案内」、「チラシ」、「本学のHP」、「知人・友人からの紹介」の4つで約7割を占めた。今後の開催方法としては、対面希望とオンライン希望でそれぞれ50%と多かったため、次年度も対面とオンラインの同時開催を計画する。また、大分県民に関心の高いテーマを選定して開催できるよう企画する。

1-7 アニュアルミーティング

アニュアルミーティングは、教員同士が互いの研究内容を把握するとともに、研究活動に必要なスキルを高める機会である。学内競争的研究費を獲得した全教員および過去3年間アニュアルミーティングでの発表がない助教以上の教員には、発表が義務付けられている。

今年度は3月14日（金）13:00～15:30に開催した。発表演題数は15演題、参加者数は発表者15名を含め47名であった。発表要旨集は図書館に所蔵している。

今年度はポストコロナを踏まえ、カレッジホールにおいてポスター発表と質疑応答を併用する形式を採用した。発表全体を2群に分け、各群につき発表および質疑応答の持ち時間をそれぞれ60分とした。スケジュールは、11月に発表予定者へ日程を提示、12月上旬に演題登録を締切り、2月上旬に発表要領を通知、3月上旬に要旨提出を締切とした。

当日は各群とも活発なディスカッションが展開されたが、時間に余裕があった印象である。次年度も対面形式での実施を予定しており、開会挨拶と講評を含めて今年度より短縮化を図り、円滑に進行できるよう、日程および前後の進行管理を検討する。

2 入学試験等

2-1 学部入試

令和7年度入学試験の選抜区分及び募集人員、入学者選抜試験結果の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員				
			一 般 選 抜		学校 推薦型 選抜	社会人 選抜	私費外国 人留学生 選抜
			前期日程	後期日程			
看護学部	看護学科	80 人	40 人	10 人	30 人	注1) 若干名	注2) 若干名

注1) 社会人選抜の「若干名」は学校推薦型選抜の30人に含める。

注2) 私費外国人留学生選抜の募集人員「若干名」は一般選抜前期日程の40人に含める。

入学者選抜試験結果の概略

(単位：人、倍、%)

区 分		志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
						計	県内 (率)	男性 (率)
学校推薦型		83	83	30	2.8	30	30 (100.0)	2 (6.7)
社会人		0	0	0	—	0	—	—
私費外国人留学生		0	0	0	—	0	—	—
計		83	83	30	2.8	30	30 (100.0)	2 (6.7)
一 般	前期日程	161	155	47	3.3	42	21 (50.0)	5 (11.9)
	後期日程	203	93	12	7.8	9	4 (44.4)	0 (0.0)
	計	364	248	59	4.2	51	25 (49.0)	5 (9.8)
合 計		447	331	89	3.7	81	55 (67.9)	7 (8.6)

試験教科等

区 分		教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
学校推薦型		総合問題 面接	令和 6 年 11 月 23 日（土）	令和 6 年 11 月 1 日（金）～11 月 8 日（金）
社会人				
私費外国人留学生		総合問題 面接	令和 7 年 2 月 25 日（火）	令和 7 年 1 月 27 日（月）～2 月 5 日（水）
一 般	前期日程	総合問題 面接	令和 7 年 2 月 25 日（火）	令和 7 年 1 月 27 日（月）～2 月 5 日（水）
	後期日程	総合問題 面接	令和 7 年 3 月 12 日（水）	

2-1-1 学校推薦型選抜

大分県内の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接等	計
学校推薦型	200	50 注1) 段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	250

注1) 面接等 50 点に、出願書類（活動報告書）の評価点 20 点を含む。

2-1-2 社会人選抜

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を設けているが、志願者はなかった。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」を試験科目とし、試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
社会人	200	40 得点が配点の 50%以下の場合は、総合点にかかわらず不合格とする	240

2-1-3 私費外国人留学生選抜

日本国籍を有しない者であって、所定の要件を満たした在留資格を有する者に対して、私費外国人留学生選抜を設けているが、志願者はなかった。

「総合問題」と「面接」を試験科目とし、試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
私費外国人 留学生	200	段階評価を行い、その評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	200

2-1-4 一般選抜

① 前期日程

令和 7 年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

教科	科目		教科・科目数
国語	『国語』	1 科目	5 教科 6 科目 または 6 教科 6 科目
地理歴史	『地理総合，地理探究』 『歴史総合，日本史探究』 『歴史総合，世界史探究』 『地理総合／歴史総合／公共』	左記科目から 1 科目	
公民	『公共，倫理』 『公共，政治・経済』 『地理総合／歴史総合／公共』(再掲)	2 科目を受験した場合は、いずれか 高得点の科目を合否判定に利用	
数学	『数学Ⅰ，数学A』 『数学Ⅱ，数学B，数学C』	左記科目から 2 科目	
情報	『情報Ⅰ』	3 科目を受験した場合は、高得点の 上位 2 科目を合否判定に利用	
理科	『物理基礎／化学基礎／ 生物基礎／地学基礎』 『物理』 『化学』 『生物』 『地学』	左記科目から 1 科目 2 科目を受験した場合は、いずれか 高得点の科目を合否判定に利用	
外国語	『英語』	1 科目	

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史 ・公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学 共通テスト	100 注 1)	50 注 2)	100 注 3)	100 注 4)	200 注 5)	—	—	550
個別試験	—	—	—	—	—	200	30	230
計	100	50	100	100	200	200	30	780

注 1) 「国語」100 点は、200 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 2) 「地理歴史」「公民」50 点は、1 科目 100 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 3) 「数学」「情報」の配点は、1 科目を 50 点に換算し計 100 点とする。

注 4) 「外国語」の「英語」は、「リーディング」及び「リスニング」の合計点とする。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

② 後期日程

令和 7 年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

教科	科目		教科・科目数	
国語	『国語』	1 科目	3 教科 3 科目 4 教科以上受験した場合は、高得点の上位 3 教科を合否判定に利用 地理歴史・公民、数学・情報、理科において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に利用	4 教科 4 科目
地理歴史	『地理総合，地理探究』 『歴史総合，日本史探究』 『歴史総合，世界史探究』 『地理総合／歴史総合／公共』	左記科目から 1 科目		
公民	『公共，倫理』 『公共，政治・経済』 『地理総合／歴史総合／公共』 (再掲)			
数学	『数学Ⅰ，数学A』 『数学Ⅱ，数学B，数学C』	左記科目から 1 科目		
情報	『情報Ⅰ』			
理科	『物理基礎／化学基礎／ 生物基礎／地学基礎』 『物理』 『化学』 『生物』 『地学』	左記科目から 1 科目		
外国語	『英語』	1 科目		

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史 ・公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学 共通テスト	(100) ^{注1)}	(100)	(100)	(100)	200 ^{注2)}	—	—	500
個別試験	—	—	—	—	—	200	30	230
計	300				200	200	30	730

注 1) 「国語」100 点は、200 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 2) 「外国語」の英語は、「英語」は、「リーディング」及び「リスニング」の合計点とする。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

2-2 令和7年度大学院看護学研究科博士課程（前期）

2-2-1 特別選抜

概要

修了後、県内で活躍を希望する優秀な本学学生を確保すべく広域看護学コースおよび助産学コース、NPコースに特別選抜を設定して実施している。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	実践者 養成	広域看護学コース	3名程度
				助産学コース	3名程度
				NPコース（老年・小児）	若干名

試験の概略

（単位：人）

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	5	5	5	1.0	5	5(100.0)	0(0.0)

試験科目等

試 験 科 目	試 験 期 日	出 願 期 間
小 論 文 面 接	令和6年 7月17日（水）	令和6年 5月29日（水）～6月17日（月）

2-2-2 一般選抜

概要

大学卒業者等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。大卒者でないものは就業経験により出願前に資格認定を行っている。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成		5名
			実践者 養成	NPコース	10名 (うち5名は地域枠、 特別選抜枠を含む)
				広域看護学コース	10名 (特別選抜枠を含む)
				助産学コース	10名
				看護管理・ リカレントコース	2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和6年 8月23日(金)	令和6年 7月22日(月)～7月26日(金)

試験の概略

(単位：人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内(%)	男(%)
看護学専攻	40	40	27	1.5	23	14(60.9)	6(26.1)

(二次募集)

概要

8月に実施した試験の結果、合格者が定員を下回ったコース・専攻を中心に12月に再度募集を行った。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成		若干名
			実践者 養成	広域看護学コース	若干名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和6年 12月12日(木)	令和6年 11月11日(月)～11月15日(金)

試験の概略

(単位：人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内(%)	男(%)
看護学専攻	2	2	1	2.0	1	0(0.0)	1(100.0)

2-3 大学院博士課程（後期）

2-3-1 進学審査

募集人員

研究科名	課 程 名	専 攻 名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名
		健康科学専攻	若干名

試験科目等

試 験 科 目	試 験 期 日	出 願 期 間
研究発表 面 接	令和 7 年 2 月 (論文審査時に併せて実施)	令和 6 年 令和 7 年 12 月 23 日 (月) ～ 1 月 6 日 (月)

審査の概略

(単位：人)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	0	0	0	0	0	0(0.0)	0(0.0)
健康科学専攻	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	1(100.0)

2.3.2 一般選抜

概要

修士の学位を有する者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課 程 名	専 攻 名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2 名
		健康科学専攻	2 名

試験科目等

試 験 科 目	試 験 期 日	出 願 期 間
総合問題 口頭試問	令和 6 年 8 月 23 日 (金)	令和 6 年 7 月 22 日 (月) ～ 7 月 26 日 (金)

審査の概略

(単位：人)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	2	2	2	1.0	2	2(100.0)	0(0.0)
健康科学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

3 学生の状況と進路

3-1 在学生の状況（令和6年4月1日現在）

学生総数 422名（学部生 335名、院生 87名）

学生数					
区分		計	県内	県外	男 女
学部	1年次生	81	64	17	3 78
	2年次生	81	56	25	5 76
	3年次生	87	58	29	2 85
	4年次生	86	58	28	5 81
	計	335	236	99	15 320
	%	100.0	70.4	29.6	4.5 95.5
大学院	博士前期	1年次生	33	21	12 6 27
		2年次生	31	21	10 1 30
	博士後期	1年次生	3	2	1 1 2
		2年次生	3	2	1 2 1
		3年次生	17	15	2 5 12
	計	87	61	26	15 72
合計		422	297	125	30 392

3-2 奨学金・授業料減免

■日本学生支援機構奨学金実績（人）

	貸与		給付
	一種	二種	
学部	78	50	55
大学院	4	2	-
合計	82	52	55

■その他奨学金実績

- ・ 壽崎育英財団奨学金 学部生 4名 大学院生 2名
- ・ 三和酒類地域文化振興会奨学金 学部生 3名
- ・ 大分県看護師等修学資金 学部生 1名 大学院生 1名

■修学支援制度授業料・入学金減免実績（学部）（人）

	前期	後期	入学金
全額免除	26	26	3
2/3免除	9	16	0
1/3免除	16	7	7
1/4免除	2	2	1
合計	53	51	11

修学支援制度減免額計 22,030,100 円

■大分県立看護科学大学授業料減免制度実績（学部・大学院）（人）

	学部		大学院	
	前期	後期	前期	後期
全額免除	1	1	2	3
2/3免除	2	1	1	1
1/3免除	0	1	2	1
1/4免除	0	0	0	0
合計	3	3	5	5

本学制度授業料減免額計 3,125,500 円

3-3 卒業生・修了生の進路

3-3-1 学部卒業生

1 修了生の状況（修了生28名）

出身地別	県内	18 名	64.3 %
	県外	10 名	35.7 %

2 進路決定状況

就職	決定	26 名	96.3 %
	未定	1 名	3.7 %
進学	決定	1 名	100.0 %
	未定	0 名	0.0 %

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	17 名	65.4 %
大分県外	9 名	34.6 %
計	26 名	100.0 %

(2) 就職先

独立行政法人等	3 名	11.5 %
都道府県	8 名	30.8 %
市町村	3 名	11.5 %
民間	12 名	46.2 %
大学	名	0.0 %
その他	名	0.0 %
計	26 名	100.0 %

大分県内	研究者	なし
	広域看護学	大分県(3)、竹田市役所、別府市役所
	助産学	別府医療センター、大川産婦人科医院 (2)
	N P	大東よつば病院 (2)、新別府病院、訪問看護ステーション青監
	看護管理・リカレント	大分県立病院 (4)、けいわ訪問看護ステーション
	健康科学専攻	なし
大分県外	研究者	なし
	広域看護学	和歌山県、特別区、京都工場保健会
	助産学	横浜労災病院、九州医療センター、福岡赤十字病院、福岡徳洲会病院
	N P	佐世保市総合医療センター、嶋田病院
	看護管理・リカレント	なし
	健康科学専攻	なし

※既に就職している施設名も併せて記載。

4 進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院看護学研究科博士課程（後期）健康科学専攻

3-3-2 大学院博士課程（前期）修了生

1 修了生の状況（修了生28名）

出身地別	県内	18 名	64.3 %
	県外	10 名	35.7 %

2 進路決定状況

就職	決定	26 名	96.3 %
	未定	1 名	3.7 %
進学	決定	1 名	100.0 %
	未定	0 名	0.0 %

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	17 名	65.4 %
大分県外	9 名	34.6 %
計	26 名	100.0 %

(2) 就職先

独立行政法人等	3 名	11.5 %
都道府県	8 名	30.8 %
市町村	3 名	11.5 %
民間	12 名	46.2 %
大学の	名	0.0 %
その他の	名	0.0 %
計	26 名	100.0 %

大分県内	研究者	なし
	広域看護学	大分県(4)、竹田市役所、別府市役所
	助産学	別府医療センター、大川産婦人科医院 (2)
	N P	大東よつば病院 (2)、新別府病院、訪問看護ステーション青監
	看護管理・リカレント	大分県立病院 (4)、けいわ訪問看護ステーション
	健康科学専攻	なし
大分県外	研究者	なし
	広域看護学	和歌山県、特別区、京都工場保健会
	助産学	九州医療センター、福岡赤十字病院、福岡徳洲会病院
	N P	佐世保市総合医療センター、嶋田病院
	看護管理・リカレント	なし
	健康科学専攻	なし

※既に就職している施設名も併せて記載。

4 進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院看護学研究科博士課程（後期）健康科学専攻

3-3-3 大学院博士課程（後期）修了生

1 修了生の状況（修了生4名）

出身地別	県内	2 名	50.0	%
	県外	2 名	50.0	%

2 進路決定状況

就職	決定	4 名	100.0	%
	未定	0 名	0.0	%

進学	決定	0 名	0.0	%
	未定	0 名	0.0	%

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	2 名	50.0	%
大分県外	2 名	50.0	%
計	4 名	100.0	%

(2) 就職先

独立行政法人等	0 名	0.0	%
都道府県	0 名	0.0	%
市町村	0 名	0.0	%
民間	2 名	50.0	%
大学	2 名	50.0	%
その他	0 名	0.0	%
計	4 名	100.0	%

就職先	大分県立看護科学大学、福岡看護大学、株式会社ノバケア、株式会社トーカーワークス
-----	---

※既に就職している施設名を記載。

4 授業等

4-1 学部

コミュニケーション論

1 年次 1 学期

関根剛

本科目はコミュニケーションの基礎となる情報の発信・理解・受信をキーワードとした内容の 8 回の講義を行った。受講者は 80 名であった。昨年度から講義は演習を多く取り入れることができる対面講義となり、構成的エンカウンターグループ、演習を取り入れた対面ならではの内容を増やすことが出来た。一方で、遠隔講義で用いていた講義関連の学習のためネット情報や動画情報を提供するなど、遠隔講義のスキルも続けて用いることができている。今後、引き続き開講されるカウンセリング論にシームレスに続くような講義の展開や説明をすることで講義の継続性を高める工夫を行う。

人のこころの働き

1 年次 1 学期

吉村匠平

外界の対象や自分自身を認識する人間の脳の機能、2 年次開講科目「行動療法論」の理解に必要なオペラント条件づけの基本的知識について、反転学習課題、講義時間内の課題学習、協働学習の技法を援用した話し合い活動等を通して学習する機会を構築した。講義時間中に、アプリケーションを通じて、学生が疑問や意見を自由に表出する環境を提示し、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供すると同時に、適宜フィードバックを行った。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。今年度は、要約課題の作成用の掲示板を提供し、学生同士が交流しながら課題に取り組む環境を構築した。講義に先立ち、評価基準を学生に開示し、各回の講義終了時に、自らの学習到達状況を確認できるようにした。

大学ナビ講座

1 年次 1 学期

福田広美、安部眞佐子、稲垣敦、小野美喜、影山隆之、杉本圭以子、関根剛、藤内美保、濱中良志

1 年次早期に開講することで、大学で学ぶために、リテラシーと呼ばれる身につけておくべき基本的な事項および技術を習得することを目的とした。内容は、「大学カリキュラムの方針・考え方」

「大学で学ぶということ」「メモ・ノートの取り方」「図書館利用法」「大学の授業と試験の受け方」「心の健康維持増進」「情報リテラシー」「伝える技術：文を書く、レポートを書く」「伝える技術：話す、プレゼンする」「学生生活の送り方」「看護と将来の進路」について 4 月と 5 月を中心に授業を行った。4 月中に行われる授業も多く、大学生活も間もないため、次年度の大学ナビ講座は、4 月中に主な講義を行うこととする。

英語 I-A1

1 年次 1 学期

宮内信治

英語母音発音記号の表記および調音法を教授し発声練習をさせた。新出語確認の際にスマートフォンを活用するなどの応用を意識させていきたい。講読では文の要素分析と品詞分類を確認した。音声面では音源 CD を活用して英語発音の特徴を意識させた。文法を意識した文の区切りを音読時に意識させたい。英文書写、音読暗唱を課題とした。誤字表記をなくすよう指導していきたい。多読では、英語で物語を読んで理解する楽しみを体験させた。古典的名作に触れるよう指導していきたい。

英語 I-B1

1 年次 1 学期

G.T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

環境保健学概論

1 年次 1 学期

小嶋光明、恵谷玲央

今年度は、世界保健機関（WHO）の報告書に準じて、WHO が定義する環境保健の概念や基本的な考え方を中心に講義を行った。特に、環境中に存在するさまざまな有害因子が人の健康に及ぼす影響について理解を深めることを目標とし、健康障害や疾病を予防し、健康の維持・増進に貢献するための最新の知見や技術も紹介した。試験結果にも大きなばらつきはなく、概ね授業目標は達成できたと評価している。一方で、受動的に講義を聴講する学生も一部見受けられ、主体的な学びには課題が残った。次年度は、環境保健に関する具体的な社会課題を題材に、リスク評価や対策提案を求める課題を導入し、学生の主体的思考や応用力をさらに高めることを目指す。また、双方向型のディスカッションを強化し、学びの定着を図りたい。

健康情報処理演習 I

1 年次 1 学期

品川佳満、岡田悠希、佐伯圭一郎

看護師に求められる ICT 活用能力の基盤となる基本技術（ワープロ・プレゼンテーション・表計算ソフト、画像処理、データベースの利用）について演習形式で教授した。授業は、Google Classroom を活用し、毎回「①事前学修（資料や動画による予習）→②授業→③事後学修（課題と解説）」の流れで進めた。提出課題や実技試験の結果から判断すると、各アプリケーションの活用能力については、多くの学生が習得できており、授業の到達目標はおおむね達成できたと言える。しかし、エラー処理や応用的な課題については、対処に苦しむ学生が多く見受けられたため、今後は、生成 AI の活用を授業に取り入れ、問題解決力や応用力の強化を図る予定である。

生体構造・機能論 I

1 年次 1 学期

濱中良志

今年度は対面形式で循環器や呼吸器や消化器などの、人体の構造（解剖学）と機能（生理学）を教授した。事前学習および事後学修として動画配信を行った。

生体構造・機能論 II

1 年次 1 学期、2 学期

濱中良志

今年度は、神経や内分泌や腎臓などの人体の構造（解剖学）機能（生理学）通して教授した。動画配信を行い事前学習・事後学習に役立てた。

健康運動ボランティア演習

1 年次

稲垣敦

昨年度は 11 のイベント（13 回）で、延べ 194 名の学生がボランティアに参加したが、今年は新しいイベントを開拓し、12 のイベント（15 回）で、延べ 238 名の学生が参加した。学生が多様な経験を通して考えられるように、バラエティに富んだイベントの提供を目指し、次年度も新しいイベントを開拓するとともに、ボランティアの主催者の偏りを調整してゆく。

今年度、学生が参加した 15 のボランティアは以下の通りである：①横瀬地区社会福祉協議会主催「フリーマーケット」（6/2）、②大分市社会福祉協議会主催「世代間交流健康づくり事業」『スカットボール大会』（7/6）、③第 51 回富士見が丘連合自治会主催「夏まつり」（7/20）、④大分市社会福祉協議会主催「世代間交流健康づくり事業」『スカットボール大会』（9/7）、⑤富士見が丘団地わかば老人クラブ主催「わかば会サロン」（9/21）、⑥大分トリニータ「藤枝 MYFC 戦」（9/28）、⑦富士見が丘連合自治会主催「体育祭」（10/13）、⑧大分県こころとからだの相談支援センター主催「大分アディクション（依存症）フォーラム」（10/27）、⑨野津原商工会・大分市主催「ななせの里まつり」（11/3）、⑩大分県教育委員会・大分県スポーツ協会主催「総合型地域スポーツクラブ交流会」（11/30）、⑪大分市社会福祉協議会主催「世代間交流健康づくり事業」『スカットボール大会』（12/7）、⑫河川協力団体ななせ交流会主催「親子凧あげ大会」（1/25）、⑬大分市社会福祉協議会主催「世代間交流健康づくり事業」『スカットボール大会』（2/1）、⑭九州陸上競技協会・大分県・大分県教育委員会・別府市・別府市教育委員会・大分市・大分市教育委員会・毎日新聞社・RKB 毎日放送・OBS 大分放送主催「別府大分毎日マラソン」（2/2）、⑮第 13 回富士見が丘連合自治会・大分市主催「森林探検ウォーキング」（3/29）。

スポーツ救護（救急法含む）

全学年

稲垣敦

10 月 26 日、10 月 27 日の 2 日間にわたり、J:COM ホルトホール大分の大会議室で開講した。この科目は選択科目であるが、昨年は 72 名が受講し、今年は 107 名が履修申請して 72 名が受講

し、一人を除き全員が認定試験に合格した。受講者の 85.7%が「非常に良かった」、「良かった」と回答した。内容は、①スポーツ頭部外傷(10カ条の提言)脳振盪、意識障害の診方と処置、スポーツ救護・小処置、②スポーツ現場における運動器疾患(スポーツ外傷・障害について)、③スポーツ救命救急(日本赤十字基礎講習)一次救急 BLS、AED の取扱い、④スポーツ現場における耳鼻科領域、⑤スポーツ現場における眼科領域、⑥スポーツ領域における歯科学、⑦スポーツ領域における薬学(アンチ・ドーピング)、⑧スポーツ栄養学について、⑨スポーツ現場における総合内科領域：呼吸器・心疾患や熱中症に関するスポーツ現場での対策、⑩運動器疾患に対するスポーツ現場での対応方法：RICE 処置・ストレッチの方法・テーピングの方法(実技・予防)・三角巾法、(11)スポーツ救護認定試験であった。次年度は満足度 90%以上を目指す。

生命科学入門

1 年次 1 学期

小嶋光明、定金香里

看護学を専攻する学生が身につけておくべき基礎教養として生物の基本的事項を講義した。特に、高校までに生物を十分に習得できなかった学生にも配慮して、医療の分野で利用されているバイオテクノロジーを紹介し、生物学を学ぶ必要性が理解できるように努めた。また、毎回講義で確認テストを行うことにより学生の理解度を把握しながら講義を進めた。その結果、学生の理解度は良好で、それが成績にも反映された。よって、概ね授業目標は達成できたと評価している。次年度も継続して看護に必要な生物の知識を学生が身につけられるよう講義をしていきたいと考えている。

看護サイエンス入門

1 年次 1 学期

吉田成一、恵谷玲央、岡田悠希

看護学を学修するにあたり身につけておくべき化学、物理および数学に関する基本的な事項を講義している。高校までに十分に習得できなかった内容を再学習すると同時に看護学との関係についても意識を向けるよう努めた。64 名が履修登録を行い、62 名が成績評価に関する試験を受験し、59 名が単位修得に至った。

数学分野を苦手とする受講生が多かったが、最高点は化学、物理および数学分野ともに満点であり、大学入学前の学習状況により本科目の学修習得状況に差が生じたと考えられる。また、個人毎の成績では 3 領域間で学修度合いに大きな差が生じた学生もいたが、3 領域全てにおいて学修習得状況が低いという受講生はいなかった。今年度は、テキストを用いず、教員作成資料で講義を行ったところ、昨年度までと比較すると各領域ともに平均点および最低点の低下が大きかった。テキストの指定の有無が関与しているか、次年度再度検証したい。

看護学概論

1 年次 1 学期

秦さと子

本科目は、看護を原理的、本質的に理解することで看護を探究し、創造していく基盤を養うことを目的としている。看護学を学ぶ最初の科目として、看護への興味や看護学への学習動機となるように、得られた知識を振り返り、活用する時間を授業中に設けたり、ミニレポートを課すなどをした。授業資料や講義では、当該授業における目標を明示し、学生に発言させることで授業に主体的に参画できるように工夫した。学生のレポートから、現時点での看護観や対象理解に対する自分の考えが表現できおり、学習の動機づけとなっていることが感じられた。また、授業アンケートから授業への満足度は高く、授業のねらいや目標の理解もできていた。次年度は、授業資料の配布のタイミングや学生が参画しやすい授業資料の工夫を行い、看護への興味につなげたい。

身体観察技術論

1 年次 1 学期

石丸智子、神矢恵美、秦さと子、田中佳子、堤恒貴

看護の展開につながる身体的な情報を収集する方法について、人が生きていくために必要な「恒常性の維持」と「日常生活行動」を枠組みとし、解剖生理に基づいた身体所見の理解と身体観察技術の習得を目指して技術演習を行った。この授業を通して学生の主体性を高めるためにグループ活動を取り入れ、事前学習が求められる環境をつくった。事前学習については、授業範囲の「講義動画」のオンデマンド配信等を教材とし、学生がグループ演習で取り組む課題事例に基づいて事前学習を課した。事前学習で自分の考えをつくり上げたのち、授業でのグループ活動に取り組むような授業構成とした。これにより、可能な限り演習時間をグループ活動や技術練習にあてることができた。また、希望に応じて課外でも教員指導が受けられる体制を取っており、学生は概ね目標達成できた。今後も学生が主体的に課題に取り組む仕組みを取り入れながら、授業展開を行っていく必要がある。

予防的家庭訪問実習 I

1 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習を行うにあたり、感染症対策として訪問前 1 週間の体調管理、および教職員による訪問前の体調確認を、引き続き行った。1 年次生を対象に地域関係者による講話を実施し、訪問地域の特徴や課題について学ぶ機会を設けた。1 年次生は特に、協力者とのコミュニケーションと、在宅

高齢者の生活・人生の全体像を捉えることを主眼とした。訪問を通して、コミュニケーションが重要であることがわかり、座学で得た知識を活かしたコミュニケーションを実践する姿も見られた。また、血圧測定など演習で学んだことを実践する機会を得ることができており、その難しさを感じていた。

人間関係学

1 年次 3 学期

吉村匠平

心理学における「人格、性格」概念の理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。反転学習課題、協働学習の技法を援用した話し合い活動等を通して学習する機会を構築した。毎時座席を抽選で指定し、学生同士が様々な学生と交流する機会を提供した。対面講義時間中には、アプリケーションを通じて、学生が疑問や意見を自由に表出する環境を作り、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。今年度は、要約課題の作成用の掲示板を提供し、学生同士が交流しながら課題に取り組む環境を構築した。講義に先立ち、評価基準を学生に開示し、各回の講義終了時に、自らの学習到達状況を確認できるようにした。

カウンセリング論

1 年次 2 学期

関根剛

本科目はカウンセリングの理論およびカウンセリングの基礎となるコミュニケーション・スキルについて解説した上で、学生同士のロールプレイを実施することで、体験的にコミュニケーション・スキルを習得することを目標にしている。受講者は 80 名であった。昨年度から対面講義が基本となり 4 人グループでのロールプレイを継続することができた。今年度の課題であった講義時間内に小テストを実施する十分な時間を確保することは実際には難しく、次年度は小テスト提出状況をフィードバックするなど、他の方策の試行に努める。

英語 I-A2

1 年次 2 学期

宮内信治

発音記号子音の調音法を教授した。日本語子音との混同を認識させたい。講読ではシェークスピアのソネット、新渡戸稲造『武士道』を使い、「国際人」に求められる教養と思考の一端に触れさせた。文体の歴史的変化を意識できるよう指導したい。多読では活動にも慣れ、読む文量が増加した。現代の自伝的作品を紹介し、興味関心を喚起していきたい。

英語 I-B2

G.T. Shirley

1 年次 3 学期

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

言語表現法

1 年次 3 学期

松田美香

小論文を書ける文章力および社会人としての適切な言語表現を身につけるため、論文で使用する日本語、データの引用、定型文などを実践的に学んだ。評価はレポートとし、適切にデータを引用し、文を組み立てて、テーマに沿った小論文を書くことができた。単位認定者数は 79 名であった。

韓国語

1 年次 3 学期

黄昞峻

ハングル（文字）の発音と書き方を覚え、基礎的な文の構造を学びながら、簡単な会話のやりとりも試みる講義を行った。単位認定者数は 63 名であった。

社会学入門

1 年次 3 学期

大杉至

社会学の巨匠たちが社会をどうとらえてきたかを概説し、それぞれの論者によって、様々な社会のとらえ方があることを理解し、社会を見る目が豊かになるように講義を行った。単位認定者数は 11 名であった。

法学入門(日本国憲法)

1 年次 3 学期

二宮孝富

市民としての基本的な法的素養を身につけるために、日本国憲法について、歴史的意義と人権に重点をおいた講義を行い、また、民法について契約・不法行為・家族についての講義を行った。単位認定者数は 76 名であった。

健康情報学

1 年次 3 学期

佐伯圭一郎

保健統計学、疫学の基本的な考え方を中心に講義を進め、健康情報処理演習において演習課題を組み込んで、理解の定着と応用力の向上を図っている。

新カリキュラムに移行して 3 年目となり、昨年度に進めた改善（講義は内容をさらに絞り込んでスピーディーにすすめ、質問や補足は Google Classroom をより活用する等）や講義内容の整理を継続した。授業アンケートによる評価では、回収率はやや低いものの全項目の 5 段階評価での平均が前年度の 3.6 から 4.0 へ、「この科目の授業の内容を理解できた」では 3.5 から 3.7 へ、と僅かずつではあるがさらに評価が向上した。なる「講義の進め方や速さは適切だった」は 2.6 から 3.8 へ、などまだまだ改善の余地はあるものの大きな評価上昇であった。ただし、最終的な不合格

者数については例年並みとなり、授業内容の学習・理解が不十分な一部の履修者への教員側からの働きかけをどう強化するかが今後も課題である。

生物統計学

1 年次 2 学期

佐伯圭一郎、岡田悠希

看護研究を遂行する上で必要となる記述統計学、推測統計学の基礎について講義をおこなった。岡田助教による授業改善の効果もあり、授業アンケートの全項目（5 段階評価）の平均評点は前年の 3.2 から 3.8 へ、「この科目に満足している」は 3.0 から 3.8 へと、若干回収率が低い点には注意が必要であるが、成果があったと評価する。大きく上昇している。今後も改善を進めるとともに、健康情報処理演習Ⅱで実施している演習をより効果的にすること、数学を中心とした基礎学力が不足する受講者への対応策を検討することが継続的な課題となっている。

健康情報処理演習Ⅱ

1 年 2 学期、3 学期

品川佳満、岡田悠希、佐伯圭一郎

前半は、医療職者に必要な情報セキュリティや個人情報の取り扱い等の情報倫理に関すること、病院情報システムの役割等について講義形式で教授した。後半は、SPSS や R を使って看護や医療分野におけるデータ解析スキルの修得を目的とした演習を行った。前半は、筆記試験での評価を行い、結果としておおむね授業の到達目標をクリアしていた。後半は、今年度から R studio を導入し、プログラムの記述のし易さを向上させたことによる一定の効果は得られたが、課題の評価結果からは、解析スキルが十分に修得されているとは言えなかった。次年度は、R に関する解説時間を増やし、データ解析スキルの向上を目指していく。

生体代謝論

1 年次 2 学期

坪内優太

授業時間内外で学生とのコミュニケーションが積極的に図れるように工夫をした。授業中はオンラインツール「Slido」を使用し、どのタイミングでも質問を受け付けることができる環境を提供するだけでなく、こちらからの問い掛けも積極的に行うことで、インタラクティブな授業を展開できた。また、授業時間外では「Google Chat」のグループチャット機能を用いて、気軽に質問ができる環境を提供するだけでなく、質問の内容を他学生と共有することで、学習効率を向上させる

ことができた。

さらに、知識の定着を促進するために、Google フォームを活用し、講義前後に確認問題を実施。講義時間内に復習を繰り返し行うだけでなく、何度も回答できるように設定することで、時間外学習への活用も可能となった。さらに、講義への出席状況確認にも活用でき、学生の学習習慣の把握にも役立てることができた。

今後は科目の到達目標をより明確にし、そのプロセスとなる各授業においても、内容や目的を詳細に提示するように心掛ける。また、予習や復習に活用できるコンテンツを作成し、講義時間外でも容易に学習ができる環境を提供する。

病理学総論

1 年次 2 学期

定金香里

疾病の成り立ちや修復過程について組織レベルから講義を行った。国家試験の出題傾向も反映させた。昨年度、説明・構成に課題があった箇所を見直し、より理解しやすい講義を目指した。復習支援として、毎回自作の演習問題を Google Classroom で配布し、学生からは「テスト勉強に役立った」との声があった。Google フォームを利用した出席確認を継続したが、今年度の学生はデジタル機器への不慣れも目立ち、アナログ対応を増やした。質疑応答や発表の機会は限られ、双方向性に欠けた点は今後の課題である。紙媒体の資料配布は希望制とし、昨年度より余剰は減少したが、さらなる改善が必要である。関連科目との連携は果たせなかったため、来年度の検討課題としたい。

病理学各論

1 年次 2 学期

定金香里

今年度も器官系統別に疾患の成り立ちを扱う講義を逆転授業形式で実施した。講義動画は全面的に作成し直し、内容の精選と時間短縮を図った上で、国家試験出題内容も反映させた。動画内にクイズを盛り込み、講義中に解説を行うことで学生の関心を引く工夫を行った。質問はメールで受け付け、講義中に回答する時間を設けることで双方向性の確保に努めた。資料配布は引き続き希望制とした。その結果、余剰分は昨年度より減少したが、希望者が増加した。授業アンケートでは、回答者の 83% が「予習や復習に積極的に取り組んだ」とし、「スライドや資料がわかりやすい」との評価も得た。一方で、学習態度に差が見られた点が今後の課題である。来年度は、関連科目担当教員との連携を進め、講義内容の精度向上を継続的に図る予定である。

微生物免疫論

1 年次 2 学期

吉田成一、松本昂

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。

試験の平均点および最低点は昨年度より若干低下した。また、記号選択問題について同一問題を使用した再試験においても、同様の傾向であった。本試験および再試験において単位認定に至らなかったほぼ全学生と面談を行った結果、講義内で用いる、基礎的な専門用語の理解ができていないことが挙げられたことから、次年度以降は本科目で使用する専門用語の理解を徹底することが必要と考えられる。事後学修として、各回のまとめを行い、Google Classroom で提出するよう指示しているが、提出率は昨年度と比較すると大幅に低下した。このことは、先に記載した、専門用語の理解不足とも関係すると考え、次年度以降は、出席回については提出を必須とするようにしていきたい。履修者（再受験該当者を含む）85 名中、72 名が単位を取得したが、この数字は近年の状況と比較して単位取得者数が大幅に低下した。また、S または A 評価の受講生数も低下したが、最高点については昨年度同様または上昇しており、学修習得状況の分布が大きくなっていると考え、分布を小さくした上で学修習得状況を改善するために、事前学修で求める内容について、整理していきたい。

健康スポーツ

1 年次 2 学期

稲垣敦

この科目では、運動の楽しさや素晴らしさ、運動の必要性を体感するため、これまでに学生が経験したことのないような多くのレクリエーションやニュースポーツ（フライングディスク、アルティメット、ユニバーサルホッケー、インディアカ、ソフトバレーボール、リングテニス、フットサル、3 オン 3、バドミントン、ドッジボール等）を行なった。今年度は、楽しさや運動量を高めるため、数多くのローカルルールを設定した。また、バドミント・ラケットのメンテナンスを実施した。和太鼓は今年度も実施できなかったが、ヨガを含め、COVID-19 で取りやめていた種目についても、早期に再開を検討する。

看護理論入門

1 年次 2 学期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、堤恒貴、神矢恵美

看護現象を科学的に理解する力や看護の基盤となる看護観を養うことを目的とした。講義により看護理論の概説を行い、模擬患者電子カルテ（Medi-EYE）を活用して理論に基づく対象理解の実際を体験させ、他の学生とのディスカッションの時間を設けることで看護現象を科学的に思考する力の強化を図った。授業時間内に3～4人の教員による個別およびグループ指導を行うことで、理論の活用方法の理解を促進するように工夫した。提出されたレポートから学生の目標到達度を評価し、ほとんどの学生が1回のレポート提出で目標到達できていた。一部指導が必要な学生については補足指導を行い目標達成につなげた。次年度は、看護理論を活用しながら理解できるように、授業展開の工夫が必要と考えている。

身体安楽援助論

1 年次 2 学期

秦さと子

臨床現場で遭遇する機会の多い身体症状とその発生機序を理解し、症状が日常生活に与える影響を考察したうえで、対象に必要な援助を判断する力を養うことを目的に実施した。今年度は、特に、身体の異常を示すサインを理解させるために、発生メカニズムを概説した直後に、学生の発現を通して理解度を確認しながら、授業を進めた。また、ワークシートを用いて、学生自身が学習内容を記述することで理解を促進するように工夫した。学生からは、授業の進め方や速さは適切で、授業参加の機会が多くあったこと、科目の内容理解ができたという高い満足度が得られた。今後は、授業内で得られた知識を活用することで理解を促進させ、必要な支援を考察できるまでを目標に授業の工夫を行っていく。

生活援助技術論

1 年次 2 学期

石丸智子、神矢恵美、秦さと子、田中佳子、堤恒貴

学生もしくはモデル人形を対象とし安全、安楽に配慮した技術が実施できることを目標に授業を行った。1学期の身体観察技術論と同様に、「講義動画」のオンデマンド配信等を教材とし、学生がグループ演習で取り組む課題事例に基づいて事前学習を課し、授業でのグループ活動に取り組むような授業構成とした。同じ授業構成にすることで、実技練習時間の確保とともに、学習行動の習慣化を図った。また、グループ演習では、身体安楽援助論で学習した症状をもつ患者に設定し、授業で扱う看護技術は、可能な限り同週の身体安楽援助論で学習した症状に対する援助を選択

し、学習間の連結を図った。学生は概ね目標達成できた。今後も継続して新しい評価方法の検討を行っていく。

看護疾病病態論Ⅰ

1 年次 2 学期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

2 単位 20 コマで、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療、合併症、また当該疾患における観察ポイントが理解できるように教授した。内容は消化器疾患、呼吸器疾患、循環器疾患、内分泌・代謝疾患、血液・造血器疾患で、各系統の解剖生理学や病態生理学の基礎的知識を想起させながら教授した。試験はオンライン形式とし、正答を速やかに学生にフィードバックでき、教員も誤答が多い問題などが把握でき、今後の授業に反映させることができる。

授業アンケートでは概ね満足度は高かったが、既習学習をどう積み上げながら論理的理解の基に疾患や病態、観察ポイントの理解に繋げていくかを検討する必要がある。

看護疾病病態論Ⅱ

1 年次 3 学期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

10 コマ、1 単位である。疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療、合併症、また当該疾患における観察ポイントが理解できるように教授した。内容は脳・神経疾患、腎・泌尿器科疾患、運動器疾患、生殖器系疾患、皮膚科疾患、眼科及び耳鼻咽喉科疾患で、各系統の解剖生理学や病態生理学の基礎的知識を想起させながら教授した。試験はオンライン形式とし、正答を速やかに学生にフィードバックでき、教員も誤答が多い問題などが把握でき、今後の授業に反映させることができる。

授業アンケートでは概ね満足度は高かったが、既習学習をどう積み上げながら論理的理解の基に疾患や病態、観察ポイントの理解に繋げていくかを検討する必要がある。

健康支援概論

1 年次 3 学期

川南公代、小野治子、佐藤愛、妻木美香、藤内修二、藤本優子

健康とは、健康に対する考え方を理解し、様々な人々の健康ニーズを理解し、健康増進における看護職の役割を学ぶことを目的とした。

学生は、自身の健康観を振り返り、健康に関する基礎的データや各地域の健康増進計画を活用

し、地域の特徴や健康づくりの取り組みをグループワークにてまとめることができた。学生は自身の学びを深める機会として、各講義終了後に講義内容を通して自分が考えたことをまとめ、提出することを通して、学びを深める機会となった。

次年度も、学生が自身の健康観など自身の振り返り、様々な健康レベルの人々の健康や支援する看護職の役割を考える機会をつくっていききたい。

教職概論

1 年次 2 学期、3 学期

吉村匠平、麻生良太、小野治子、関根剛、堀本フカエ、横山秀樹

専門職としての教員の基本的な心構え、教職の意義、教員の役割、職務内容などについて学び、職業としての教師が、どのようなものであるのかについて各自のイメージを作り上げる機会を提供した。講義の内容についてお互いの意見や疑問を討論し、自分の意見や考えがもてるようにすることを通して、教師としての構えや教師としてのありようについて考える機会を提供した。授業終了後の課題を掲示板に提出させ、自分以外の投稿にコメントをつけることを求めた。本年度も、養護実習を終えた 4 年次生、3 年次生との交流の機会を提供することができた。履修登録者は 15 名だった。

哲学入門

1 年次 3 学期

平野互

哲学は、様々な事象を対象として概念化し考察する過程と定義されるため、保健・医療・福祉および一般社会で重要と考えられる概念である「権利、人権」、「自由、自己決定、自立」、「障がい」、「尊厳」、「優生思想」を考察のテーマとして取り上げ、論じた。また看護職者の行動の拠り所とすべき実践の哲学である生命倫理、看護倫理について、その基本的な考え方、原則を教授した。単位認定者は 78 名であった。

基礎看護学実習

1 年次 3 学期

秦さと子、藤内美保、石丸智子、田中佳子、堤恒貴、神矢恵美、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介、阿万貴子、佐藤栄治、妻木美香、森崎久美、矢野亜紀子

基礎看護学実習は、4 つの学習目標のもと 2025 年 1 月 20 日から 1 月 31 日の期間に、1 年次生 79 名が履修した。実習施設は、9 施設予定していたが、インフルエンザ等の感染症の影響で 1

施設の受け入れが困難となり、3施設に追加で学生を受け入れていただき計8施設で実施した。対象を社会で生活している人としてとらえ、病気や入院による影響を考察するツールとしてヘンダーソンの14の基本的欲求を基盤に本研究室で独自で作成した記録様式を用いて指導を行った。目標の到達度についてはループリックを用いて評価し、今年度の学生の各目標の平均到達率は80～87%で、数回の指導でできるレベルであった。特に、目標3「必要な看護を考察する力」や目標4「看護職としての基本的姿勢」については他の目標に比べ達成度が低い傾向であった。次年度は、オリエンテーションの工夫や学内授業での工夫を行う。

英語 II-A1

2 年次 1 学期

宮内信治

Word Power Made Easy を教材にギリシャ語・ラテン語起源の語源知識と英単語を教授した。医療関連語彙の増強が学術論文読解のカギになることを意識させたい。1 年次既習の英文要素分析を活用し、看護に関する英語原著論文の緒言を文法解析、和訳させた。米国医療の背景知識を適宜提示し、日本の医療、看護の現状との比較を意識させていきたい。

英語 II-B1

G.T. Shirley

2 年次 1 学期

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

放射線健康科学

2 年次 1 学期

小嶋光明、恵谷玲央

現代医療に不可欠な放射線と健康との関係を理解することを目的に、放射線の特性、物理的性質、生物・健康影響、防護について基本事項を対面で講義した。医療現場での放射線利用への理解を深めるため、X 線検査や放射線治療の具体例を、検査画像や写真資料を用いて教示した。さらに、同時期に実施した健康科学実験（自然放射線測定や診療用 X 線装置の散乱線測定）と連携し、放射線に関する量的理解を促した。講義・実験を通じて、学生の放射線に対する理解は概ね良好であり、試験成績にもそれが反映された。一方で、看護学との関連性を明示する機会がやや少なかったため、学びの実践的イメージを持たせる点に課題が残った。次年度は、講義内容と看護実践との関連をより明確に示し、放射線利用に伴うリスク評価や防護対策について、看護師が実際に取り組める具体例を取り上げる。これにより、学生の学習意欲をさらに高め、主体的な理解につなげる授業展開を目指す。

薬理学 I

2 年次 1 学期

吉田成一

薬理学 I は薬理学総論、末梢神経系作用する医薬品および生活習慣病、感染症に用いる医薬品に関する講義を行う科目である。学修範囲が絞られているため、理解度が高い受講生が多い状況であった。しかし、医薬品の体内動態に関しては、昨年度までと同様に、理解が進みにくい状況であるとともに、設問で問われている意味を正確に理解しない内容が多かったため、試験後の講評で周知した。

講義後に、Google Classroom を用いて事後学修内容の提出を求めたが、事後学習を行っている受講生については単位取得状況および S 評価の取得割合が高かった。このため、次年度以降は事後学習内容の提出を出席回については必須とするようにする。

試験の平均点、最高点は、昨年より若干低下、最低点は昨年より若干上昇し、学修習得状況の分布が小さくなったと考える。本科目の単位取得率は昨年に引き続き高かったが、過年度履修生の単位取得状況は低かった。また、過年度履修生は再履修科目であり、講義に出席できる時間割となっているが、事後学修の提出が低い状況を鑑みると、学修状況が不十分であることが推察される。履修者（再受験該当者を含む）89 名中、85 名が単位を取得した。

健康運動学

2 年次 1 学期

稲垣敦

1 年次の健康スポーツでは運動の楽しさや素晴らしさ、必要性を体感した。2 年次の健康運動学では、さらに科学的知見に基づいて運動の重要性や必要性を講義した。はじめに科学について考え、その後、バイオメカニクスや生物の進化の視点から、加齢や不活動・運動による身体機能の変化や健康との関連性を講義することで、運動の重要性を教授した。また、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても講義した。昨年までは Zoom で行ったが、今年は予定通り対面で開講した。

診療補助技術論（基礎編）

2 年次 1 学期

石丸智子、神矢恵美、秦さと子、田中佳子、堤恒貴

対象者の安全と安楽を優先するとともに、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように支援する方法の習得を目指して授業を展開した。初めて見る医療機器の取り扱い方や、対象および自己の安全のために必要な行動や技術について、学習効果を考えて授業展開を行った。また、1 年次の身体観察技術論や生活援助技術論と同様に、「講義動画」のオンデマンド配信等を教材とし、学生がグループ演習で取り組む課題事例に基づいて事前学習を課し、授業でのグループ活動に取り組むような授業構成とした。この方法により 1 年次からの学習方法を継続し、主体的な学習行動の習慣化を図った。学生は概ね目標達成できた。今後も継続して新しい評価方法の検討を行っていく。

ヘルスアセスメント

2 年次 1 学期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

2 単位 20 コマの演習形式で、障害をもつ対象のヘルスアセスメントの能力を身につけることを主眼としている。基礎看護学研究室が身体観察技術論でフィジカルアセスメントの正常編を教授していることを受け、知識を想起しつつ解剖生理学、病態生理学、疾病論の知識を統合させるよう演習形式で、事例展開している。事例は、呼吸器系、循環器系、消化器系、運動器系、神経系の障害事例を提示し、必要な観察ポイントとその根拠、また正しい方法でフィジカルイグザミネーションを行うことを目的とした。事前学習と演習時間の情報共有とディスカッションを行い、最後に教員の講義でまとめ、ポイントを示した。

授業アンケートでは、概ね満足度が高かったが、内容が盛り沢山となる場合もあったので、理解

できる内容の精選が必要と考えている。

看護アセスメント学概論

2 年次 1 学期

石田佳代子、内倉佑介、藤内美保、山田貴子

本科目の目的は、「対象者の健康問題と看護の必要性をアセスメントし、問題解決を踏まえた看護過程を展開するための基礎理論を学ぶ」ことである。講義では、看護過程の意義や目的、看護過程の基盤となる考え方、看護過程の各ステップ、臨床推論の考え方などを解説した。看護過程をアセスメント・看護診断・計画立案・実施・評価の 5 つの構成要素からとらえ、展開方法としては NANDA-I (North American Nursing Diagnosis Association International : 北米看護診断学会) の 13 の看護診断分類をアセスメントの枠組みとして活用した。看護過程の展開を学ぶことがクリティカルシンキングの訓練の場ともなるように、問題解決のための体系的なデータ収集と演繹的推論プロセスに重点を置いたアセスメントの基本的な考え方を中心に指導した。また、講義と事例に基づく展開による個人ワーク（時間外学修を含む）を並行させながら実施した。この個人ワークは、看護過程の一連の思考過程を記録を通して体験するために、所定の記録様式に思考を整理するものである。個人ワークを並行させることで、講義で理解したことを事例の状況に適用してみることができ、実践への活用をイメージしながら取り組むことができると考える。記録の書き方については記載例を示すなどした。このような方法で、学生一人ひとりが基本的な思考の型を習得できるように指導している。しかし、学生は、疾患・病態の一般論の理解や看護専門用語の理解などがまだ充分ではなく、知識や経験不足などから概念化が困難な面がある。その点に対しては、DVD や動画を活用してイメージ化を促すような工夫を行っている。本科目の評価は上述の看護過程のレポートを中心に行った。なお、学生個々の課題が明確になるように、本研究室で考案したルーブリック評価表を用いて評価し、結果を個別にフィードバックした。加えて「看護アセスメント学演習」の時間を一部活用して補足したことで、概ね目標を達成できたと考える。

次年度に向けての課題は、上述の演習時間を割くことなく、目標の達成ができるような方法の改善である。よりよい思考の仕方を身につけるためには、それなりの訓練が必要と考えられるが、記録を書くことそのものの訓練に費やす時間には個人差があると思われる。学生が着実に一つずつ理解でき、習得度を高めていけるように、今後も学生とコミュニケーションを図りながら取り組んでいきたいと考える。

成人看護学概論

2 年次 1 学期

古賀雄二、森加苗愛

本科目は成人看護学の導入科目であるため、大分県医療計画を紹介し、大分県における医療提供体制の現状と課題を成人看護学の視点から考えることで、本科目と成人看護学援助論Ⅰ～Ⅳとのつながりを具体的に示し、関連科目への関心を高める工夫を行った。成人期に特徴的な健康問題と対象への看護援助の概要を学ぶことができるよう講義を系統的に計画した。また、今年度よりすべて対面授業に変更して実施した。講義内容は、人間のライフサイクルにおける成人期の特徴を、発達課題、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識や理論を教授した。看護理論の講義では、事例を通して講義を展開し、看護実践を意味づけして理解できるように工夫した。また、講義中に学生間の意見交換を取り入れ、議論を促した。また、看護実践の具体例では講師の臨床経験を交えつつ、看護実践がイメージできるように工夫するとともに、感想フォームに質問記入を促し、教員との交流機会を確保・対応した。授業評価アンケートは 4.4(前年度 4.3)であった。次年度も学生が成人看護学への関心を高め、主体的に参加できる工夫を行っていく。

成人看護学援助論Ⅰ（急性期）

2 年次 1 学期

古賀雄二

本科目は成人看護学概論に続いて受講する科目であるとともに、旧カリキュラムでは 1 科目であった内容を今年度より成人看護学援助論Ⅰ～Ⅳに分割して教授する科目である。そのため、特に関連の深い成人看護学援助論Ⅱ（回復期）との連動の視点を踏まえて講義編成を行った。急性期や重症な状態にある人および周術期にある人と家族への支援について教授した。学生が主体的に学び、理解を深められるようにワークシートと予習・復習の視点を提示するとともに、授業各回に対する感想・質問をふまえたフィードバックを次回授業で行い、受講者の反応を確認しながら知識の定着を図った。また、今年度は、成人看護学実習で遭遇しやすい疾患・状態の内容について、より深く学習できるように、講義中に学生間の意見交換を取り入れ、議論を促した。授業後の対応については、感想フォームに質問記入を促し、教員との交流機会を確保・対応した。授業評価アンケートは 4.3（前年度 4.0）であった。次年度も学生が成人看護学への関心を高め、主体的に参加できる工夫を行っていく。

成人看護援助論Ⅱ（回復期）

2 年次 1 学期

古賀雄二、佐藤栄治、岩下恵子

本科目では、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱの臨地実習で遭遇する機会の多い疾患を中心に、リハビリテーション看護の特徴とともに、代表的な生活機能障害の回復過程と移行を支える援助について教授した。教育方法の工夫として、Google Workspace を積極的に活用し、事前学修の進捗状況を Google フォームで授業前に確認するとともに、講義後には学んだ内容をアウトプットする機会を設けた。また、ICT を活用し、学生の意見を Web 上で可視化することで、相互に意見を共有しながら議論を深める学習環境を整備した。さらに、視聴覚教材を積極的に取り入れ、臨床に近い場면을擬似的に体験できるような工夫を施した。

加えて、グループワークが円滑に行えるように改修された講義室を活用し、学生同士のディスカッションを促進する機会を導入した。これにより、学習の進捗のみならず、相互理解を深めるとともに、各学生が自身の看護観を醸成できるよう配慮した。授業のまとめとして、脳卒中事例を用いたグループディスカッションを実施し、急性期・回復期・慢性期における看護の特徴と課題について討議する機会を設けた。これにより、患者の病期ごとの看護援助についての理解を深めることができた。また、本年度は試験にマークシート方式を導入し、学生の苦手な領域を客観的に把握できるだけでなく、結果を迅速にフィードバックできるよう工夫した。さらに、Google Apps Script (GAS) を活用し、採点結果を個別に返却する仕組みを導入した。これにより、学生が自身の理解度を把握し、学修の振り返りに活用することが可能となった。

次年度も Google Workspace を積極的に活用し、ICT を活用した学習環境のさらなる充実を図る予定である。また、臨床での事例を用いた学習機会を強化し、考察力を養う取り組みを増やすことで、より深い学びを促進する。これらの取り組みを通じて、学生の主体的な学びを支援し、実践的な看護能力の向上を目指していく。

老年看護学概論

2 年次 1 学期

小野美喜

人間のライフサイクルにおける老年期の特徴、生活を理解し、高齢者の健康生活を支援するための保健医療福祉制度、高齢者の健康問題、倫理的課題、看護理論など、高齢者の看護に必要な知識を教授した。授業内では事例提示と小グループディスカッションにより検討と発表を実施した。意見交換は円滑であり、授業評価でも学生参加の満足度が高かった。時間外学修を要する課題への学生の積極的取り組みが課題であり、課題を見直し、授業後に学修ができるようにした。授業内容を反映させた課題提示を更に強化する。また高齢者の理解が深められるように学生参加型の授業を継続する。

小児看護学概論

2 年次 1 学期

草野淳子、足立綾

本科目は、小児看護の特質と概要、および小児の成長発達を理解することを目的とした。小児保健や教育・福祉・保育の概念と、小児医療の動向・小児看護の役割と重要性について教授した。媒体として DVD を使用して、発達段階による形態・機能的発達の違いをイメージ化した。また、小児看護で用いる理論、家族支援などに重点を置いた。最終的に自分の中の子ども観を認識するための課題レポートを課した。評価は筆記試験（90%）・レポート（10%）とした。学生は筆記試験を受験し、こども観についてはそれぞれの考えを述べることで授業目標は達成できた。次年度も同様の授業構成とし継続する。

母性看護学概論

2 年次 1 学期

濱耕子、永松いずみ、林猪都子

母性の概念や対象の特性、母性看護の対象を取り巻く社会の変遷と現状、およびライフステージにおける女性の健康と健康問題を通して、母性看護の役割と機能について学ぶことを目的とした。

毎回、Google フォームにて、授業後の学びや感想、質問を聴取した。学生の回答を次の授業の話題に取り入れた。母性の対象理解、生命の尊厳と障がい観の育成に繋がっている様子があった。

国内外のリプロダクティブヘルス/ライツや母子保健動向を、時代背景や専門職の制度、事業の側面から解説した。少子化問題は日本が“100 人の村”と例えた人口ピラミッドからイメージ化を図った。社会制度については「母子保健」と「母体保護」の 2 点から、国家試験に頻出する用語をミニ問題で解説した。母性の発達、母性課題や出産後の移行、危機等をフロー図での視覚化や身近な事例からの説明、関連する理論（自己効力感やエンパワーメント、危機理論）から概説した。

授業アンケート結果は 4.3～4.4 点であり、次年度も同様の授業構成で進める予定である。母性の概念が益々拡大しており、セクシュアル・リプロダクティブヘルス/ライツの観点、ライフステージでの母性の健康を捉える意義について解説していきたい。

国際看護学概論

2 年次 1 学期

桑野紀子、大矢七瀬

①世界の人々を看護の対象としてとらえ、世界の保健医療に関する課題について学び、その背景や対策について考察すること、②日本国内の在留外国人や訪日外国人への健康支援に関して、対象者の文化社会的多様性に配慮した看護について学ぶこと、③海外での看護実践の実際を学ぶこと

を目的とし、内容構成した。海外での看護実践については外部講師の体験談を組み込んだ。グローバル社会、特に開発途上国の保健医療に関する状況や健康課題への理解を深めるために、講義と連動させて適宜 WHO 等が提供する動画の視聴を組み込む等、学生の理解を促進できるよう工夫した。また、講義終了後に毎回 Google フォームで小テストを実施し理解度を確認すると共に質問を受け付け、次の回で解説し、復習の機会とした。授業アンケートの結果では、内容理解、ねらいや目標の理解、講義の進め方や資料等は高評価であったが、予習に取り組む学生は多くなかった。予習・講義／演習・復習を効果的につなげ、相乗効果が得られるよう教授内容や方法を工夫していく必要がある。

国際看護学演習

2、3 年次 1 学期、2 学期

桑野紀子、G. T. Shirley、大矢七瀬、宮内信治

国際看護学演習は、令和 5 年度より選択科目とし、国際看護学研究室と言語学研究室の教員、国際交流アドバイザーが共同で担当している。看護職として多様な価値観を尊重することの重要性について学ぶこと、自分と異なる文化・社会・言語背景をもつ人々と主体的にコミュニケーションを図る能力を身に付けることを主な目的として内容を構成した。演習前半は、WHO6 地域から各 1 か国を選択し、SDGs の取り組みに関連づけながらその国の健康課題と背景および対策について、国際機関ホームページ等を情報源として調べて考察し、発表するグループワークを行った。言語学研究室教員は、異なる文化・社会・言語背景をもつ人々とのコミュニケーションについて講義し、グループワークなどを行った。

演習後半は、対面で 7 月に韓国の看護学生と交流するグループと、オンラインで 9 月にインドネシアの看護学生と交流するグループに分かれて準備および交流を行い、最後に学びを共有した。英語でのコミュニケーションについては、実際の国際交流を通して自己の課題を確認し、改善行動につながるよう振り返りの機会を設けた。

授業アンケートによると、学生は概ね目標を達成できた。今後は体験的に学ぶことができる国際交流の機会を継続的に創出し、交流準備からふりかえりまでをより有意義なものにできるよう工夫を重ねていく必要がある。

予防的家庭訪問実習Ⅱ

2 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習を行うにあたり、感染症対策として訪問前 1 週間の体調管理、および教職員による訪問前の体調確認を、引き続き行った。2 年次生は特に、協力者の生活を把握し、在宅生活を維持する

ために必要な条件を考えることを主眼とした。訪問を通して得た情報をもとに、学生なりのアセスメントを通して協力者への理解を深めていた。また、地域や周囲の環境の変化が協力者の生活や健康に影響を与えることを学んでいた。その中で協力者が状況に応じて地域での暮らしを営む様子を観察し、高齢者の持つ強みを捉えることができていた。

教育学概論

2 年次 1 学期

鈴木篤

教職課程を履修するまでに、受講者が有してきた学校教育や家庭教育での経験や理解を問い直し、それを受講者相互で交流することを通して、教育に関する本質的理念について、①教育についての基礎理論・思想を理解するとともに、②教育の歴史的発展過程を理解し、今後の変化についての見通しを持つことを目的として、講義を行った。

生徒指導

2 年次 1 学期

藤村晃成

教師として児童生徒を対象に生徒指導を行う上で理解すべき考え方（法制度を含む）や理論、実践のための方法などを理解するとともに、学校で実際に生徒指導を行うための実践能力の基礎を養うことを目的に講義を進めた。

発達心理学

2 年次 2 学期

吉村匠平

言語発達、運動発達、進化心理学、発達障害を取り上げた。定型発達を基準として発達を理解する構えを相対化する視点の獲得を主目的として講義を行った。毎時座席を抽選で指定し、学生同士が様々な学生と交流する機会を提供した。対面講義時間中には、アプリケーションを通じて、学生が疑問や意見を自由に表出する環境を作り、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。今年度は、要約課題の作成用の掲示板を提供し、学生同士が交流しながら課題に取り組む環境を構築した。講義に先立ち、評価基準を学生に開示し、各回の講義終了時に、自らの学習到達状況を確認できるようにした。

音楽とところ

2 年次 2 学期

小川伊作

クラシック音楽、ジャズ、フォークソングの 3 つのジャンルの音楽を取り上げ、多様な音楽に触れることを通して、「音楽とは何か?」、「音楽の意味するもの」について、そして音楽と人間との関係についてふりかえる機会とし、もって音楽についての理解を深める講義を行った。単位認定者数は 16 名であった。

美術とところ

2 年次 2 学期

澤田佳孝

便利さを重視する現代社会においては、とかく失われがちな、人が生まれながらに持っている物を作る力、表現する心・工夫する能力などを、描く体験を通して復活させ、自己を表現することの楽しさ、感じたこと・考えたことを形に表すこと(造形表現)の歓びを理解する講義を行った。単位認定者数は 2 名であった。

英語 II－A2

2 年次 2 学期

宮内信治

医療、看護分野以外の幅広い科学分野に関連する英語語彙を教授した。教材内の英文を暗唱音読することを課した。科学、技術の発展に寄与した知識がそうした語彙によって伝えられていることの意義を意識させたい。看護に関する英語原著論文本体を、文法解析させ、それをもとに和訳させた。論理的な文章構成と国際的な看護の現状の一端を理解させることができた。文法を根拠とした合理的な解釈の重要性と合理性の文化的差異について学生の興味を喚起したい。

英語 II－B2

G.T. Shirley

2 年次 2 学期

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their

fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

文化人類学入門

2 年次 2 学期

足立恵理

看護の現場で患者の多様な背景に目を向けられるよう、文化人類学に加えて医療人類学の視点を学び、医療の現場や歴史を文化的視点から捉えてみる講義を行った。また、医療現場における多文化共生の問題を扱い、学んだ視点や方法論を応用し、問題解決や改善について具体的・実践的に検討する演習を行った。単位認定者数は 7 名であった。

健康運動学演習

2 年次 2 学期、3 学期

稲垣敦

この演習では、学生が運動で解決できそうな健康課題を自分で見つけ、これを解決するために、主体的に目的や目標を定め、1 学期の健康運動学で学んだ知識を動員して自分に合った運動メニューを作成し、運動実施した。ベースライン測定（10/3）と効果判定測定（1/30）を行って運動効果を判定し、レポートを作成した。今年度もベースライン測定と効果判定測定では、身体組成・エネルギー代謝量の計測で 3 密が生じるため、健康運動学研究室前で 2 週間測定できるようにした。次年度は運動期間の早めに行動変容理論の説明を行う。

健康科学実験

2 年次 2 学期、3 学期

濱中良志、坪内優太、吉田成一、定金香里、小嶋光明、恵谷玲央、稲垣敦

健康科学実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは 9 テーマからなる実験を行った。1) 組織学実習（担当者：濱中良志）、2) 血液検査（担当者：定金香里）、3) 基礎微生物学実習（担当者：吉田成一）、4) ラットの解剖（担当者：吉田成一、定金香里）、5) 放射線（担当：恵谷玲央）、6) 染色体異常（担当者：小嶋光明）、7) 呼吸循環器系持久力

(担当者：稲垣敦)、8) バイオメカニクス実習(担当者：坪内優太) 9) 人体解剖学実習(担当者：濱中良志、坪内優太)

看護アセスメント学演習

2 年次 2 学期

石田佳代子、内倉佑介、藤内美保、山田貴子

本科目の目的は、看護アセスメント学概論で学んだ看護過程の一連のプロセスの理解を深め、その基礎理論を活用し、事例展開を行うことで、実践に活用するための方法を学ぶことである。本演習の導入にあたり、看護アセスメント学概論で学生が個別に提出した事例課題レポートに対するフィードバックを全体および個別に行い、教員からのコメントに応じて必要な修正を求めた。これにより、看護過程における習得度が低い部分を一定レベルまで補強したうえで、グループワークが円滑に進められるようにした。本演習では、胃切除を受けた患者の事例展開を課題としてグループワークに取り組み、メンバーとの意見交換を通して、自分の考えを持ち、深め、発展させていくことができるように指導・助言を行った。複数のデータや情報を関連づけたり、統合したり、さらには全体像を捉えるところに難点があり、より多角的な視方、考え方を身に付けられるように指導する必要がある。グループワークの中間・最終時点で発表会を行い、発表や意見交換を通して各学生が表現力を高め、自分のグループの不足部分に気づいて改善につなげられるように、学習環境の調整に努めた。なお、最終コマでは、臨地実習に向けて、看護の視点で患者を捉え、気づきの思考を養うためのワークを行った。本科目の評価はレポートや発表内容等によって行い、概ね全員が科目の学習目標を達成できたと考える。

次年度に向けての課題は、記録のデジタル化を推進しながら、より円滑に運営できるような方法の工夫などを検討することである。本演習は看護アセスメント学概論による到達状況と関連が深く、看護アセスメント学実習への橋渡しとして重要なだけでなく、基礎看護学から段階的に積み上げ、今後の各看護学における看護過程の展開の基盤となるべき重要な位置づけにあると考えているので、関係領域と連絡を取りながら取り組みたいと考える。

老年看護援助論 I

2 年次 2 学期

小野美喜、堀裕子

本科目は加齢に伴い機能低下や健康問題が高齢者の生活に及ぼす影響をとらえ、健康的な日常生活を支えるための看護援助を学ぶ。学習を通して、高齢者の尊厳を保ち、最期まで高齢者本人とその家族のもつ力を最大限に活かすことが考えられるよう授業構成をしている。高齢者の生活に生じる健康課題をもつ事例を提示し、生活背景をとらえた日常生活援助の知識を教授するとともにグループ検討し発表と意見交換の場を設けた。また聴覚・視覚障害等を模擬体験しながら援助を

考える授業展開をしており、学生が能動的に学習し思考を強化でき効果を感じている。授業時間内で効果的に討議できるよう事例設定と進め方が課題であり、授業方法に工夫を重ねている。改善点もあるが継続課題として次年度も取り組み評価していく。

精神看護学概論

2 年次 2 学期

影山隆之

人間を生物・心理・社会的存在としてとらえ、その全体像を理解しつつ心の健康を考えられるようになるために、精神看護学の入り口となる講義を準備した。前半では健康日本 21、精神力動論、精神達論、ストレス論、リカバリ、及び国際生活機能分類などの基本的な考え方を扱い、後半では精神症状・精神疾患、アディクションや自殺予防などのトピック、精神医療の歴史的文脈と法制の関係について講義した。全資料を一括製本して授業前に配布し、演習問題について予習を求め、授業内でディスカッションをした。できるだけ自験例の紹介に努めた。

リアクションペーパーでは引き続き、学生の理解度が上がり、スティグマが低下したように見えるので、次年度もこれらに対して原則 2 日以内に応答し、学内ウェブに掲示する。

看護管理学概論 I

2 年次 2 学期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

看護管理学概論 I は、看護職として働く上で必要な看護管理の基本的な知識を身につけるための授業である。看護を取り巻く社会や看護管理に必要な能力、安全管理など、臨床でスタッフの看護師も用いる基本的な看護管理全般について講義した。今年度はグループワークを中心にして自身の意見を他者に伝えることまでを目標として時間を確保した。さらに、各講義後にリアクションペーパーを配布し、次回の講義時に疑問については回答するなど、受講者の反応をみながら正しい理解に繋がるように取り組みを行った。受講生の反応として、他者の意見を聞くことで自身にない考え方を知ることができた等の肯定的な反応が得られたため、次年度も継続してアクティブラーニングを組み入れていく。

家族看護学概論

2 年次 2 学期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

看護の対象としての個人を取り巻く家族について、家族システムの視点から家族全体に対する看護を学ぶための講義を行った。家族看護学の理論や概念、家族機能や構造などの基礎的な知識を学習した。個人・グループワークを積極的に取り入れ、それらのフィードバックと学生間の協議の場を設けることで、学習内容の理解の深まりを促すことができた。また各回匿名のアンケートを取り、学生の素直な要望に都度対応するように努めた。次年度はより学生が討議に参加しやすいような問いかけの仕方について力を入れていく。

社会保障システム論

2 年次 2 学期

加藤典子

社会保障の全体像が把握できるよう内容を整理した。社会保障制度の意義と構造を説明し、その後で社会保険（医療保険・年金保険・労災保険・雇用保険・介護保険）、公的扶助、社会福祉、公衆衛生を各論で説明した。できる限り、看護職との関係性を理解できるよう動画を活用するなどしてつとめた。また、各回の振り返りを次の講義で行い、知識の完全な獲得につとめた。

養護概論 I

2 年次 2 学期

小野治子

養護教諭の基本理念を学ぶことを目的とした。具体的には、夏休み前に母校へのインタビューの事前課題を提示し、各学生が母校の養護教諭へのインタビューを通じて、養護についての本質や基本的概念、職業倫理などの理解を深めた。講義において、各学生のインタビュー内容の発表、ディスカッションにより学生相互間での学びを深めた。養護教諭養成課程の早い段階で母校の養護教諭にインタビューすることで、理想とする養護教諭像が明らかになり今後の学習意欲への高まりが期待できた。本年度は、講義は夏休みの集中講義であったが、台風の影響のためオンラインでの講義を実施した。今後も、学生が集中できる講義方法を工夫していった。

教育相談

2 年次 2 学期

中島暢美、飯田法子、河野伸子

不適応とは何か、適応障害とは何かについての理解を深めるために、学校教育における教育相談の意義や役割について理解した上で、心理学の諸理論に理解の深化を試みた。また、受講者各自が体験したことなどを課題化して、どのような対応が必要か、どのような組織との連携が必要かなどを、グループで話し合わせた。

学校教育心理学

2 年次 2 学期

藤田文

心理学やに教職課程における教育心理学の位置づけについて解説したうえで、発達、知能、パーソナリティ、学習、グループダイナミックスなど、児童生徒を理解するために必要な知識について教授した。単に知識を吸収するだけでなく、自ら積極的に、教育現場に必要な心理学の知識とは何かを考えていくことを求めた。

教育課程論

2 年次 2 学期、3 学期

今井航

教員として授業計画を立案する際に必要不可欠となる、国の定める基準、即ち学習指導要領に則りながら授業内容を自ら構成できるようになるための基盤となる力の習得を目的とした。「教育課程とは何か（その形態・原理）」及び「学習指導要領とは何か」といった 2 点の問いを持って、授業を進めた。

行動療法論

2 年次 3 学期

関根剛

本科目は、患者の健康行動の形成を促進する理論と方法について理解し、自己の健康行動等の行動変容プログラムを作成・実施することにより、体験的に行動療法を理解することを目的としている。行動心理学および多理論統合モデルをベースとした 8 コマから成立している。受講者は 80 名であった。昨年度同様、開講時期の関係もあり、健康行動の変容よりも、進級試験のための学習行

動の変容を選択する者が多かった。そのため、危機意識の強い行動目標となるメリットは認められた。テーマが偏りやすいデメリットはあるが、ポイントを絞ったプログラム作成、グループでの行動変容につなぎやすい点もあり、今後、開講時期の特性を講義展開のメリットにつなげられる展開とする。

看護アセスメント学実習

2 年次 3 学期

藤内美保、阿万貴子、石田佳代子、石丸智子、岩下恵子、内倉佑介、神矢恵美、篠原彩、秦さと子、田中佳子、堤恒貴、妻木美香、姫野雄太、森崎久美、山田貴子

2 週間の 2 単位の実習である。12 月 9 日（月）～12 月 20 日（月）までの期間で、大分県立病院、大分赤十字病院、大分大学医学部附属病院の 3 施設において臨地実習を行った。受け持ち患者をもち、援助的人間関係を形成し、情報収集から看護過程の計画立案までの展開を行うこと、看護職としての資質や態度を養うことを目的とした。実習参加した学生の到達度は高く、実習態度や姿勢も良かった。一方で、患者の身体的状態の理解不足を感じる場面もあり、情報共有し指導に繋がった。新たな場面や経験を通して、臨地で学ぶことがいかに貴重な体験であるかを認識することができた。

次年度は、指導者と情報共有するカンファレンス資料（関連図）と思考の強化をしたいアセスメントシートとの進捗の調整を図る必要がある。

成人看護援助論Ⅲ（慢性期）

2 年次 3 学期

森加苗愛、岩下恵子、古賀雄二、佐藤栄治、森崎久美

2023 年度の新カリキュラムから本科目が開始となり今年度は 2 年目となった。本科目の受講にあたり、学生は成人看護学概論、成人看護援助論Ⅰ（急性期）、Ⅱ（回復期）を受講している。内容は、成人看護援助論Ⅰ（急性期）、Ⅱ（回復期）の学びの連続性を意識し企画した。慢性疾患の特徴および慢性疾患とともに生きる人の理解、また、慢性期に有用な行動変容の支援に活用可能な看護理論とその看護について系統的に理解できるように展開した。疾患別の看護の学習では、臨床経験の少ない学生が事例をイメージし易い様に事例示しながら、理論と実践を理解できるよう教授した。特に代謝・内分泌疾患看護では、自己の糖尿病患者への療養指導や糖尿病教室、患者会活動(サマーキャンプ含)の実践の様子を写真や事例を交えて紹介する等、関心を高める工夫を行った。また、技術演習として、「血糖値測定」「インスリン注射指導」について講義内で行った。紙上事例を提示し演習を行ったが、血糖値測定は学生が自己の血糖値を測定した。学生は、自己の血糖値測定を行うことで、血糖値と自己の身体をアセスメントして糖尿病の理解・関心を深められ、慢性疾患と共にある生活者への看護についての学びについてレポートに記載できていた。

今後も、学生が与えられる講義を聞くだけではなく、看護に対する関心を高め、自ら思考することや課題を見出す力を養うことができるよう、講師自身の実践事例や演習、アクティブラーニングを取り入れた講義内容となるよう企画していく。

老年看護援助論Ⅱ

2 年次 3 学期

堀裕子、小野美喜、中釜英里佳

老年期の代表的な疾病をもつ高齢者の健康問題を取り上げ、日常生活に及ぼす影響を考慮した看護援助や、高齢者の QOL を維持し多職種連携と家族支援の重要性を学べるように、適宜グループワークを交えながら授業を行った。意見交換の際には、各グループから複数の発言がみられた。また、認知症高齢者の看護では、ユマニチュードの動画を視聴後、ロールプレイを実施し認知症高齢者の対応を共有した。加えて、ミニテストや小レポート課題を課し、知識の定着化を図った。今後も学生が主体的に学習に取り組めるように事前課題等の工夫を行っていく。

母性看護援助論Ⅰ

2 年次 3 学期

濱耕子、徳丸由布子、永松いずみ

妊娠期、分娩期の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護について学ぶことを目的とした。今年度から濱が妊娠期の生理・アセスメントと分娩期の生理を担当した。その他の担当は昨年度通りである。

Google フォーム上の学生の質問（分娩予定日の算出等）について次の授業で解説し、また個別の質問に対応した。分娩機転（分娩回旋や骨盤や児頭の応形機能）は骨盤模型とモデル人形を用いて実演しながら解説し、イメージ化できたという声が多かった。しかし、授業アンケート結果は、全体平均は 4.1 点であったが、課題として授業進度の適切性 3.9 点、授業資料の分かり易さ 3.8 点、授業量が多く難しい、国家試験に出題し易い問題や具体的な学習に役立つところを知りたいという声があった。次年度は、学生の理解度を確かめつつ要点をおさえた授業進行につとめる。

精神看護援助論Ⅰ

2 年次 3 学期

杉本圭以子、後藤成人

精神看護の基本概念及び精神疾患の症状や治療の基本について講義した。各疾患の学習は、教科書を調べワークシートに記入してから講義に参加することを求め、講義時間での学びを追記する

こととした。精神疾患を理解するため視聴覚教材を多用し、学生がイメージを持ちやすいよう工夫し、小テストで知識を確認した。前回の復習を兼ねて感想や質問のいくつかを講義の初めに紹介し科目全体のつながりを作り知識の定着を促した。次年度は、短時間でも学生同士が意見交換するペア活動等、学生が主体的に学修に取り組める機会を取り入れる。

地域看護学概論

2 年次 3 学期

川南公代、小野治子、佐藤愛、妻木美香、藤内修二、藤本優子

今年度より新カリキュラムでの講義内容となった。地域で生活する人々（個人・家族・集団）を理解し、地域における様々な場での暮らしを支える看護の基礎を学ぶことを目的とした。

教員や地域保健に従事する医師や保健師は、具体的な活動事例を用いて、学生がイメージし理解出来るようにした。学生が、これまでの実習などで出会った人々を関連づけて看護職の役割を考察でき、自己を振り返りと学生間で学びを共有できた。各講義終了後は、学生は講義内容を通して自分が考えたことをまとめ、提出することを通して、学びを深める機会となった。

次年度も学生が具体的にイメージできるように、事例を活用し、自分の考えの振り返り、学生間で共有し、自身の考えを再考出来る機会をつくっていきたい。

基礎看護援助技術演習

2 年次 3 学期

石丸智子、足立綾、荒木章裕、徳丸由布子、妻木美香、内倉佑介

本科目は、3つのステップからなる看護技術修得プログラムの第1段階目の位置づけである。演習目的は、学生が看護技術に関する自らの課題に主体的に取り組む、自己研鑽しながら、看護技術の定着と向上を図ることである。まず、学生が主体的に学ぶことができるように自ら課題を選択し、技術の根拠や手順を思考したうえで、グループワークに取り組むように設定した。その後、2～3人のグループで各自の考えや意見を共有・集約し、担当教員の指導内容を踏まえ適宜修正を行い、実技演習に取り組んだ。学生の実技演習の取り組み状況は良く、集中して練習に取り組む、概ね目標に到達できたと考える。来年度も学生が主体的に課題に取り組む仕組みを取り入れながら、授業展開を行っていく必要がある。

環境保健学詳論

3 年次 1 学期

小嶋光明、恵谷玲央

生活の中で遭遇する身近な環境因子（物理的、化学的、生物的因子）による健康影響とその予防・安全管理についての基礎知識を講義した。熱中症、感染症、PM2.5、ワクチン接種など身近なテーマを設定し、学生にはそのメカニズムや予防策について調査・発表を行わせた。発表後には、学生同士でコメントや質疑を促し、主体的な学びと多様な視点の共有を図った。学生発表により、テーマに対する多角的な考察が見られ、学びへの関心を高めることができた。一方で、一部の発表では時間超過や質疑応答の活性化に課題があり、発表・討議を円滑に進める仕組みづくりの必要性が明らかとなった。次年度は、発表時間の厳守や質疑応答を活性化するためのツール等を整備し、学生がより自分の意見を発信しやすい環境づくりを進める。

薬理学 II

3 年次 1 学期

吉田成一

薬理学 II は昨年度までの生体薬物反応論 II から講義名が変更となったが、教授内容について変わりはなく、疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）に関する講義である。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり臨床で使用される医薬品全般について講義した。講義後に、本科目の学修について事後学修を行い、Google Classroom にて提出するよう求めている。事後学修内容を提出した学生の単位取得率は高く、次年度以降は提出を必須とすることで、学修習得状況の向上を図りたい。

今年度も受講生の単位取得率は比較的高い状況ではあり、また、昨年度と比較して本試験における合格者数も増加し、S 評価、A 評価の受講生の割合も増加した。これらは、昨年度の薬理学 I における学修習得状況が高いことで今年度学習した薬理学 II の内容理解が進んだものと考えられる。一方、単位認定に至らなかった受講生は増加した。

履修者（再受験該当者を含む）87 名中、81 名が単位を取得した。また、単位未取得者のうち 4 名は再試験を受験しなかった。

成人看護学演習

3 年次 1 学期

古賀雄二、森加苗愛、佐藤栄治、岩下恵子、中釜英里佳、森崎久美

今年度は新カリキュラム初年度であり、健康課題（問題）をもつ成人の急性期、回復期の対象に必要な援助を検討し、看護過程の展開の思考と看護技術を学内で習得することを目的とした。発達段階（成人期）の特徴を踏まえた上で、健康問題を持つ対象者に必要な看護計画を立案し、看護援助の実践がイメージできるよう視聴覚教材を取り入れ、看護技術面においては E-Learning システムを活用した。

看護展開演習においては、周手術期の看護から回復過程までの援助がイメージしやすく、臨地実習で担当することの多い直腸がん切除術を受ける患者とした。術直後の患者観察や看護援助のみでなく、術中・術後の患者の状況に応じて評価修正しながら看護援助ができるよう、事例情報の提示の時期や方法を工夫した。特に、臨床の電子カルテを再現したシステムを用いて、臨地実習に即した情報収集を行うとともに、看護技術演習（術後全身観察）ではシミュレーションシステムを活用し、学生の思考をリアルタイムでフィードバックしながら、学生間の討議を深められるよう支援した。また、その他の看護技術演習（気管吸引、ストマパウチ交換）は教員の実技指導に加えて、全身状態への影響についても学生間の討議を深められるよう支援した。また、臨地実習を想定して、看護記録の電子記録化を取り入れた。

授業評価アンケートは 4.5（参考：前年度成人・老年看護学演習 4.0）であった。引き続き、学生が臨地実習へスムーズに適応できるよう、臨地実習現場のイメージをより具体化できるよう ICT 活用を進めていく。

老年看護学演習

3 年次 1 学期

小野美喜、中釜英里佳、堀裕子

高齢者模擬事例のアセスメント、健康課題の検討、看護援助の実践ができるよう構成した。看護援助の実践では、身体に加齢変化、皮膚障害、低栄養に関するケースをとりあげ、高齢者疑似体験、褥瘡処置及び予防、経鼻経管栄養注入の技術演習を実施した。技術演習では、感染症対策として、少人数のグループ編成とベッド配置の工夫を行った。予習にはナースングスキルを活用した。技術演習の際はモデル人形を活用しながら、患者体験を交代で実施することで、学生が実際の対象者をイメージしながら技術を修得できるよう工夫した。

今年度から教員 3 名体制での科目となり、技術演習中に煩雑さが見られた。授業アンケート結果では、「予習や復習を積極的に行った」の項目が他項目と比べて低かった。次年度は、授業進行方法の再検討と、予習・復習がしやすくなるような仕組みづくりを整備する。

小児看護援助論Ⅰ

3 年次 1 学期

草野淳子、足立綾、阿万貴子

本科目の目的は小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的にとらえ、発達段階に応じた日常生活の援助方法と保育技術を習得することである。小児期の主要な疾患・病態について理解し、健康障害をもつ小児とその家族の看護を学ぶ。評価は筆記試験（100%）とした。学生は筆記試験を受験し、講義中に考えを述べていたため授業目標は達成できた。次年度も同様の授業構成とし継続する。

小児看護援助論Ⅱ

3 年次 1 学期

草野淳子、足立綾、阿万貴子

本科目の目的は小児看護援助論Ⅰで学んだ小児の発達過程を基本とする。小児期の主要な症状・疾患・病態について理解し、健康障害をもつ小児とその家族の看護を学ぶ。評価は筆記試験（100%）とした。学生は筆記試験を受験し、講義中に考えを述べていたため授業目標は達成できた。次年度も同様の授業構成とし継続する。

小児看護学演習

3 年次 1 学期

草野淳子、足立綾、阿万貴子

本科目は、小児看護学概論と小児看護援助論Ⅰ・Ⅱで学んだ知識を生かし、第4段階専門看護学実習で必要とされる内容について演習を行った。技術演習では、バイタルサイン測定、救急法、点滴法、計測法、経管栄養法、吸引法を行った。看護過程の展開では、グループダイナミクスが生かせるようなグループワークを取り入れた。評価は看護過程の課題（40%）全体発表の発表状況（10%）、技術演習レポート（40%）・グループワークへの参加状況（10%）であった。学生は課題に取り組み、グループワークでは科目の目標に沿った発言が見られた。来年度も今年度と同様にグループダイナミクスを考慮した看護過程の展開や看護技術の指導を実施したい。

母性看護援助論Ⅱ

3 年次 1 学期

濱耕子、徳丸由布子、永松いずみ

分娩期、産褥期、新生児の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護について学ぶことを目的とした。分娩時出血や処置など産褥期も継続して必要な看護も含め実施した。今年度から濱が産褥期の異常を担当した。その他の担当は昨年度通りである。

Google フォーム上の学生の質問や個別の質問に対応した。授業アンケート結果は、全体平均は 4.0 点であったが、予習・復習に積極的に取り組んだか 3.3 点、授業資料の分かり易さ 3.9 点であった。次年度は、学生が主体的に学習に取り組めるような授業の工夫を考える。

母性看護学演習

3 年次 1 学期

濱耕子、徳丸由布子、永松いずみ

母性看護学に必要な知識と看護技術習得のために、母子と家族の看護過程を展開できる基礎的修得を目的とした。

看護技術の習得は、3 日間で全 6 グループに分けて、学生がペアとなり妊婦計測、新生児計測、沐浴の 3 項目を実施した。母性看護学に必要な知識は過年度の国家試験問題を解き、授業アンケートに母性領域の様々な問題が解けてよかったという声があった。

主体的な復習の観点から、解説用紙を一定期間 CampusSquare に配布した。ウェルネスの視点から母性看護過程の演習は 3 事例うち 1 事例を展開し、発表会では活発な意見交換がなされた。授業評価は 4 項目目までの回答のみで 4.1～4.4 点であった。

次年度も同様な授業構成により、学習の取り組み状況を確認していく。

精神看護援助論Ⅱ

3 年次 1 学期

杉本圭以子、後藤成人

精神疾患の特徴と看護について講義した。特に精神科医療の入院環境の特徴と、地域生活支援の実際が理解できるように、実際の病棟内や当事者の発言が聞けるよう動画視聴を組み合わせ、教科書の内容を理解できるようにした。また、安全や人権の視点について考えることができるよう発問した。精神看護におけるセルフケアのアセスメントについてマンガの資料を利用し、理解が深まるよう工夫した。講義の最後に小テストを行い、知識を確認した。次年度は学生同士が意見交換できる機会を組み込み、主体的に授業に参加できる機会を作る。

精神看護学演習

3 年次 1 学期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人

例年の紙上事例教材を微修正し、個人作業で事例検討をさせ、全体で振り返りを行った。紙上ではわからない精神科医療・地域精神保健と障害福祉サービスの現状を知るため、実習施設等から招いた外部講師による講話と、後に実習を行う障害福祉サービス事業所の見学を行い、実習との接続を図った。

教材や講師は適切と考えられるが、次年度は外部講師として当事者を招き、内容の充実を図る予定である。

在宅看護学概論

3 年次 1 学期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

疾病や障害をもちながら多様な場で生活する人々に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方を理解することをねらいとした。前年度から講義コマ数が減少したことで、社会保障制度の内容を他の科目からの補足程度にまとめて説明したが、事前・事後学習の取組みの低さからかえって全体像が掴めないという反応が多かった。また説明資料の多さ、進行スピードの速さなどに対する意見も多く、次年度はそうした意見を踏まえて構成を大幅に変更する必要がある。学生が苦手とする関連法規の理解については、事前・事後学習の機会を積極的に設けるなどして、引き続き学習効果の強化に努める。

予防的家庭訪問実習Ⅲ

3 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習を行うにあたり、感染症対策として訪問前 1 週間の体調管理、および教職員による訪問前の体調確認を、引き続き行った。3 年次生は特に、協力者の健康維持のために大切なことを協力者と共に考え、可能な支援は実施することを主眼とした。長期施設実習での経験を通して、協力者の変化を捉え、疾病予防の視点を持って訪問活動を考えることができていた。また、上級生としてチームリーダーの 4 年次生をサポートし、チームの訪問活動が円滑に行えるように役割を遂行する姿が見られた。

臨床看護援助技術演習

3 年次 1 学期

石丸智子、内倉佑介、堀裕子、森崎久美

本科目は、3つのステップからなる看護技術修得プログラムの第2段階目の位置づけである。本科目は、実技講習と事例を用いた演習から構成されている。実技講習では、救急法、止血・包帯法を実際に学び、病院内だけでなく、普段の生活においても緊急時に必要な救急ケアが提供できるような内容とした。事例を用いた演習では、急変時の異常に早期に気づき、対象者の生命維持を目的に、異常の発見後の対応をグループで検討し、実際に看護展開を動画撮影した。撮影した動画を他のグループと共有しディスカッションを行った。学生の実技演習およびグループワークの取り組み状況は良く、集中して練習に取り組み、概ね目標に到達できたと考える。来年度も学生が主体的に課題に取り組む仕組みを取り入れながら、授業展開を行っていく必要がある。

教育方法論

3 年次 1 学期

佐伯圭一郎、麻生良太

教師による発問、それに対する児童および生徒の考察、話し合い活動、質問行動、説明、新たな課題の発見といった教授過程や理論の実際を概説した上で、現行の学習指導要領の方向性に沿った形での学習指導案の作成を行った。同時に、情報化社会に対応した教育内容や方法の実際に焦点をあて、各種情報機器の活用について紹介した。

特別支援教育論

3 年次 1 学期

古賀精治

特別支援学校、特別指導学級、通級指導学級だけではなく、通常の学級にも在籍する様々な障害（発達障害や軽度知的障害など）のある児童及び生徒に対し、学習上または生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対応するために必要な知識（法制度を含む）や支援方法について教授した。

養護概論Ⅱ

3 年次 2 学期

小野治子

子どもの健康課題解決、危機管理などの学校保健における課題の歴史的変遷を捉え、具体的な養護活動を展開方法やこれからの養護教諭に求められる役割について理解することを目的としている。講義は、対面での夏期集中講義で実施した。個人発表およびグループワーク、意見交換を多く取り入れ、学生が主体的に取り組むことができるよう工夫した。学生からもグループワークについては高評価を得た。年度により履修人数が異なるが、今後も学生が主体的に取り組める講義方法を工夫していきたい。

道徳、総合的な学習及び特別活動

3 年次 1 学期

鈴木篤

道徳教育、総合的な学習、特別活動の特質とその方法について知識・理解を深めることを目的として、学校教育の具体的な場面を取り上げながら説明した。

英語Ⅲ

3 年次 3 学期

宮内信治

語源学の知見を基に人体に関連する語彙を教授し、習得確認テスト、音読暗唱テストを毎時間課した。病気や症状に関する語彙の教授も検討したい。文学作品簡略版 *Frankenstein* を講読させた。学生に音読をさせたうえで、内容理解を促すグループディスカッションを行った。講義終了後、購読を通じた自己の変化を記述、提出させた。受講人数を勘案しつつ、現代社会の批判的解釈を促す文学作品を選択、提示していきたい。

環境疫学・生物学演習

3 年次 2 学期、3 学期

小嶋光明、恵谷玲央

健康と環境（生活習慣を含む）との関係がどのように科学的に明らかにされるかを理解することを目的に、疫学的統計や分子・細胞レベルの生物学的知見について、演習と事例を通じて講義した。演習では、医療統計や疫学データを適切に処理し考察する力を養うことを重視し、課題レポー

トの作成・提出を通じて学生の主体的な学びを促した。課題に取り組む中で、学生は問題意識を高め、理解を深める様子が見られた。一方で、エクセルを用いた演習に困難を感じる学生や、時間内に課題を完了できない学生も一部見受けられた。演習中のフォローや事前準備に課題が残った。次年度は、演習中の理解度確認を徹底し、事前資料の充実や指導方法の工夫を進める。また、学生アンケートを活用して課題難易度に応じた演習時間や講義内容の見直しを行う。

成人看護学実習Ⅰ

3 年次 2 学期

古賀雄二、森加苗愛、佐藤栄治、岩下恵子、森崎久美、内倉佑介、神矢恵美、田中佳子、中釜英里佳、堀裕子

今年度は新カリキュラム初年度である。本科目は第 3 段階の専門看護学実習に位置づけられ、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、急性期・回復期の健康段階にある対象に対し適切な看護援助方法を学ぶ。また、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とする。実習中は感染予防の観点から、実習部署や看護実践、時間の制限はありながらも、可能な限り実習指導者と相談・調整を行い、学生が主体的に実習を行えるように調整した。教員は常駐し、学生が看護スタッフと連携が図れるよう支援した。

また、関連する成人看護学援助論Ⅰ（急性期）・Ⅱ（回復期）および成人看護学演習においては、本科目（臨地実習）を想定し、電子カルテシステムを再現した情報収集やシミュレーション教育を取り入れた。また、今年度より本科目での電子記録導入に備えて、成人看護学演習から使用を開始した。授業評価アンケートは 4.9（前年度 4.8）であり、目標達成ができたと評価する。引き続き、関連科目間の連動性を高める工夫を行う。

老年看護学実習

3 年次 2 学期

小野美喜、中釜英里佳、堀裕子

高齢者施設に入所している高齢者の健康生活を援助する実習であり、大分市内の介護老人保健施設 3 ケ所での実習を行った。今年度は 1 グループ約 7～8 名の学生を 3 施設に配置し、学生は入所高齢者（要介護者）を担当し、日常生活の理解と生活の維持・向上をめざした援助、多職種連携を学んだ。また実習最終日は全学生が実習施設をこえて交流し、高齢者の看護についてディスカッションを行った。当科目は実習期間が 1 週間のため、到達目標や学習内容と方法の改善を継続している。高齢者への看護介入や多職種連携の実践を深めるには課題があり、実習指導者の協力を得ながら学生指導を工夫している。学生が考え、実施し、高齢者の反応をとらえて実践を評価する体験をさらに強化できるように実習施設と連携した実習プログラムの検討を継続する。また高齢者

に対する看護の役割を言語化・他者共有できるように指導していきたい。

小児看護学実習

3 年次 2 学期

草野淳子、足立綾、阿万貴子、内田一恵

小児看護学実習では、3 日間の保育所実習を 7 月末から 8 月第 1 週まで実施した。学生は子どもとコミュニケーションをとり、健康な子どもを理解した上で遊びや保育を行い実習目標が達成できた。最終日には各グループで手洗いの保健指導を行い、子どもの保険教育を行うことができた。

病院での臨地実習において 7 日間の実習を行うことができた。コロナ感染問題も収束し、通常通りの実習ができた。しかし、感染防止に留意をし、グループ分けの工夫を行った。大分県立病院と別府発達医療センターの 2 か所で実習を行い、異なる施設での学びを最終カンファレンスで共有した。教員は学生の個性に合わせて指導を行ったが、積極的に実習できるように指導することが課題と考える。

評価は実習態度(25%)・実習内容(25%)・受け持ち患者の看護過程の展開(25%)・実習記録(25%)とした。来年度は感染状況や病院の対応に合わせて実習方法を調整する。

母性看護学実習

3 年次 2 学期

濱耕子、徳丸由布子、永松いずみ

母性看護学実習施設は 5 施設で、実習期間は 6 グループが各 2 週間ずつ（延べ 12 週間）であった。学生の配置人数は、大分県立病院は 1 グループにつき 5 名配置（計 30 名）、堀永産婦人科医院は 4～5 名配置（計 26 名）、いしい産婦人科医院は 5 名配置（計 30 名）であった。担当教員は大分県立病院、堀永産婦人科医院、いしい産婦人科医院に各 1 名を配置した（堀永産婦人科は臨時教員）。学生は当 3 施設のいずれかで実習し、学生 1 名につき産褥婦 1 名を受け持ち、産褥期、新生児期の看護について学び、一部分娩見学を通じた学びと、母性の対象の特性とニーズに応じた看護過程の展開を行った。

サロンリラ・ドーナつ助産院による講義聴講と学級活動に参加した。また、生野助産院では妊婦健診や産後ケアの見学に臨んだ。これら助産院では、地域における助産師活動について学ぶ機会を得ている。

授業評価は 4 項目目までの回答のみで 4.6～4.8 点であった。最終日には異施設で実習したグループで学びを共有し、学内で合同カンファレンスを行っているが、母子の看護以外にも家庭環境をふまえた支援の重要性から学びの有用性を感じている学生もいた。一方で、施設ごとに発表すればよいという意見もあった。

次年度は臨時教員 1 名分の施設担当教員が減少する。実習の運営を検討するにあたり、学内学習のあり方も併せて検討していく。

精神看護学実習

3 年次 2 学期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人

例年と同様に、3 箇所での病院実習と 4 箇所での障害福祉サービス事業所実習を計画した。病院のうち 1 つは今年度から新規に依頼したので、事前準備に配慮した。新規病院を含め病院実習では、短い日数ながら受け持ち患者について全人的な理解と考察を深め、個別性を考えた看護計画を立てる実習ができ、可能な範囲で計画も実施できた。事業所実習では利用者と共にプログラムに参加し、精神障害を有する人が地域で暮らす様子や社会資源の利用を理解し、必要な支援を考え、指導を受けた。例年通り、最終日のカンファレンスで学びを統合した。

どの病院も入院患者の高齢化やスタッフの不足などの課題があるので、次年度はさらに 1 箇所の病院を新規開拓する。

在宅看護援助論

3 年次 2 学期、3 学期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

疾病や障害をもちながら多様な場で生活する人々に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。講義では、事例を用いた看護展開のグループワークを実施した。在宅療養のイメージを掴むため、動画事例を用意し、学生が観察を通じた情報収集、アセスメントができるようにした。またディスカッションを通じて学生同士が学びを深め合えるよう工夫した。次年度は、臨床で収集した事例を活用し、より実践的な講義展開を目指す。

地域生活支援論

3 年次 2 学期

藤本優子、小野治子、川南公代、佐藤愛、妻木美香

多様な場で生活するあらゆるライフステージや健康レベルにある人々の健康や生活の質を向上させるために、看護職として必要な視点と地域看護活動を学ぶことを目的とし、健康教育およびコミュニティアセスメントの基本的知識と技術を教授した。具体的な内容として、講義で基本知識を教授した後、健康教育では、4～5 名程度のグループで学生自身がテーマを決定し、企画書を作成

した。また、コミュニティアセスメントでは、CAP モデルに基づいて実習地の情報収集まで演習を行った。いずれも、学生が主体的に学べるようグループワークを多く取り入れ、教員が各グループをラウンドし、適宜助言を行った。

授業アンケートや各回の感想において、概ね評価は良好であった。8 コマの限られた時間の中で健康教育とコミュニティアセスメントの一部を教授するため、引き続き、看護師課程で習得すべき内容を精査し、グループワークを展開する必要がある。

国際看護比較論

3 年次 2 学期

桑野紀子、大矢七瀬

2 年次の国際看護学概論からのつながりを意識して内容を構成し、国際保健／国際看護の主要概念や世界の疾病構造の変化について理解を深めること、Universal Health Coverage や Sustainable Development Goals といった保健医療に関する世界的な取り組みについて学ぶこと、母子保健や精神保健といった各分野のグローバルな状況について学ぶことを目的として講義を組み立てた。また、世界的に増加している難民の健康課題や、在外邦人の健康支援に関する実践的内容を組み込んだ。

課題レポートや試験結果から、学生は概ね目標を達成できたと考えるが、学生がより主体的に取り組めるよう、グループディスカッションの機会をより多く設けていきたい。また、知識の定着を、各回予習復習を促していく必要がある。また、基本的な知識の習得と共に、変化の激しい世界情勢とそれに伴う健康課題について学べるよう、毎回の講義の参考図書、英語で発信される国際機関ホームページ情報等を伝え、最新情報を収集する力も向上させる必要がある。

学校保健学

3 年次 2 学期

草野淳子、小野治子、大渡文子、手嶋康深

講義回数は 15 回であった。目的は、児童生徒の心身の健康維持・増進における学校保健の役割について、保健管理、保健学習、保健指導の視点から理解し、主要な観点を説明できるようになることである。講義は養護教諭の実践経験がある非常勤講師によって、主に行われた。内容は根拠となる法律、学習指導要領、教育課程について取り上げ、意義や内容が理解できるようにした。演習は保健室経営計画、症状アセスメント、保健教育指導案の立案とし、課題提出後に全員で討議し教員が講評を行った。評価は、症状アセスメント・指導案作成の発表(40%)と筆記試験(60%)とした。今年度の方法は有効であったため、来年度も同様に実施する予定である。

成人看護援助論Ⅳ（終末期）

3 年次 3 学期

森加苗愛、岩下恵子、古賀雄二、佐藤栄治、森崎久美

2023 年度の新カリキュラムから本科目が導入され、今年度は開講初年度であった。本科目の受講にあたり、学生は成人看護学概論、成人看護援助論Ⅰ（急性期）、Ⅱ（回復期）、演習、実習を終えており、本科目は成人看護学の科目において集大成の位置付けとなる。

終末期の事例への看護は、実習においても経験できる学生は少ないため、実習で経験した事例を踏まえつつ、終末期にある人・家族の理解や看護師の役割について思考できる様講義を企画した。具体的には、終末期にある事例を提示してイメージできるようにし、理論を用いた看護援助のあり方を学べるようにした。また、今年度は緩和ケア認定看護師を外部講師として招聘し、より具体的な終末期の場面や緩和ケア病棟のシステムや看護師の役割が理解できる様にした。外部講師には事例検討の機会の企画を提案し、講義では学生が自己の考えを述べる機会を設け、学生参加型の内容になるように企画した。

評価は、各担当教員が学生の終末期看護への思考過程が理解できる様、全てレポート評価とした。全 8 回にわたる終末期にある患者・家族の理解、看護理論や社会資源、家族看護、ACP など終末期看護に関わる多岐にわたる概念について思考し、理解を深めることができたと考える。

今後も成人看護学の集大成として、学生が経験することが少ない終末期看護事例をイメージでき、看護に対する関心を高め、自ら思考することや課題を見出す力を養うことができるよう、アクティブラーニングを取り入れた講義内容となるよう企画していく。

看護管理学概論Ⅱ

3 年次 3 学期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

本科目は、二年度開講科目である看護学概論Ⅰから発展させる内容として、管理実践に求められる法制度、人的資源管理、経営に関する基礎的な知識等、翌年に開講される看護政策論との連続性を意識して講義を行った。学生が実習等で経験した事例をとおして、医療・看護の質を評価し、向上させるための取組みについて検討することができた。事例に沿った評価モデルの説明後に、グループでの事例検討を取り込んだことで、知識の定着が図れた等の肯定的な反応が得られた。事前・事後学習を促すために、事前配布資料に自己学習項目を提示していたが、その取組みの割合は低い結果であった。次年度はそうした活動を積極的に行えるよう、学習用の資料の配布とあわせてアナウンスを積極的に行い、さらなる学習効果の向上を図る。

災害看護学

3 年次 3 学期

石田佳代子、石丸智子、内倉佑介、福田広美、松久美

本科目の目的は、災害の基礎的知識として、災害の種類と特徴、災害サイクル各期の特徴と災害医療・看護、保健医療対応の原則、災害と法律・制度、災害発生時の医療体制や支援体制、災害への備えなどについて、幅広い視点から多角的に学ぶことである。また災害時特有の疾病・病態や医療対応の要点を学び、災害時に必要とされる迅速かつ的確なアセスメント（トリアージの基本的な方法の習得など）および災害時の看護マネジメントの基礎的能力を身につけることを目指している。そのために、講義では、災害に関する基礎的知識に重点を置いたうえで、病院における初動体制、DMAT の活動や避難所における災害支援ナースの活動など、多面性を有する災害看護活動に触れながら、平時との違いや災害時の看護師の役割などが理解できるような内容とした。また、災害状況を設定したペーパーシミュレーションや動画の活用などを通して、災害時のイメージ化を促せるような工夫を行った。今年度は、大分県国民保護共同実動訓練（場所：大分スポーツ公園等）に被災者役として参加することを本科目の演習に位置付けて実施した。テロ事件を想定した多数傷病者への対応訓練で、学生はトリアージや搬送をされるなどの体験をした。体験後のレポート内容から、災害現場の厳しさを知り、救助活動における迅速さとコミュニケーションの重要性を実感できたり、被災者への細やかな配慮の大切さに気づけたりなど、多くのことを学ぶことができた。

災害時の状況を適切にイメージすることは難しいと考えられるが、今回の訓練参加のような体験学習は、学生がリアルな実感を持って学んだ内容を定着させることができ、学んだことを実践につなげやすいメリットがあると考えられる。今後は、体験型の学習を積極的に取り入れながら、改善に取り組んでいきたいと考える。

看護科学研究

3 年次 3 学期

福田広美、堀裕子、濱中良志、古賀雄二、後藤成人、岡田悠希、草野淳子、加藤典子

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的知識を習得することを目的に、8 回の授業を行った。本年度は「看護研究の意義」「文献検索徳文献研究」「実験研究」「調査研究」「質的研究」「統計学・データ解析」「研究の倫理と安全」「論文の書き方・発表の仕方」について講義を行い、学生が研究について理解を深めることができた。

教育制度論

3 年次 2 学期、3 学期

今井航

世界の主要国における教育制度改革の動向や、学校の法的な位置づけを問うことにより、教育制度への関心を高めた。その上で、職務内容や遵守事項、免許制度、研修制度を取り上げ、教職員に関する制度の特徴を捉えさせた。加えて、教育委員会の制度の変遷、教員評価の制度、学校支援の制度についても解説した。

養護実習事前事後指導

3 年次 3 学期

吉村匠平、関根剛

事前指導では、養護実習時の遵守事項について学ぶとともに、実習校の概要について、HP や要項をもとに整理した上で、個別の実習目標、実習期間中の具体的な行動目標を策定し、実習生間で交流させた。事後指導では、実習目標に沿って、実習の自己評価を行うとともに、他の学生の実習体験を共有する機会を提供した。実習前に、4 年次生と交流し、実習に関する情報を収集する機会を提供した。

養護実習 I

3 年次 3 学期

吉村匠平、関根剛

大分市立金池小学校、春日町小学校、碩田学園、西の台小学校、判田小学校、東植田小学校、豊府小学校、松岡小学校、桃園小学校、植田小学校、大分西中学校、坂ノ市中学校、南大分中学校、日出町立日出小学校、大神中学校、日出中学校、日田市立三芳小学校、佐伯市立上堅田小学校、竹田市立直入小学校で学校体験を中心とする実習を行った。

応用生体機能反応論

4 年次

濱中良志、吉田成一

今年度は、解剖生理学、病態生理学及び薬理学の思考過程を教授した。

総合人間学

4 年次後期

古賀雄二、福田広美

看護学実習や演習を経験した 4 年次生が各講師の講義を通して物の見方や考え方を学び、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことができるように、教職員の推薦から教育研究委員会での検討を重ね、様々な分野の第一線で活躍されている 8 名の講師とテーマを決定した。さらに、看護国際フォーラムへの参加を 2 回分の講義とし、全 10 回の講義を実施した。今年度は、対面と Zoom による講義を実施した。学生全員が 10 回の講義を聴講できた。講義を通して、1 人の人間としてももの見方や捉え方など視野の広がりを認識でき、レポートに看護職者としての学びや今後の課題について自己の意見を表現することができた。

本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第 1 回 9 月 6 日 私が演劇を通して学んだこと

俳優 山本健翔 大阪芸術大学芸術学部舞台芸術学科教授

第 2 回 9 月 13 日 起業看護師としてのやりがい・添乗看護・在宅看護・

看護師保健師 日本旅行医学会認定看護師 小野里春香 このみの空企業組合代表理事

第 3 回 9 月 20 日 学ぶことは生きること―院内学級の子もたちが教えてくれた大切なこと―

院内学級教師ホスピタルクラウン 副島賢和 昭和大学大学院保健医療学研究科准教授

第 4 回 9 月 27 日 逆境体験をした子ども・ヤングケアラーへの支援

河野洋子 フォスタリング機関 NPO 法人 chields (チーズ) 代表理事

第 5 回 10 月 4 日 人づくりと地域づくり「食育」と防災ボランティア

ボランティアグループ「暮らしつなぎ隊」代表 柴田真佑 元佐伯市役所職員

第 6 回 10 月 11 日 理想の未来を手に入れるタイムマネジメントの基礎知識～時間の使いかたを変えると人生は変わる～

社会保険労務士 篠原丈司 大分県男女共同参画審議委員 大分県ワークライフバランス推進アドバイザー

第 7 回 10 月 18 日 災害支援を通して伝えたいこと

松永鎌矢 NPO 法人リエラ代表理事

第 8 回 10 月 25 日 嘘をつかずに生きるとは～クラリネットとともに～

クラリネット奏者 倉堀翔 大分中学校大分高等学校非常勤講師

第 9 回・第 10 回 10 月 26 日 看護国際フォーラム「診療看護師 (NP) と拓く看護の未来」

看護探究セミナー（学部）

4 年次前期

福田広美

4 年生に対し、実習で受け持った患者 1 名に対する看護を振り返り、看護をより深く考えることを目的としたケース・スタディを行った。振り返りを行う実習の事例は、4 年間の実習で受け持った事例を振り返ることとした。各教員が、学生を担当し、テーマ決定からケースレポート作成までのプロセスを指導した。学生は主体的に担当教員の指導を受けながらレポートの作成を行った。また、自らの看護実践と理論を繋げて理解を深めることができた。

地域看護学実習

4 年次前期

川南公代、小野治子、加藤典子、佐藤愛、妻木美香、藤内修二、藤本優子

大分県下の保健所（保健部含む）と市町村保健センターの 2 施設の公的機関において、地域で暮らす人々及び地域全体を対象とする看護を学ぶことを目的に、2 週間（各実習施設は 1 週間）の実習を行った。学生は、実習準備として、実習課題の各機関における実習で学びたいことを教員へ相談しながら作成できた。教員は、実習前に各実習施設の指導者へ、実習の目的や各学生の学びたいことを説明し、実習準備を行った。実習中の学生は、各実習施設の実習指導者の指導のもとに、実習目的や実習で学びたいことを達成するために、乳幼児健診、健康教育、健康相談、他（多）機関との会議等に参加できた。学生は、これらの経験を通して、地域で暮らす人々の生活や実習地域の健康に関する特徴、保健師の活動から看護職の役割を考察した。教員は、実習施設の指導者と学生の実習状況を随時共有し、各実習施設の最終カンファレンスに参加し、学生の学びを共有した。毎週金曜日は学内日とし、学生全員で各実習施設の学びを共有する機会となった。

次年度は、新カリキュラムの 1 週間の実習へ変更となるため、実習目標、目的等を検討し、実習施設へ事前説明を行い、学生が実習目標に向けて実習できる体制を整え、実習を進めたい。

予防的家庭訪問実習（4 年次生）

4 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習を行うにあたり、感染症対策として訪問前 1 週間の体調管理、および教職員による訪問前の体調確認を、引き続き行った。4 年次生は特に、協力者個人の生活のみならず、地域の健康課題にも目を向けて考察・提案することを主眼とした。身近な人々の健康状態の変化が協力者の生活や健康に影響をもたらすことを理解し、訪問活動において協力者の健康維持への支援を考え、チー

ムメンバーとともに実践することができていた。その中でチームリーダーとして創意工夫して役割を遂行する姿が見られた。

看護管理学概論Ⅱ 政策等含む

4 年次前期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

看護管理のプロセスおよび管理の実際を通して、看護の質を高めるための理論や看護管理に必要な理論、経営に関する基礎的な知識および、看護政策について学習することを目的とした。本年度は対面で講義を行った。4 年次生が、看護管理学の基礎知識とともに、実習で経験した事例を通して、看護の質を高める看護管理の基本的な考え方を身につけることができた。

第 3 段階看護技術演習

4 年次前期

石丸智子、後藤成人、堀裕子

本科目は、3 つのステップからなる看護技術修得プログラムの 3 段階目の位置づけにある演習である。本演習の目標は、これまでに学んだ看護援助に必要な知識と技術を、e ラーニングにより主体的かつ計画的に再学習し、総合的に看護技術力を強化することである。学生はナースングスキルによる反復学習を通して、自己にとって未熟な看護技術項目と定着している看護技術項目を再確認することができていた。また、レポート課題により自己の技術習得状況を振り返り、技術修得上の課題や今後の対策を明確にしていた。学生全員が目標を達成できた。本科目は今年度が最後の実施となり、応用看護援助技術演習へ移行となる。

在宅看護論実習

4 年次前期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

自宅や施設等の居宅で生活する人々を対象に、その暮らし方を支援する実習であり、大分県内の訪問看護ステーション 20 施設での臨地実習を行った。1 施設あたり 4 名の学生を 2 グループに分けて配置し、学生は訪問看護サービス以外にも、訪問リハビリテーションや介護、退院前カンファレンス、サービス担当者会議の機会に積極的に参加することで、地域で生活する人々を支える看護職の役割と実態について学習した。実習の性質上、教員が同行することができないため、臨地指導者と協力しながら作成指導の方法について工夫を行っている。次年度からは実習期間が 1 週間となるため、看護過程では看護計画の初期計画立案までを目標とし、積極的な訪問サービス参加の促

しと、臨地指導者との連携を強化するなどして、訪問看護の面白さや奥深さを体験できるよう指導していく。

総合看護学実習

4 年次前期

桑野紀子

4 年次生 87 名が県内 34 施設 36 病棟において、6 月 10 日（月）から 6 月 28 日（金）の 3 週間、実習を実施した。一部施設では、実習学生が COVID-19 濃厚接触者となり自宅待機期間を設けたため、3 日間実習を延長し、7 月 3 日（水）まで実習を実施した。本実習は 4 年間の看護学実習の最終段階にあたり、実習の集大成である。実習の目的は、学生が自ら主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保証するマネジメント能力、および看護専門職としての自立性を養うことであり、また、本実習の特徴は、計画から実施・評価まで学生が自律的に取り組む点である。担当教員に適宜相談しながら、各自が実習目的・目標に沿って実習し、4 年次生全員が無事に実習を終了することができた。新カリキュラム以降に伴い、2025 年度から実習期間が 2 週間となるため、実習目的・目標や評価方法、実習前の準備等について検討していく必要がある。

看護スキルアップ演習

4 年次後期

石丸智子、足立綾、荒木章裕、後藤成人、妻木美香

急性期、回復期、母性、小児、在宅領域の事例に対し、根拠に基づくアセスメントおよび適切な看護技術を提供できる実践能力を養うことを目的として実施した。1 グループを学生 8～9 名で構成し、各グループで課題に取り組み発表会を実施した。必要と考えられる看護の根拠や意図が伝わるように動画や写真、パワーポイント資料の作成を課し、要点をおさえた発表を行うことができた。2 つのグループが共通事例を担当したことでディスカッションが深まり、また看護系教員のみならず人間科学系教員からの助言を受けることで、患者や一般的な視点に立ち返る重要性を再認識したと学生から多数意見があった。本科目は今年度が最後の実施となる。

卒業研究

4 年次

福田広美

4 年次生は、各研究室に所属し、開学以降行っている 1 人 1 テーマで研究に取り組むことを継続した。研究室配置は、各研究室の教員が、研究室の特色、研究室で行う研究テーマ、これまでの卒業研究などをオンデマンド形式で紹介し、それを学生が各自視聴した上で、研究室の希望に沿って研究室配置を決定した。各研究室において、教員の指導のもとに、卒業研究のテーマを 3 月 31 日までに決定した。テーマ決定後は、研究計画に基づき研究に取り組んだ。倫理審査を要する研究は、研究倫理・安全委員会に計画書を提出し、研究倫理についての学習過程を踏み、学びを深めた。

4 年次生は、各研究室で研究を実施し、要旨、論文、パワーポイントの作成までを行った。研究発表会は、Zoom で 3 分科会に分かれて実施した。3 セクションが同時進行のため、録画により発表を後日視聴できるようにした。今年も学生、教員ともにルーブリック評価を行った。卒業研究優秀賞は、視聴した教員全員が評価し、各セクションから上位 2 名、計 6 名を選出する方法とした。

原著講読

4 年次

福田広美

卒業研究で配属された研究室で、教員の指導のもとに原著講読を行った。目標は、専門領域の原著論文を 2 本以上読み、その知見を述べるができること、卒業論文作成時に、原著講読で学んだ知見を活かすことである。ルーブリック評価を用いて、学生が段階的に自己の成長を確認するように評価し、担当教員は最終的な評価をルーブリック評価で行った。いずれの学生も一定のレベルに到達することが出来た。

養護実習Ⅱ

4 年次前期

吉村匠平、関根剛

大分市立荏隈小学校、大道小学校、田尻小学校、長浜小学校、植田小学校、上野ヶ丘中学校、滝尾中学校、植田西中学校、佐伯市立下堅田小学校で学校保健活動を中心とする実習を行った。

教職実践演習（養護教諭）

4 年次後期

吉村匠平、小野治子、中釜英里佳、関根剛

学校保健活動を行う現場を念頭に置いた実践的な授業を演習形式で行った。4 年間の教職課程の学びを振り返り履修カルテを完成させた。今年度は、実習機会のない支援学校で見学実習を行った。学内演習では、構成的エンカウンターグループのファシリテーター体験、場面指導案の作成と実施、救急法の実技演習などを行った。

4-2 博士課程(前期)

助産学概論

1 年次

梅野貴恵、樋口幸

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会で期待される役割と重要性、さらに助産師活動に取り組む姿勢・態度や助産師の現状と課題、助産学研究の意義や研究方法と研究倫理について系統的に教授した。講義はパワーポイントや資料を用いて教授した。2～3名の学生グループによる事前課題「出産や助産の歴史」、「女性を取り巻く社会の変化と親子関係をめぐる問題」のプレゼンテーションとディスカッションでは、各グループ同士の活発な意見交換がなされた。また出産満足度に関する研究論文のクリティークや助産関連のガイドライン等の資料を用いたディスカッションを通して、自然分娩と医療介入分娩の違い、産婦が望む出産や助産師に求められるケアとはどのようなものか自己の考えを述べることができた。

周産期特論

1 年次

梅野貴恵、飯田浩一、後藤清美、小山尚子、佐藤昌司、豊福一輝

講義内容は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得をめざして産科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその医学的管理についての基礎知識、近年増加傾向の無痛（麻酔）分娩、さらに周産期における異常の判断をするために、産婦人科診療ガイドラインに基づき、疾患の病態・検査・治療およびNICUにおける新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は、筆記試験を講師に作成依頼し、学内で実施し全員合格した。

母子成育支援特論

1 年次

梅野貴恵、井上祥明、上野桂子、宇留嶋美弥、草野淳子、桑野紀子、佐藤敬子、平野亙、吉村匠平

女性のライフサイクルにおける性と生殖の問題である不妊や出生前診断、生殖補助医療と生命倫理、社会的支援が必要な母子やその家族をとりまく様々な問題、夫婦・親子関係や国内外の子育て支援制度など、今後の助産師活動の基盤となる内容を教授した。学内外の専門家を講師としたオムニバス形式で実施した。子育て体験は、夏期休業中に育児体験人形を自宅に持ち帰り、学生がおむつ交換、授乳やあやすなどの子育てを24時間体験した。初めての子育ての困難さなど母親の心

理を理解し、支援者の重要性を再認識する機会となった。また、地域で活躍する開業助産師の活動を聴き、病産院から地域における切れ目のない母子への支援について考える機会となった。評価は、各講師によるレポート課題等の評価で行った。今後もそれぞれの実践分野で活動する専門家を非常勤・外部講師として依頼する。

リプロダクティブ・ヘルス特論

1 年次

梅野貴恵、穴井麻友美、宇津宮隆史、大神達寛、花田克浩、平川八大

講義内容は助産の基礎知識として、女性の性と生殖の健康における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得をめざして産婦人科医師と遺伝の専門家を講師とした。性・生殖器に関する形態機能から主な疾患及び検査・最新治療に対する基礎知識、遺伝疾患や遺伝カウンセリング、最新の生殖補助医療の現状と課題、HPV ワクチン接種等の予防を含めた子宮頸癌の動向や今後の展望についても教授された。評価は、筆記試験を講師に作成依頼し、学内で実施し全員合格した。

ウイメンズヘルス特論

1 年次

梅野貴恵、小嶋光明、影山隆之、桑野紀子、實崎美奈、濱耕子、吉田成一

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に関わる国内外の心身の健康問題や生殖補助医療をうける女性のケア、環境・社会問題と母子の健康（免疫・アレルギー含む）を理解し、女性とその家族の健康相談や教育を実施するための知識や技術を教授した。講義は、講師の専門性を活かしたオムニバス形式で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。次年度は、講師の交代が予定されている内容があるため、授業内容等への学生の意見を聴取する。

妊娠期診断技術特論

1 年次

姫野綾、安部眞佐子、小嶋光明、吉田成一、渡邊しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する情報収集やフィジカルアセスメントに必要な基礎的な知識と実践の手法、そして、薬理、栄養、放射線障害などの知識をオムニバス形式で教授した。オムニバス形式にすることで、助産学教員からは伝えることが出来ない知識や最新情報の提供、臨床での助産師の実際の支援を知り、助産師としての在り方について考える機会となっている。

本科目では、正常妊婦およびハイリスク妊婦への支援を思考する機会を設けている。知識の教授後には、グループワークやディスカッションの機会を設け、自分の考えを他者へ伝える機会も重要視した。本講義での学びを今後続く演習や実習に活かしている部分が一部に留まっているため、課題内容を再考し、記憶に残る学習に繋げることが今後の課題である。

分娩期診断技術特論

1 年次

樋口幸、姫野綾、生野末子、豆田ちかの

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術をしている。入学生は分娩見学を経験していたが、コミュニケーションや観察を通して対象を理解することがイメージできない学生もいた。そのため臨床場면을想起しながら必要な知識や五感を使った情報収集の方法について、DVD や模型などの教材を工夫して教授した。模擬事例を用いたシミュレーションでは、ローリスク分娩、ハイリスク分娩、緊急時の対応についてグループ学習を行った。今年度の事例を通して、正常からの逸脱を迅速かつ的確に判断し、多職種と連携して緊急性の高いケースに対応する助産師の基本的な知識及び技術は学習できた。さらに、ペリネイタルロスのグリーフケアについては非常勤講師を招聘し、揺れ動く心理状態に合わせた具体的ケアや多様な母子とその家族に対する支援について学ぶことができた。

産褥・新生児期診断技術特論

1 年次

樋口幸、姫野綾、宇留嶋佳子

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、褥婦のセルフケア能力を高めるための支援や新生児の胎外生活適応過程のケア方法を教授した。学生は、産褥早期と新生児期の支援において必要な基礎知識とケア技術を習得できた。しかし、育児中の母親や乳幼児と接した経験がなく、退院後の育児・生活をイメージ出来ない学生が多くいた。そのため、一般的な産後 2 週間の母子への家庭訪問場면을想定し、心身の変化だけでなく退院後の生活を意識した指導案を作成し、パンフレットを用いて、ロールプレイを実施した。活発なリフレクションの中で、学生は母子の心身のアセスメントの実際を学ぶとともに、妊娠中に対象者の生活背景を把握して地域の保健師と連携することの重要性を理解することができた。次年度は、産後ケア事業や社会資源の活用により継続的な支援が必要な事例についても検討していく。

周産期診断技術演習

1 年次

樋口幸、姫野綾、宇留嶋佳子、梅野貴恵、佐藤昌司、安部真紀、軽部薫

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態を把握・助産診断する技術と、新生児蘇生および母体救急に関する知識と技術について、臨床場面を想定したシミュレーションを通して思考しながら行動することを強化した構成で演習した。胎児の健康状態は、超音波診断機器と高機能シミュレーターを用いて、胎児推定体重の評価や、胎盤・臍帯・羊水を含む胎児健康状態の判断について OSCE を行い、妊娠週数によって胎児の成長と健康状態を適切に評価し対応できる能力を養った。また、学内で新生児シミュレーターを用いた新生児蘇生法の技術演習を行い、日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースに全員合格することができた。次年度は、出産・育児に向けた心身の準備として、妊娠中に変化していく母体の特徴に合わせた体操（マタニティービスク/ヨーガ/骨盤ケア）について学びを深めていく。

助産保健指導演習

1 年次

姫野綾、梅野貴恵、宇留嶋佳子、樋口幸

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する健康問題と個別性を理解し、それぞれの発達段階にある個人および集団を対象として、保健指導案の立案及び実践方法を教授した。さらに、多様な性とセクシャリティ教育についての講義を行い、多様な性について考察する機会を設けた。

妊娠期、産褥期の保健指導は、模擬患者への個別指導を実施し、保健相談、健康教育、援助活動の効果的な実践の能力を養った。妊婦の気持ちを考察する機会を設けるため、模擬患者を学生が実施する工夫や、教員が助産師役となり、実際の臨床現場に近い保健指導のデモンストレーションを行う工夫を意識した。さらに、リフレクションを充実させることで、自分の意見を発言し他者へ伝える機会を設けること、一方的な指導ではなく対象者とのコミュニケーションをとりながら実施することの大切さをイメージ出来るよう意識した。ただし、何より臨床での保健指導の実際を見学することが最善の学びとなり理解も深まるため、いかに 1 年次の早い時期に見学の機会を設けるかを検討していくことが今後の課題である。

今年度も小学校における性教育を実践する機会を設けることが出来た。実践に至るまでには、多くの知恵を出し合い、相談し合いながら練習を重ね、実践に繋げることが出来ていた。健康教育の準備の大変さを知ると同時に、実際の反応から得られる楽しさや達成感を感じる機会となっていた。次年度以降も引き続きこの機会を大切にしていきたい。

分娩期実践演習

2 年次

姫野綾、梅野貴恵、宇留嶋佳子、樋口幸

今年度も自己学習教材として、教員間で作成した分娩介助場面の動画を活用し、自己学習期間を設けることで、デモストレーションの時間を最低限にし、技術練習時間の確保を行った。夜間の自己練習時間の確保も行うことで、「基本的な分娩介助技術は習得できた」と学生が感じる達成度で助産学統合実習へと繋げることができた。引き続き、学生自身が十分練習をして OSCE に臨むことが出来るような練習時間の確保、そして、達成感と自信を得て分娩実習へと繋がる支援をすることが今後の課題である。

助産学統合実習前に、分娩第一期に心音が低下するシミュレーションを実習室で実施した。産婦を演じる教員の演技力も長けていたため、実際の臨場感や緊張感のある演習を実施することが出来た。学生は、考えながら行動する必要性を体感し、さらに、リフレクションをすることで他学生の意見も踏まえながら、自己の行動を振り返ることが出来ていた。その他、フリースタイル分娩介助・会陰切開縫合術の演習を助産学統合実習後の 9 月に実施した。実習では経験できないからこそ、演習を通して経験することで縫合の難しさや自然なお産への関心を高める機会となっていたため、引き続き継続していきたい。

助産過程展開演習

1 年次

樋口幸、梅野貴恵

助産を実践するための基本的な助産過程の展開について、実際の事例を用いて実践に応用する思考過程を教授した。まず、講義形式で助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授した後、妊娠期の異常事例、分娩期の正常事例とハイリスク事例の 3 つの事例について助産過程を展開した。事例の展開方法は例年と変更せず、各自で自己学習したのち 2 名ずつのグループで『実践マタニティ診断』指標についてディスカッションし発表した。アセスメントに必要な基礎知識はあるもののアセスメント力が不足しており情報の羅列となる傾向が強かった。そのため、思考・アセスメントを促し、その内容を統合して分娩の進行への影響に関連付けることを意識した。分娩期の事例では、初期診断だけでなく、経過診断の修正と初期診断計画の修正、ハイリスク事例では分娩進行中に医療介入が必要になった場面を取り入れ、臨床推論力を強化した内容とした。妊娠期および分娩期における妊産婦の身体的・心理的・社会的健康状態、胎児の発育・発達および健康状態について判断し助産診断名および計画の立案ができた。今後はアセスメントに必要な基本的な知識の定着を図りながら、優先度を意識したケア計画立案を強化することが課題である。

助産マネジメント論

1 年次

梅野貴恵、安部真紀、生野末子、戸高佐枝子、樋口幸

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために開業も含めた助産管理について教授した。講義は周産期領域における管理的視点を養う内容とし、資料やパワーポイントを用いて実施し、講師それぞれの助産師としての専門性を考慮し、オムニバス形式で実施した。特に、産科領域で起こりがちな医療事故や災害時の母子への助産師としてのケアなど、身近な問題を教授しディスカッションした。また、新カリキュラム対応した助産に関する政策立案のプロセスについても教授した。評価は、発表内容や筆記試験から行った。開業助産や災害時の助産ケアの実践内容は学生の評価が高いため継続して非常勤講師に依頼する。

地域母子保健学特論

2 年次

梅野貴恵、小野治子、川井梨沙、内藤文子

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、母子保健における社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、大分県の母子保健の現状をふまえた母子保健施策と母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境や地域における具体的な母子への支援について、事例をとおしたディスカッションで理解を深めた。最後に、『子育てを取り巻く環境と助産師の役割』について、学生自身の4月以降の就業先の自治体、実習の受持ち母子の自治体等の母子保健統計データ、ホームページなどをもとに資料を作成しプレゼンテーションを行った。それぞれの発表に対して質問や意見交換を行い、母子保健をめぐる現状とこれから助産師として活動するにあたって、病産院から地域にもどった母子への支援についてそれぞれの地域の母子保健事業を把握する必要性の理解を深めることができた。

助産マネジメント演習

2 年次

梅野貴恵、宇留嶋佳子、樋口幸、姫野綾

助産業務の行われる病産院において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習とした。助産院における管理を学ぶため、生野助産院に学生2名1組で2日間ずつ実習した。自分達が分娩介助や産後のケアを体験したことから、助産院院長ひとりで行う実際の業務管理の意味が理解でき、改めて助産師に求められることへの責務を実感していた。第38回日本助産学会のオンデマンド講義（「どうする？お父さんの育児支援」「女性が母乳育児を選択することでもたらされ

る経済的な効果」)を Zoom で聴講し学びを深めた。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定し、実習室でシミュレーション学習を行った。さらに周産期母子医療センターへの母体搬送事例3事例をもとに、受入れ施設助産師として求められる役割と助産ケアの実際についてグループで受入れ計画を立案し、模擬妊婦や模擬医師役を教員が行い、シミュレーション学習を行った。実施後、デブリーフィングによって、計画していたことが実際の緊急場面では再現できないこと、事前準備や報告・確認の重要性を発表した。演習後、助産師としての自己の課題と将来の目標をレポートし明確にすることができていた。次年度も、助産院助産師の自律した助産ケアの実際を学べる機会を得られるよう依頼する。

助産学統合実習

2 年次

梅野貴恵、宇留嶋佳子、樋口幸、姫野綾

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から分娩介助を通して産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別に応じた助産ケアの臨床判断力と実践能力を養うことを目的に 2 施設で実習を行った。あおい産婦人科医院と堀永産婦人科医院で 5 月 27 日から実習開始し 9 月 6 日まで待機を伴う実習を行った。分娩介助例数は、平均 9.3 例 (9~10 例) の実施となった。担当教員が体調面の確認を毎日行い、臨地指導者も夜間の待機や呼び出しなど配慮をしてくださり、実習期間中に大きく体調を崩した学生はなく実習できた。各施設ともに担当教員や臨地指導者の指導を受け、受け持ち妊産婦へのケアも 1 か月健診まで実施することができた。中間カンファレンスでは、学生個々の学びの状況に応じた助言をいただき、後半は継続事例など経験を重ねるごとに学びが深まっており、最終カンファレンスでは各人の成長を認められた。継続事例 3 例を妊娠期 (1 例分娩期) から 2 週間健診、さらに産後 1 か月まで受け持ち、指導者の指導を受け妊産婦個々の問題に寄り添い助産ケアを実践することができた。特に分娩例数が減少していることで、産後の母子に寄り添いケアを熱心に取り組む姿勢があり、母親からの信頼を得ていた。各施設の分娩例数が減少する中で、次年度は学生が 10 名であるため 4 施設での実習を計画している。全員が 10 例以上の分娩介助を実施できるように指導者と連携し、待機実習等を含めて指導体制を密にしていく予定である。

ハイリスク妊産婦ケア実習

2 年次

梅野貴恵、宇留嶋佳子、姫野綾

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に総合周産期母子医療センターで 2 週間の実習を行った。昨年度は、COVID-19 感染症後で 7 日間の臨地実習であったが、今年度は通常通り 2 週間の実習を行った。学生 2 名で

ハイリスク妊婦 1 名を受け持ち、感染対策を行いつつ指導者の助言を得ながら助産ケアを展開した。学生は、異常の予測をした上で受持ち妊婦のニーズを把握し、少しでも安楽な入院生活が行えるようにと指導助産師に計画の相談をしながらケアを展開した。また、ハイリスク妊産婦の心の揺れ動きにも助産師のケアが重要であることを学んでいた。また、退院支援カンファレンス等に参加することで、スタッフ間の情報共有や多職種との連携の重要性を認識していた。しかし、受持ち妊婦への計画を立案しても基本的な看護ケアの経験が無い（学部時代に臨地実習経験が乏しい）ことから実際のケアへつながらない場面もみられた。次年度以降は、学部での実際の看護経験を確認し、実習前に事前練習等を準備して臨ませる必要がある。

妊娠期課題探究実習

1 年次

梅野貴恵、宇留嶋佳子、樋口幸、姫野綾

産科超音波装置を用いた助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が確認し科学的根拠に基づいた助産診断を行い、妊婦のニーズに寄り添い、妊婦の生活に応じた保健指導ができる能力を身につけるための実習である。10 月 8 日から 11 月 15 日の期間に、1 学生が大分県立病院産科外来 3 日、わたなべ助産院 2 日、生野助産院 2 日の計 6 日間実習し、12 月 3 日から 2 月 14 日の期間に、堀永産婦人科医院（学生 6 名）、別府医療センター（学生 2 名）、ひらかわ産婦人科医院（学生 2 名）の 3 施設に分かれて実習した。大分県立病院産科外来は見学後 5~10 例の経腹超音波検査を経験した。施設の産科医師や助産師、助産院長、教員の指導を受けながら、2 月末までに超音波診断装置を用いた妊婦健康診査 12~19 例と個別に応じた保健指導 7~10 例を実施した。別府医療センターとひらかわ産婦人科医院で実習した学生の経腹超音波検査の経験数が少なかったため、2 月 3 日から 2 月 14 日の期間に 5 日間、大分県立病院産科外来で補習実習を行った。2 月 17 日から 3 月 29 日の期間は、堀永産婦人科医院、あおい産婦人科医院の 3 施設で、6~7 月に出産予定の妊婦 2 名を継続事例として受持ち妊婦健診日に実習した。継続事例の経験を含めて実習目標は達成された。次年度以降も、妊婦数の減少等により、状況をみながら実習先を検討する必要がある。

NICU 課題探究実習

1 年次

樋口幸、宇留嶋佳子

大分県立病院総合周産期母子医療センターNICU で実習を行った。受け持ち児を通して、ハイリスク新生児の生理的特徴と子宮外生活適応の過程をアセスメントし、個別性のある看護を展開し、母子分離された家族に対する親子関係成立のための看護計画を立案した。ケアの視点や具体的なケアを見学し、NICU 看護の特徴や個々のハイリスク新生児への看護援助の視点を理解できた。

その後の学内演習では、高機能シミュレーターや SimPad を用いて受け持ち児への看護援助を実践した。体調不良の1名についてはペーパーペイシェントを用いた学内実習で対応し、カンファレンスで学びを共有した。感染予防対策として面会制限は続いており、学生が直接家族と接する機会は得られなかったが、母子分離された両親への愛着形成促進へのケア、家族とのつながりや退院後の生活を考えた育児環境の調整や他部門との連携については、指導者からの臨床講義で強化した。学生は、助産師として妊娠期から果たすべき役割について活発にディスカッションし学ぶことができた。

地域母子保健演習

2 年次

梅野貴恵、宇留嶋佳子、内藤文子、姫野綾、渡邊しおり

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習とした。大分市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、全員が1歳6か月児健康診査に参加し、大分市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性や、健診状況から母親と子どもの関係性を理解し、問題解決へ向けた保健師の対応や多職種、他機関との連携を理解した。出産後3～4か月の母子の理解は、実践マタニティ診断の産後期の診断名等を参考に、情報収集計画を立案し実施した。堀永産婦人科医院で実習した学生5名は施設での3か月児健康診査に参加し、継続事例の母子の状態を把握し予防接種等の説明を行った。あおい産婦人科医院で実習した学生2名は施設の許可を得て4か月児健康診査後の時期に継続事例に電話訪問を行った。3～4か月頃の受け持ち母子の様子を対面や電話での聞き取りから、家族や地域の人に支えられ成長している母子を理解し、助産師として育児期までの支援の重要性を認識する機会となった。次年度も、3～4か月頃の健診の参加と電話訪問から母子の状況を理解する機会とする。

広域看護学概論 I

1 年次

川南公代、麻原きよみ、小野治子、桑野紀子、佐藤愛、藤内修二、妻木美香、藤本優子

専門職としての保健師の責務を果たすための知識と態度を身につけ、自分がめざす保健師像を探求することを目的とした。学生は、講義内容に関するディスカッションやグループワークを通して、公衆衛生看護活動の概要、保健師の使命、人権擁護、倫理的実践能力、個人・家族・集団・地域社会・職場・学校・国際社会の視点について、理解を深めることができた。次年度も同様の形式ととりながら、学生が他の履修科目とも関連づけ、保健師としての責務を果たすための学びを深める機会としたい。

広域看護学概論Ⅱ

1 年次

川南公代、小野治子、佐藤愛、妻木美香、藤本優子

看護師学士教育を通して履修した理論を基盤に、公衆衛生看護活動に理論やモデルを活用する意義を理解し、公衆衛生看護の実践に活用できることを目的としている。学生は、公衆衛生看護活動で活用できる理論やモデルを選択し、その歴史的背景や機能を学習し、実習経験を活用し発表した。学生は、発表後のディスカッションを通して、学びを共有し今後の自身の実践活動への活用など学びを深める機会となった。

次年度は、実習前後の時期を考慮し、同様の形式にて理論やモデルを自身の活動に活用できるように実施していきたい。

広域看護展開特論

1 年次

川南公代、小野治子、川井梨沙、川崎涼子、佐藤愛、妻木美香、藤本優子

地域で生活する個人、家族、集団、地域を対象とした保健所と市町村保健センターの保健師の支援技術を学ぶことを目的とした。学生は、保健師や歯科医師等の講義を通じて、ライフサイクルやあらゆる健康レベルの人々へのポピュレーションアプローチとハイリスクアプローチ、共生社会をめざす保健活動を理解する学ぶことが出来た。学生は、実習体験を活用し、ディスカッションにて学びを共有することが出来た。

次年度も実習時期を考慮し、講義内容と実習体験を連動し、保健師の支援技術を学ぶ機会とした。

広域看護管理特論

1 年次

川南公代、小野治子、佐藤愛、妻木美香、藤本優子

公衆衛生看護管理の概念と基本的理論から、管理的な立場の保健師の機能と役割について理解するとともに、チームの一員としてチームの生産性向上に貢献する役割を理解することを目的とした。学生は、公衆衛生看護管理の 8 機能を理解し、実習中に理解した管理の内容を実習後にまとめることができた。学生間の発表を通して、学生は学びを共有し、ディスカッションにより、新人保健師が担う管理機能を具体的に理解することができ、自身の学びを深めることができた。統括保健師の講義を通して、統括保健師の役割を理解することができた。

次年度も、学生が実習を通して管理機能を具体的に理解した内容をいかし、学生の学びを深めていきたい。

産業保健特論

2 年次前期

小野治子、高波利恵、吉田愛

産業分野における保健活動のあり方を修得することを目的としている。労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害の防止を含めた健康管理、メンタルヘルス対策、健康的な職場づくりについての講義を実施した。さらに、企業で働く保健師より、職域における保健師活動の現状と課題について実際の活動事例を示しながらディスカッションを含めた講義を行った。広域看護活動展開実習（産業分野）と連動するよう講義内容を構成した。

学校保健特論

2 年次

小野治子

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、養護教諭の役割と機能および学校保健との連携を理解することを目的としている。現在の学校が抱えている子どもの健康課題や地域の保健師との連携の取り方など実際の状況について各学生の発表、ディスカッションを通し、学びを深めた。また、特別支援学校の見学を実施し、学校保健活動と地域保健活動の連携について考察した。次年度も支援学校の見学を取り入れる予定である。

健康危機管理特論

1 年次

加藤典子、市川由希子、小野治子、鎌田久美子、玉井文洋、本山秀樹

地域社会における健康危機管理に関する基本的な考え方の理解を深めることができるよう一部演習形式で事例を提示し、保健師に求められる支援を個人、グループで検討した。発表やディスカッションを通じて、保健師の役割を深めることができた。また、県の健康危機管理対策の経験者や大分 DMAT で活躍している講師、国の制度運用に関連している講師、新型コロナウイルス感染症の拡大時に保健所を支援した市町村の保健師による講義を通して、大規模災害発生時の実際の対応について実践と応用ができるよう講義内容を構成した。

健康増進技術演習

1 年次

関根剛、稲垣敦、安部眞佐子

3名の教員により、心理相談（関根）8回、運動指導（稲垣）6回、栄養指導（安部）7回の合計21回の講義を遠隔講義と対面講義をあわせて行った。講義内容は各教員の重複しない専門領域であるため、独立して講義・評価を実施した上で総合的な評価を行った。今年度の受講生は7名であった。講義内容は、講義、演習、発表など各教員の講義展開により様々な方法を用いて実施した。

広域看護アセスメント学演習

1 年次

藤本優子、小野治子、川南公代、佐藤愛、妻木美香

保健師の活動の基本となる地域診断の意義と目的、活用できる理論やモデルを理解し、実習地の質的・量的データを収集・分析して地域の強みおよび弱みを多角的に捉え、地域の健康課題を抽出することを目的とし、CAPモデルに基づく演習を実施した。

学生は、自身の実習地について、KDBシステム等を用いて、横断的・縦断的視点の双方から量的データを分析することにより、地域の特性を明らかにした。同時に、積極的に実習地に出向き、地域や住民と関わる中で学生自身が感じたことを指導者や教員と確認しながら、質的情報として追加し健康課題を精練させた。学生が上記を進めるにあたり、教員は情報収集や分析について学生と密に関わりながら方法や視点を教授した。本科目は、実習の事前準備としての位置づけになるため、必要に応じて実習指導者と連携をとり、共通認識をはかりながら演習を進めた。

データヘルス計画が発展し、健康課題を「見える化」する力が一層必要とされているため、引き続き、健康課題およびその根拠を見せる化する力を育成していきたい。

健康教育特論

1 年次

小野治子、川南公代、藤本優子、妻木美香、佐藤愛

個人と家族、集団が主体的に自らの健康の維持増進に取り組みことを目指し、そのために、必要な知識・方法を効果的に伝える技術について修得することを目的とした。具体的には、母子の家庭訪問に必要な知識、技術を修得するために、乳幼児の発達評価を含めた家庭訪問のロールプレイングを実施した。ロールプレイングの後は、学生、教員で振り返りを実施した。来年度もロールプレイングを実施していく予定である。

健康リスクアセスメント演習

1 年次

藤本優子、小野治子、川南公代、佐藤愛、妻木美香

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得することを目的に、事例を用いた演習を実施した。具体的には、保健師が支援する代表的な 3 つの紙上事例を用いて、学生がグループでプレゼンテーションを行った。全ての学生が主体的に取り組めるよう、グループは少人数で編成した。また、全てのグループが共通事例に取り組むことにより、相違点をディスカッションできるように工夫した。その結果、調べ学習の不足点に学生自身が気づき、次のプレゼンテーションの際に追加学習してくるなど学びが深化された。

次年度は、学生自身の実習経験と絡めることで理解を深められるよう、事例の紹介なども組み入れながら演習を展開したい。

疫学特論

1 年次前期

佐伯圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を教授した。テキストの講読とディスカッション、演習、確認のための小テストを組み合わせることで学習の定着をはかった。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。また、ほぼ毎回パソコンでのデータ解析の演習問題を導入して理解を深めることを目指すとともに、一部の高度な内容は後期後半開講となる「疫学・保健統計学演習」へと移動する形で進行を整理した。

保健統計学

1 年次前期

佐伯圭一郎

健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法をエクセルや R を利用した演習を交え教授した。別科目である「疫学」における統計手法で重複する部分については、両科目のテキストを補足する形で演習を十分に行って、理解を深めた。ただし、R についてはパッケージ EZR を利用した演習であり、より高度な解析能力を習得するために、R に関して更に実践的な演習を含んだ内容に改めていく必要を認めている。

疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯圭一郎、品川佳満、岡田悠希

疫学特論および保健統計学と連続した内容として、習得した知識を活用して実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。また、保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。今年度は広域コースの履修者のみであったため、演習の一部を対応する講義科目に前倒して実施する運用が可能となったが、他コースの履修者も含まれる場合の対応については、当該履修者への個別対応も含め、科目の進め方に、検討の必要性を感じている。

保健医療福祉行政特論

1 年次

加藤典子

社会保障制度の理念と構造の理解に加え、保健師に必要な政策形成能力を養うため、保健医療福祉の行政・制度と保健師の活動を関連づけた上で、保健医療福祉の行政・財政の理念やしくみ、保健医療福祉分野における生活習慣病対策や母子保健対策等の各分野の政策と動向が理解できる内容とした。また、保健医療福祉の企画から実施、評価のプロセスに関する知識を着実なものとするため、グループで市町村の事例をもとに演習を行った。演習は、実習を未経験の学生にとってイメージがつきにくく、繰り返し展開した。今後は、保健所の事例にも取り組めるよう、事前学修の充実が求められる。

疾病予防学特論

1 年次

池邊淑子、藤内修二、三浦源太

地域に生活する個人・家族・集団・社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を養うことを目的とし、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法、診断治療学などの医学的知識を基礎から修得する。特に保健師として、疾病予防を担う専門職としての役割を果たすため、医学的エビデンスに基づいた保健指導、健康教育を実践できるよう、特定健診の検査結果の解釈に必要な知識と実践力を身につけることを重視している。そのため、講義には医師による指導を取り入れ、臨床現場に即した内容構成とした。また、2 年次に実施される広域看護活動展開実習（産業分野）において行う保健指導、健康教育への円滑な移行を図っている。

実践薬理学特論

1 年次前期

吉田成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。また、医薬品の治療効果に関する論文データの見方、意味を評価できるような講義も行った。

本年度も受講者7名全員が単位取得に至った。次年度以降はより理解しやすい講義を行いたい。

薬剤マネジメント学特論

1 年次

小野治子、井上真

地域で治療や服薬指導に関わる看護職として、必要な薬剤コンプライアンスの基礎知識、多剤投薬、国民医療費の高騰など、医薬品に関する諸問題を理解し、その対策を考えることを目的としている。保健師活動に必要な服薬指導の知識を修得するため、薬剤師による講義を取り入れ、学生との双方向のやり取りを重視した授業を実施した。講義では、理解を深めるために、学生とのディスカッションを交えながら進め、知識の定着を図るために毎回、小テストを実施した。来年度も同様に小テストを活用し、学生の積極的な参加を促しながらより効果的な学習環境を提供していく予定である。

環境保健学特論

1 年次

小嶋光明

健康と環境（物理的要因（電離放射線、電磁界）、化学的要因（化学物質）、生物的要因（ウイルス））の関わりについて、基礎を整理した講義を行った。また、環境問題（PM2.5）、食生活（摂取カロリー、飲酒）の健康影響に関する最新の学術論文を紹介し、疾病の予防と健康増進につなげるための対策を議論した。受講者からは環境因子による健康影響を根拠をもって理解することができたとの声が聞かれた。次年度も環境因子による健康影響の最新の知見を取り入れて講義をしていく予定である。

地域生活支援実習

1 年次

川南公代、小野治子、加藤典子、佐藤愛、妻木美香、藤本優子

対象者とその家族を継続的に家庭訪問し、家族が支援の単位であること、個別事例から地域に必要な支援を検討することを目的としている。学生は、県内 7 か所の市町において、6 月から 2 月までの 8 か月間に、保健師との同行または学生が単独で家庭訪問を実施し、個別支援を体験できた。健診や健康相談の機会も活用し、継続的に対象者とその家族の現状を把握することができた。継続的に対象者とその家族の変化を捉え、必要な支援や保健師の訪問の意義について、理解を深めた。

次年度も、実習施設の実習指導者へご相談し、対象者をご紹介いただき、対象者にご協力をいただき、実習を実施していきたい。

健康教育演習

1 年次前期

小野治子、川南公代、藤本優子、妻木美香、佐藤愛

健康行動理論に基づき健康教育の技術と展開方法を修得することを目的としている。地域マネジメント実習Ⅰ・Ⅱと連動させ、実習地の健康課題より対象者と健康教育のテーマを選定し、健康教育の企画案、指導案、媒体作り、実施に向けたデモンストレーションをそれぞれ 1 回ずつ実施した。各発表の後、学生と教員間で意見交換を行い、内容の見直しや改善を加える過程を通じて、実践的かつ理論的な理解を深める学習活動とした。

広域看護学実践演習Ⅰ

1 年次

小野治子、川南公代、藤本優子、妻木美香、佐藤愛

地域生活支実習と連動し、個人・家族を対象とした公衆衛生看護活動について家庭訪問の計画立案・アセスメント・評価の演習および実践を実施した。実習終了後には、各学生が担当した事例の報告や家庭訪問のまとめを行い、学生同士での情報共有を通じて多様な視点から学びを深める機会を設けた。

広域看護学実践演習Ⅱ

1 年次

小野治子、川南公代、藤本優子、妻木美香、佐藤愛

地域看護診断に基づき、地域マネジメント実習Ⅰ・Ⅱで実施した内容について、公衆衛生看護活動に必要な理論に基づき整理・統合する演習を実施した。また、習全体を通じた学びのまとめを実施し、各学生の経験や気づきを学生間で共有することで、多角的な視点からの理解を深める機会とした。

広域看護学実践演習Ⅲ

1 年次

小野治子、川南公代、藤本優子、妻木美香、佐藤愛

広域看護活動展開実習Ⅰと連動し、組織を対象とした公衆衛生看護活動に関する演習を実施した。演習では、保健医療福祉システムの変遷や関連する理論・政策について理解を深めるとともに、今後求められる社会資源や健康政策について考察する力を養うことを目的とした。さらに、実習全体を通じた学びのまとめを実施し、各学生の経験や気づきを学生間で共有することで、多角的な視点からの理解を深める機会とした。

地域マネジメント実習Ⅰ

1 年次

川南公代、小野治子、佐藤愛、妻木美香、藤本優子

実習前の広域看護アセスメント学演習と連動し、実習地域の既存の量的データを収集し分析を通して、実習地域の関心がある分野の健康課題を抽出できることを目的としている。

学生は、別府市、臼杵市、豊後大野市、佐伯市、日田市、中津市、大分市において、実習施設にご協力をいただき、7月に1週間の実習を行った。学生はそれぞれに地域の量的・質的データを収集できた。

次年度は、広域看護アセスメント学演習へ連動し、実習地域の既存の量的データを収集し、実習施設にご協力をいただき、実習をしていきたい。

地域マネジメント実習Ⅱ

1 年次

川南公代、小野治子、佐藤愛、妻木美香、藤本優子

地域マネジメント実習Ⅰと連動し、実習地域の既存の量的・質的データを収集し分析を通して、実習地域の関心がある分野の健康課題を抽出できる能力を修得することを目的としている。学生は、別府市、臼杵市、豊後大野市、佐伯市、日田市、中津市、大分市において、実習施設にご協力をいただき、9月に3週間の実習を行った。学生は実習地域の量的・質的データを収集し統合し、健康課題を抽出できた。広域看護学実践演習Ⅱへ連動し、健康課題を解決するための対策や評価について、さらに検討した。実習終了後9月26日の実習成果報告会は、実習施設だけでなく、大分県国民健康保険団体連合会等の方々の参加を得て、オンラインにて開催し、実習地域の健康課題、対策や評価について意見交換を行った。

次年度は、同様に実習施設にご協力をいただき、実習地域の量的・質的データを収集し、広域看護学実践演習Ⅱへ連動し、実習をしていきたい。

広域看護活動展開実習Ⅰ

1 年次

川南公代、小野治子、佐藤愛、妻木美香、藤本優子

地域生活支援実習と地域マネジメント実習Ⅰ・Ⅱで習得した知識と技術を統合させ、学生が関心ある分野の難病、精神、母子、感染症、地域・職域連携などの現状から健康課題を抽出し、健康課題を解決する保健師の取り組み、評価までのプロセスを展開する実践力や分かりやすく伝える能力を修得することを目的とした。

学生は、県内7か所の保健所、保健部（東部保健所、中部保健所、南部保健所、豊肥保健所、西部保健所、北部保健所、大分市保健所）において3週間の実習を行った。各学生は関心ある分野について、実習施設の実習指導者の指導、教員や学生との意見交換を行いながら、実習に取り組むことができた。実習終了後は、広域看護学実践演習Ⅲへ連動し実習のまとめを行い、12月13日に実習成果報告会を開催した。実習施設、大分県国民健康保険団体連合会、全国健康保険協会大分県支部の方々に参加いただき、学生は自身の取り組みを発表することができた。

次年度は、同様に実習施設にご協力をいただき、学生は実習地域の関心ある分野について実習施設のご協力をいただき実習し、広域看護学実践演習Ⅲへ連動してまとめをしていきたい。

広域看護活動展開実習Ⅱ

1 年次

川南公代、小野治子、佐藤愛、妻木美香、藤本優子

1 年次の修得した知識と技術を統合させ、を目的に、学生は産業保健分野の 7 か所の実習施設にて 1 週間の実習をすることができた。

学生は、実習施設にて職場での健康づくりのために、実習施設の対象者の健康課題を解決するために健康教育の企画や実施、健康相談等を経験する機会となった。

次年度は、同様に実習施設にご協力をいただき、実習をしていきたい。

広域看護活動展開実習Ⅲ

2 年次

小野治子、川南公代、藤本優子、妻木美香、佐藤愛

竹田市市地域包括支援センター及び由布市地域包括センターにおいて地域包括支援センターの機能と保健師の役割について学ぶ 1 週間の実習を実施した。高齢者宅への訪問や会議等に参加し、地域に暮らす高齢者の健康課題に対するそれぞれの支援の実際について理解を深めることができた。最終日にはカンファレンスを行い、各学生がそれぞれの学びを共有することで、多様な視点から学びを深める機会とした。

NP 特論

1 年次

甲斐博美、石田佳代子、草野淳子、庄山由美、藤内美保、長谷川健美、廣瀬福美、村嶋幸代

老年・小児の NP コース 10 名が履修した。日本の医療社会情勢と Nurse Practitioner 教育の創設経緯と国内外の NP 教育の歴史的変遷や役割・活動について理解し、高度実践看護師としてのコンピテンシーを学び、日本の診療看護師 (NP) (以下 NP) に係る現状の課題や展望から今後の NP が果たすべき役割について考えた。NP 教育創設に係る教員や実践者として活動する NP の講義を通じ、NP に必要な能力をプレゼンした。病院の管理職として活動する NP の組織作りや看護管理の視点と、離島を含む在宅領域で実践を重ねる NP による講義から、プライマリ領域の NP の役割を幅広く学ぶ機会とした。NP の能力や役割をイメージしながら学習し、この科目は特に、このあとの施設で実践する NP に同行する演習による学習効果を上げることにつながった。次年度も、NP の活動の実態や能力を理解するとともに、高度度実践看護師としての NP の役割を見出し、いくスタートになる科目とする。

プライマリ NP 演習

1 年次

甲斐博美、上野聖子、大島操、清原小百合、草野淳子、藤内美保、谷山尚子、廣瀬福美、廣田真理、光根美保

1 年次 10 名（小児・老年）が履修した。学内での演習では、診療看護師（NP）の活動や特定行為の実践を含む活動における組織での医療安全体制を講義から学んだ。続けて自施設の組織分析を通じ、組織分析を通じて所属する組織やチームの強みと課題から NP の役割を全体で討論検討し文献学習で強化した。それらの学習をした後に NP の実践の場に同行して活動場面に触れた。同行実習は、事前学習とつながり、履修者の達成感が高かった。同行は、診療所や訪問看護ステーションなどのプライマリ領域で活躍する NP の協力のもとで実施できた。今年度は更に複数の NP が所属する新規演習施設も開拓し、様々な活動や組織作りを学べた。実際の NP の活動と学内での学びを統合して、NP に必要な能力と役割をプレゼンし他施設の学びを共有した。入学直後の NP 特論からの連動で、NP の役割について学びを深めることができた。NP が果たすまたは期待される役割の幅広さから、学生自身の経験を補強する知識習得と事前学習の意義を課題学習と統合して自覚した。次年度は、さらに学内演習での事前学習とこの科目につながる課題の自己学習を強化することで本演習による学びが充実できるよう支援する。

NP 実践特論

1 年次

藤内美保、甲斐博美、草野淳子、古賀雄二、後藤愛、菅谷愛美、庄山由美、高根利依子、廣瀬福美、光根美保

2 単位、15 コマの講義・演習形式の科目であり、NP コース 10 名が履修登録したが、1 名が長期履修のため欠席した。科目の目的は、診療看護師の活動の本質的要素を探究することである。そのため、診療看護師の実際の活動を知ること、その周りの環境を知ingことを目的に講義形式で教授した。最後の 4 コマは、科目目的を達成するため、講義内容や文献検討、既習学習から、診療看護師の活動の一部を取り上げ（例：臨床推論の特徴、チーム医療の活動の特徴など）、そのテーマを掘り下げ、プレゼンテーションしてもらった。次年度は、さらに早期から診療看護師の活動の本質的要素は何かを見つめる視点をもつことを動機づけていく必要がある。

老年診察診断学特論

1 年次後期

濱中良志、永瀬公明、加隈哲也、糸永一朗、安藤優、中村雄介、中村朋子、佐分利能生、溝口博本、宮崎美樹、西水翔子、藤谷直明、江口晴彦、長濱明日香、別府幹庸、草野淳子、足立綾

プライマリーケアから臨床医学の各専門領域にわたって、老年系と小児系の専門医師による講義、演習を行った。

アセスメント学演習

2 年次

藤内美保、足立綾、石田佳代子、草野淳子、立川洋一、濱中良志、原卓也、光根美保、宮川ミカ

2 単位、15 コマの演習科目であり、NP コース 7 名が履修したが、1 名途中体調不良のため欠席し単位取得できなかった。NP コースの令和 5 年度のカリキュラム改正で老年と小児の合同科目とした。立川医師が 10 コマ、宮川診療看護師と光根診療看護師が各 2 コマ担当した。今年度は臨床推論の思考プロセスを一定のフォーマットにより、統一化を図ることで、考え方を定着することができた。また、疾患が特定でき治療を開始している場合の臨床推論や記録の仕方についても説明をしていただいた。

試験は、筆記試験と OSCE で行った。8 割合格基準で受験者全員が合格した。

次年度は、医師と事例の選定を相談して、さまざまな症状や年代など、多角的な臨床推論の事例を通して、多様で幅広い知識の定着と活用ができるようにする。

臨床薬理学特論

1 年次後期

吉田成一、伊東弘樹、田中遼大

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。学生間において学修習得状況に差があることが明確であり、受講を継続できない者が生じた。また、12 名の受講生のうち、本試験受験者は 11 名で単位認定に至った受講生は 7 名であり、再試験での単位認定に至った受講生が 4 名であった。

本講義が開講する前に、選択科目、薬理学特論を開講しているが、薬理学特論の学修習得状況が本科目の学修習得状況に影響を与えることが考えられるため、次年度以降、薬理学特論の講義内で本科目に関する学修についての周知も行っていきたい。

臨床薬理学演習

2 年次前期

吉田成一、甲斐博美、草野淳子、大仲將美、高木繁薫、松本康弘

本科目は本年度より老年薬理学演習と小児薬理学演習を統合して開講した科目である。老年領域および小児領域における NP の役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力に関する事例課題を用いた演習とした。症例を通じて、病態の理解や検査や処方判断、治療マネジメントも含めた薬理学の修得をディスカッションによる演習で強化した。NP が活動する臨床に多く見られる症候や事例を組み込み、演習の質を上げた。事例に対する資料作成、ディスカッション時の理解度等、受講生は一定水準の学修習得状況に達したが、全症例課題の提出について理解をしていない受講生もいたため、次年度以降、開講時に周知したい。

7 名の受講生のうち、1 名が受講を中断し、6 名が単位認定に至った。

医療安全実践演習

1 年次

甲斐博美、足立綾、大島操、加藤典子、草野淳子、佐藤博、谷山尚子、田村委子、藤内美保、廣瀬福美、平井健一、古川雅英、松久美、山本真

3 か月間に渡り大学や病院などの施設での演習で 10 名が履修した。特定行為を含み高度な知識・技術を習得し、安全面に配慮した高度実践看護師としての能力を養うことと、特定行為により症状マネジメントのための技術を安全かつ確実に実施できる能力を養う目的で学んだ。特定行為に係る制度の講義から開始し、シミュレーターなどを活用して実際の原理原則から手技を学び、ナースィングスキルも活用して学習の強化をした。講師は、その特定行為に精通している医師や診療看護師（NP）であり、年々スキルアップする NP からの直接の指導は学びが大きかった。臨床での事例提供により臨場感があることから学習効果が高まった。演習とナースィングスキルなどの自己学習を統合して習得に取り組んだ。2 月に特定行為の筆記試験と OSCE を実施し、第 3 者評価も受け 9 名が合格した。次年度も実務家の指導者に協力を得て、特定行為が安全に実施できるように演習を組み立てていき、特定行為研修につなげていく。

特定行為実習

1 年次

甲斐博美、大島操

特定行為実習前の筆記試験と OSCE 試験の合格者 9 名が履修した。特定行為の実習に際し、学内ではナースィングスキル学習も強化して準備を行った。特定行為の項目の到達目標、実習における

医療安全を意識するように指導した。レポートによる振り返りと事故課題の明確化を支援し、2年次の特定行為実習につなげていく。この科目では、特定行為の行為における対象者の全体像、経過と実施後の評価と振り返りを統合し、手技と倫理的思考、タイムリーな判断力の強化を怠らないよう教育していく。

NP 探求セミナー

2 年次

甲斐博美、草野淳子、廣瀬福美、足立綾、大島操

2 年次 6 名が履修した。今年度から小児 NP コースと老年 NP コース全員での履修科目とし、小児老年 NP 実習 I II III の 14 週間の学びを通し、総まとめとしてケースレポートによる臨床推論や看護マネジメント、包括的健康アセスメントの学びを発表した。実習全体を通じて学んだ NP の役割を別日にプレゼンテーション、全体のディスカッションで検討した。加えて、今年度から、シミュレーター（シナリオ・ふりかえ朗）を活用して、在宅事例をもとに倫理的意思決定支援の実際を演習し事前学習も含めて、自身の実習での学びと統合された。また、学んだ知識と技術強化のために特定行為などを含む技術演習も実施した。14 週間の実習の総まとめとして思考の整理や知識の確認、NP の役割を探究することには大きな意義があった。今年度は、シミュレータ活用の事例演習により、紙面上のまとめだけでなく、演習の形で実感することを強化した。今後は、実習終了後の学びを整理探究とともに、経験を言語化していくことをさらにこの演習で強化していく。

老年疾病特論

1 年次後期

濱中良志、一万田正彦、財前博文、小坂聡太郎、佐分利能生、加隈哲也、塩月成則、木村成志、

NP としてプライマリーケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病について病態生理学との関連性を学び、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を教授した。

老年 NP 実習 I

2 年次

藤内美保、甲斐博美、廣瀬福美、石田佳代子、大島操、山田貴子、濱中良志

老年 NP 実習 I は、総合病院で、8 週間（9 月 2 日（月）～10 月 25 日（金））実習を行った。NP コースの全ての科目を統合する総まとめの科目であり、理論と実践を統合する科目である、多くの多様で判断が難しい症例を受け持つことで、臨床推論能力やマネジメント能力を強化できる実習科目である。老年 NP 学生は 5 名で、県立病院、厚生連鶴見病院、大分医療センター、津久見

中央病院、豊後大野市民病院で医師の指導のもと、実習を行った。またケースレポートも 13 症例のうち、老年 NP 実習で 8 症例程度をまとめる学生が多かった。また、特定行為実習で 5 症例に満たない行為もあったが、本実習でかなり経験することができた。全般的に大きなトラブルなく順調に実習ができた。

次年度は、老年 NP 学生が 10 名以上となり、指導医師や担当教員が受け持つ学生数が多くなるため、きめ細やかな指導が必要と考える。

老年 NP 実習Ⅱ

2 年次

甲斐博美、大島操、濱中良志、廣瀬福美

外来にて軽微な症状の初期診療、慢性疾患の診療について学び、指導医の訪問診療・往診に同行し、在宅で継続診療について学ことをねらいとし、4 週間の診療所実習を 5 名が履修した。指導医からの丁寧な指導を受け、通院・在宅への訪問（ご自宅や施設）を通じ、在宅での継続医療における包括的アセスメントを学んだ。社会医療法人三愛会 たばるクリニックが新規実習施設として加わり、合計 5 施設での実習を実施した。実習施設と連携する訪問看護ステーションの方々からの指導や、ナースিংホームの見学なども実施し、対象者を取り巻く連携する多くの職種からの指導も受けることができた。日々の指導やカンファレンスでのケースレポートの指導や在宅領域での医療看護の在り方を学んだ。この 4 週間はプライマリ NP としての基盤を形成する実習となる。次年度も、実習施設が増えるため、大分県のあらゆる地域や施設でプライマリとしての NP の役割を学べるように支援する。

老年 NP 実習Ⅲ

2 年次

甲斐博美、石田佳代子、大島操、濱中良志、廣瀬福美

2 週間の介護老人保健施設実習で 5 名が履修した。施設に入所している高齢者およびデイケアに参加する在宅高齢者の包括的アセスメント、看護治療マネジメント（特定行為を含む）を実施することと、急変を含めた健康状態の変化を早期発見し、医療的処置の必要性判断と実施をすることをねらいとした。実習施設は、新規の社会医療法人三愛会 介護老人保健施設たばると一般社団法人 津久見市医師会 介護老人保健施設つくみかんを加えた 5 施設で実施した。現在も面会制限のある社会的な状況も踏まえ、施設内での医療の在り方を学びながら、担当の対象者やご家族に対しての看護治療マネジメント、医療面接や身体診察を通じて包括的アセスメント能力を強化した。実習施設の関連・連携施設への訪問や見学も組み込んでいただくことで、地域の視点で地域包括ケアシステムにおける高齢者の在宅医療を考える実習となった。老年 NP 実習Ⅰ（病院）、Ⅱ（診療所）との統合で、プライマリ領域の NP に必要な能力を探究していける支援をした。学生のこれま

での教育・就業背景の違いを考慮して、1 年次から在宅分野の看護実践能力を強化は課題課題として次年度の実習計画を検討していく。

小児疾病特論

1 年次

草野淳子、足立綾、井原健二、脇口宏之、糸永知代、井上真紀、清田晃生、小林修、後藤洋徳、河野暢之、佐藤亮介、原卓也、福永拙、保科隆之、前田知己

小児に適切なプライマリケアを提供するために、小児期に特徴的な慢性疾患・急性疾病について学び、診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。小児の疾病に関する臨床推論能力を高め、より高度で専門的な知識と技術を修得する。医療機関で小児の診察を行っている各専門領域の医師がオムニバス形式で講義した。評価は筆記試験（100%）で行った。各講義については専門性が高い医師の講義であり、小児 NP に必要な知識を学ぶことができた。来年度以降に講義がある場合は同様の内容で実施する。

小児 NP 実習 I

2 年次

草野淳子、足立綾、黒木雪絵、原卓也

急性期の総合病院での NP としての実践力を身に付けることを目的に、小児 NP 実習を展開した。総合病院 8 週間の実習を行った。小児病棟や小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の回診に同行して、問診、診察技術、臨床推論力を身につけ、医師より臨床推論記録の指導を受けた。帰学日には教員にプレゼンテーションを行い討議した。また、学生の実習目的の修得状況を確認した。評価は毎日の実習記録と 8 事例のレポート（100%）とした。来年度も同様の指導方法と内容にする。

小児 NP 実習 II

2 年次

草野淳子、足立綾、後藤愛、福永拙

医療型障害児入所施設で、障害児に対する NP としての実践力を身に付けることを目的に、小児 NP 実習を展開した。4 週間の実習とし、小児病棟や小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の回診に同行して、診察技術や臨床推論力を身につけるため、適宜医師よりの指導を受けた。毎日の実習記録を教員に提出し、目標の到達度を確認した。評価は毎日の実習記録と 4 事例の事例レポート（100%）とした。来年度も同様の指導方法と内

容にする。

小児 NP 実習Ⅲ

2 年次

草野淳子、足立綾、長濱明日香

プライマリ診療を行う場で実践力を身に付けることを目的に、小児 NP 実習Ⅲを展開した。診療所 2 週間の実習とし、小児外来にて問診、診察技術、臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の診察に陪席、訪問診療に同行して、医師よりの指導を受けた。毎日の実習記録を教員に提出し、目標の到達度を確認した。評価は毎日の実習記録と 2 事例の臨床推論のレポート(100%)とした。来年度も同様の指導方法と内容にする。

生体科学特論

1 年次前期

濱中良志

今年度は各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を教授した。動画配信を行い事前学習に役立てた。

病態生理学特論

1 年次前期

濱中良志、黒川竜樹

今年度は Zoom を駆使して、各臓器別の疾患の成り立ちに関する病態生理学を解剖生理学との関連性を重視して教授した。

フィジカルアセスメント学特論

1 年次

藤内美保、石田佳代子、黒木雪絵、濱中良志

2 単位、15 コマの科目で、10 名の NP コースの学生が履修した。内容は、理論編と実践編（フィジカルイグザミネーション）について、演習形式の対面授業で実施した。学生がプレゼンテーションし、学生間での質疑応答、その後教員のポイント・補足説明を行った。系統別の内容はフィジカルアセスメントの意義及び全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神

経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。最後の 2 コマは、系統別のフィジカルアセスメントの内容を統合し、臨床推論を強化する演習を実施した。

今年度の授業アンケートは、100%が満足で、参加も積極的に参加しているという回答であった。学生の経験歴のある得意分野を担当することが多かったので、次年度は不得意分野を担当する方法も視野にいて検討する。

健康増進科学特論

1 年次前期

稲垣敦、安部眞佐子

はじめに運動の強さと量の測定、歩行の運動力学的分析、歩行の筋活動と代謝、柔軟性、トレーニングの基本原則、レジスタンストレーニング、行動変容理論等について講義した。臨床での応用を考慮して、ストレッチングとレジスタンストレーニングを取り入れ、身体活動量計測の演習を取り入れ、自分の身体活動量を測定評価してレポートにまとめた。栄養学では、最初に、栄養学の知識の整理、確認をした。看護の場面での栄養面について考察するため、テーマを選択し、呼吸障害時の栄養補給と急性期の栄養補給をとりあげた。関連する英語文献を紹介した。

次年度は、健康科学専攻の廃止、研究室の閉鎖、運動・栄養関係の常勤教員の不在等を考慮して、この科目の継続について検討する。

人間関係学特論

1, 2 年次

関根剛、吉村匠平

2 名の教員により、関根 8 回、吉村 7 回の合計 15 回の講義をすべて遠隔講義で行った。受講者は 14 名であった。受講生の先行領域が多岐にわたる為、シラバスを基本としながら受講学生の希望を取り入れた講義内容として実施している。今年度は行動理論の基礎、行動変容、保健指導、カウンセリング、人材育成、危機対応などであった。遠隔講義では演習課題を実施提出させたり、講義中にチャットによる随時質問を促したりするなど、遠隔であることのメリットを活かす方法をとることに努めた。

看護管理学特論

1, 2 年次後期

福田広美、甲斐仁美

看護管理特論では、保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成や経営等、マネジメントに関する理論とその展開について教授した。学生が看護管理の実践現場において理論を応用しながら改善、改革を進められるよう、講義の内容を踏まえたプレゼンテーションを行った。学生は質の高い看護サービスやマネジメント等について、実践と理論を結び付けながら看護管理に対する理解を深めた。来年度は、学生間のグループディスカッションを活発に行えるようファシリテーションを強化する。

看護理論特論

1, 2 年次

秦さと子、藤内美保、桑野紀子、杉本圭以子、石丸智子

看護理論の基本構造や理論評価の意義及び視点について理解し、看護実践への活用について検討することを目的に、教員による講義と学生によるプレゼンテーションで構成した。夜間開講のため、授業はすべてオンラインで実施した。5名の担当教員が各理論家の発表会にチュートリアル形式で支援した。履修生2名であったが、学生自ら2～3人の理論家の担当を希望し、課題に対するプレゼンテーションやディスカッションに取り組んでいた。それぞれの発表では、理論の解釈だけでなく実践への活用例についてもおおむねまとめられており、活発な意見交換につながっていた。次年度も同様の授業構成で実施予定である。

看護教育学特論

1, 2 年次

藤内美保、梅野貴恵、小野治子、桑野紀子、秦さと子、山崎清男、吉村匠平

2単位、15コマの科目で、5名が履修した。看護を担う人材育成には、質の高い看護教育学を学ぶ重要性があるという視点から、教育学の理論および技法を理解し、活用・応用できることを目標に教授した。今年度は新たな視点として、海外の教育事情や保健師・助産師の教育、看護職の実習の考え方・あり方など、幅広くグローバルな視野で考えることを目指した。教育学に造詣が深い学部講師1名を招聘し、教育原理や教育方法の基盤についての内容を教授してもらった。次年度も学生の反応を把握しつつ、内容は継続的に進めていきたい。

看護コンサルテーション論

1, 2 年次

杉本圭以子、関根剛、竹村陽子、吉村匡平

看護におけるコンサルテーションの概念とプロセスについて講義した。県内で活動する専門看護師に依頼し看護コンサルテーションの実際を講義した。組織に対するコンサルテーションについては複数の文献を読み合わせた。また、対象者を理解するための心理的アセスメント法や効果的な心理教育と心理的援助法についても学び、より臨床で活かせるように工夫した。さらに学生が経験した事例から、コンサルテーションのタイプと目的を検討し理解を深めた。次年度も事例を通して看護コンサルテーションの学びが深められるよう授業を構成する。

看護倫理学特論

1, 2 年次

関根剛、小野美喜、平野互

3名の教員により、関根3回、小野4回、平野7回の合計14回の講義、3名の教員のグループに分かれての受講生による事例報告レポート討論1回の、合計15回の対面と遠隔による講義を行った。受講者は25名であった。評価は提出された事例報告レポートおよび講義中の討論により行った。遠隔講義を基本としながら一部対面講義を取り入れるため、ハイブリッド授業を行うことを前提として、学生への案内、教員の準備を行なうことができた。今後、演習や討議の際に遠隔講義受講生からの発言の促進や演習内容の確認などを効果的に行う手法をさらに検討して講義の質をあげる検討が望まれる。

看護政策論

1, 2 年次後期

加藤典子、川南公代、影山隆之、小池智子、小山明夫、立森久照、中西三春

日本の看護・保健・福祉政策の最新の動向と、政策や事業の評価方法及び評価の実例、及び大分県における看護政策について、オムニバス形式の講義を開講した。国や大分県の対策立案の実際、政策立案方法、NPOの政策的関与、研究エビデンスの政策への反映などについて、演習の要素を取り入れて展開した。履修者の反応は好評であった。レポートでは、自分の領域に照らし合わせて政策への関与について考察することができた学生がいる一方で、講義の知識を統合せずにそのまま記述する学生も少数いた。レポートの課題の提出の前に講義全体を総括する時間を入れていきたい。

健康社会科学特論

1 年次

加藤典子

本特論では、看護制度の課題に関して社会及び社会システムから深堀してその様相を捉える能力を養うことを目的とした。このため、個々の人間行動や社会構造、社会の抱える課題について解決のためのアプローチ方法について学習した。演習では、それぞれ 1 課題を設定し、課題を設定、分析、解決方策を検討した。このプロセスを経験することで、社会及び社会システムから看護を捉えることが認識された。今後は、これらのプロセスをより深く学べるよう、事前学修の内容について工夫が必要である。

看護科学研究特論

1, 2 年次前期

小嶋光明、麻原きよみ、稲垣敦、大田えりか、影山隆之、川南公代、桑野紀子、佐伯圭一郎、関根剛

看護科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、疫学研究、文献研究を専門的に行っている先生方から講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。また、研究倫理規範意識を向上させるため、APRIN e-ラーニングを活用した。

保健情報学特論

1, 2 年次前期

佐伯圭一郎、品川佳満、岡田悠希

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。後半の生物統計学については、事前学習と発表を組み込んだ形式で学習の充実をはかるとともに、事前事後の試験により知識と技術の定着を確認した。

生物統計学パートは、教員と受講者が分担して統計学の各トピックについて短いプレゼンテーションを行い、質疑応答や教員からの補足を行うという形式を昨年度から導入したが、今年度は履修者が多いこともあり、各受講者のプレゼンテーション担当が 2 回となり、ディスカッションもやや低調となった点は、今後の課題である。また、統計ソフトウェアを用いたデータ解析の演習に充てる時間が不足気味であり、実践的データ解析能力の一層の向上策も検討していきたい。

英語論文作成概論

2 年次前期

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This class was a workshop to help students write academic paragraphs and essays in English. It was not a translation class. The aim of this class was to help students write short, simple, logical English paragraphs. It was a student-centered class that emphasized active learning and cooperative learning. Students practiced writing together through pair work and group work. The instructor monitored and gave real-time advice and instruction to students during their practice to help them improve their ability to read and write in English.

薬理学特論

1 年次前期

吉田成一

臨床薬理学を学修する上で基盤となる薬物についての作用機序、体内動態（血中濃度）、代謝経路、副作用、適応疾患、依存性などの基本的事項を理解し、処方にあたっての留意点、年齢や病態による薬物動態の変動、および薬物相互作用について修得するための講義を行った。体内動態に関する理解が高くない状況であり、このことが、臨床薬理学特論における学修習得状況が高くなかったことに起因することが考えられるため、次年度以降、本科目において理解が進む講義を行っていく必要があると考える。

受講生 10 名のうち、本試験にて 7 名が単位認定に至ったが、本試験で合格しなかった 3 名は再試験の受験を希望しなかったため、結果として、本科目の単位認定は 7 名となった。これは本科目が選択科目であることで手続き等を行い再試験の受験、単位認定の必要性がないためであると考え、本科目の理解不十分が関連科目の学修習得状況に影響を与えることから、一定の学修習得状況に達するよう関わっていく必要があると考える。

看護アセスメント学特論

1 年次

藤内美保、草野淳子、石田佳代子、杉本圭以子

2 単位、15 コマで、1 名の学生が履修した。看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法についてオムニバス形式で教授した。1 点は看護過程を展開する場合の看護理論の違いにより、看護診断にどのような違いがあるか、診断プロセスの違いなど検討する。2 点目は小児のフィジカルアセスメント、家族看

護とアセスメント及び看護の実際について、3点目は災害看護における概念や理論の探求、災害看護の課題とその解決の探求など、4点目は精神看護におけるアセスメントの講義および事例展開演習を行った。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

次年度も学生の反応を把握しつつ、内容は継続的に進めていきたい。

精神看護学特論

1 年次

影山隆之

広域看護学コースと研究者・リカレントコースの履修者がいることから、別内容で昼夜開講するコマ、共通内容で夜間開講するコマ、および昼間開講しオンデマンドで夜間視聴できるコマの3種類を設けた。共通内容としては、精神健康の基礎理論とモデル、および自殺予防について扱った。広域看護学コースのためのコマでは、精神保健福祉業務運営要領の改訂をふまえて行政保健師の役割と技法を取り上げた。

今年度は広域看護学コースの履修者が自分の実習日程を把握していなかったため日程変更が必要になった。次年度は早い段階で調整を徹底し、全履修者が同じコマに参加してディスカッションできるようにする予定である。

成人看護学特論

1 年次前期

古賀雄二

EBN に基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、成人期の発達課題や健康問題への理解を深め、健康の段階に応じた看護を実践するための理論と方法及び疾病予防・健康増進について探究することを目標としている。学生の臨床経験・実践事例を背景として、成人看護領域における臨床課題を明確化するとともに、学生自身の研究課題の明確化を進めた。結果として、この学生は2025年度文部科学省科学研究費基盤研究（C）国際・若手支援強化枠に採択された。

次年度の開講予定はないが、引き続き、学生の臨床経験を背景とした教育を行っていく。

老年看護学特論

1, 2 年次

小野美喜

高齢者の健康課題や看護実践を探究するために、エンドオブライフケア、高齢者の尊厳と倫理的課題、高齢者の QOL 等を取りあげた文献抄読と意見交換を行った。履修者は看護管理・リカレントコースの学生 1 名であった。最新の文献知見を通して、履修者が実践している高齢者看護について振り返ることができた。またコンフォート理論等の高齢者の看護に適用する理論を教授し、学生の実践につなぐ思考展開ができた。最終的に学生が自身の高齢者看護の実践をプレゼンテーションし、今後の実践活動につながるものとなったと評価している。次年度も文献抄読を主とした学習活動を予定しており文献選択を工夫する。

看護管理学演習

2 年次

福田広美

看護管理に関する実践力を高めることを目的に、臨床現場における組織の現状分析を行い、課題を明らかにしたうえで看護管理演習の計画の立案、実践および評価に関する教育を行った。学生が、実践の場の組織分析を行い、改善に向けた実践計画を実践の場の組織員とともに立案を行った。さらに、立案した計画をもとに実践の場で、計画を組織員とともに実施し、実践に対する評価と次の改善に向けた計画立案を行った。学生は、組織分析から評価に至るプロセスで発表とディスカッションを行い、各段階において、看護管理実践について理解を深めた。また、看護管理の実践を行うプロセスで文献を活用し、改善に取り組んだ。次年度は学生が所属する職場の組織において職位に応じたマネジメントを強化できるよう各学生の看護管理の実践力を高めていく。

原書講読演習

1 年次

宮内信治

英語に接触していない空白期間の長さを考慮し、原著論文読解に不可欠な要素としての発音記号、英文法基礎知識と文法解析方法を教授し、Nurse Practitioner (NP) に関する英文原著を用いた文法解析と読解和訳に取り組ませた。NP コース以外の受講生には、コース別、個人別に演習課題を指定し、文法解析と和訳を演習させた。英文読解能力の向上が見られた。看護、医療についての批判的思考を促すような内容を含む文献を用いて、学生が考察できるような機会を設けたい。

特別研究（研究者養成コース）

通年

稲垣敦

履修者がそれぞれの主・副指導教員の指導を受けながら、修士論文に取り組んだ。また、1年次生は論文レビュー報告会（8/29）、論文計画報告会（3/3）で発表し、2年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度は、1名が修士論文を提出して審査に合格し、修了した。

課題研究（広域看護学コース）

通年

稲垣敦

履修者がそれぞれの主・副指導教員の指導を受けながら、課題研究に取り組んだ。また、1年次生は研究計画報告会（3/3）で発表し、2年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度は、8名が課題研究を提出し、修了した。

課題研究（助産学コース）

通年

稲垣敦

履修者がそれぞれの主・副指導教員の指導を受けながら、課題研究に取り組んだ。また、1年次生は研究計画報告会（8/29）で発表し、2年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度は、7名が課題研究を提出し、修了した。

課題研究（NP コース）

通年

稲垣敦

履修者が各それぞれの主・副指導教員の指導を受けながら、課題研究に取り組んだ。また、1年次生は研究計画報告会（3/3）で発表し、2年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度は、6名が課題研究を提出し、修了した。

課題研究（看護管理・リカレントコース）

通年

稲垣敦

履修者がそれぞれの主・副指導教員の指導を受けながら、課題研究に取り組んだ。また、1年次生は論文レビュー報告会（8/29）、研究計画報告会（3/3）で発表し、2年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度は、5名が修士論文を提出し、修了した。

放射線健康科学演習

1年次

小嶋光明、恵谷玲央

医療放射線の線量に関する最新の学術論文をレビューし、医療被ばくに伴う健康影響とそのリスクについての現状を把握する演習を行なった。

放射線生物物理演習

1年次

小嶋光明、恵谷玲央

放射線の健康影響とそのリスクを理解するためには線量を把握することが重要である。医療放射線の線量を人体模型（ファントム）を用いて物理学的に、ヒト細胞を用いて生物学的に測定する演習を行なった。

特別研究（健康科学専攻）

通年

稲垣敦

履修者がそれぞれの主・副指導教員の指導を受けながら、修士論文に取り組んだ。また、1年次生は論文レビュー報告会（8/29）、論文計画報告会（3/3）で発表し、2年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度は、1名が修士論文を提出して審査に合格し、修了した。

4-3 博士課程(後期)

精神保健看護学特論Ⅱ

1, 2, 3 年次前期

影山隆之

履修者の研究領域に関係深い精神保健学の論文を選ばせ、抄読を行った。当該論文の内容のクリティックだけでなく、背景論文の読み込みをさせ、研究計画と論文作成の実際に資するようにした。

放射線保健学特論

1 年次

小嶋光明、恵谷玲央

医療における放射線診療の概要から医療従事者の放射線防護までの基礎と、原子力災害時に看護職者に求められる知識を教授した。学生からの質問と放射線の健康影響・リスクの最新の知見をもとに講義を行うことで理解が深まるように努めた。

国際看護学特論Ⅱ

1 年次後期

桑野紀子

グローバル社会と人々の健康を関連づけ、国内外の人々の健康リスクや健康問題とその対策について検討するとともに、自身が行っている研究テーマに関連した国際情報を収集し、研究に活用することを目的とした。講義では国際保健／国際看護の主要概念とその背景を概観し、世界の疾病構造の現状と課題、および保健医療に関する世界的な取り組み等について、国際機関ホームページ等を履修生と共に確認しながら解説、ディスカッションした。また、履修生は各々の研究テーマに沿って、英文文献を検索し、原著講読を行い、プレゼンテーション・ディスカッションを行った。履修生は自身の実践分野や研究に沿った関心テーマについて、国際機関ホームページからの情報収集や原著論文講読等を通して、当該分野のグローバルな現状について理解を深めた。

履修生の背景により、学部や修士課程で国際看護に関する学習機会がなかった場合があるため、履修生の準備生やニーズを確認したうえで効果的な内容構築に努める必要がある。

看護専門科学演習

1, 2, 3 年次

梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、草野淳子、藤内美保、濱耕子、福田広美

看護専門領域教員によるオムニバス形式で、受講生 1 名の背景等を考慮した以下に記述する内容の講義や学生による課題発表とディスカッション、研究論文のクリティーク、講義後の課題提出を通して学びを深めた。全ての授業は Zoom を用いて実施した。演習内容（題材）は、看護管理、アドバンスケアプランニング（人の生死への考え）、看護における臨床推論・臨床判断、ハイリスク妊婦（GDM）の受診行動への支援、母子愛着形成と障害がある子どもを持つ保護者への支援、性や生殖の課題とプレコンセプションケア、メンタルヘルスなどである。最終回は、受講生自身の研究課題に関する先行文献の知見と研究計画のプレゼンテーション、および教員とのディスカッションを行った。学生は、全ての課題を完了し単位を取得した。

特別研究（看護学専攻）

通年

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、原書購読演習と博士論文に取り組んだ。また、1 年次生は論文レビュー報告会（8/29）、論文計画報告会（3/3）で発表し、2 年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度は、3 名が博士論文を提出して審査に合格し、修了した。

放射線健康科学特論 II

1 年次

小嶋光明、恵谷玲央

原子力災害や医療被ばくの線量測定、放射線治療に関する最新の学術論文の抄読を課して、論文の解説をプレゼンさせ、現状と課題を議論した。

放射線健康科学特別演習

1 年次

小嶋光明、恵谷玲央

原子力災害時の被ばく線量測定に着目した最新の原著論文を課し、論文の解説をプレゼンさせるスタイルで進めた。取現状と課題をまとめ、研究の基礎に役だてた。

特別研究（健康科学専攻）

通年

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、原書購読演習と博士論文に取り組んだ。また、1年次生は論文レビュー報告会（8/29）、論文計画報告会（3/3）で発表し、2年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度は、1名が博士論文を提出し、修了した。

4-4 その他の教育活動

大学生消防応援隊（Oita-NHS-team）

学生 15 名（4 年次生 5 名、3 年次生 7 名、2 年次生 2 名、1 年次生 1 名）

担当教員 石田佳代子、内倉佑介

1. 消防応援隊の活動目的

本学の消防応援隊は平成 26 年 3 月に結成された。活動目的は、地域での防災・減災の活動や災害時の活動を学び、地域での防災・減災活動に参加し、看護学生として地域に貢献することである。そのために、消防本部等の関係機関と連携をとりながら消防・防災に関する活動に参加することなどにより、消防に関する正しい知識、情報及び技術の習得などに努めている。

2. 本年度の活動内容と今後の課題

学内の活動では、以下の各イベントに参加した。

・若葉祭（5 月 18 日、19 日実施）

大分市消防局との合同企画で、防災学習車を活用した企画（水消火器、火災時の煙の体験、油による火災の体験の 3 企画）や地震体験車を活用した企画を実施した。児童から高齢者まで幅広い年齢層の方々が参加してくださった。防災学習車の参加者数は 153 名、地震体験車の参加者数は 189 名だった。また、大分県との合同企画でおおいた防災 VR を活用した企画も実施した。本企画への 2 日間での参加者数は総計 152 名だった。

・オープンキャンパス（7 月 13 日実施）

大分県との合同企画でおおいた防災 VR を活用した企画を実施した。本企画への参加者数は 87 名だった。

・防災訓練（11 月 20 日実施）

毎年 1 回実施される本学の防災訓練の一部の企画・運営に携わった。本年度も訓練参加対象者は、1 年次生全員および訓練実施時間に学内にいる教職員と学生全員に縮小された中での活動であった。応援隊は学生の避難誘導・点呼（安否確認）・AED の使用訓練を担当し実施した。

また、学外の活動では、以下の各イベント等に参加した。

・「救急の日」及び「救急医療週間」に伴う街頭啓発活動（4 年次生 5 名参加）

9 月 9 日（月）に、大分駅前広場において、大分市消防局や大分市消防団などと協力して、市民に対する呼びかけやリーフレット等の配布を行った。

・応急手当普及員講習（4 年次生 1 名参加）

11 月 23 日（土）・24 日（日）・25 日（月）に大分市消防局（大分市中央消防署）において応急手当普及員講習が開催され、基礎医学（人体の構造、感染防止）と応急手当（AED の使用方法を含む）の実技や指導方法等を学んだ。3 日間の講習を修了し、応急手当普及員に認定された。

今後の課題は、応援隊学生の増員、消防応援隊としてのスキルの継続的な習得、防災意識を高めるための啓発活動の継続と考える。消防本部等の関係機関と連携をとりながら計画的に取り組むたいと考える。

5 研究室活動

5-1 生体科学研究室

1 活動方針

学部では、本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。大学院においては、疾患の基礎となる生理学を細胞内のレベルまで深く掘り下げて理解し更に発展させることができる研究者および実践者を育成する。4年次生の卒業論文の作成の補助を行いながら、教員自身の研究を推進させる。その成果は、学会発表を国内または海外において年に1回以上行う。ある程度、成果がまとまったら、論文としてその成果を発表する。

2 教育活動の現状と課題

学生が自ら疑問をもち、解決していく能力を養うことが課題であったが、動画配信を利用した事前学習を促すことにより、意欲の高い学生は疑問を持つようになった。しかしながら、意欲の低い学生にも興味をもって学習に取り組めるように工夫することが課題である。

3 研究活動の現状と課題

今年度は、定員が3人から2人に減少したが、新しい助教の研究領域が骨粗鬆症であり、共通の課題に協力して取り組む準備ができた。課題は具体的な共通の課題に向かって、論文発表や学会発表を行える環境を構築することである。

5-2 生体反応学研究室

1 活動方針

生体反応学研究室の教育活動に関しては、病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を担当している。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。また、大学院の教育に関しても薬理学、特に臨床薬理学に関する内容の教育を担当している。生体反応学研究室の研究活動に関しては外部の競

争的研究費を獲得し、積極的に研究論文を学術雑誌に発信して行くことを目標にしている。

2 教育活動の現状と課題

本研究室が担当している科目としては、学部1年次生を対象に生命科学入門(分担)、看護サイエンス入門(選択科目、分担)、病理学総論、病理学各論、微生物免疫論を、学部2年次生を対象に薬理学I、健康科学実験(血液検査・ラットの解剖・基礎微生物学実験)、学部3年次生を対象に薬理学II、学部4年次生を対象に応用生体機能反応論(分担)がある。大学院1年次生を対象に、実践薬理学特論、妊娠期診断技術特論(分担)、ウィメンズヘルス特論(分担)、薬理学特論(選択科目)、臨床薬理学特論、大学院2年次生を対象に老年薬理学演習を行った。学部試験終了後の成績不良者の対応としては解答状況や解答用紙および質問コメントに対する回答することで改善点を示すほか、面接等を行うと共に、全ての学生に試験問題(正解付)や解答用紙を返却する等の対応を取った科目もある。解剖学や生理学と共にこれらの病理学、薬理学、微生物学が看護実践を行ううえで十分に理解しておくことの重要性を認識させ、講義を進めることが重要であると考え。前述の対応を行ってはいるが、基礎科目の解剖、生理、病理、薬理、微生物学の成績は看護の科目の学修習得状況と比べると悪く、科目によっては単位修得率が低い状況であった。また、大学院の科目において、大部分の科目は受講生全員が単位取得に至ったが、臨床薬理学特論および臨床薬理学演習に関しては、受講中断に伴い単位取得に至らなかった学生が生じた。

来年度の学部教育において、事前学修について引き続き具体的な提示を行い、事後学修については、担当教員の確認を必須とする科目を設定するなど、学修習得状況の向上を目指したい。

3 研究活動の現状と課題

外部の競争的研究費として、日本学術振興会の科学研究費補助金を教員2名とも獲得している。研究代表者として、基盤研究(B)「加熱式たばこによる雄性生殖系への影響および寄与因子の探索と影響の低減を目指して」、基盤研究(C)「ユズ果皮飲料中のフラボノイドが抗アレルギー作用を発揮する条件の探索」を、研究分担者として、基盤研究(A)「東アジアを越境するバイオエアロゾル：日本本土への拡散・沈着とその生体影響の評価」を獲得している。卒論生に対しては外部研究費に関連するテーマで研究を進めることができた。これまでの成果をもとにした知見を積極的に英語論文として発表し、科学研究費補助金以外の競争的研究費も獲得して行くことを目指す。

5-3 健康運動学研究室

1 活動方針

当研究室の教育目標は以下の6つである：①科学的なものの見方や考え方などを学ぶ。②実際の運動を通して体を動かすことの楽しさを体感する、③個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する。④健康・体力を維持・増進するための運動量、運動強度を確保する。⑤自分に合った運動を見つけ、運動習慣を身につける。⑥ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす。研究に関しては、地域課題を解決できるような研究を重視している。また、社会貢献では看護職対象ではなく、地域住民や県民対象の活動を指向し、学生と共に参加することを重視している。

2 教育活動の現状と課題

1年次の大学ナビ講座では、「大学の授業と試験の受け方」を今年もZoomで実施した。本学は単科大学なので、看護大学の教育の特殊性も説明した。1年次の健康運動ボランティア演習は、昨年度よりも多い12のイベント（15回）に、学生延べ238名がボランティアとして参加し、イベントの運営補助や参加者の健康・体力チェック等を経験した。予防的家庭訪問とは異なる形で、不特定多数の地域住民と交流できた。1年次生の健康スポーツは、初めてコロナ禍以前と同様に実施することができた。2年次生の健康運動学も今年から対面で実施することができた。Zoomであると学生の顔が見えなかったが、対面のため学生の反応を見ながら双方向性の授業ができた。同じく2年次生の健康運動学演習では、80名が同時に運動するため、引き続き自宅での運動実施も認めた。4年次生の卒業研究では、2名の学生がそれぞれエクササイズ・ウォーキングと高温反復浴に関する研究テーマに取り組んだ。今年は実験の開始が遅れたが、実験はスムーズに進み、新しい知見が得られた。

大学院では、学長が交代したため、看護科学研究特論の担当となり、「研究の意義」について講義した。身近な具体例を取り入れて解説し、イメージしやすくした。研究指導では、助産学コース2年次生の課題研究の主旨指導教員を務めた。研究テーマは看護系女子大学生の妊孕性に知識の関するもので、今年度もスムーズに進み、余裕をもって提出することができた。また、副指導教員を務めている博士課程後期看護学専攻の学生は、副論文が学術雑誌に受理されたため、本論文を一度チェックし、コメントを返した。次年度早々に提出できる見込みである。

3 研究活動の現状と課題

近年、注目を浴びている高温反復浴の減量法としての可能性とエクササイズ・ウォーキングによる皮下脂肪減少効果について取り組んだ。日本学術振興会の科研費は、「スポーツパフォーマンスを効率的に改善する身体機能のトレーニング目標値の設定」というテーマで挑戦的研究（萌芽）に申請したが、採択されなかった。審査員が数学的な部分を理解できず、オリジナリティを理解できないまま審査している可能性もある。

5-4 人間関係学研究室

1 活動方針

自他の独自性及び個性を尊重し、周りの人と喜びや苦しみを分かち合うことのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成し、教育活動を展開している。加えて、本学における教職課程（養護教諭一種免許状）の運営も担当している。大学院教育においては、院生自身が、課題の設定から、研究方法を確定、調査（実験）の実施、資料解析、論文の作成を、主体的に行うことができるよう、個別にゼミを開催し、指導を行っている。

2 教育活動の現状と課題

学部講義は対面、大学院の講義はオンラインを中心に、部分的に対面での講義を併用し教育活動を展開した。オンライン授業では、Zoomの機能を援用し、学習者に参加、発言の機会を提供した。また、授業時間外の課題に関しても、オンラインのアプリケーションを利用して、課題の提示、提出、フィードバックを円滑に実施することができている。遠隔講義の環境下においても、学生が受け身にならず、放置されることもなく、教員のマネジメントの下に主体的に授業に参加する機会を保障することができた。非常勤講師との事務連絡、養護実習I、II、教職実践演習の運営、卒業生を含めた教員採用試験への対応、進路ガイダンスの実施、県内実習体制の環境整備、文部科学省提出文書の作成などにより、相応の負担が発生している。

3 研究活動の現状と課題

研究活動に関しては、大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導、博士課程の学生の指導がメインになっている。博士課程の学生1名の投稿論文が受理され、次年度学位を申請する予定である。大学院生の指導と養護教諭養成課程の運営の両立が課題になる。

5-5 環境保健学研究室

1 活動方針

環境保健学研究室は、WHOが定義する「Environmental Health」に沿って「環境」を、物理的要因、化学的要因、生物的要因、および行動に影響を与えるすべての関連要因と健康との関係を科学的に理解するための基礎的事項とその予防対策の考え方についての教育を学部では環境保健学概論（1年次）、環境疫学・生物学演習（3年次）、大学院では環境保健学特論で行っている。また、現

代医療に必要不可欠な放射線教育も、開学以来、全国の看護系大学の先頭に立って実施してきた。学部では放射線健康科学（2年次）、大学院では「放射線健康科学特論」、「放射線健康科学特論II」、「放射線保健学特論」で行なっている。また、大学院の「放射線健康科学演習」と「放射線生物物理演習」では、医療放射線による被ばく線量を実際に測定して理解を深める演習を行なっている。2022年に日本看護協会の専門看護分野に「放射線看護」が特定されたことで、本学の放射線教育モデルが他の看護系大学の参考になることが期待される。また、その関係で看護教育者を対象にしたトレーナーズトレーニングを文科省事業として平成30年まで実施してきた。その後は、看護職者を対象にした放射線教育に移行し、現在も他大学と連携して進めている。

2 教育活動の現状と課題

放射線を含む環境保健の教育は、多分野な内容を含むために、学部1,2年生の段階では教育が難しい点がある。そのため、身近な社会問題（原子力災害、新型コロナウイルス・インフルエンザ感染症の危機管理など）を取り上げることで関心を持たせ、その理解には物理や生物、病理生理、免疫、生物統計といった関連科目の基礎的な知識が重要であることを認識させるようにしている。さらに、2年次の環境保健学詳論、3年次の演習「環境疫学・生物学演習」ではアクティブに関わる授業を実施し、主体的に理解を深めることを狙っている。プレゼン資料の作成、質問応答、課題レポート作成などを通して、できる限りすべての学生に対して個別に指導することでより効果の高い講義・演習にしていこうことを目指している。放射線教育に関しては座学だけでなく、健康科学実験でポータブルX線撮影装置を用いて被ばく線量を実際に測定し、その実体験から放射線防護が理解できるように努めた。学生による授業アンケートから講義・演習の目的はおおよそ達成できたと考える。昨年度、課題として上がった環境問題に対してお互いの考え方をグループディスカッションする試みを大学院の環境保健学特論で実施し、学生から環境問題を多角的に考えることができたという意見があった。来年度は継続していきたいと考えている。

3 研究活動の現状と課題

医療・環境放射線をテーマに研究を続けている。医療被ばくによる発がんリスクを生物学的に明らかにすることを目的とした研究では、白血病に焦点をあて、マウスにγ線を繰り返し照射し、時系列を追って白血病関連遺伝子に変異を起こした造血幹細胞の蓄積の程度を評価し、より詳細な発がんモデルの構築を検討している。放射線の医学利用に関する研究では、新しいがん放射線療法の一つであるマイクロビーム放射線療法（MRT）確立を目指し、高エネルギー加速器研究機構にあるX線マイクロビーム照射装置を用いた研究を行ない、一定の成果をあげることができた。今後はさらなる治療効率の向上を目指し、量子科学技術研究開発機構（QST）と共同で重粒子線を用いたMRTにチャレンジする予定である。令和7年度も放射線の健康リスクや医学利用に関する研究にさらに貢献していく。

4 その他

東日本大震災復興支援の一環として、日本放射線影響学会と福島県教育委員会との共同で福島県の小中学生を対象に放射線教育を実施している。今年で6年目となる。福島第一原子力発電所事故による放射線の健康リスクに関する話をするだけでなく、放射線関連の職業（放射線技師、放射線科医、看護師、発電所職員など）の紹介も行っている。

5-6 健康情報科学研究室

1 活動方針

科学的根拠に基づいた看護実践の基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

また、教育及び研究のみならず、本学のICT環境の管理と運用を通じて大学全体のパフォーマンスを日常的に支援することを実践している。

2 教育活動の現状と課題

学部教育においては新カリキュラムの3年目となり、授業アンケートの結果からも、ある程度の効果を評価している。ただし、生物統計学と健康情報学については不合格となる受講者数があまり減少しておらず、授業にきちんとついてこれない学生へのフォローを充実させること、および演習での学習内容の定着をどう図るか今後の課題である。卒業研究は、おおむね例年通りの水準の研究を進めることができた。

大学院における教育では、昨年度に生物統計学パートの授業形式を大きく変更した保健情報学特論では、今年度は履修者が14名と比較的多いこともあり履修者1名あたりの発表回数が減ってしまった。受講者の多寡によらず学習効果を高めることができるように調整を検討したい。

3 研究活動の現状と課題

佐伯は前年度で終了した科研費による2課題の論文投稿を行っている。品川は研究代表者、分担者として複数の科研費による研究を継続している。岡田は博士号を取得し、看護領域の研究にもメンバーとして参加するなど積極的に研究活動の幅を広げている。

5-7 言語学研究室

1 活動方針

言語活動の四技能であるSpeaking, Listening, Reading, Writingをバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション（Speaking, Listening）に取り組ませている。看護学の相対的理解と考究を目指した読解（Reading, Writing）能力を高めることを目指し、英文講読に取り組ませるとともに、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。

2 教育活動の現状と課題

COVID-19の影響から脱した感のある現状において、言語活動のうち、表現活動としての発音・発話と筆記を意識して実施した。音読暗唱課題では、筆記におけるつづり間違いを指摘して準備を確実にすることを意識させるとともに、暗唱で何度も挑戦して達成させることで学生に自信をつけさせた。今後、最新の学習指導要領のもとで指導を受けた学生が入学してくることに伴い、読解において必要な文法知識が定着していない学生の存在が懸念される。学生がすでに習得している英語運用能力の度合いを観察、勘案しつつ、卒業研究に関連する原著講読において必要とされるレベルを意識した語彙、発音、文法を同定し、教授していく必要がある。医療・看護に関連する原著にはギリシャ語・ラテン語を起源とする英語語彙が多く含まれるため、語源の知識を通した語彙理解と定着を図っている。一方、人間としての人を理解するきっかけとしての文学作品との出会いの機会が少ないことが懸念される。古典的文学作品の一端に触れる機会を提供するとともに、そこに現れるギリシャ語・ラテン語を起源とする英語語彙を通した人間への洞察や歴史的意味などに触れさせ、現代の状況を相対的、批判的に思考する体験をさせることを念頭に、教材を選定したい。

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション（Speaking, Listening）を練習した。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題（Food, Shopping, Home, その他）、2年次生の講義内容は、看護英語であった。各話題について3～4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫した。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行った。発音の向上を図ることを念頭に、教員の発音を確認、反復させ、学生間で反復練習させる時間を以前よりも長く確保した。結果として発音を意識した英語での発話の機会が増え、発音の技術が改善したと考えられる。今後は語彙習得が未熟な学生を念頭に、生活において頻出する語彙を習得させる効果的な方法を検討していきたい。

3 研究活動の現状と課題

言語（母語）教育における音読の果たす役割を、英国の歴史的変遷とJane Austenの作中表現をもとの考察した論考を学術機関誌に投稿した。英語イントネーションに関する論考として「*Emma*の自由間接談話における音調の解釈」と題した研究内容を大学HPの「研究紹介」に掲載した。英語イントネーションに関する学術書の翻訳を分担執筆し、翻訳図書『英語のイントネーション 一話し言葉のメロディー *Intonation and Its Parts Melody in Spoken English*』として出版された。言語（母語）教育における音読の果たす役割については、日本における国語教育について考察を進める予定である。Jane Austenの文体論的論考にも引き続き着目していく。談話分析の観点では、学術誌 *Nursing Ethics* に表れる善悪正誤の頻度と内容に着目していきたい。看護の視点からケアの在り方を倫理的に考察する研究を人文的要素も加味して展開した。日本看護倫理学会において「実習中の暴力に対する看護学生の対応例：イラン、中国、日本」という演題にて共同研究し、発表した。また、学術雑誌『日本看護倫理学会誌』に筆頭筆者として、「看護を応援する、看護倫理を考える」をテーマとして論考を2編投稿し、掲載された。今後の社会情勢の変化、混沌が懸念される中であって、人の本質を問いかける人文学の果たす役割を再確認し、19世紀英文学とともに現代の看護に関連する文学・学術文献に着目し、文体論、談話分析の視点をもとに研究を進めていきたい。

5-8 基礎看護学研究室

1 活動方針

基礎看護学研究室は、人々の健康生活やQOL(Quality of life)の向上に向けて、現象を科学的にとらえ分析的に考察できる力、看護を遂行するための広い知識、原理原則に基づいた基本的な看護技術の習得と対象に合わせて適用できる力、人への尊厳や倫理観の基本的姿勢を身に付けることを目指して教育活動を行っている。特に、学生が学習に対し興味を持ち主体的に学ぶ姿勢や、学習への動機づけにつながるような授業の方法論に関しては、PDCAサイクルに則って研究室全体で協議、検討しながら作り上げていくことを方針としている。

研究活動においては、各教員の研究テーマに基づいて年間1本以上の研究論文の学術雑誌への掲載を目標に研究活動に継続的に取り組み、研究力を強化していくこととしている。

2 教育活動の現状と課題

本研究室が担当する基礎看護技術に関する演習科目では、反転授業形態の実施により、対象への適応を考えながら技術展開を考える力、対象を尊重した態度で接する倫理観、反復練習の時間を可能な限り確保することで技術力の強化を図った。また、試験方法においても、学生が課題に対して実施する看護展開をビデオカメラで録画し、学生1人に対し2人の教員で録画映像の評価を行い、見落としなく、平等に評価することが可能となった。さらに、教員の教育力の維持、向上を目指して、メン

バーで協働して実施する授業については、約2週間前に打ち合わせを行い、指導方針の共有や内容の確認を行った。このような工夫から、実技試験で再試験対象になったのは、各科目で0～2人と少人数を維持している。講義形式の授業においては、可能な限りメンバーは聴講し、各自の授業の参考や学生指導に活かした。以上のように、ICTの活用や教員の連携のもと教育の質向上に向けた取り組みができています。一方で、演習授業の終盤に行う学生間での取り組み成果の振り返りが効果的に行えていない傾向がある。改善のためには、教員のチュートリアル力の強化が必要と考えている。

基礎看護学実習では、実習開始後に学生が効率的に指導を受けられるように、教員で分担して対象理解に向けたグループ指導、個別指導を実習前に実施した。教員間でも記録様式についての意見交換会を複数回もち実習で活用する看護理論の理解を深め、一貫した指導につなげた。

卒業研究では、学生6人を3人の教員で分担し指導を行った。研究を客観的に進めるため、研究室全員参加で月に1回程度の卒業研究ゼミナール、研究成果についてのプレゼンテーションの練習3回を実施し、意見交換をすることで研究に対する批判的思考力の育成にも努めた。今年度は、学生1名が卒業研究発表賞を獲得した。次年度も同様の体制で支援していく。

3 研究活動の現状と課題

2名の教員が外部資金をすでに獲得しており、2名が外部資金獲得に向けた申請を行い、新たに1名が獲得した。また、3名が学会で研究成果を発表するなど、自律的に研究活動を推進している。また、卒業研究や大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導、博士論文の指導、論文審査などを通して、研究力を研鑽している。一方で、学術雑誌への論文掲載が今年度は少ない。次年度は、引き続き1名の科研費獲得に向けた支援と、1名の博士論文の審査申請の支援、および、1教員1論文以上の学術雑誌への掲載を目指す。

5-9 看護アセスメント学研究室

1 活動方針

看護アセスメント学研究室は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的とし教育を実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点で根拠に基づくアセスメントができることがねらいである。また大学院ではNP教育も担い、令和5年度から創設されたNP研究室と連携して、フィジカルアセスメント能力や臨床推論能力をさらに高めていくことを目指すとともに、プライマリケア領域のNP育成をしていく。

学部における担当科目は、1年次及び2年次の履修科目が多く、基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを追及する姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるという教育的役割がある。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント学概論」「看護アセスメント

学演習」「看護アセスメント学実習」である。これらの授業を通して、シミュレーション教育を導入し、より自主的・自律的に学ぶ姿勢を身に付け、自分で調べ、学習し、自己の意見をもってディスカッションできる力を強化したいと考えている。

大学院教育においては、「フィジカルアセスメント学特論」「看護アセスメント学特論」「基盤看護学演習」など、根拠に基づくアセスメント、臨床推論能力を高めることを教育・研究方針とする。またNPコースにおいては、「アセスメント演習」「NP特論」「プライマリNP演習」「NP実践特論」「医療安全・実践演習」「NP実習」「特定行為実習」などの科目の他、特定行為のOSCE、課題研究、またNP教育・事業推進チームにも研究室員全員がメンバーとなり、NP教育に参加している。

2 教育活動の現状と課題

各科目において、達成度や課題を研究室教員全員で共有し、評価し改善策を検討して授業を企画した。「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」などフィジカル的な科目はメカニズムの学修ができることを重点に教育している。学修評価の試験では、過去問による断片的で暗記重視の知識に依存しないよう、理解することに重点をおく試験問題を作成するため、毎回新たに作成し、教員間で試験問題をチェックしている。さらに「看護アセスメント学概論」「看護アセスメント学演習」など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人間を包括的に捉えることの重要性を教授している。また「看護アセスメント学概論」「看護アセスメント学演習」「看護アセスメント学実習」では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開自体が主眼とならないよう指導が必要な場面もあるが、患者の状況や症状がイメージできるようDVDの視聴をした看護過程の展開の工夫や、教員4名で個別に看護過程の基本的考え方や記録方法を丁寧に指導した。

看護アセスメント学実習は3施設の全てで予定通り2週間の実習を受け入れ、臨地でしか学べない経験ができ、学生も充実した実習であったとの感想が多く目標到達度も高く達成感もあった。

課題は、症状から病態を探究していく力、観察ポイントの修得、臨床推論能力の育成などさらに強化していきたい。また実習場面では、病態理解と患者の状態が結びつかない実践的な知識の統合の不足があり、実習場面の学びを学年全体でどのように共有するか検討する必要がある。

3 研究活動の現状と課題

石田准教授が責任者となり、研究室全員でデジタル聴診器を用いた遠隔授業の有用性に関する研究に取り組み、日本看護研究学会及び日本看護科学学会で口演発表を行った。また、日本看護科学学会誌の掲載予定である。また、各自の専門的研究領域で研究も推進し、科学研究費に採択されて研究を推進している教員もいる。また卒業研究や課題研究の指導により、各分野の研究の幅を広げている。卒業研究では、看護アセスメント学研究室としての特徴を引き出し、看護アセスメントを発展させていくよう研究テーマを検討することが必要である。

5-10 成人看護学研究室

1 活動方針

成人看護学は、成人期に特徴的な健康問題を学び、あらゆる健康段階の人へ看護を応用できるように看護の理論と保健、医療、福祉体制を教授することを目標としている。そのため、成人看護学概論、成人看護学援助論Ⅰ～Ⅳ（急性期・回復期・慢性期・終末期）の講義科目に加え、成人看護学演習と成人看護学実習Ⅰ・Ⅱの各教科を設定し、各健康段階に応じた看護の専門性を深めるとともに、各健康段階の移行期の支援について思考できる授業構成としている。

学部教育においては、新カリキュラムに際して、成人看護学援助論は1科目から4科目に分割されたが、成人看護学演習および成人看護学実習Ⅰ・Ⅱまですべての成人看護学関連科目が一巡し、各科目の授業評価アンケート結果をふまえ、教育目標は達成できたと評価している。

本研究室は、各健康段階の看護に専門性を有する教員で構成されており、成人看護学全体の統合的な視点を学ぶとともに、各教員の専門性を発揮した授業を展開することができる。そして、学生が学習に主体的に参加できる授業となることを目指し、授業の計画と実施においては、PDCAサイクルに則って研究室全体で協議・検討を行うことを方針としており、引き続き、各科目の評価結果を踏まえた改善を図っていく。

2 教育活動の現状と課題

学部教育においては、昨年度から開始された新カリキュラム授業が今年度で一巡した。講義科目（成人看護学概論成人看護学援助論Ⅰ～Ⅳ）、演習科目、実習科目の専門性と連動性を強調した授業を行い、各科目の授業評価アンケート結果をふまえた教育目標は達成できた評価している。また、新カリキュラム下においては、成人看護学援助論Ⅳ（終末期）は演習・実習後に開講したことが特徴であった。各科目の評価結果をふまえた改善とともに、講義・演習・実習科目の連動性を高める工夫を行っていく。

大学院教育においては、今年度より博士前期課程看護学専攻研究者養成者コースの学生1名が所属している。成人看護学特論においては、成人期の発達課題や健康問題への理解を深め、健康の段階に応じた看護を実践するための理論と方法及び疾病予防・健康増進について、学生の興味関心をふまえながら探究することを支援し、研究計画の作成を支援した。結果として、この学生は2025年度文部科学省科学研究費基盤研究（C）国際・若手支援強化枠に採択された。引き続き、研究支援を行っていく。

3 研究活動の現状と課題

卒業研究生は5名を担当し、基本的な研究活動を支援し、全員が卒業論文を完成させた。また、各教員が専門性に即した研究を自律的に遂行し、3名の教員が科研費研究（3件）を行っている。また、新たに2名の教員が2025年度科研費研究に採択（2件）された。今年度の研究実績として

は、学術雑誌への掲載4件、学会発表3件である。

5-11 老年看護学研究室

1 活動方針

老年看護学研究室は、健康な高齢者から人生の最期を生きるまでの連続した幅広い健康段階にある高齢者への看護を創造し、これからの看護職の人材育成する研究室として活動している。大学の研究室編成により令和4年度より成人・老年看護学研究室から老年看護学研究室が独立し、少人数体制となったが、高齢者の生活モデルをとらえた健康問題を取りあげて看護アプローチに重点をおく研究室として方針を定め活動している。超高齢化、高齢人口増とともに高齢者の抱える社会課題が大きく変化している。その環境にある高齢者の健康に貢献する看護の知見創造を目指している。

2 教育活動の現状と課題

老年看護学は、学部生を対象に高齢者を理解し、看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標とし、老年看護学概論、老年看護援助論Ⅰ、老年看護援助論Ⅱ、老年看護学演習、老年看護学実習の各教科を設定している。高齢者との交流機会が少なく、特に認知症を持つ高齢者の理解と看護援助は難しさがあった。学外の指導者と連携しながら教育活動を充実することを課題として取り組んでいる。授業では認知症家族の会の方を招聘した講義や高齢者疑似体験を工夫し継続した。さらに臨地実習指導との連携による実習指導を行い、カンファレンスを通して高齢者理解に努めた。今後も引き続き高齢者理解が深められるように工夫した教育活動をおこなっていく。さらに多職種との協働による看護実践ができるように、実習指導者と実習内容を検討していきたい。大学院生には老年看護学特論、発達看護学、看護専門科学演習を選択する学生に対し、老年看護学の理論と研究を教授および研究指導をしている。高齢者への看護実践がある学生であり、看護経験を理論に適用した振り返りおよび課題検討ができるよう教育していく。

3 研究活動の現状と課題

老年看護学研究室では、高齢者の健康生活に寄与できるよう各研究室員が研究を行っている。共同研究として学内競争的資金を得て、向老期女性に対する認知症予防のための調査研究を実施し、公表に至った。また、地域医療機関と検討してきた課題である高齢者への遠隔診療と看護実践についても学内競争的資金を獲得し、地域医療機関・研究室での共同研究を行った。研究室の共同研究体制が強化され、研究成果を徐々に公表することができており、今後も継続して研究課題に取り組み知見を重ねていく。さらに外部研究者との連携を強化し専門家の意見を取り入れることにより研究活動を促進する。

5-12 NP 研究室

1 活動方針

NP研究室は、高度実践看護師としての診療看護師（NP）の育成と研究を目的として教育している。エビデンスに基づく臨床推論のもと、特定行為を実施しながら症状マネジメントをタイムリーに提供できる看護師を育成することを目指し、カリキュラムの中で、特定行為研修（17区分31行為）を含む教育をしていく。NPに求められる7つの能力を育むために、症状マネジメントに必要な、Physical Assessment, Pharmacology, Pathophysiologyの医学教育を強化し、臨床推論能力を高め、症状の原因や緊急性や治療の必要性を判断できる能力を講義・演習・実習で強化している。プライマリNP専門科目として「NP特論」「医療安全実践演習」「プライマリNP演習」「アセスメント学演習」「臨床薬理学演習」「NP実習Ⅱ・Ⅲ」「NP探究セミナー」「特定行為実習」の教育を担い、大学と現場の連携に努めている。また、教育課程で行われる試験全般を担当している。実習内容は、プライマリ領域で活動する将来を見据えたプログラムにより臨地での実習指導を強化し、求められる7つの能力の修得を目指している。NP教育と社会に発信する事業を含め、NP教育・事業推進チームとしての重点活動として、NP実習の充実および特定行為の実習を円滑に運営するとともにプライマリNP教育の質を担保することと、大学院でのNP教育の特徴を社会に発信する、大分県地域卒のNPの活動を支援し県内の医療・福祉施設と連携した活動の企画運営を担う。

2 教育活動の現状と課題

NP実習と特定行為の実習を円滑に運営するために、今年度は特に特定行為研修の実習体制を強化した。研修が安全かつ確実な認定につながるように今年度も特定行為研修のための実習施設を増やした。また、NP実習施設においては、診療所1施設、介護老人保健施設2施設の合計3施設の新規実習施設として準備運営を行い、実習の地域も拡大した。更に次年度の実習施設も診療所1施設、介護老人保健施設2施設を開拓し準備に入っている。NP教育の質の担保としては、学習の定着と自己課題を明確にする口頭試問を1回から3回に増やし、学習支援体制を強化し学習効果をあげた。技術や思考のスキルアップでは、シミュレーターやエコーなどを使用し、在宅医療における倫理的課題を探究する症例学習により、実習での学びを強化した。更に今年度は特定行為研修のスキルアップ専用のシミュレーターを導入し、実習や臨床で活かせる学習システム創りを始動した。今年度の看護国際フォーラムによる診療看護師（NP）を育成する看護管理者の講演の反響が大きかったため、連動して、NP活動推進の交流会（実習施設の代表者向け）の開催により、診療看護師育成の組織作りについての講演を開催し、効果的な広報に繋げた。大分県内卒の進学推進のために作成した広報のパンフレットの更新とリクルートエリアの拡大により、地域卒の入学につなげることができた。今後は、シミュレーション教育を含めたより臨床に近い学習プログラムの構築を目指す。また、修了生の研修プログラムの構築とつながる在宅で活躍する診療看護師（NP）の進学支援を進めていくために、地域・行政との連携も強化していきたい。

3 研究活動の現状と課題

学内競争的研究のプロジェクト研究としてのへき地の医療体制構築に関するテーマは、研究方法で今年度実行不可能な事案が生じ、時期を改めてプロジェクト研究を修正した形で実行することにした。現在は2026年度にプロジェクト研究を再開できるように準備を進めている。大学院生の課題研究指導では、診療看護師の能力などの研究指導に携わり、諸外国のNPの移行期支援や病院間の連携実態等、現在進行して指導している。学部生の卒業研究では、移行期支援に携わる診療看護師（NP）の実践や、米国におけるNPがかかわる慢性期医療、へき地高齢者医療等の診療看護師の活動や高齢者医療を課題にした研究指導をした。また、学外では、本学修了生の共同研究者として「日本NP学会」や「日本看護倫理学会」などで診療看護師（NP）の倫理に関する研究の共同研究に携わった。修了生に対しては、継続して、シンポジウムや学会発表のサポートなどを実施し研究能力向上に努めた。論文では、英文での投稿を行い、診療看護師（NP）に関する研究の投稿準備中である。次年度は、診療看護師（NP）教育に関連するテーマで、科学研究基盤Cの研究をスタートする。研究室としては、診療看護師（NP）の地域貢献につながる研究が計画的に継続できるように実施していく。

5-13 小児看護学研究室

1 活動方針

学部における専門看護学小児看護学の教育活動は、1年次に学んだ基礎科目の知識をもとに、小児の成長・発達過程の特徴を理解できるように組み立てている。小児看護学概論・小児看護援助論・小児看護学演習・小児看護学実習へと段階的に小児看護の知識と役割を理解する。そして、代表的な理論を学び、小児の発達段階、看護・保育について学ぶ。最終的に小児看護学実習にて、学んだ知識を生かしながら小児の看護過程を展開できるようになること、子どもへの倫理的態度やこども観を養うことが目標である。

小児NPコースでは、2年間で必要な科目を履修し、NPとしての知識や態度を身に着ける。医師や他の医療従事者と連携・協同し、効果的、効率的、タイムリーに実践できる能力を身につける。段階的に行われる実習前試験、OSCE、進級試験、特定行為OSCE、修了試験に合格し、NPとしての素養を身につけ、NP資格認定試験に合格することが目標である。

教員は各自の学内・研究室内での役割を全うする。研究課題に取り組み、学会や研修会に参加しながら自己研鑽し研究活動を行う。また、関連する社会貢献活動を行う。

2 教育活動の現状と課題

学部教育での講義は計画通り実施できた。講義では学生が小児をイメージできるようにDVDや事例を用いた。学生の理解を確認するために、一方的な講義だけではなく理解を確認する発言を促すこ

とが必要であった。実習では担当教員が中心に、目標を到達できるように実習指導を行った。大分県立病院と別府発達医療センターの2か所で実習している。双方の実習で学んだことを最終カンファレンスで統合し、学生の学びとした。次年度も今年度と同じ方法で行う。

大学院小児NPコースでは、学生は必要な科目を履修し、段階的に行われる試験に合格した。1年次生は進級試験に合格し、2年次生は修了試験に合格して、外部試験であるNP資格認定試験を受験することができた。大学院教育では共通科目、専門科目、各科目試験、実習とスムーズな流れであった。次年度もこの方法で行う。

3 研究活動の現状と課題

各教員の専門性を生かしながら、学部4年生はプリパレーションに関する研究、がんの子どもに関わる病棟看護師の文献検討、ポストコロナの小児病棟の状況調査、幼児及び保護者の生活時間と睡眠時間に関する研究を行った。教員の指導を受けながら、段階的にスムーズに研究に取り組むことができた。

NPコースでは課題研究に取り組んだ。1年次生は小児病棟での防災意識調査、2年次生はNICUにおける異動看護師への教育指導に関する研究を行った。これまでの臨床経験を生かした研究であった。NPコースの学生は実習の時期は課題研究についての時間がとりにくく、計画的に進めることが課題であった。次年度は早めに進めていく。

5-14 精神看護学研究室

1 活動方針

学部教育の実績をふまえ引き続き、1)精神科以外の様々な場でも活用できる精神看護、2)当事者のリカバリーとストレングスに焦点を当てた看護、3)看護者自身の特徴や“治療的人間関係”に留意した看護、及び4)医療・保健・福祉サービスとの連携を意識した看護の修得を、学部教育の基本目標とした。2年次から3年次にかけての講義－演習－実習が一つの流れとして接続するよう、教員間で連携を図った。今年度も卒業後に精神科病院へ就職する学生が見られたことは、こうした教育活動の効果の一つと考えている。

大学院教育および研究活動では、日常的な論文レビュー・討論・学術発表準備を通して、教員の研究力を高め、大学院生の研究リテラシーを向上させる方針で研究室を運営した。

2 教育活動の現状と課題

3年次生まで新カリキュラムに移行しても重要な教育事項は変わらないので、基本概念の理解、とくにセルフケアに着目したアセスメントや、リカバリーに焦点を当てた支援を重視して授業を行った。学部実習は予定通り臨地で行うことができた。諸事情を考慮して新しい実習施設の開拓作業を始

め、次年度から実習できることとなった。

卒業研究では6名の学生を教員が分担して指導した。できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで進められるよう配慮し、調査研究や文献研究を進めさせた。

大学院では担当授業の他に、研究室教員と指導学生によるオンラインゼミを月1回程度開催し、原著講読や研究発表の予行を行った。学生が自主的に運営と進行を担い、互いに刺激し合って教育的効果を発揮している。その中から今年度も1名が博士号を取得した。

3 研究活動の現状と課題

自殺予防、交替勤務と睡眠、精神障がい有する人のリハビリテーション、更年期女性の更年期症状とマインドフルネス、依存症の人への支援等の領域で研究を展開した。これらに関連した科研費を研究代表者あるいは研究分担者として6件獲得し、大学院生や学外の病院・企業・自治体と協働しながら進めた。研究成果は順次、学会発表や投稿論文として公表しており、順調に進行している。

5-15 母性看護学研究室

1 活動方針

母性看護学の学部教育では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにおける妊娠・分娩・産褥・新生児の生理や病態の理解を深め、母子およびその家族への援助に関する理論と方法を修得することを目標としている。この教育は概論から援助論や演習、そして実習により構成される。周産期や妊娠期から産後までの継続支援を重視し、理論と技術が実践に結びつくよう、研究室全員が学生との関わりを意識してきた。今年度も卒業生の1割以上が助産課程へ進学しており、今後とも助産学関連領域として意識した教育を継続していく。

研究活動においては、卒業研究や課題研究のゼミ等を通じて研究室教員と学生とが互いに研究力を高め合い、学会発表、論文投稿を通じて経験を積んでいる。またこれらの取り組みを通じ、学協会や職能活動を通じた社会貢献に繋がるよう自己研鑽に努めている。

2 教育活動の現状と課題

母性看護学の教育は対面で実施したが、冬季休業明けは感染防止を優先してオンライン形式を併用した。学生の学びや感想、質問はグーグルフォームを利用して収集し、次の授業で解説した。技術演習や看護過程展開の演習ではペアまたはグループ学習を取り入れ、直接指導を効果的に行うことができた。看護過程展開の発表会では、学生同士での意見交換が活発に行われた。

母性看護学実習の体制は、ポストコロナにおいて大きな影響はなく、通常通りに実施することができた。大分県立病院では、総合周産期医療センターの特性から同居者も含めコロナ感染への注意が求められる体制が取られたが、最終的に全学生が実習目標を達成することができた。今年の実習配置

は、大分県立病院(30名)、堀永産婦人科医院(26名)、いしい産婦人科醫院(30名)であった。昨年度から助産院実習を2施設に増やしたことで、病院診療所実習と助産院実習の違いを明確にまとめやすくした。最終日は施設を混合したグループで発表を行い、各施設の特徴に応じた看護の内容を共有した。次年度からは専任教員以外の実習担当教員が3名から2名に減るため、実習体制の検討が必要である。この課題については、学生の準備性を考慮しつつ、次年度の実習体制を検討していく。

卒業研究では、研究室教員が学生4名と合同ゼミを20回実施した(原著講読3回含む)。ゼミの時期が後期に集中したため、次年度は計画的な進行を目指す。また、担当教員による個別指導も各10回前後行っている。

大学院では担当授業に加え、博士前期課程の課題研究生2名を担当し、合同ゼミ、個別指導を実施した。現在、研究計画の立案や倫理審査を経て調査期間中であり、収集済みのデータを基に分析の方向性を確認している段階である。卒業研究生、院生ともに主体的にゼミを運営し、それを支援する形で進めている。

3 研究活動の現状と課題

母性看護学研究室では、女性の健康やQOL、性教育・受胎調節・家族計画、乳房ケアや産後ケア、父親の育児参加に関する研究に取り組んでいる。

今年度は大学院生の研究課題として、死産退院後の継続看護、乳幼児期の多胎児を持つ母親の育児困難感、産褥早期の身体的疼痛に関する論文が「母性衛生」に掲載され、母親の卒乳・断乳支援と二一ズに関する論文が「助産師」に掲載された(計4件)。昨年度の卒業研究生は、その研究成果を今年度の学会で1件報告した。今年度の卒業研究生4名も、次年度の学会発表に向けて演題登録を進めている。

外部資金では、妊産褥婦の健康や育児休業に関連した科研費を研究代表者または研究分担者として5件獲得し、学内外の教員・研究者と協力しながら進めている。これらの成果は順次、学会発表や投稿論文として公表しており、順調に進行している(共同研究課題による学会発表2件、論文掲載1件、1件投稿中)。次年度は学内競争的研究により、インターコンセプションケア(産後から次の妊娠までの健康管理)をテーマに共同研究を開始する予定である。

共同分担研究では、他大学との協力により妊婦のQOL尺度の開発、父親の育児時間に関する論文の計2件が各学術誌に掲載され、母性看護学の沐浴評価表の開発に関する論文が次年度の9月に学術誌に掲載予定である。

4 その他

今年度の卒業研究生の進学状況として、本学大学院生助産コースには3名が進学し、他大学専攻科助産学専攻へは1名が進学した。他大学への進学者には個別に進学支援を実施した。

大分県母性衛生学会の活動では、理事や学会座長の形で協力し、社会貢献に取り組んでいる。次年度からは大学として分掌業務の一部を担う予定である。

5-16 助産学研究室

1 活動方針

本研究室は、大学院助産学コースの教育を主に担当している。大学院助産学コースでは、高度な判断力と実践力をもつ自律した助産師を育てることをめざしている。助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割を認識し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術、またリプロダクティブ・ヘルスを推進するために他職種との連携・協働、社会資源の活用能力を身につけるための教育を展開している。特に、模擬事例を用いたシミュレーション演習、ワークショップを取り入れた段階的OSCEなどの教授方法を教員で検討し、感染症対策に留意し実施している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指し、発表やグループによる交流の機会を設けディスカッションの場としている。研究活動は、各教員のテーマを深め卒業研究や課題研究のゼミなどの指導をとおして研究力を高めること、学会発表や論文投稿を行い、助産学領域全般の研鑽を積んでいる。また、学会やオンライン研修に積極的に参加し自己研鑽を積み重ねている。

2 教育活動の現状と課題

助産学コース学生は、夜間帯に共通科目を履修し、1年次前期は昼夜にわたって講義・演習があるため、課題の重複や体力・健康面の支援を継続して行っている。大分市内の小中学校での「いのちの教育」は、学内で何度もリハーサルや修正を重ね、11月後半に現地で経験した。1年次生の段階的OSCEは、グループディスカッションを中心としたワークショップ形式とした。学生は、積極的に練習を行い発表した。発表後のデブリーフィングを通して、提示事例のイメージ不足を補い、より良い方法を考えていた。学生は様々な意見を出し合えるグループディスカッションを通じた技術練習の機会になると好評であった。1年次後期のNICU課題探究実習は、臨地5日（半日）と学内5日の実習を行った。担当教員と専任教員が、実習前後に学内でグループディスカッションするなど学びが深まるように計画し実施した。妊娠期課題探究実習は、ほぼ計画通りの日数を実施した。外来受診妊婦数の減少から超音波診断装置を用いた妊婦健康診査の件数は施設による差がみられた。2月上旬に大分県立病院産科外来で4名が補習実習を行い、経験数を満たすことができた。10名全員が2月後半から継続事例2名を受持ち、健診に合わせた実習を継続中である。

2年次生の4月の分娩介助演習は、研究室作成の動画を活用し各自で事前学習を行い、2グループに分かれて練習しOSCEを実施した。今年度は、コロナ感染症拡大以降5年ぶりに、ほぼ通常通りのハイリスク妊産婦ケア実習を大分県立病院産科病棟で2週間実施した。分娩介助を伴う助産学統合実習は、産科診療所2施設で施設指定の感染対策を実施し5月から8月にかけて約4か月間の実習を行った。担当教員が睡眠・食事状況や体調面の確認を行い、適宜休息をとらせるなどして、学生間で協力して体調を崩すことなく実習した。担当教員は、学生個々の問題解決能力や対人対応能力に応じた指導を展開した。助産師国家試験受験に必須の分娩介助経験であるため、実習施設の協力を得て可能な限り

経験できるように自宅や借屋等で待機を行い、学生は直接分娩介助を平均9.3例（9～10例）実施した。次年度も全教員で学生の体調や学びの状況に留意しながら支援する。

2年次後期の助産所助産師の自律した助産ケアの実際は、2名が2日間ずつ助産所実習を行った。院長の助産ケアの意味を考えながら実習し、各自が将来の助産師像を描くことができた。課題研究は指導教員の指導を受け、全員提出し成果を報告した。令和7年度に開催される関連学会で発表予定である。令和6年度修了生7名は県内に3名、県外に4名が産科のある病院に就職した。

大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させる教育方法について、ワークショップ形式のOSCEの修正も含めて研究室教員でディスカッションし改善を図っていく。

3 研究活動の現状と課題

学内外の研究費を獲得し、さらに他機関の支援を受け、各自の課題を探究し続け調査を進めている。卒業研究は、教員の研究テーマの一部や教員のテーマとは直接関係しないものの助産学の発展の基礎となる研究を指導し、優秀賞を2名が受賞した。卒業研究のゼミは、当初の予定通り英文原著購読会3回を含む計6回実施した。大学院生の特別研究・課題研究は、主または副指導教員として指導に携わり、共同研究者として関連学会誌に掲載され、優秀賞を受賞するなど成果を残している。定期的な大学院生のゼミは、9月頃までに指導教員と数名の院生で実施したが、後期は実習があり教員との個別ゼミにとどまった。過年度修了生の論文を投稿するべく継続して支援していくことは継続課題である。

5-17 看護管理学研究室

1 活動方針

学部教育については、看護管理学や在宅看護学に関する授業を通して、学生がマネジメントやリーダーシップ、在宅看護に関する能力を育成することを方針とする。大学院教育では、看護管理・リカレントコースをはじめとした実践者を対象に、看護管理学に関する教育を行い、実践に役立つ授業を行うことを方針とする。特に、博士課程の教育では、看護管理に関する研究指導を行い学位取得にむけた支援を行う。さらに研究活動として、看護管理学や在宅看護学に関する研究を行い、研究の新たな知見を学部と大学院教育に役立て、教育と研究を通して地域社会に貢献することを方針とする。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では看護管理学と在宅看護学の教育を行った。看護管理学は学部2年生と3年生に新カリキュラムの看護管理学概論ⅠとⅡで基礎知識を教授した。4年次生は旧カリキュラムにおいて看護管理学に関する基礎知識に加え、実習経験をもとに看護管理を考える教育を行った。学生同士が自らの経験を看護管理の視点から振り返ることができた。次年度は、新たに看護政策論の科目が開講となる

ため、看護基礎教育において看護政策に関する基礎的な考え方を学べるよう教育を行う。在宅看護学については、2年次に家族看護学概論、3年生に在宅看護学概論および在宅看護学援助論を開講し、基礎知識と支援方法について教授した。さらに、4年次の実習では実践を通して学べるよう、臨地指導者と協働して指導を行った。次年度は、4年生の在宅看護学実習が新カリキュラムとなるため、臨地の指導者と協力しながら実習を充実させる。

大学院前期課程の看護管理学特論では、学生が看護管理学に関する主要なテーマについて、講義を受講し、自らの臨床経験を踏まえたプレゼンテーションとディスカッションを行った。看護管理学演習では学生が実践に即した演習を展開し一定の成果を得られた。特論や演習により、学生の看護管理学に関する学習を促進できた。次年度は学生が所属する職場の組織において職位に応じたマネジメントを強化できるよう各学生の看護管理の実践力を高めていく。

大学院後期課程の研究指導では、研究室の教員全員と大学院生によるゼミを通して支援を行った。各学生が研究計画に沿って調査、データ分析、論文作成を進めることができた。次年度は副論文論文の投稿と本論文の作成に向けて支援を行う。

3 研究活動の現状と課題

看護管理学や在宅看護学に関する研究として、令和6年度は、科研費の研究①「中山間地域の訪問看護ステーションにおける課題と安定・持続化に向けたモデルの検討」②「中小規模病院の看護師がやりがいを獲得するプロセスの解明と支援指針の開発」③「中小規模病院の看護管理者の管理行動が看護の質と定着に及ぼす効果予測モデルの開発」が予定していた3年間が終了した。①と③については、期間延長を行うため、研究成果に繋げる。「中小規模病院における効率的かつ質の高い看護に向けた人材育成に関する理論の開発」が3年目に入るため計画に沿って研究を進める。また、今年度は大分県中小規模病院等看護管理者支援研修に加えて、由布地域と臼杵津久見地域で支援を行った。次年度は、臼杵津久見地域に加えて、別府地域で支援を行う。

5-18 地域看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、学生が保健師助産師看護師法第一条の看護職の目的である医療及び公衆衛生の普及向上を図るために、健康とは何か、看護師として地域で暮らすさまざまな健康レベルやライフステージの人々の健康を支援するために、どのような役割を担うのかを考えることができることを目的としている。対象者の支援のために、地域の特徴や多機関で働く看護職の役割を理解し、多（他）職種との連携ができる看護職の育成をめざす。

大学院教育では、少子高齢化、災害や感染症による健康危機管理など社会情勢の変化を踏まえ、多方面から地域の現状を把握し健康課題を抽出し、健康課題の改善や対策に向けて、多職種や地域の人々と協働し解決していく探求心と論理的思考をもつ保健師育成をめざす。また、学生が「保健師に

求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」を活用し、自己を振り返り、専門性の高い看護職者として自ら学び育つ力の育成を図る。

今後も外部の関係機関とも連携を図り、地域や社会貢献の役割を果たすことをめざしていく。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では、1学期に4年生は地域看護学実習、3学期に1年生は健康支援概論、2年生は地域看護学概論、3年生は地域生活支援論の科目を実施した。3年生には、旧カリキュラムの健康支援論演習を履修する学生への講義も実施した。毎回の講義終了後に、学生は講義内容を振り返り、自身の学びを提出することにより、学びをまとめる機会となった。また、地域の看護職のひとつである保健師から、地域での看護活動の実際を学ぶ機会を設定した。3年次の科目は、4年次の地域看護学実習と連動するように、学生は実習メンバーによるグループワークを通して、実習地域の情報を把握し、実習に臨むことができた。実習中は、さらに実習地域に関する健康情報や地域の特徴を追加し、地域で暮らす人々のQOLの向上をめざすために、今後の自身の看護活動にどのようにいかしていきたいかなど役割を考える機会となった。R7年度は、新カリキュラムの学生が4年次を迎え、地域看護学実習が2週間から1週間へと変更となる。実習期間の変更に伴う実習目的や内容の変更について、R6年度内にオンラインにて全実習施設へ説明した。これまでと同様に、本学の教育にご協力をいただけるように、対応していきたい。R7年度の実習状況は、大学と実習施設で共有し、R8年度の実習の充実に向けて対応を検討していきたい。

大学院の広域看護学コースの1年次の学生は、専門コースと修士課程の履修科目が多い学年である。学生は、講義と演習を通して自身の学びを実習場面で関連づけて理解し、具体的な実習経験から保健師の役割を考え、自身の保健師像を考える機会となった。実習では、各自の実習テーマを掲げ、対象者を取り巻く健康課題の抽出、健康課題を解決するためのシステムの充実や必要性、評価までの一連のプロセスを経験した。R6年度の報告会は、教員からの発表内容例を提示した。報告会では、学生はこの例を参考にして、各学生が共通した視点について自身の考えを他者へ伝えることができた。2年次の学生は、1年次の学びや経験をいかして、さらに産業施設や地域包括支援センターにて実習を重ねた。1年次、2年次の学生とも、実習を通して保健師の役割を考えることができた。

保健師の国家試験対策として、教員は、国家試験模試の受験を奨励し、学生は計画的に模試を受験し国家試験に臨んだ結果、合格率は100%であった。院生の保健師としての就職先は、県内に5名（大分県・市）、県外に3名で、県内の就職率は62.5%であった。

R6年度の後半は、新たな試みとして1年次の実習において、学生毎の担当教員は固定せず、学生が自主的に自身の考えを教員に相談や報告することを通して、実習に取り組むことを試みた。学生は、学生同士の共有を主体的に行いながら、実習の学びを深めることにもつながった、R7年度も同様に、教員は学生が主体的に教員へ報告連絡相談を行うことを出来るように支援をしていきたい。国家試験対策、就職試験対策も同様に、学生の意向を確認しながら支援していきたい。

3 研究活動の現状と課題

学部の卒業研究は、研究室として6名の学生を担当した。質問紙調査は2名、文献研究は4名の学生が取り組んだ。6名のうち、2名の学生が大分県公衆衛生学会にてポスター発表を行った。学生は質疑に対して回答するなど貴重な経験をすることができた。教員は、学生の発表の準備や当日の発表をサポートした。

大学院の課題研究は、4名の学生を担当した。学生は、研究に取り組み、論文にまとめることができた。4名とも、課題研究に取り組んだ内容を発表することができ、質疑に対して回答を行い、発表内容を深める機会となった。

教員は、科研費や学内先端研究、奨励研究を得て、各自の研究課題に取り組み、大分県公衆衛生学会にて発表した。

R7年度も、教員は、学部生、大学院生の研究指導を行うと共に、各自の研究に取り組み、国内の学会発表や論文を投稿するなど、研究活動に取り組みたい。

5-19 国際看護学研究室

1 活動方針

国際看護学研究室では、国際社会の健康課題とその背景に関心を持ち、国際的な視野と、多文化を尊重する姿勢を身に着け、幅広い分野で活躍できる看護職の育成を目指し活動している。教育・研究活動共に、グローバルヘルスに関する基本的な知識を基盤とし、多様な文化社会的背景が人々の健康に及ぼす影響への理解、異文化圏で暮らす移民の健康課題への理解と看護アプローチに重点を置き活動している。また、学生が自らと異なる言語・文化・社会経済的背景を持つ人々と対面・オンラインでの国際交流に参加し、多様な価値観に触れる機会の創出に尽力している。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では、国際看護学概論（2年次）、国際看護学演習（新カリキュラム、2年次および平成27年度カリキュラム、3年次）、国際看護比較論（3年次）を設置し、大学院では、国際看護学特論Ⅰ・Ⅱを開講している。その他、助産学コース、広域看護学コース、全コース共通科目の講義・演習において、国際看護に関連する講義を担当している。学部・大学院共に、講義では世界の健康課題やその背景を理解するため複眼的な視点を持ってもらえるよう、保健医療福祉以外に文化・社会経済に関する情報も盛り込むよう留意している。学部の講義・演習では、日本国内のみならず世界の人々を看護の対象と捉え、1) 地球規模の保健医療に関する課題について理解し、その直接的・間接的要因や、課題に対する地域／グローバルな規模での対策について学ぶこと、2) 多様化する対象者の文化・社会的背景に着目し、文化に配慮したケア（Transcultural nursing）について学ぶことを目的としている。次年度は学生がより主体的に学べるよう、ディスカッションを効果的に組み込む等の工夫をす

ることが課題である。

3 研究活動の現状と課題

国際看護学研究室では、文化社会経済的背景が人々の健康に及ぼす影響、健康課題に関する日本と諸外国の比較、異文化圏で暮らす移民の健康課題への看護アプローチ等に関する研究を行っている。教員は研究テーマに関して科研費を獲得し、外部の研究者や海外の研究協力者とも協力しながら継続的に研究に取り組んだ。今後は研究で得られた知見を研究成果として公表できるよう準備を進める。

来年度以降はタイムマネジメントに努めて研究に取り組む時間を確保し、研究を推し進めること、結果を遅滞なく論文としてまとめ公表していくことが課題である。

4 その他

大分市国際課、大分県国際交流プラザ、JICAデスク大分等から国際交流に関するイベントをご紹介いただき、学生・教職員に発信している。また、大分市国際課が開催した「おおいた国際協力啓発月間」において、研究室活動のパネル展示を行った。

5-20 社会看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、看護の対象となる人々が生涯を通じて、健康や障害の状態に応じて社会資源を活用できるよう支援を行うため、必要な知識と基礎的な能力を養うことを目的とする。事前学修等を活用し、学生が保健・医療・福祉・介護に関する基本概念、関係制度などを法律上の位置づけや制度の背景とともに理解するために必要な能力を養うことを目指す。

大学院教育では、少子高齢化や人口減少などの社会的な背景のなかで、社会のニーズと制約を捉え、課題を社会の仕組みを踏まえて思考すること、さらには、演習や事前学修等をとおして、課題に対してシステム化や変革していくために必要な能力を養うことを目指す。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では、社会保障システム論を担当した。実習では地域看護学実習及び総合実習を担当した。社会保障システム論では、関係する法律などを用いて背景、理念、目的などを理解するよう講義をすすめた。また、学生にとって制度が身近に感じられないことから、制度を活用しているALS患者の動画を用いて理解することの重要性を教授した。今後は、それぞれの制度で身近に感じられるよう工夫したい。

大学院教育では、健康社会科学特論、看護政策論、保健医療福祉行政特論を担当した。この他、NPコースの講義などを一部担当した。保健医療福祉行政の制度の基礎的理解に加え、それらに影響を与える社会的な要因を理解できるよう事例などを用いて説明した。今後は、事例を踏まえた演習など思考が定着するための工夫が必要である。

3 研究活動の現状と課題

学部の卒業研究で2名の学生に研究指導を行った。1名は、保健師へのインタビューにより、貴重な経験を積むことができた。他の1名は、文献研究を行い、研究のプロセスを丁寧に踏むことができた。

大学院教育では、NPコースの院生を担当した。

教員は、看護基礎教育における看護政策教育プログラムの導入の試みに関する研究、地方自治体の保健師確保に関する研究を行った。また、地方自治体の保健事業と地域特性との関係は論文としてまとめた。

6 研究助成・事業助成等

6-1 研究助成

6-1-1 日本科学振興会科学研究費助成事業（科研費）

麻原きよみ

ヘルスヒューマニティーズを基盤とした公衆衛生看護における態度・価値教育の構築. 基盤研究(C). (代表)

市民と保健医療者が共に考える「市民主導型ケア」の教材のグローバルスタンダード開発. 基盤研究(B). (分担)

組織変容を伴うプリセプター保健師教育支援プログラムの実装. 基盤研究(C). (分担)

石田佳代子

災害時における「黒エリア」の構成のための基本となる指標の作成とその普及. 基盤研究(C). (代表)

梅野貴恵

離乳後女性のエクオール産生能と骨代謝プロフィール回復状態の推移との関連. 基盤研究(C). (代表)

恵谷玲央

放射線発がんの新たなリスクモデルを細胞間コミュニケーションの視点から考える. 若手研究. (代表)

持続的な医療被ばく国民線量評価のためのデータ収集、線量評価法の構築. 基盤研究(B). (分担)

小嶋光明

マイクロビーム放射線療法の抗がん効果の仕組みを細胞間コミュニケーションから紐解く. 基盤研究(C). (代表)

影山隆之

病院看護師における夜勤時の眠気と先行睡眠・勤務時間・身体活動との関連. 基盤研究(C). (代表)

森林環境下でのリモートワークが労働者のメンタルヘルスと労働効率に及ぼす影響. 基盤研究(C). (分担)

医療的ケアが昼夜必要な在宅療養児の生活に即した地域包括支援システムの構築. 基盤研究(C). (分担)

ランダム化比較試験による自殺対策ゲートキーパー養成プログラムの効果と持続性の評価. 基盤研究(C). (分担)

草野淳子

医療的ケア児を支える訪問看護師と専門支援相談員をつなぐ連携教育プログラムの開発. 基盤研究(C). (代表)

古賀雄二

注意力障害評価を軸とした神経認知障害群の同時スクリーニングに関する研究. 基盤研究(C). (代表)

学習効果が排除可能なせん妄評価アプリケーションの開発と検証. 盤研究(C). (代表)

集中治療後症候群患者(PICS)の潜在化を防ぐ地域医療連携支援モデルの開発. 基盤研究(C). (分担)

後藤成人

ランダム化比較試験による自殺対策ゲートキーパー養成プログラムの効果と持続性の評価. 基盤研究(C). (代表)

Web を活用した依存症の偏見解消プログラムの開発と社会実装の普及効果検証. 基盤研究(C). (分担)

民生委員を対象にした短縮版ゲートキーパー養成プログラムの開発及び効果検証. 基盤研究(C). (分担)

定金香里

ユズ果皮飲料中のフラボノイドが抗アレルギー作用を発揮する条件の探索. 基盤研究(C). (代表)

東アジアを越境するバイオエアロゾル: 日本本土への拡散・沈着とその生体影響の評価. 基盤研究(A). (分担)

佐藤愛

地域在住高齢者のオーラルフレイルの実態調査と口腔・嚥下・咳嗽機能向上の介入の試み. 若手研究. (代表)

自立高齢男性における咳嗽反射時の喀出力の関連要因の解明. 基盤研究(C). (代表)

佐藤栄治

自発的掛け声と立ち上がり時の体幹前傾動作が体幹及び下肢筋活動に及ぼす影響. 基盤研究(C). (代表)

品川佳満

看護学生の情報倫理統合力の修得を目的とした学習支援ポータルサイトと演習教材の開発. 基盤研究(C). (代表)

ICT を活用した医療職との連携による新しい保育者実習プログラムの開発と評価. 基盤研究(C). (分担)

篠原彩、桑野紀子

女性技能実習生担当者等の健康支援コンピテンス醸成プログラムの構築. 基盤研究(C). (代表、分担)

秦さと子

嚥下機能評価のための血中および唾液中サブスタンス P 濃度の基準値の検討. 基盤研究(C). (代表)
デジタル機器使用と嚥下機能との関連. 基盤研究(C). (代表)

杉本圭以子

精神障害者が地域で活躍するための総合的就労促進プログラムの構築と評価. 基盤研究(C). (代表)

田中佳子

シャント血流音から狭窄を評価する機器の開発に関する基礎的研究. 基盤研究(C). (代表)

坪内優太

アロマターゼ阻害薬が筋骨格系に与える影響の解明と筋骨連関に着目した治療法の探索. 若手研究. (代表)

藤内美保

看護基礎教育における臨床推論の看護の思考過程を導く教育プログラム開発. 基盤研究(C). (代表)
高度実践看護師の医学的視点と看護的視点を融合した臨床推論の指標開発. 基盤研究(C). (代表)
診療看護師(NP)が患者・家族の症状マネジメント力を高める教育支援モデルの開発. 基盤研究(C). (分担)

徳丸由布子、濱耕子、永松いずみ

産後パパ育休を取得する夫婦の夫婦関係満足度を高める支援に関する研究. 基盤研究(C). (代表、分担)

徳丸由布子、永松いずみ

父親の育児参加と育児休業取得に関する現状と課題. 基盤研究(C). (分担)

濱耕子

産後女性における骨盤矯正機能付き筋力サポートアンダーウェア着用効果の検証. 基盤研究(C). (代表)
膀胱底の位置の縦断的計測による妊産褥婦の尿失禁リスク予測のための指標の探索. 基盤研究(C). (分担)
周産期の助産実践能力形成を促すループリックの開発と有用性. 基盤研究(C). (分担)

濱中良志

骨粗鬆症に対する新しい発症機序の解明と新規薬物開発. 基盤研究(C). (代表)

樋口幸、吉田成一

妊娠期の高脂肪食摂取が出生児の皮膚に与える影響と増悪・感受性要因の解明. 基盤研究(B). (代表、分担)

樋口幸

新生児皮膚トラブル予防を目的とした胎脂の網羅的解析による予測バイオマーカーの創出. 挑戦的萌芽. (代表)

予防的スキンケアのための画像解析による新生児の皮膚評価ツールの開発. 基盤研究(C). (代表)

姫野雄太

中小規模病院の看護師がやりがいを獲得するプロセスの解明と支援指針の開発. 若手研究. (代表)

福田広美

中小規模病院における効率的かつ質の高い看護に向けた人材育成に関する理論の開発. 基盤研究(C). (代表)

藤本優子

乳幼児を持つ親への祖父母の育児サポートは、祖父母の世代性と健康の向上に関連するか. 研究活動スタート支援. (代表)

育児の悩みを抱える幼児の親が援助要請行動に至るプロセス及びその関連要因の解明. 基盤研究(C). (代表)

乳児期の子どもを持つ母親の特性および育児レジリエンスの特徴と促進要因に関する研究. 基盤研究(C). (分担)

堀裕子、小野美喜、中釜英里佳

向老期女性の認知症予防・理解促進のための ICT を活用したプログラムの開発. 奨励研究. (代表、分担)

森加苗愛

糖尿病をもつ男性のセクシュアリティの看護ケアに対する教育プログラムの開発. 若手研究. (代表)

矢野亜紀子、福田広美、荒木章裕、姫野雄太

中小規模病院の看護管理者の管理行動が看護の質と定着に及ぼす効果予測モデルの開発. 基盤研究(C). (代表、分担)

山田貴子

熟練訪問看護師の臨床判断モデルの開発—新卒訪問看護師教育の開発に向けて—. 若手研究. (代表)

吉田成一

加熱式たばこによる雄性生殖系への影響および寄与因子の探索と影響の低減を目指して. 基盤研究(B). (代表)

6-1-2 その他の研究助成

小嶋光明

放射線照射したマウスの骨髄・脾臓内造血幹細胞の細胞動態の解析～放射線誘発マウス急性骨髄性白血病のメカニズムを考える～. 2024 年度放射線災害・医科学研究拠点共同研究. (代表)
乳腺上皮正常細胞と乳がん細胞の共培養細胞集団を用いた X 線マイクロビームのすだれ状照射による抗がん効果. 高エネルギー加速器実験機構共同利用実験. (代表)

加藤典子, 小野治子, 岡田悠希

自治体保健師の計画的・継続的な確保に関する研究. 令和 5 年度厚生労働科学研究費 健康安全・危機管理対策総合研究事業. (分担)

坪内優太

ベルト電極式骨格筋電気刺激装置を用いた難治性骨折に対する新規治療法の開発. 株式会社ホームーイオン研究所. 受託研究. (代表)

濱耕子

「AYA 世代がんサバイバーのセクシュアリティに関する情報共有ツール」の活用・教育方法の検討. 石川県立看護大学 学内研究助成 (研究プロジェクト). (分担)

樋口幸

胎脂の構成成分と新生児の皮膚バリア機能・皮膚組織に与える影響. サラヤ株式会社共同研究費. (代表)

6-1-3 学内の競争的研究資金

石田佳代子，山田貴子，松久美

訪問看護師を対象としたフィジカルアセスメントの遠隔研修プログラムの開発と評価 ―デジタル聴診器を使用した聴診スキルなどについて―. 先端研究.

小野美喜

高齢者施設におけるオンライン診療（D to P with N）の可能性と多職種連携に関する予備的研究
-高齢者の診療を支える看護師および多職種の視点. 先端研究.

川南公代

A 県内における自治体保健師の標準的なキャリアラダーの実態とリーダー育成に関連する活動領域の検討. 先端研究.

堤恒貴、古賀雄二、濱中良志

痛みの強度と周期性（性質）の同時モニタリング法の検証. 奨励研究.

妻木美香

行政保健師が行う地区活動の定義. 奨励研究.

6-2 事業助成

麻原きよみ、小野治子

令和 6 年度 地域保健総合推進事業「2040 年を見据えた令和における保健師の地区活動の推進に関する調査研究事業」．日本公衆衛生協会．（協力事業者）

藤内美保、甲斐博美、大島操

令和 6 年度地域医療介護総合確保基金（医療分）看護学生学習環境整備事業費補助金

6-3 外部研究者受入れ

本年度実績なし

7 研究業績

7-1 著書

麻原きよみ：公衆衛生看護とは，保健師活動の「見える化」．井伊久美子，勝又浜子，森永裕美子，荒木田美香子，坂本真理子，村嶋幸代編，新版 保健師業務要覧 第4版 2025年版，p5-7, p268-271，日本看護協会出版会，東京，2025.2.

丸山総一郎（監訳），丸山総一郎，江副智子，影山隆之，瀬戸昌子，中山邦夫，福田早苗，牟礼佳苗，瀬藤乃理子，中尾和久，大塚泰正，吉内一浩，島津昭人，島津美由紀（訳）：ストレスの歴史 科学的研究の発展と社会・文化の影響．創元社，大阪，2024. (Jackson, M.: The Age of Stress: Science and the Search for Stability, 2013)

加藤典子：第2章 論点 3 地方自治体の看護職，pp170-174，勝原裕美子編，組織管理論 2024年版，日本看護協会出版会，東京，2025.3.

勝又浜子，加藤典子，清水嘉代子，田母神裕美：看護法令要覧 令和7年度，日本看護協会出版会，東京，2025.3.

古賀雄二：第2章 痛み・不穏・せん妄に対応する一鎮痛薬，鎮静薬，抗精神病薬，抗不安薬，C せん妄に対応する，茂呂悦子，長谷川隆一，前田幹広（編），ケア場面で考える ICU/CCU のくすり，p88-95，南江堂，東京，2024.10.

古賀雄二：第3章 4.鎮痛・鎮静管理，山勢博彰，山勢善江（編），成人看護技術 急性・クリティカルケア看護第3版，p126-130，メヂカルフレンド社，東京，2024.10.

伊関敏之，市崎一章，大庭義典，加曾利実，神谷厚德，城戸真由美，鈴木薫，西原真弓，宮内信治，宮武香織，渡部アヤ子：8. 音調線，9. イントネーションとしぐさ．伊達民和監訳『英語のイントネーション 一話し言葉のメロディー *Intonation and Its Parts: Melody in Spoken English*』，pp.180-246, pp.247-269，大阪教育図書，大阪，2024.

7-2 原著論文・査読付総説

遠藤直子, 嶋津多恵子, 嶋野洋子, 麻原きよみ, 吉野純子, 今野弘美, 清水雅子: 都道府県および保健所設置市, 特別区におけるプリセプター保健師研修に関する全国調査. 日本公衆衛生看護学会誌, 13(3), 205-214, 2024.

岡本玲子, 岸恵美子, 松本珠実, 臺有佳, 村嶋幸代, 麻原きよみ, 佐伯和子, 荒木田美香子, 井口理, 和泉比佐子, 岩本里織, 遠藤雅幸, 唐川祐一, 坂田祥, 古橋完美, 前田香, 松原三智子, 三森寧子, 茂木りほ, 吉村史子: 保健師のコアバリューとコアコンピテンシー: デルファイ調査. 日本公衆衛生雑誌, 745-75, 2024.

原田若奈, 麻原きよみ: 定年退職後も同一企業で就労を継続する男性の体験. 聖路加看護学会誌, 28, 10-19, 2024.

高橋恵子, 朝澤恭子, 有森直子, 亀井智子, 麻原きよみ, 大森純子, 新福洋子, 菱沼典子, 田代順子: 市民と保健医療専門職における People-Centered Care パートナーシップの関連要因. 厚生の指標, 1(6), 2-8, 2024.

石田佳代子, 山田貴子, 内倉佑介, 藤内美保: 遠隔授業によるデジタル聴診器を使用した呼吸音と心音の聴診プログラムの作成・実践・評価. 日本看護科学会誌, 44, 882-892, 2024.

岩下恵子, 鈴木啓司, 小嶋光明, 放射線による皮膚組織反応. 放射線生物研究, 59(3), 181-205, 2024,

木村 (安藤) 聡美, 梅野貴恵, 樋口幸, 穴見愛: A 地域周産期母子医療センターで出産した褥婦への助産師による産後 2 週間健診の精神面への効果. 母性衛生, 65(4), 368-377, 2025.

江藤芳浩, 恵谷玲央, 品川佳満, 小嶋光明, CT 画像の fat stranding を特徴量とする 人工知能を用いた大腸炎検出. 日本診療放射線技師会誌, 71, 360-269. 2024.

Okada, Y., Matsuchi, N., Hyodo, M, Shutoh, N.: Redundancy test for some variables in linear discriminant analysis with two-step monotone incomplete data. SUT J. Math., 60 (2), 39-64, 2024.

Kitajima, T., Ojima,M., Shinagawa, Y., Kai, M.: PHITS Simulation Analysis of the Performance of Pediatric Thyroid Screening Measurements Using NaI(Tl) Spectrometer. J. Radiat. Prot. Res. 49(4), 2024.

Kai, H., Shimada, T.: Ultrastructure of new-born human umbilical vessels, with specific reference to the unique architecture of smooth muscle cells. 形態・機能, 23(2), 67-77, 2025.

田中生弥子, 影山隆之: 中学生の自殺予防のための教職員向けゲートキーパー校内研修が教職員のゲートキーパー知識・スキルに及ぼす効果. こころの健康, 39(2), 32-46, 2024.

黒岩千翔, 影山隆之, 小林敏生: 病棟で勤務する看護師が交替勤務中に感じる眠気と眠気のピーク時刻の実態. 看護科学研究学会誌, 44, 659-667, 2024.

影山隆之: 自殺予防対策と睡眠. 睡眠と環境, 18(2), 13-20, 2024.

加藤典子, 竹澤くるみ, 佐藤栄治: 市町村における母子保健の事業形態と地域特性との関係に関する研究—事業の直営, 民間委託の別に着目して—. 日本看護科学会誌, 44, 1192-1202, 2024.

網田真利子, 草野淳子, 井原健二: 病院から在宅に移行する医療的ケア児へ訪問看護師が行う看護実践. 小児の診療看護師(NP)の特性を生かした今後の活動の可能性. 日本 NP 学会誌, 8(1), 17-27, 2024.

新家勇希, 草野淳子, 足立綾, 井原健二: 小児がん患児に関わる診療看護師 (NP) の実践と役割—海外の文献検討を通して—. 日本 NP 学会誌, 8(2), 17-26, 44-53, 2024.

草野淳子, 井原健二: A 県における医療的ケア児の訪問看護師研修会を受講した訪問看護師の実践. 小児看護, 47(11), 1401-1406, 2024.

井上千穂, 齋藤信也, 古賀雄二, ローレンス綾子, 平松貴子, 清水克彦: 我が国の看護師が捉える「不穏」について, 医療の質・安全学会誌, 19(3), 277-289, 2024.

峰松恵里, 佐伯圭一郎, 村嶋幸代: 高齢者講習受講者の運転能力の過大評価. 日本看護科学会誌, 44, 526-535, 2024.

篠原彩, 荒木章裕, 影山隆之, 福田広美, 甲斐優子, 永松いずみ, 神矢恵美, 村嶋幸代: 新型コロナウイルス感染症流行下における看護学生による予防的家庭訪問実習～地域で展開する看護学実習継続に向けた工夫～. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 47(3), 111-115, 2024.

Shinohara, A., Kuwano, N., Shinagawa, Y., Kawasaki, R., Ohnishi, M.: Perspectives of persons in charge regarding support for the health and daily lives of female technical intern trainees who migrate to Japan: a qualitative study. Journal of Rural Medicine 19(3), 131-140, 2024.

Kataoka, T., Tsubouchi, Y., Takase, R., Otsu, T., Iwasaki, T., Kataoka, M., Kaku, N.: Preoperative abaloparatide plus zoledronate treatment accelerates femoral bone healing in rats following osteotomy. *Journal of Orthopaedic Surgery*, 32(3), 2024.

Abe, T., Miyazaki, M., Sako, N., Kanezaki, S., Tsubouchi, Y., Kaku, N.: Optimal Intermittent Administration Interval of Abaloparatide for Bone Morphogenetic Protein-Induced Bone Formation in a Rat Spinal Fusion Model. *International Journal of Molecular Sciences*, 25(7), 3655-3655, 2024.

Kubota, Y., Tsubouchi, Y., Anan, M., Kawano, M., Iwasaki, T., Itonaga, I., Ikeda, S., Kataoka, M., Tsumura, H., Kaku, N., Tanaka, K.: Gait analysis of a patient after femoral nerve and malignant soft tissue tumor resections: a case report. *BMC Musculoskeletal Disorders*, 25(1), 2024.

片岡高志, 坪内優太, 高瀬良太, 大津健史, 岩崎達也, 片岡晶志, 加来信広: Zoledronate の短期間過剰投与による骨微細構造および材質特性の変化. *大分県リハビリテーション医学会誌*, 21, 2024.

野中代子, 坪内優太, 齊藤貴文: 理学療法学専攻初年次学生における学業成績に関連する因子の探索的研究. *リハビリテーション教育研究*, 30, 19-24, 2024.

中釜英里佳, 宿利優子, 小野美喜: 特定行為研修における倫理教育の実態. *日本看護倫理学会誌*, 16(1), 48-55, 2024.

中釜英里佳: 看護系単科大学における教養教育の多様性に関する検討 カリキュラム、教養教育科目に着目して. *日本看護学教育学会誌*, 34(1), 1-14, 2024.

土肥真由子, 林猪都子, 永松いずみ: 死産を経験した女性への退院後の継続看護と看護職者の困難感. *母性衛生*, 65(1), 137-143, 2024.

後藤麻乃, 林猪都子, 永松いずみ: 産褥 1～4 日目の褥婦の身体的疼痛の部位と経日的変化. *母性衛生*, 65(4), 91-98, 2025.

佐藤榛香, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: 多胎児を持つ母親の乳幼児期における育児の困難感の実態. *母性衛生*, 65(4), 541-548, 2025.

中田覚子, 濱耕子: 日本人妊婦の Quality of Life 尺度 50 項目版の開発 ～信頼性・妥当性の検証. *日本助産学会誌*, <https://doi.org/10.3418/jjam.JJAM-2024-0016>, 2024.

島田明日華, 桶作梢, 濱耕子: 日本における父親の育児時間に関連する要因についての文献検討. 看護実践学会誌, 36(2), 51-62, 2025.

亀田幸枝, 濱耕子, 米田昌代, 曾山小織, 河合美佳, 野沢ゆり乃, 西村未来: 周産期のシミュレーション教育で使用するループリックの作成と教育実践報告, 石川看護雑誌, 22, 15-22, 2025.

矢野真美, 矢野博之, 濱中良志, 樋田真理子, 吉岡秀克, 松尾哲孝: 放射線による V 型コラーゲンの転写および転写後調節について. 細胞, 56(9), 687-689, 2024.

Yonezawa, K., Higuchi, S., Shimizu, S., Minematsu, T., Haruna, M.: Relationship Between Cytokines and Face Skin Symptoms in Newborns in Two Japanese Cities. Skin Research & Technology, 30(10), 1-6, 2024. ※ Kaori Yonezawa and Sachi Higuchi are co-first authors.

餘目千史, 佐藤栄子, 村角直子, 岡佳子, 清水安子, 住吉和子, 高橋慧, 東めぐみ, 藤原優子, 山崎優介, 山本裕子, 森加苗愛: COVID-19 感染拡大による糖尿病患者への教育・看護に関する実態調査 — 外来における教育・看護に焦点を当てて —. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 28(1), 53-62, 2024.

7-3 その他の論文等

麻原きよみ: 学問追及に対する熱い思いを秘めた生粋の研究者. 看護研究, 58(1), 27-28, 2025.

麻原きよみ: 質的研究の査読を受けた経験. 看護研究, 57(4), 356-357, 2024.

岩本里織, 麻原きよみ: 私たち保健師のコアバリューとコアコンピテンシー 「健康の社会的公正」. 保健師ジャーナル, 80(4), 324-327, 2024.

麻原きよみ: 日本看護倫理学会第 16 回年次大会大会長講演 ソーシャル・ジャスティス: 誰ひとり取り残さない社会のために看護職としてできること. 日本看護倫理学会誌, 16 (1) , 89-90, 2024.

影山隆之, 後藤成人, 瀬戸屋希, 小泉典章: MCRT の先にある課題ー支援者の支援と学会の役割. ころの健康, 39(2): 22-26, 2024.

影山隆之: エコロジーで考える自殺予防ー危険因子と保護因子、環境因子と個人因子. 自殺予防と危機介入, 45(1), 10-18, 2024.

後藤成人 地域における自殺対策 自殺対策におけるゲートキーパー養成研修に関する研究 海外との比較、ゲートキーパーに興味を持つ人の人口統計学的属性、および研修の効果と持続性の検討 (解説). 自殺予防と危機介入, 44(2), 51-54, 2024.9.

藤内美保: 特集 医師の働き改革後の世界 働き方改革はタスクシフト・シェアで解決するか?. 月刊地域医学, 39(2), 163-167, 2025.

塩出千尋, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: 保育所に入所する子どもをもつ母親の卒乳・断乳時期の支援の実態とニーズ. 助産師, 78(4), 32-37, 2024.

宮内信治, 小野美喜: ナイチンゲールの時代と現代の「取り残された人々」: COVID-19 などの感染症に焦点を当てて. 日本看護倫理学会誌, 16(1), 77-80, 2024.

矢野亜紀子, 福田広美, 荒木章裕, 姫野雄太, 村嶋幸代: 【中小規模病院における管理者育成を考える 自施設の理念・機能に応じた育成計画をどう描くか】中小規模病院の看護管理者の看護管理行動と看護の質および定着(解説). 看護管理, 34(11), 922-929.

7-4 プロシーディングス

内倉佑介, 後藤成人: 男性看護師の離職に関連する要因 職業性ストレスの男女比較による検討. 日本精神科看護学術集会誌, 67(1), 118-119, 2024.6.

7-5 報告書

生田寛子, 木櫛聖子, 林利恵子, 池戸啓子, 田谷奈津世, 野澤憲子, 伊藤由紀子, 西本美和, 麻原きよみ, 大河内彩子, 高本佳代子, 小野治子, 藤内修二: 令和 6 年度 地域保健総合推進事業「2040 年を見据えた令和における保健師の地区活動の推進に関する調査研究事業」報告書. 2025.3.

小嶋光明, 恵谷玲央: 放射線照射したマウスの骨髄・脾臓内造血幹細胞の細胞動態の解析～放射線誘発マウス急性骨髄性白血病のメカニズムを考える～, 2023 年度放射線災害・医科学研究拠点共同利用・共同研究課題成果報告書.

村嶋幸代, 加藤典子, 川崎涼子, 佐伯和子, 岸恵美子, 臺有佳, 田村秀, 小野治子, 岡田悠希: 自治体保健師の計画的・継続的な確保のためのガイドライン. 令和 5～6 年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理危機対策総合研究事業「自治体保健師の計画的・継続的な確保に関する研究」), 2025.3.

矢野亜紀子 ほか: 令和 5 年度大分県中小規模病院看護管理者支援事業報告書.

吉田成一: 加熱式たばこに関する情報について: 文献情報. 令和 5 年度 第四回加熱式たばこ研究討論会, 45-48, 2024

7-6 学術講演

小嶋光明: 造血幹細胞の競合から考える放射線誘発急性骨髄性白血病のメカニズム. 第5回放射線災害・医科学研究拠点ワークショップ, 長崎, 2024.2.

影山隆之: 自殺予防と生きる希望. 第43回大分県緩和ケア研究会, 大分市, 2024.3.

影山隆之: 自殺予防対策と睡眠. 第33回日本睡眠環境学会教育講演, 那覇市, 2023.9.

影山隆之: 中学校教員のためのゲートキーパー研修 全国の実態と実施効果の確認. 第49回日本自殺予防学会ワークショップ, さいたま, 2024.9.

影山隆之: 地域の自殺実態の把握. 第83回日本公衆衛生学会シンポジウム 自殺対策基本法制定20周年自殺対策を振り返る, 札幌, 2024.11.

影山隆之: 労働者の健康と睡眠. 日本精神衛生学会第40回大会教育講演, 八王子市, 2024.12.

影山隆之: これからの精神衛生学会に期待すること. 日本精神衛生学会40回大会記念シンポジウム, 八王子市, 2024.12.

草野淳子: 教育講演 わが子のケアの達人になる『医療的ケア児』のママたちの奮闘から一子どもたちに格差がない福祉社会へ-. 第44回看護科学学会学術集会, 熊本, 2024.12.

本郷成市, 石井瑛, 梅木和美, 坪内優太, 鶴田瑛典, 濱田彰, 熊木光包: 大分県における脆弱性骨折予防活動-大分県骨粗鬆症リエゾンサービス(OLS)ネットワークが担う役割とは-. 第12回日本脆弱性骨折ネットワーク学術集会, 北九州, 2025.3.

坪内優太: アカデミックセミナー 骨粗鬆症の基礎と脆弱性骨折. 第16回九州ハンドセラピー研究会学術集会, 2025.2.2.

坪内優太: 特別講演 骨代謝疾患に対する予防・治療としてのベルト電極式骨格筋電気刺激の可能性. 第10回日本骨格筋電気刺激研究会学術集会, 東京, 2024.11.

坪内優太: シンポジウム 複雑化する運動機能障害のトータルマネジメント～拘縮、骨粗鬆症、栄養・代謝障害へどう立ち向かうか?～ 骨代謝の視点から再考する骨粗鬆症の予防と治療. 第12回日本運動器理学療法学会学術大会, 横浜, 2024.9.

樋口幸: シンポジウム バイオ研究のすすめ, 「看護×バイオ」の融合ですべてのいのちに Well-being な未来を. 第 12 回看護理工学会学術集会, 石川, 2024.11.

森加苗愛: 研究推進委員会企画セミナー 質的研究のポイント! part2 インタビューデータの分析について検討しよう. 第 29 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 京都, 2024.9.

森加苗愛: 政策委員会企画セミナー 外来在宅共同指導料について. 第 18 回日本慢性学会学術集会, 神戸, 2024.8.

7-7 学会発表等

Shimazu, T. Hatono, Y., Yoshino, J., Yamaya, M., Asahara, K., Endo, N., Konno, H., Shimizu, M.: Evaluation of a Model Programme in Preceptor Public Health Nurse Training- Qualitative Text Analysis from the 2022 Initiative. EAFONS 2024, Hong Kong, 2025.3.

内村二三代, 麻原きよみ: メンタルヘルスの不調を抱える母親と共に子どもを育てる父親の体験. 第 13 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 愛知, 2025.1.

三好諒, 麻原きよみ: 予定しない不意の初回面接場面における保健師の支援技術. 第 13 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 愛知, 2025.1.

嶋津多恵子, 吉野純子, 麻原きよみ, 遠藤直子: A 保健所中堅期研修におけるプリセプター保健師研修モデルプログラムの評価. 第 44 回日本看護科学学会学術集会, 熊本, 2024.12.

高橋恵子, 射場典子, 中村恵, 亀井智子, 大森純子, 有森直子, 朝澤恭子, 新福洋子, 麻原きよみ, 菱沼典子, 田代順子: 市民と保健医療専門職が共に考える「英語版: People-Centered Care の教材」の作成. 第 29 回, 聖路加看護学会学術大会, 東京, 2024.9.

百武ひとみ, 麻原きよみ: 育児相談において保健師が母親の日常的意思決定を支援するプロセス. 第 27 回日本地域看護学会学術集会, オンデマンド, 2024.6.

足立綾, 草野淳子, 阿万貴子: 小児看護学実習における保育所での保健教育導入の試み. 第 24 回九州沖縄小児看護教育研究会, 福岡, 2024.8.

石丸智子: 反転授業を取り入れたシミュレーション演習の試みーGoogle Workspace の活用ー. 第 12 回日本シミュレーション医療教育学会学術大会, 愛媛, 2024.11.

岩下恵子, 鈴木啓司, 香崎正宙, 恵谷玲央, 甲斐倫明, 小嶋光明: 放射線照射ヘアレスマウスの皮膚炎における表皮免疫細胞のダイナミクス. 日本放射線影響学会第 67 回大会, 北九州, 2024.9.

松尾美佳, 梅野貴恵, 杉本圭以子: 産後の母親の産後ケア事業利用に対する認識と利用上の困難に関する研究. 第 19 回大分県母性衛生学会, 大分, 2024.11.

恵谷玲央, 小嶋光明, 甲斐倫明: マウス頭部への X 線繰り返し低照射が非照射部位の造血幹細胞の *Sfp1* 遺伝子に与える影響. 日本放射線影響学会第 67 回大会, 福岡, 2024.9.

小野孝二, 藤淵俊王, 横山須美, 赤羽恵一, 松原孝祐, 川浦稚代, 長谷川隆幸, 恵谷玲央, 張維珊, 勝沼泰, 山本和幸, 福永正明, 明神大也, 西岡祐一: 医療被ばく国民線量評価委員会の活動報告. 第 5 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会, 大阪, 2024.12.

岡田悠希, 松内直輝, 兵頭昌, 首藤信通: 2-step 単調欠測データに基づく判別分析における一部の变量に対する冗長性仮説検定. 2024 年度統計関連学会連合大会, 東京, 2024.9.

小嶋光明: 放射線誘発急性骨髄性白血病の発症機構を骨髄の組織反応から考える. 第 61 回放射線影響懇話会, 長崎, 2024.8.

小嶋光明, 伊藤敦, 宇佐美徳子, 大原麻希, 鈴木啓司, 甲斐倫明: X 線マイクロビームを用いた放射線の局所照射による細胞集団の応答～内部被ばくによる生物影響を考えるための基礎研究～. 日本放射線影響学会第 67 回大会, 北九州, 2024.9.

小嶋光明, 安藤奈緒, 恵谷玲央, 甲斐倫明: 単純 X 線撮影を繰り返し行ったヒト正常細胞における DNA 損傷の蓄積性の検証. 第 5 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会, 大阪, 2024.12.

花宮大輔, 小嶋光明, 恵谷玲央: 毛髪を用いた生物学的線量評価の可能性の探索-X 線照射した毛乳頭細胞における DNA 損傷・応答の解析-. 第 5 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会, 大阪, 2024.12.

北島貴弘, 小嶋光明, 品川佳満, 甲斐倫明: NaI(Tl)スペクトロメータを使用した小児甲状腺スクリーニングの性能評価-PHTIS コードによる解析-. 第 5 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会, 大阪, 2024.12.

小野治子, 岸恵美子, 臺有桂, 岡田悠希, 川崎涼子, 加藤典子, 佐伯和子, 村嶋幸代: 保健師教育課程からみた自治体保健師としての就業状況と就業以降-保健師教育機関教員調査の結果から-(第 1 報). 第 13 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 名古屋, 2025.1.

臺有桂, 岸恵美子, 小野治子, 岡田悠希, 川崎涼子, 加藤典子, 佐伯和子, 村嶋幸代: 保健師教育課程からみた自治体保健師としての就業状況と就業以降-保健師教育機関教員調査の結果から-(第 2 報). 第 13 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 名古屋, 2025.1.

鈴木由美, 小野治子, 川南公代: 自殺未遂者支援を行う看護職の思いとサポート体制に関する文献レビュー. 第 13 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 名古屋, 2025.1.

川口こゆき, 小野治子, 藤本優子: 通いの場をサポートする住民の役割の実態と活動満足感との関連. 第 69 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2025.3.

荒木将晴, 小野美喜, 甲斐博美, 中釜英里佳, 堀裕子: 看護実践を拡大した看護師の道徳的苦悩 特定行為に係る看護師の自由記述の質的分析より. 日本看護倫理学会年次大会, 東京, 2024.6.

荒木将晴, 小野美喜, 甲斐博美: 特定行為実践において診療看護師 (NP) が経験する倫理的問題の傾向. 第 10 回日本 NP 学会学術集会, 東京, 2024.11.

齋藤友子, 影山隆之: 保育従事者の精神健康と職業性ストレス, コーピング特性及び SOC との関連. 日本精神衛生学会第 40 回大会, 八王子, 2024.

森口泉, 影山隆之: 自殺念慮を有する人がインターネット検索で得られる情報の検討: 防御因子か促進因子か?. 第 49 回日本自殺予防学会, さいたま, 2024.

岡本文恵, 影山隆之, 小林敏生: 日勤ホワイトカラー労働者の睡眠と生活習慣、職場要因、家庭要因との関連の男女別分析. 第 97 回日本産業衛生学会, 広島, 2024.

名越究, 麻生保子, 加藤典子, 片岡穰, 富尾淳, 藤田利枝, 堀口逸子, 藤井仁, 町田宗仁, 松林恵介, 谷口かおり, 松本伸哉: 健康危機管理における自治体・関係部局・関係機関との連携構築のための全国アンケート. 第 83 回日本公衆衛生学会総会, 札幌, 2024.10.

石橋みゆき, 田中幸子, 佐藤紀子, 雨宮有子, 細谷紀子, 小山田恭子, 池田真理, 西垣昌和, 加藤典子, 野村陽子: 看護基礎教育における政策教育プログラム導入ガイドの開発・A 大学における政策教育コンピテンシーの活用例. 第 44 回日本看護科学学会学術集会, 熊本, 2024.12.

川南公代, 小野治子, 藤本優子, 妻木美香, 佐藤愛, 加藤典子, 麻原きよみ: A 県内における自治体保健師の標準的なキャリアラダーを活用したキャリアレベルの実態. 第 42 回大分県地域保健学会 第 70 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2025.3.

田中笑子, 橋本結花, 廣瀬絢加, 渡邊千秋, 佐藤睦子, 遠山寛子, 川南公代, 上木隆人, 矢澤正人, 石川貴美子, 尾島俊之, 平野かよ子, 中板育美: 保健師による地域組織活動の実態 継続的保健師アンケート調査からの考察. 第 83 回日本公衆衛生学会, 札幌, 2024.10.

内田三恵, 草野淳子, 藤内美保: 地域医療に従事する医師が在宅領域で働く診療看護師 (NP) に抱く認識や期待. 第 10 回日本 NP 学会学術集会, 東京 2024.11.

後藤愛, 島田珠美, 遠山明子, 内田三恵, 武知由佳子, 草野淳子 (座長): シンポジウム医療的ケア児
その人らしい生活を送るために生涯を見据えた成人移行支援. 第 10 回日本 NP 学会学術集会, 東京,
2024.11.24.

上吉原良実, 来生奈巳子, 今野美紀, 近藤美和子, 西田みゆき, 伊藤久美, 上原章江, 泊祐子, 草野淳子,
菅原淳, 野村智美: テーマセッション (災害対策委員会) 令和 6 年能登半島地震における厚生労働省
DMAT 事務局の活動と本学会災害対策委員会の活動報告-学会が担うべき災害発生直後・急性
期・中長期の対応-. 日本小児看護学会第 34 回学術集会, 大阪, 2024.7.7.

草野淳子: 訪問看護における医療的ケア児の口腔ケアに関するアセスメントと実施の認識 (2) - 自由記述から - . 日本小児看護学会第 34 回学術集会, 大阪, 2024.7.6.

草野淳子: 訪問看護における医療的ケア児の口腔ケアに関するアセスメントと実施の認識 (1) - 量的研究から - . 日本小児看護学会第 34 回学術集会, 大阪, 2024.7.6.

草野淳子, 井原健二, 出口響: NICU から在宅に移行する医療的ケア児の家族へ看護師が行う看護の
現状 (2) - 自由記述から - . 第 71 回日本小児保健協会学術集会, 札幌, 2024.6.22.

草野淳子, 井原健二, 出口響: NICU から在宅に移行する医療的ケア児の家族へ看護師が行う看護の
現状 (1) - 量的研究から - . 第 71 回日本小児保健協会学術集会, 札幌, 2024.6.22.

後藤成人, 影山隆之: 自殺対策におけるゲートキーパー養成研修の効果と一年後までの持続性について. 日本精神衛生学会第 40 回大会, 東京. 2024.12.

定金香里, 牧輝弥, 吉田成一, 市瀬孝道: 能登および丹波地方上空で採取されたクラドスポリウム属
による肺アレルギー誘発能の比較. 第 65 回大気環境学会年会, 横浜, 2024. 9.

定金香里, 市瀬孝道, 吉田成一: フラボノイドの抗アレルギー作用に対するショ糖添加の影響. 第 95
回日本衛生学会学術総会, 埼玉, 2025. 3.

衛藤茉緒, 佐藤愛: 地域在住高齢者のオーラルフレイル判定方法に関する文献検討. 第 69 回大分県
公衆衛生学会, 大分, 2025.3.

品川佳満, 橋本勇人: 看護師・看護学生のための情報倫理学習支援サイトの構築. 第 25 回日本医療
情報学会看護学術大会, 東京, 2024.8.

原汐里, 篠原彩: 日本で働くベトナム人女性外国人労働者の月経と月経セルフケアの実態. 第 8 回日本
国際看護学会学術集会, 大分, 2024.10.5-6.

篠原彩, 荒木章裕, 影山隆之, 福田広美: 看護学生による予防的家庭訪問実習 (第 10 報): 本実習に対する地域住民の認識. 第 83 回日本公衆衛生学会総会, 北海道, 2024.10.29-31.

Shinohara, A., Shinagawa, Y., Kuwano, N.: Factors Influencing Intercultural Sensitivity of Supervisors of Female Migrant Workers in Japan. EAFONS, South Korea, 2024.2.13-14.

秦さと子, 園田芽依: デジタル機器使用習慣と嚥下機能との関連. 第 12 回看護理工学会学術集会, 石川, 2024.11.

田中佳子, 秦さと子: 末梢動脈血管音と心周期との関連. 第 12 回看護理工学会学術集会, 石川, 2024.11.

西田欣広, 坪内優太, 矢野博之, 濱中良志: β -secretase 欠損マウスに観察されるオキシトシンの分泌異常と発育・ネグレクト行動に与える影響の解析. 第 47 回日本分子生物学会年会, 福岡, 2024.11.

高橋兼人, 坪内優太, 阿部徹太郎, 迫教晃, 宮崎正志: 思春期特発性側彎症患者における脊椎の形態的变化が歩行特性に与える影響: 小型慣性センサーを用いた検討. 第 58 回日本側彎症学会学術集会, 福岡, 2024.11.

坪内優太, 片岡高志, 高瀬良太, 大津健史, 片岡晶志, 津村弘, 加来信広: ベルト電極式骨格筋電気刺激(B-SES)が骨・軟骨下骨の微細構造および骨強度に与える影響. 第 39 回日本整形外科学会基礎学術集会. 東京, 2024.10.

片岡晶志, 児玉浩志, 高瀬良太, 片岡高志, 坪内優太, 大津健史, 加来信広: 骨粗鬆症に対する天然型ビタミン D 含有キクラゲ粉末の予防効果の検討. 第 39 回日本整形外科学会基礎学術集会, 東京, 2024.10.

阿部徹太郎, 宮崎正志, 迫教晃, 坪内優太, 加来信広: 低用量 BMP との併用における abaloparatide の最適な投与間隔 - ラット脊椎後側方固定モデルを用いた検討 -. 第 39 回日本整形外科学会基礎学術集会, 東京, 2024.10.

片岡高志, 坪内優太, 高瀬良太, 岩崎達也, 片岡晶志, 加来信広: Bisphosphonate 製剤の高用量投与による骨微細構造および骨強度の短期的変化. 第 26 回日本骨粗鬆症学会, 金沢, 2024.10.

片岡高志, 坪内優太, 久保田悠太, 岩崎達也, 片岡晶志, 加来信広: 大腿骨転子部に病巣を呈した転移性骨腫瘍患者に対する有限要素法を用いた骨折リスクの算出. 第 12 回日本運動器理学療法学会学術大会, 横浜, 2024.9.

高瀬良太, 坪内優太, 大津健史, 片岡高志, 岩崎達也, 片岡晶志, 加来信広: 充分量ビタミン D 経口摂取下での活性型ビタミン D 投与が骨微細構造と強度に与える影響. 第 10 回日本栄養・嚥下理学療法学会学術大会, 福岡, 2024.7.

片岡高志, 坪内優太, 高瀬良太, 岩崎達也, 片岡晶志, 加来信広: ラット骨粗鬆症モデルに対する乳塩基性蛋白質と骨吸収抑制剤の併用が骨微細構造および骨強度に与える影響. 第 10 回日本栄養・嚥下理学療法学会学術大会, 福岡, 2024.7.

自見美菜, 高瀬良太, 坪内優太: 多系統萎縮症症例に対し共有意思決定に基づく関わりにより意思伝達装置導入に至った一例. 九州作業療法学会 2024 in 大分, 大分, 2024.6.

徳丸由布子, 林猪都子, 永松いずみ: 夫婦における男性育休の認知度および取得に関する意識と実態. 第 65 回日本母性衛生学会学術集会, 宮崎, 2024.10.

永松いずみ, 林猪都子, 徳丸由布子: 産褥 1 か月時の父親（パートナー）の産後パパ育休の取得に対する思いに関する研究. 第 65 回日本母性衛生学会学術集会, 宮崎, 2024.10.

小深田晴香, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: 震災時に避難生活をする妊産褥婦への看護に関する文献研究. 第 65 回日本母性衛生学会学術集会, 宮崎, 2024.10.

樋口幸, 大貝和裕: 新生児期の腸内細菌叢の変化とおむつ皮膚炎発症との関連. 第 12 回看護理工学会学術集会, 石川, 2024.11.

佐伯真優, 樋口幸: 微酸性電解水を用いた新たな哺乳瓶の洗浄・消毒効果の検証. 第 12 回看護理工学会学術集会, 石川, 2024.11.

佐藤未来, 樋口幸: 乳幼児用スキンケア製品の特徴量可視化の試み. 第 12 回看護理工学会学術集会, 石川, 2024.11.

米澤かおり, 樋口幸: 日本の二地点における新生児の顔の皮膚トラブル症状と皮膚サイトカインの関連. 第 12 回看護理工学会学術集会, 石川, 2024.11.

伊藤佳乃, 姫野綾: 母乳育児自己効力感尺度を用いた母乳育児支援に関する文献研究. 第 65 回日本母性衛生学会学術集会, 宮崎, 2024.10.

Himeno, Y., Kagawa, Y.: Care and Challenges for Separated Caregivers by Home-Visit Nurses in Japan. International Conference on Optical Technologies for Healthcare and Wellness Applications, Italy, 2024.10.

都筑千景, 藪本初音, 藤本優子, 渡井いずみ, 高部さやか, 尾崎伊都子, 津下一代: 地域・職域連携推進体制の現状と課題(第 1 報)～政策の位置づけとの関連～. 第 83 回日本公衆衛生学会総会, 北海道, 2024.10.

藪本初音, 都筑千景, 藤本優子, 渡井いずみ, 高部さやか, 尾崎伊都子, 津下一代: 地域・職域連携推進体制の現状と課題(第 2 報)～自治体種別ごとの特徴～. 第 83 回日本公衆衛生学会総会, 北海道, 2024.10.

高部さやか, 渡井いずみ, 尾崎伊都子, 都筑千景, 藤本優子, 藪本初音, 津下一代: 地域・職域連携推進に向けた方策の検討(第 1 報)～ICT 活用項目の導入状況～. 第 83 回日本公衆衛生学会総会, 北海道, 2024.10.

尾崎伊都子, 渡井いずみ, 高部さやか, 都筑千景, 藤本優子, 藪本初音, 津下一代: 地域・職域連携推進に向けた方策の検討(第 2 報)～ICT 活用チェックリストの作成～. 第 83 回日本公衆衛生学会総会, 北海道, 2024.10.

渡井いずみ, 尾崎伊都子, 高部さやか, 都筑千景, 藤本優子, 藪本初音, 津下一代: 地域・職域連携推進に向けた方策の検討(第 3 報)～協会けんぽの連携事業への関わり～. 第 83 回日本公衆衛生学会総会, 北海道, 2024.10.

岡部真衣, 藤本優子: 抱児を持つ親の災害への備えの実態と防災意識との関連. 第 69 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2025.3.

豊田歩果, 藤本優子, 小野治子: 妊婦歯科健康診査受診がその後の母親と 3 歳児の口腔内状態・歯科保健行動に及ぼす影響. 第 69 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2025.3.

堀裕子, 小野美喜, 中釜英里佳: 向老期女性の認知症イメージに対する認識と認知症予防行動. 第 18 回日本性差医学・医療学会学術集会, 熊本, 2025.1.

宮内信治, 小西恵美子, 高橋梢子, 蔡小瑛, 廣瀬理絵, 小野美喜, 山下早苗, 前田樹海: 実習中の暴力に対する看護学生の対応例: イラン、中国、日本. 日本看護倫理学会第 17 回年次大会, 東京, 2024.6.

森加苗愛：糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の評価－集団指導への参加者によるインタビュー調査から－. 第 43 回日本性科学会学術集会, 札幌, 2024.9.

矢野亜紀子, 荒木章裕, 姫野雄太, 福田広美：吃音のある看護師の職業的アイデンティティ発達プロセス－キャリア成熟期を迎えた看護師の語りをもとにした事例研究. TEA と質的探求学会第 3 回大会, 東京. 2024.5.

佐々木菜摘, 矢野亜紀子, 荒木章裕, 福田広美：病棟看護師のチームワークと職務満足に関連 病床規模に注目して. 第 55 回日本看護学会学術集会, 熊本, 2024.9.

安井美鈴, 丸岡美穂, 松本正美, 鈴木織江, 矢野亜紀子：オンラインによる女性吃音当事者を対象とした定期ミーティングの意義と課題. 日本吃音・流暢性障害学会第 12 回大会, 岡山, 2024.9.

吉田成一：加加熱式たばこ気化蒸気中に含まれるグリセロール／プロピレングリコール曝露により生じる雄性生殖機能への影響. 日本アンドロロジー学会第 43 回学術大会, 東京, 2024.6.

吉田成一：加熱式たばこ気化蒸気中に含まれるグリセロール／プロピレングリコールの妊娠期曝露が胎児雄性マウスに与える影響. 第 69 回日本生殖医学会学術講演会, 愛知, 2024.11.

7-8 開発・特許等

本年度実績なし

7-9 受賞

内村二三代, 麻原きよみ

第 13 回日本公衆衛生看護学会学術集会 最優秀演題賞, 2025.1.

石田佳代子

第 10 回(2023 年)日本職業・災害医学会 奨励賞

恵谷玲央

日本保健物理学会 2023 年度学会賞（論文賞）, 2024.7.

篠原彩, 影山隆之, 荒木章裕, 福田広美, 品川佳満, 堀裕子, 永松いずみ, 佐藤愛, 木嶋彩乃, 村嶋幸代

日本老年社会科学会 2024 年度論文賞

秦さと子, 園田芽依

第 12 回看護理工学会学術集会優秀演題賞, 2024.11.

森楓, 樋口幸, 小嶋光明

2024 年日本母性衛生学会 学術論文優秀賞, 2024.10.

樋口幸, 大貝和裕

看護理工学会 第 12 回学術集会 優秀演題賞, 2024.11.

8 社会貢献

8-1 講演等

麻原きよみ

これからの保健師活動において、変えていくこと、大事にすること～大分県保健師等に期待すること～. 大分県市町村保健活動研究協議会, 大分県市町村保健活動研究協議会, 大分, 2024.6.

感性をみがく人材育成. 全国保健師教育機関協議会九州ブロック研修会, 全国保健師教育機関協議会, 大分, 2024.9.

地域特性を踏まえた保健活動の推進のための取り組み. 第2回地域保健活動研修会, 長岡市福祉保健部健康増進課, オンライン, 2024.9.

保健師が行う地域づくりとは. 長岡市研修, 長岡市福祉保健部健康増進課, オンライン, 2024.9.

感性をみがく人材育成～ヘルスヒューマニティーズを基盤として～. 令和6年度保健師長会専任職研修, 横浜市戸塚区役所福祉保健課, 横浜, 2024.11.

感性をみがく～ヘルスヒューマニティーズと看護実践～. 第47回大分県看護研究学会, 公益社団法人大分県看護協会, 大分, 2024.11.

感性をみがく人材育成. 令和6年度宮崎県保健師の力育成事業に係るキャリアアップ保健師研修, 宮崎県立看護大学, 宮崎, 2024.12.

感性をみがく～よりよい保健師活動のために～. 令和6年度全国保健師長会福岡県支部講演会, 全国保健師長会福岡県支部, 福岡, 2024.12.

足立綾

大分県教育委員会 令和6年度第2,3回医療的ケア研修. 大分, 2024.7.

実習指導の意義・カンファレンスの役割. 保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分, 2024.7.

実習指導案作成演習. 保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分, 2024.9.

石田佳代子

看護過程. 令和6年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会. 大分, 2024.6

確実に身につくフィジカルアセスメント ～呼吸・循環編～. 令和6年度大分県看護協会研修会. 大分, 2024.7

石丸智子

指導案作成演習. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分, 2024.9.

梅野貴恵

助産師教育課程, 母性看護学. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分, 2023.7.

小嶋光明

久留米大学認定看護師教教育「放射線療法における放射線防護と安全管理」. 久留米大学認定看護師教育センター, 大分, 2024.11.

小野治子

養護概説. 大分県教育委員会免許認定講習, 大分県教育委員会, 大分, 2023.7.

小野美喜

看護専門職論 看護実践における倫理. 令和 6 年度大分県看護協会認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修, 大分, 2024.8.

実習指導計画・指導案作成の実際. 令和 6 年度大分県看護協会 実習指導者講習会, 大分, 2024.8.
ナースプラクティショナー（仮称）制度創設に向けた三団体の取り組み. 日本 NP 学会学術集会, 東京, 2024.11.

実践者/教育者から見た社会課題と APN の未来; 診療看護師. 日本看護系学会協議会主催シンポジウム, Webinar, 2025.2.

診療看護師の現状と課題 日本 NP 教育大学院協議会の取り組み. 日本看護協会主催令和 6 年度 NP 教育課程修了者との交流会, 2025.3.

影山隆之

職場のメンタルヘルス. 大分県自治人材育成センターマネジメント研修, 大分, 2024.5.

メンタルヘルス不調者への相談員の対応. 大分県警察本部メンタルヘルス相談員研修会, 大分, 2024.5

メンタルヘルス:管理監督者が知っておきたいこと. 大分県自治人材育成センター新任課長級研修, 大分, 2024.6.

睡眠と健康管理. 大分産業保健総合支援センター産業医研修, 大分, 2024.7.

精神保健論. 大分県教育委員会免許法認定講習, 大分, 2024.7

わがまち、わがこととしての自殺予防. 中津市自殺予防ゲートキーパー研修. 中津, 2023.8.

わがまち、わがこととしての自殺予防. 豊後大野市自殺予防ゲートキーパー研修. 豊後大野, 2023.8.

広域災害時のストレスに対する警察職員の備え. 警察庁惨事ストレス対策研修会（九州管区）, 福岡, 2024.10.

睡眠と健康一質の良い睡眠のとり方. 九重町ふるさと祭り 2024 睡眠セミナー. 2024.10.

子どもの自傷行為・自殺予防のための理解と対応. 令和 6 年度第 2 回大分小中学校生徒指導連絡会. 大分, 2024.10.

自死を未然に防ぐために:だれもがゲートキーパー. 令和 6 年度大分県職員こころの健康講座, 竹田, 2024.12.

高齢者の心の変化のアセスメント～寄り添い方に迷う事例をどう理解するか. 由布市介護予防ケアマネジメント研修会, 由布, 2024.12.

自死を未然に防ぐために：だれもがゲートキーパー．令和 6 年度大分県職員こころの健康講座，中津，2024.12.

自死を未然に防ぐために：だれもがゲートキーパー．令和 6 年度大分県職員こころの健康講座，中津，2024.12.

自死を未然に防ぐために：だれもがゲートキーパー．令和 6 年度大分県職員こころの健康講座，竹田，2024.12.

希死念慮や自殺企図のある子どもの理解と支援．令和 6 年度第 8 回スクールソーシャルワーカー研修，大分，2025.1.

自死を未然に防ぐために：だれもがゲートキーパー．令和 6 年度大分県職員こころの健康講座，日田，2025.1.

自死を未然に防ぐために：だれもがゲートキーパー．令和 6 年度大分県職員こころの健康講座，佐伯，2025.1.

自死を未然に防ぐために：だれもがゲートキーパー．令和 6 年度大分県職員こころの健康講座，日出町，2025.1.

睡眠と健康について：豊かな人生のために．令和 6 年度大分県シルバー人材センター連合会安全衛生研修会，由布，2025.2.

惨事ストレス対策について．大分県警察本部惨事ストレスケアセミナー，大分市，2025.2.

心地良い眠りのためのヒントと工夫．由布市中心の健康づくり講演会，由布，2025.2.

加藤典子

保健師教育課程・在宅・公衆衛生看護学．大分県実習指導者講習会，大分，2024.6.

保健師に求められる公衆衛生看護管理と人材育成．保健師管理者能力育成研修，大分，2024.10.

川南公代

中堅期保健師に求められる公衆衛生看護管理．令和 6 年度大分県中堅保健師研修会，大分，2024.8.

草野淳子

大分県看護協会実習指導者講習会（小児看護学実習）講義．2024.8.

大分県教育委員会主催令和 6 年度第 2 回（教員対象）医療的ケア研修会．2024.7.

大分県教育委員会主催令和 6 年度第 3 回（教員対象）医療的ケア研修会．2024.7.

大分県教育委員会主催令和 6 年度第 1 回（看護師対象）医療的ケア研修会．2024.4

大分県教育委員会主催令和 6 年度第 2 回（看護師対象）医療的ケア研修会．2024.8.

大分県立盲学校医療的ケア講習会講師．2024.12.

後藤成人

ギャンブル依存症セミナー．NPO 法人全国ギャンブル依存症家族の会，大分．2025. 3.

定金香里

初年次地域キャリアデザインワークショップ. 大分大学地域連携プラットフォーム推進事業, 大分, 2024. 6.

品川佳満

やってみよう看護研究 2 量的研究と分析. 大分県看護協会教育研修, 大分, 2024.6.

秦さと子

基礎看護学における実習指導. 2024 年度保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分, 2024.8.
看護教育場面の DX/ICT の活用について. 令和 6 年度看護基礎教育研修会, 大分, 2024.10.

杉本圭以子

やってみよう看護研究 1 テーマの絞り方から研究開始まで. 大分県看護協会教育研修, 大分, 2024.5.
やってみよう看護研究 4 看護研究のまとめ方とプレゼンテーション. 大分県看護協会教育研修, 大分, 2024.8.
精神看護学における実習指導. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会教育研修, 大分, 2024.7.

関根剛

対話の基本. 大分県警察学校安全相談・被害者支援専科教養, 大分, 2024.5.
能登地震派遣熊本県菊陽町職員メンタルサポート. 地方公務員安全衛生推進協会、熊本県菊陽町, 2024.5.
健康推進に活かすコミュニケーションの力. 大分市保健所地域健康推進員研修会, 大分, 2024.5.
職場のメンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター 新任係長級研修, 大分, 2024.5.
チーム力を向上させるコミュニケーション. 大分県教育センターフォローアップ研修, 大分, 2024.6.
犯罪被害者支援とは何か. 紀ノ国被害者支援センター養成講座, 和歌山, 2024.6.
人材管理 I (看護チームのマネジメント). 大分県看護協会ファーストレベル研修, 大分, 2024.6.
信頼関係を築くコミュニケーション. 栄養教諭, 大分, 2024.7.
住民だからこそできる自殺予防. 大分市保健所ゲートキーパー研修会, 大分, 2024.7.
青年期のメンタルヘルスとコミュニケーション. 大分工業高等専門学校特別活動, 大分, 2024.7.
CRT 活動各論ケア班の任務とポイント. こころとからだの相談センターCRT 研修会, 大分, 2024.7.
ストレスマネジメント. 大分県高齢者総合相談センター相談業務担当職員研修会 カウンセリングの理論(1). 大分いのちの電話電話相談員養成講座, 大分, 2024.7.
相談技術 被害者に寄り添う. かがわ被害者支援センターボランティア相談員養成講座, 高松, 2024.7.

被害者支援センターが対応すべき（可能な）心理的援助. かがわ被害者支援センター相談員継続研修会, 高松, 2024.7.

電話内容に応じた対応方法. 大分いのちの電話継続研修会, 大分, 2024.8.

性犯罪被害者の心理と支援: 支援者の二次受傷・惨事ストレス対策. 大分県警察学校性犯罪捜査専科, 大分, 2024.8.

自殺予防のために地域だからできることー自殺のサインと対応ー. 臼杵市自殺予防ゲートキーパー研修会, オンライン, 2024.9.

犯罪被害者の心理とその支援ー支援者の二次受傷・惨事ストレス対策. 被害者サポートセンターおかやま被害者支援員養成講座, 岡山, 2024.9.

ロールプレイ・聴くということ. チャイルドライン大分受け手養成講座, 大分市, 2024.9.

自殺予防のために地域だからできることー自殺のサインと対応ー. 臼杵市自殺予防ゲートキーパー研修会, 臼杵, 2024.10.

メンタルサポート支援. 消防庁緊急時メンタルサポートチーム, 八代市, 2024.10.

思春期の子どもとのかかわり方〜声のかけ方・誉め言葉のかけ方〜. 大分市立西中学校 PTA, 大分, 2024.11.

こころ相談（自殺関連）の連携を推進するために. 大分県中部保健所精神相談担当者研修会, 臼杵, 2024.12.

スーパービジョン. チャイルドライン大分相談員研修会, 大分, 2025.1.

自殺予防のために地域だからできること. 臼杵市自殺予防ゲートキーパー研修会, 臼杵, 2025.2

人材育成ー育成される側から育成する側へ. NNVS 中四国ブロック研修会, 徳島, 2025.2.

人材育成ー助言・指導のあり方. NNVS 九州沖縄ブロック研修会, 大分, 2025.2.

惨事ストレス. 大分県消防学校専科教育, 由布, 2025.3.

坪内優太

私の研究の裏側 | Question 構築から情報収集、評価項目・統計手法の選定、結果の臨床応用まで「基礎研究」. XPERT 公式セミナー, オンライン, 2024.10.

藤内美保

新人看護師公開研修 看護に必要なフィジカルアセスメントを確認しよう. 大分赤十字病院, 大分, 2024.9.

実習指導者講習会 大学の教育課程. 大分県看護協会, 大分, 2024.6.

実習指導者講習会 実習指導計画・指導案. 大分県看護協会, 大分, 2024.8.

確実に身に付くフィジカルアセスメント. 大分県看護協会, 大分, 2024.

フィジカルアセスメント呼吸・循環・消化器. 別府医師会看護職研修会, 大分, 2024.10.

質的研究へのチャレンジ. 西部地区看護研究会, 日田, 2025.2.

学会研究発表講評. 豊肥地域看護研究会, 豊後大野, 2024.9.

姫野雄太

日精看大分県支部 第4回支部研修会. 大分, 2024.9.

日本手術看護学会 2024年度手術看護実践指導看護師フォローアップ研修. オンライン, 2025.1.

福田広美

大分県看護協会令和6年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル 組織管理論. 大分, 2024.8.

大分県看護協会令和6年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル 統合演習. 大分, 2024.9.

藤本優子

第1回大分県東部保健所管内新任期人材育成保健師研修会講師. 2024.8.

第2回大分県東部保健所管内新任期人材育成保健師研修会講師. 2024.12.

第3回大分県東部保健所管内新任期人材育成保健師研修会講師. 2025.2.

森加苗愛

事例研究入門セミナー 看護を語り合い、事例研究につながるエッセンスをみつけましょう！～実践事例から研究のいろはを紐解いてみましょう～. 一般社団法人日本糖尿病教育・看護学会, 2024.7.

看護職を目指す高校生への看護師の理解を深める. 臼杵高校, 2024.7.

やってみよう看護研究3 質的研究と分析. 大分県看護協会, 2024.8.

外来における在宅療養支援能力向上のための研修. 大分県看護協会, 2024.10.

看護研究支援. 飯塚病院

吉村匠平

構成的エンカウンターグループを用いたコミュニケーション演習. 大分医師会立アルメイダ病院新入職員研修, 大分, 2024.6.

勇気づけのコミュニケーション. 大分医師会立アルメイダ病院プリセプター研修, 大分, 2024.7.

大分県教員育成ガイダンス. 大分県立大分国東高校、大分舞鶴高校、竹田高校、臼杵高校、高田高校、大分豊府高校、大分南高校, 2024.10.

愛着障害の理解. 玖珠九重地区養護教諭部会研修講師, 大分, 2024.11.

Sleep well live well. 令和6年度安全運転管理者講習, 大分, 2024.7,11,12.

ゲートキーパー養成講座 研修講師. 大分, 2025.1.

8-2 非常勤講師

麻原きよみ

国際医療福祉大学大学院 公衆衛生看護学原論
東京医科歯科大学学部 看護倫理
東京医科歯科大学大学院 看護倫理
東京大学大学院 行政看護学
富山県立大学 環境保健論
聖路加国際大学大学院 公共哲学・保健医療福祉システム特論

稲垣敦

大分医学技術専門学校 運動学

梅野貴恵

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

恵谷玲央

久留米大学認定看護教育課程がん放射線療法看護分野 放射線療法における放射線の安全な取り扱い

小嶋光明

久留米大学認定看護教育センター

影山隆之

別府大学文学部人間関係学科 精神保健の課題と方法Ⅰ,Ⅱ
別府市医師会看護専門学校 精神看護学概論、精神看護の方法Ⅰ

加藤典子

聖隷クリストファー大学 看護政策論
東北大学大学院医学系研究科 公衆衛生看護学活動論Ⅱ 国レベルの公衆衛生看護活動
群馬大学大学院 看護政策論

古賀雄二

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 高度実践研究者養成プログラム専門看護師課程
せん妄患者のアセスメントと看護
亀田医療大学大学院クリティカルケア CNS コース せん妄ケア・PICS ケア

後藤成人

中津ファビオラ看護学校 看護研究
中津ファビオラ看護学校 看護師国家試験対策

佐伯圭一郎

別府医師会立別府青山看護学校 情報科学, 情報科学演習
藤華医療技術専門学校 情報科学Ⅱ

定金香里

大分リハビリテーション専門学校 生理学Ⅰ, 生理学Ⅱ, 生理学国試対策補講

品川佳満

別府市医師会立別府青山看護学校 情報科学

関根剛

大分大学医学部医学科 導入Ⅱ
大分大学医学部看護学科 臨床心理学
大分臨床工学技士専門学校 コミュニケーション学
大分医学技術専門学校 心理学

坪内優太

令和健康科学大学リハビリテーション学部理学療法学科 動作分析学

藤内美保

広島大学医学部保健学科 (客員教授)
名桜大学人間健康学部看護学科
中津ファビオラ看護専門学校

濱中良志

大分大学 国際健康コンシェルジュ養成講座
平松学園大分臨床検査技師専門学校 生化学
後藤学園智泉福祉製菓専門学校社会福祉士学科・精神保健福祉士学科 医学一般

樋口幸

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

宮内信治

大分県立芸術文化短期大学 英語Ⅰ

8-3 研究指導

大分県立病院

小嶋光明

荒木章裕

大分赤十字病院

石田佳代子

秦さと子

定金香里

大分医師会立アルメイダ病院

古賀雄二

恵谷玲央

衛藤病院

影山隆之

堀裕子

濱耕子

別府医療センター

吉田成一

樋口幸

大分医療センター

品川佳満

小野治子

8-4 学会役員等

麻原きよみ

一般社団法人日本看護系大学協議会 副代表理事
一般財団法人日本看護学教育評価機構 評議員
一般社団法人日本地域看護学会 理事長・代議員
一般社団法人日本看護倫理学会 理事・代議員
一般社団法人日本公衆衛生看護学会 監事・代議員
公益社団法人日本看護科学学会 代議員
一般社団法人聖路加看護学会 評議員

石田佳代子

大分県看護協会 実習指導者講習会運営委員会 委員長
大分県リハビリテーション協議会 委員
日本看護系大学協議会 災害支援対策委員会 災害連携教員

石丸智子

日本救急看護学会雑誌 専任査読委員

稲垣敦

日本体育測定評価学会 名誉会長
日本スポーツ救護看護学会 顧問

梅野貴恵

日本助産診断実践学会 理事・編集委員
一般社団法人日本助産学会 代議員
大分県母性衛生学会 理事・副会長

恵谷玲央

日本保健物理学会 コミュニケーション委員会 委員
日本放射線影響学会 放射線リスク・防護検討委員会
日本アイソトープ協会 第33期放射線安全取扱部会広報専門委員会 委員
日本保健物理学会 医療被ばく国民線量評価委員会
日本放射線影響学会 論文紹介企画小委員会 委員

小嶋光明

日本放射線影響学会 理事

日本放射線影響学会 放射線リスク・防護検討委員会 委員長

日本保健物理学会 倫理委員会 委員

小野治子

全国保健師教育機関協議会 教育評価準備委員会 委員

小野美喜

日本看護倫理学会 評議員

日本看護倫理学会 課題検討委員

日本 NP 教育大学院協議会 理事

日本 NP 教育大学院協議会 制度検討委員会 委員長

日本 NP 教育大学院協議会 資格更新制度委員会 委員

日本看護協会 ナースプラクティショナー（仮称）制度検討委員会 委員

甲斐博美

日本 NP 学会 理事（～11 月）

日本 NP 学会 学術推進委員（～11 月）

日本 NP 学会 九州地方会 監事（11 月～）

影山隆之

日本精神衛生学会 理事長

日本精神衛生学会 編集委員

日本自殺予防学会 常務理事

日本自殺予防学会 編集委員長

第 47 回日本自殺予防学会総会 大会長

日本学校メンタルヘルス学会 評議員

日本学校メンタルヘルス学会 編集委員

日本産業ストレス学会 評議員

日本産業精神医学会 評議員

日本看護科学学会 編集委員

加藤典子

日本看護系大学協議会 高等教育行政対策委員会 委員

草野淳子

一般社団法人日本小児看護学会 評議員
一般社団法人日本小児看護学会 災害対策委員
一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会 委員
第 44 回日本看護科学学会学術集会 企画（プログラム担当）委員

古賀雄二

日本看護科学学会 和文誌専任査読委員
日本クリティカルケア看護学会 評議員
日本クリティカルケア看護学会 せん妄ケア委員会委員
日本クリティカルケア看護学会 専任査読委員
日本救急看護学会 評議員
日本救急看護学会 専任査読委員
日本看護学会誌 査読委員

後藤成人

一般社団法人日本精神科看護協会 大分県支部 教育委員長

佐伯圭一郎

日本テスト学会 編集委員

定金香里

日本生理学会 評議員
日本大気環境学会 健康影響分科会 幹事
日本大気環境学会 九州支部会 役員

篠原彩

一般社団法人日本国際看護学会 第 8 回学術集会 事務局員
一般社団法人日本国際看護学会 第 8 回学術集会 査読委員

坪内優太

第 10 回日本栄養・嚥下理学療法学会学術大会 準備委員 企画委員
第 30 回日本基礎理学療法学会学術大会 準備委員 広報部長

藤内美保

公益社団法人日本 NP 教育大学院協議会 監事
日本 NP 教育大学院協議会 NP 教育課程審査委員
公益社団法人日本 NP 教育大学院協議会 社員
日本 NP 学会九州地方会 監事
公益社団法人日本看護科学学会 役員
第 44 回日本看護科学学術学会企画委員
公益社団法人日本看護研究学会 評議員
日本看護研究学会 九州・沖縄地方会役員
一般社団法人看護師の特定行為に係る特定研修機関協議会 発起人・世話人
特定行為研修指定研修協議会 学術委員

永松いずみ

第 55 回（2024 年度）日本看護学会学術集会 抄録選考委員

濱耕子

日本看護学教育学会誌 専任査読者
日本助産学会誌 専任査読委員
大分県母性衛生学会 理事

濱中良志

癌・炎症と抗酸化研究会 評議員

樋口幸

看護理工学会 評議員
看護理工学会 将来構想委員会 委員
日本助産学会学会誌 専任査読委員
大分県看護協会 助産師職能委員会 委員

姫野綾

大分県助産師会 教育委員

姫野雄太

千葉看護学会第 31 回学術集会 広報・実行委員長

福田広美

大分県看護協会 令和 6 年度認定看護管理者教育課程運営委員

藤本優子

日本地域看護学会 国際交流推進委員

堀裕子

一般社団法人日本放射線看護学会 編集委員

宮内信治

日本言語音声学会 常任理事

日本英語教育音声学会 常任理事

森加苗愛

一般社団法人日本糖尿病教育・看護学会 理事

一般社団法人日本糖尿病教育・看護学会 評議員

一般社団法人日本糖尿病教育・看護学会 研究推進委員会 委員長

日本慢性看護学会 評議員

日本慢性看護学会 政策委員会委員

大分県看護協会 教育委員

吉田成一

日本アンドロロジー学会 評議員・理事

精子形成・精巣毒性研究会 評議員

大気環境学会健康影響分科会 幹事

大気環境学会 論文賞選考委員

8-5 その他委員等

麻原きよみ

学校法人聖路加国際大学 評議員
千葉大学大学院看護学研究院付属看護実践・教育・研究共創センター運営協議会 委員
大分県都市計画審議会 委員
大分県医療審議会 委員
健康寿命日本一おおいた創造会議 委員
生涯健康県おおいた 21 推進協議会 委員
大分県国民保護協議会 委員
大分県公私立学校教育協議会 委員
大分県石油コンビナート等防災本部員 委員
特定非営利活動法人大学コンソーシアムおおいた 理事
おおいた地域連携プラットフォーム 監事
野津原地域まちづくりビジョンフォローアップ会議 委員

石田佳代子

大分市総合計画基本構想・第 1 次基本計画検討委員会 委員

石丸智子

大分市救急業務検討委員会 委員
大分市救急医療電話相談事業（＃7119）検証委員会 委員

梅野貴恵

日出町子ども子育て会議 委員・会長

小嶋光明

大分大学医学部付属病院臨床研究審査委員会 委員
放射線生物研究編集委員会 委員
放射線影響懇話会 世話人

小野治子

大分市鶴崎駅周辺整備基本構想策定委員会 委員
大分市鶴崎駅前広場整備基本計画策定委員会 委員
大分市建築審査会 委員
大分市風俗関連営業建築物審査会 委員
大分市開発審査会 委員
大分県国民健康保険団体連合会情報公開および個人情報保護審査会 委員

大分県国民健康保険団体連合会介護サービス苦情処理委員会 委員
大分県保健師連絡会 委員

小野美喜

大分市高齢者福祉計画/介護保険事業計画策定委員
大分県立病院 地域医療支援病院運営委員会 委員

甲斐博美

大分県特定行為研修推進連絡会 指定研修機関委員

影山隆之

大分県ギャンブル等依存症対策推進協議会 会長
大分県自殺対策連絡協議会 副会長
大分県精神疾患医療連携協議会 委員
大分県アルコール健康障がい対策推進協議会 委員
大分県公害審査会調停委員会 委員
大分県社会福祉協議会 日常生活自立支援事業契約締結審査会 審査委員
大分市民のこころといのちを守る自殺対策行動計画策定推進検討委員会 会長
別府市自殺対策計画策定推進委員会 委員長
豊後大野市自殺対策連絡協議会 助言者
中津市自殺対策連絡協議会 委員長
第3次健康こころのえ21計画策定委員会 委員長
日出町自殺対策連絡協議会 委員
大分産業保健総合支援センター 産業保健相談員

加藤典子

大分県後期高齢者医療審査会 委員
大分県大分県国民健康保険運営協議会 委員
大分県国保連合会 保健事業支援・評価委員会 委員

川南公代

全国保健師教育機関協議会 九州ブロック 幹事校代表
大分市社会福祉審議会 委員
おおいた地域連携プラットフォーム 地域人材創出部会 地域包括ケアシステム人材育成ワーキンググループ構成員

草野淳子

おおいた医療的ケア児等支援関連施設連絡会 役員
大分県小児保健協会 役員
大分県訪問看護推進協議会 委員
大分県障害児適正就学指導委員会 委員
大分県立特別支援学校第三者評価委員会 委員
九州沖縄小児看護教育研究会 幹事
大分県立看護科学大学 特定行為管理委員会 委員

古賀雄二

大分県看護協会学会委員会 副委員長

後藤成人

九州アルコール看護研究会 委員
大分アディクションフォーラム 実行委員
日本国際看護学会第8回学術集会 実行委員
日本精神衛生学会第40回大会 実行委員

佐伯圭一郎

ホルトホール大分選定委員

定金香里

大分県理科化学教育懇談会 幹事
大分県リサイクル認定製品審査会 委員
大分県公害審査会 委員

佐藤愛

大分県公衆衛生協会 評議員

佐藤栄治

大分県脳卒中懇話会 世話人

品川佳満

大分県情報公開・個人情報保護審査会 委員

篠原彩

令和6年度重層的支援体制構築に向けたスーパーバイズ事業 スーパーバイザー

杉本圭以子

大分地方労働審議会 委員

大分県医療費適正化推進協議会 委員

関根剛

総務省消防局緊急時メンタルサポートチーム・メンバー

大分県 DPAT 運営委員・メンバー

(公社) 全国被害者支援ネットワーク 理事 (九州沖縄ブロック担当)

(公社) 大分被害者支援センター 副理事長

(社福) 大分いのちの電話協会 理事・スーパーバイザー

藤内美保

大分県立看護科学大学特定行為管理委員会責任者

医療法人敬和会大分岡病院特定行為研修管理委員会外部委員

大分岡病院特定行為管理委員会委員

大分県医療費適正化推進協議会委員

中津ファビオラ看護学校学校関係者評価委員会委員

第 44 回日本看護科学学会学術集会シンポジウム「プライマリケアの診療看護師が地域医療ではたす役割～医療資源が限られた地域への新たな戦略～」座長

第 10 回日本 NP 学術集会座長シンポジウム「皆さんが望む最期を叶えるために -ICT を活用した看護師の死亡診断補助を進めていくには-」座長

大分県ナースセンター事業運営委員

中釜英里佳

一般社団法人日本看護学習支援協会 理事

濱耕子

おおいた地域連携プラットフォーム教育プログラム開発部会 FD・SD 事業ワーキンググループ
構成員

第 5 期大分市地域福祉計画・第 6 次地域福祉活動計画策定委員会 委員

樋口幸

大分市産業活性化プラザ産学官連携推進事業検討委員会 委員

おおいた地域連携プラットフォーム地域交流・課題検討部会 産学官成果共有 WG

福田広美

大分県アドバイザー派遣事業推進会議

大分県中小規模病院等看護管理者支援協議会

大分県在宅医療連携協議会

大分県社会福祉審議会

藤本優子

大分市第3期いきいき健康大分市民21及び第4期大分市食育推進計画策定検討委員会 委員

宮内信治

大分市立横瀬小学校 学校評議員

大分県高等学校教育研究会英語部会 顧問

矢野亜紀子

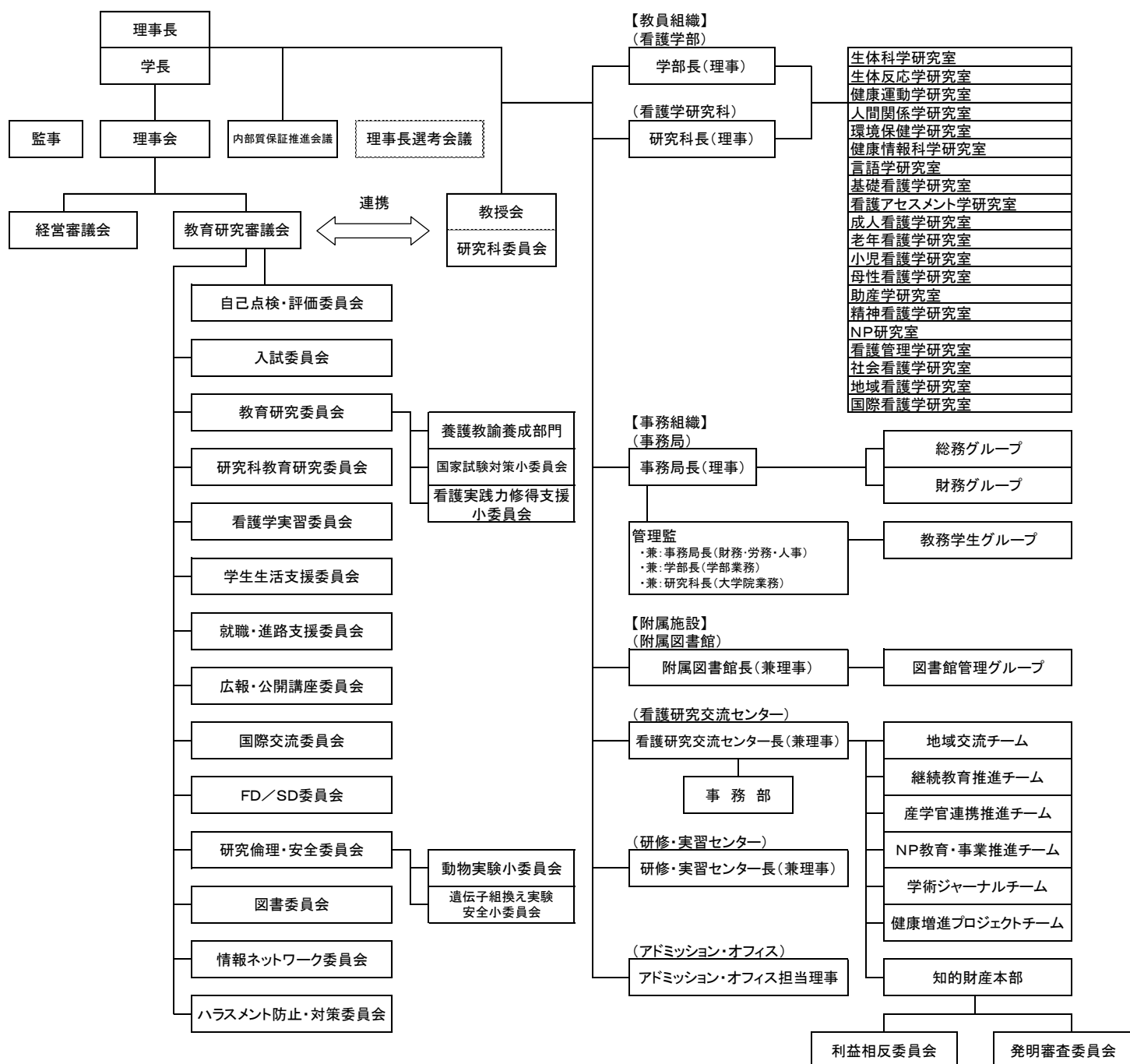
大分県中小規模病院等看護管理者支援事業（西部地域、運営補助）

日本吃音・流暢性障害学会「合理的配慮に関するワーキンググループ」（共同調査）

吃音のある看護師交流会（企画、運営）

9 教学・事務組織

9-1 法人組織図



9-2-1 理事会

理事長 麻原きよみ

学内理事 福田広美、稲垣敦、阿部剛

学外理事 三股浩光、佐藤昌司、渡邊規生

監事 福田安孝、中野洋子

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は新理事長の着任し合計 5 回の理事会を開催した。主な内容は年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規定の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

特記すべき報告および審議事項として、第 1 回は、2024 年度の主な課題と名誉学長について審議を行った。また、令和 6 年度在学生の状況、令和 5 年度卒業生・修了生の進路状況の報告を行った。第 2 回は、令和 5 事業年度における業務の実績及び中期目標期間（平成 30～令和 5 事業年度）における業務の実績に関する報告、令和 5 年度事業年度決算について審議を行った。その他、入試改革、第 4 期中期計画に係る評価指標の進行管理、法人固有職員の業績評価導入、職員の給与の支給等に関する細則の一部改正について報告が行われた。第 3 回は、公立大学法人の年度計画・評価の廃止等に伴う規程の一括改正について審議を行った。また、令和 6 年度大分県地方独立行政法人評価委員会評価結果、第 4 期中期計画目標達成のための令和 6 年度具体策、大学院入学者選抜試験の結果と二次募集、大学院村嶋幸代名誉学長学費支援奨学金給付要項、草間朋子名誉学長ナイチンゲール記章の展示、台風 10 号による被害状況について報告された。第 4 回は、教員の選考結果、教員昇任に関する選考基準の改定、第 4 期中期計画具体策の取組状況、規程等の一部改正、①職員給与規程、②役員報酬規程、期限付雇用職員就業規則、令和 6 年度中間決算、令和 7 年度予算編成方針（案）について審議を行った。その他、学部入学者選抜試験実施状況、令和 7 年度理事会等の開催日案について報告が行われ、15 時からエントランスホールで草間名誉学長のナイチンゲール記章寄贈式を行った。第 5 回は、大分県立看護科学大学人事基本計画の一部改正、教員の採用と昇任、第 4 期中期計画（令和 6 年度達成見込みと令和 7 年度具体策）、規定等の一部改正、令和 7 年度予算・事業計画について審議が行われた。その他、令和 6 年度卒業、修了生の状況や入学者選抜試験の状況について報告が行われた。

大学の円滑な運営のために活発な意見をいただいております、今後も引き続き、外部理事の方々の意見をいただき議論をして決定するよう進める。

9-2-2 内部質保証推進会議

議長 麻原きよみ

構成員 阿部剛（事務局長）、福田広美（学部長）、稲垣敦（研究科長）、佐伯圭一郎（自己点検・評価委員長）、【氏名非公開】（入試委員会委員長）、小野美喜（学生生活支援委員会委員長）、藤内美保（就職・進路支援委員会委員長）、濱耕子（FD/SD 委員会委員長）、川島貴博（総務グループリーダー）、小野逸郎（財務グループリーダー）、角渕直美（教務グループリーダー）

本会議は、当大学の内部質保証に関する総括的な評価を行うことである（大分県立看護科学大学内部質保証推進会議設置要綱第1条）。また、分掌事項は、(1)内部質保証に関する規程第4条第2項、第5項及び第6項に関する自己点検・評価委員会への指示に関すること、(2)内部質保証に関する規程第4条第5項に定める認証評価及び公立大学法人評価において、自己点検・評価委員会が作成した評価原案の承認に関すること、(3)内部質保証に関する規程第4条第6項に定める評価に対する改善及び向上の取組案の承認に関すること、(4)その他内部質保証に関し必要なこと、である（大分県立看護科学大学内部質保証推進会議設置要綱第2条）。

第4期中期計画では、毎年1回の開催を目標としているが、今年度は4回開催した。第1回（6月12日）は、令和5事業年度における業務の実績及び中期目標期間(平成30~令和5事業年度)における業務の実績に関する報告書及び第4期中期計画に係る評価指標の進行管理の方法が承認された。第2回（9月11日）は、第4期中期計画目標達成のための具体策を承認した。第3回（12月11日）は、第4期中期計画具体策の実施状況と第4期中期計画進捗状況表を承認した。第4回（3月13日）では、第4期中期計画及び令和6年度達成見込みと令和7年度の具体策を承認した。

次年度も、第4期中期計画の進捗管理を中心に審議する。

9-2-3 経営審議会

理事長 麻原きよみ

学内理事 福田広美、稲垣敦、阿部剛

学外理事 三股浩光、佐藤昌司、渡邊規生

経営審議会委員 千野博之、吉村充功、佐藤政昭、大戸朋子

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。法人の経営状況について報告し、審議した。

本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規定の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、

組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などについて審議した。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も関係することから経営審議会と同時に開催し、特記すべき報告および審議事項は、理事会と同様の内容である。

運営費交付金が年々減額されていく状況のなかで、外部資金の獲得をさらに推進すること、大学の魅力を発信し優秀な学生の継続的な確保の戦略が必要であり、効果的・効率的な経営に関して継続的に審議する。

9-2-4 教育研究審議会

学長 麻原きよみ

学部長 福田広美

研究科長 稲垣敦

事務局長 阿部剛

委員 犀川哲典（学外委員）、梅野貴恵、小嶋光明、小野美喜、川南公代、加藤典子、影山隆之、草野淳子、桑野紀子、古賀雄二、佐伯圭一郎、秦さと子、藤内美保、濱中良志、濱耕子、宮内信治、吉田成一、吉村匠平

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は11回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、規定等の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規定等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会で報告された。

特記すべき審議事項等として、第1回は、名誉学長の推薦、入試改革タスクグループ（以下、TG）の一次答申を踏まえた学長提案、令和6年度学内競争的研究費審査結果、臨床教授等について検討を行った。また、日本学生支援機構給付型奨学金及び授業料減免の適格認定案について承認された。第2回は、会議方法の見直し・運営方針案、学内競争的研究費採択結果案、大学院生指導教員等について審議が行われ、承認された。第3回は、授業等におけるデジタル化・ペーパーレス化推進の方針案、入試改革TGの二次答申を踏まえた学長提案等について審議が行われ、各提案について承認された。その他、授業料等減免および日本学生支援機構の奨学金推薦者などの案が承認された。その他、非常勤講師、内部質保証推進会議の構成員、令和5事業年度業務実績及び中間目標期間業務実績に関する報告、第4期中期計画に係る評価指標の進捗管理について、学長報告が行われた。第4回は、学部の社会人選抜および私費外国人留学生選抜における入学者選抜方法について審議が行われた。その他、日本学生支援機構の奨学金推薦者案、科研費採択に向けたピアレビュー運用案、博士論文審査委員案について承認された。第5回は、令和6年度大分県地方独立行政法人評価委員会評価結果、第4期中期計画目標達成のための令和6年度具体策について学長報告が行われた。主な審議事項は、教員選考、大学院履修規程の一部改正、大学院村嶋幸代名誉学長学費支援奨学金給付要項、令和6年度授業料減免（学部生・院生）、MVV作成のTG設置、博士後期課程DNPコースの検討に関するTG設置であった。その他、令和6年度目的積立金による教育研究備品等整備要望審査結果、インドネ

シア看護協会関係者の来学、台風 10 号による法面土砂流出について報告が行われた。第 6 回は、教員評価委員会委員、MVV 作成の TG メンバーについて学長報告が行われた。主な審議事項は、教員選考、教員選考規程の一部改正等であった。第 7 回は、大学設置基準の一部改訂に伴う基幹教員について本学における対応を審議し継続議題とした。その他、卒業研究発表優秀賞の選出方法、日本学生支援機構奨学金(二次採用)に係る推薦者等について審議を行い、承認された。その他、令和 6 年大分県人事委員会勧告、台風 10 号による法面工事について報告された。第 8 回は、大学設置基準の一部改訂に伴う基幹教員について本学における対応の審議を行い承認された。その他の主な審議事項は、教員選考、教員承認に関する選考基準の改定、職員休養等の規定の一部改訂、非常勤講師と外部講師の取り扱い申し合わせの改定、令和 6 年度中間決算、令和 7 年度予算編成方針等であった。第 9 回の主な議題は、教員選考、委員会規定の一部改正、授業参観ピアレビュー運用等について審議が行われた。その他、学内競争的研究費に関する審査員、授業料減免、大学院修士論文、博士論文審査委員について審議し、承認された。第 10 回は、教員選考、令和 7 年度委員会構成案、令和 7 年度学部非常勤講師(A)の委嘱等について審議が行われた。その他、令和 5 年度日本学生支援機構大学院第一種奨学金返還免除候補者選考にかかる評価者、大学院特待生授業料免除評価にかかる審査員、大学院授業評価における運用等について検討し承認された。第 11 回は、教員の昇任と人事、基本人事計画の一部改正、DNP コース設置に関する答申と WG 設置、職務発明などにおける保証金に関する細則及び学術相談規程の策定について審議が行われた。さらに、非常勤講師就業規則の一部改正、総務関連規定および大学院関連規定の一部改訂、令和 7 年度委員会構成案、予算案についても審議を行った。その他、令和 6 年度進級判定、学生の休学、長期履修許可および大学院指導教員の変更などについて審議を行った。

以上、令和 6 年度の審議会運営を行った。令和 7 年度は第 4 期中期計画 2 年目となる。大学の教育研究に関する重要事項の審議を行い、目標を達成できるよう取り組みを行う。

9-2-5 教授会

学長 麻原きよみ

学部長 福田広美

事務局長 阿部剛

委員 足立綾、荒木章裕、石田佳代子、石丸智子、稲垣敦、梅野貴恵、恵谷玲央、小嶋光明、小野治子、小野美喜、影山隆之、甲斐博美、川南公代、加藤典子、草野淳子、桑野紀子、古賀雄二、後藤成人、佐伯圭一郎、定金香里、品川佳満、秦さと子、杉本圭子、関根剛、藤内美保、濱中良志、濱耕子、樋口幸、姫野雄太、藤本優子、堀裕子、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は 5 回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定、および学生の表彰に関する事

項について審議・承認した。令和6年度の卒業生は85名、看護師国家試験は合格率99%であった。4年次の学生表彰は、学長賞1名、優秀賞3名、卒業研究発表優秀賞6名、学生賞1名の計11名、2年次生の表彰は2名、3年生の表彰は2名が承認された。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

令和7年度入学生は81名、卒業生は87名を予定している。今後も入学、卒業に関して量的、質的な観点から審議し、今後も優秀な学生の輩出に向けて努力する。

9-2-6 研究科委員会

学長 麻原きよみ

研究科長 稲垣敦

事務局長 阿部剛

委員 足立綾、荒木章裕、石田佳代子、石丸智子、梅野貴恵、恵谷玲央、小嶋光明、小野治子、小野美喜、甲斐博美、影山隆之、加藤典子、草野淳子、桑野紀子、後藤成人、佐伯圭一郎、定金香里、品川佳満、秦さと子、杉本圭以子、関根剛、藤内美保、濱中良志、濱耕子、樋口幸、姫野雄太、福田広美、堀裕子、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

本学大学院看護学研究科は、看護学及び関連領域の理論及び応用の教授研究を通して、より高い専門性を有し、看護の実践、教育及び研究において指導的役割を果たすことのできる人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の進展に寄与することを目指しており（大分県立看護科学大学大学院学則第1条）、当委員会の分掌事項は、(1)学生の入学、卒業及び課程の修了に関する事項、(2)学位の授与に関する事項、(3)学生の表彰及び懲戒に関すること、(4)前3号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項である（大分県立看護科学大学大学院研究科委員会規程第8条）。

本年度も、特別選抜の合否判定（第1回：7月24日）、一般入試の合否判定（第2回：9月5日）、博士論文の合否判定・後期修了判定（第2回：9月5日）、2次募集の合否判定（第3回：12月19日）、修士論文の合否判定・前期修了判定・進学審査の合否判定・博士論文の合否判定・後期修了判定（第4回：2月12日）、前期・後期修了判定（第5回：3月4日）について審議した。この結果、今年度の学位授与者は、修士が28名、博士が4名であった。また、次年度の入学予定者は、博士課程前期が28名（募集人員37名）、博士課程後期が3名（募集人員4名）であった。

今年度の課題として、大学院設置基準に基づいた指導体制の変更があったため、研究科委員会規程を変更し（第11回教育研究審議会：3月13日、第5回理事会・経営審議会：3月19日）、研究指導教員（主・副指導教員）を教授及び准教授と定めた。これに伴い、次年度より研究科委員会のメンバーは、教授及び准教授となる。

次年度は、学長から提案があり、学生の表彰の制度を策定し、運用開始する予定である。

9-3-1 自己点検・評価委員会

委員長 佐伯圭一郎

副委員長 吉田成一

委員 樋口幸、小野治子、山田貴子、川島貴博、吉野美穂、安部翼

自己点検・評価委員会は、本学の教育研究水準の向上を図り、かつ本学の目的及び社会的使命を達成するため、大学の自己点検・自己評価に関すること、内部質保証に関すること、年報の編集・発行に関すること、本学の中期目標・中期計画に関すること、および認証評価その他の第三者評価に関することを分掌している。

2024 年度は第 4 期中期目標・中期計画の初年度として、各委員会等の活動の具体策・評価指標と目標・達成状況の取りまとめを行った。今期より評価指標は極力定量的なものとし、個別の達成率を示した。また、年度中間でも進捗状況を集約することできめ細かな把握を行っている。また一昨年の大学機関別認証評価結果を受けた改善もほぼ達成することができた。他にも、法人情報の公開、年報の作成と公開、議事録等の整備など、例年と同様の活動を実施した。

大学機関別認証評価に関連する研修に 2 名の委員が参加するなど、自己点検・評価のスキルアップを継続しているが、大学評価基準や評価体制の見直しが進行している状況において、今後も情報を収集して受審に備えるとともに、より効率的・効果的な自己点検・評価活動を継続することが課題である。

9-3-2 入試委員会

構成員は非公開としている。

入試委員会は、学部の入学者選抜を分掌し、令和 7 年度入学者選抜の全体及び大学入学共通テストの実施を統括するとともに、入学者選抜の方法及び入試広報について検討した。特に今年度は、入学試験出願者数の増加を目的に設置された入試改革 TG と連携して、入試システムの変更を行い、入試広報の強化を図った。その結果、令和 7 年度入学選抜の入学試験出願倍率は目標の 4.0 倍を上回る 5.6 倍となった。

入試システムに関しては、多様な受験生が受験しやすいように令和 7 年度入学者の一般選抜試験前期日程において、これまでの理科 2 科目指定を 1 科目指定に変更し、6 月に大学ホームページに公開した。また、令和 8 年度試験からは全ての選抜区分において総合問題を小論文に変更することを決定し、7 月にホームページにてお知らせした。さらに、10 月には小論文の出題例をホームページ上で公開した。現在、小論文の出題に関して詳細を検討している。

令和 7 年度入学者選抜の志願者数は、学校推薦型選抜では前年度より 9 名の増加、社会人選抜と私費外国人留学生選抜は昨年度と同様に 0 名、一般選抜前期日程では前年度より 92 名の増加、一般選抜後期日程では前年度より 98 名の増加で、総計では昨年比 199 名増加であった。

大学入学共通テストに関しては、令和 6 年度全国大学入学選抜研究連絡協議会（オンライン開催）に 6 名が参加し、令和 7 年度大学入学共通テストの「情報」の出題、各大学の入試広報の現状、及び大学入学選抜の追跡調査研究の現状、入試問題の出題・採点ミスを防止する仕組み等について情報を収集した。また、今年度は新しい高等学校学習指導要領に対応して行われる最初のテストであり、本学は「情報」を「数学」に含んで選択する方式であることを既に公開している。令和 7 年度大学入学選抜試験における本学受験生は全員「情報」を受験していた。今後、この指定科目の方式による影響を分析する予定である。

入試に関する広報活動では、看護職希望状況や本学の入試についての印象などについて情報収集と広報活動を目的に、県内高校訪問を 5 月と 11 月に延べ 21 校および予備校 1 校に行った。業者主催進学説明会に延べ 25 会場で参加し、高校生・保護者等延べ 489 名の相談を受けた。またオープンキャンパスや若葉祭、随時受付のキャンパスツアー 7 件でも進学説明会を開催した。「看護師という仕事の魅力」をテーマとして、高校 1～2 年生を対象とした公開講座を開催し、県内 17 校から 42 名の参加があった。さらに、大学入学共通テスト終了後に個別進学相談会をオンラインで開催し、県内 3 名、県外 3 名の受験生と保護者の参加があった。本学開催の高校教諭に対する進学説明会については、案内状送付対象高校を大分県内 55 校に加えて過去 4 年間で本学受験実績のある県外高校 55 校に拡大し、オンラインと対面のハイブリット形式で 7 月 13 日に開催した。23 校 24 名の教諭が参加、うち会場参加が 18 名、オンライン参加が 6 名であった。今年度は、高校教諭と卒業生との交流や、入学後の大学生活についての発表、出身校宛ての手紙を渡すなど、学生を通して大学生活の様子を高校教諭に知ってもらう機会を設けた。

県外からの志願者数を増やすため、業者主催の全国高校生対象の大学合同進学オンラインイベントの大学別説明会に 10 月 19 日、20 日に参加した。説明会参加後アンケートで関心度が参加大学 198 校中 19 位と高評価を得た。教育コンサルタント業者から模試における本学志望者の動向等を聴き取って広報戦略に活用し、九州地区で看護系国公立大学を志望する受験生にターゲティングを行って、本学の魅力を PR するデジタルメッセージを 800 名に送信した。

昨年度整備した大学ホームページの入試情報の頁を活用して、適時新着情報を掲載していった。また、入試に関する新着情報を見逃さず、タイムリーに受け取ってもらうために、新着情報を自動的にユーザーのスマートフォン画面にポップアップで通知してくれる機能を導入し、104 名が登録している。マスコミュニケーションを通じて本学の知名度を拡大する目的で、コメンテータガイドを作成し 12 名が登録をし、マスメディアへ配信した。マスメディアより、1 名の依頼があった。

ウェブを活用した出願システム及び主体的活動に関する得点評価システムは 3 年目となる。システム事業者と綿密に連絡をとり、出願開始前に入念な連携テストを実施し、トラブルなく運用できた。R8 年度からは、大学入学共通テストが電子出願となるため、引き続き事業者との連絡、連携テストの実施による、実際の運用への準備が必要である。

面接試験については、入試監督者説明会と合わせて面接担当者説明会を開催して、評価と記録方法の統一を図った。総合問題（筆記試験）に出題ミスの発生を予防するよう、作問手順書に沿って慎重に作業を進めた。

今後も入試の広報と運営方法の両面について改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動していく予定である。

9-3-3 教育研究委員会

委員長 福田広美

副委員長 杉本圭以子

委員 石丸智子、古賀雄二、定金香里、品川佳満、阿部剛、葛城奈穂、吉村匠平

本委員会は学部学生の教育を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月（8月除く）定例の委員会として11回の会議を開催した。令和6年度より第4期中期計画が開始され、教育研究委員会の目標を達成できるよう教育の質向上等に関する活動を行った。本年度は各指標において概ね100%を達成した。令和7年度も各指標の目標達成を目指す。

1. 教学マネジメント・IR

4年間の看護師基礎教育の評価として、1～3年次の学生は自己の学修成果を把握するために、ディプロマポリシー（以下、DP）の自己評価を教務情報システム（キャンパススクエアのキャリアカルテ）に入力した。2、3次生は、各学年における大項目別のDP平均値が前年度に比べて高かった。4年次生については、旧カリキュラムにおけるDP評価を質問紙形式で行った。旧カリキュラムDPに示す能力26項目の全項目において平均4.0点以上であった（とても身に付いた（5点）～全く身に付かなかった（1点）の5段階評価、回答者78名（91.8%））。

アセスメントチェックリストに沿って、多角的な教育成果を可視化、一元化し、教育研究審議会を経て学内で情報共有を行った。また、令和6年度驚愕マネジメントIR研修を行い、学生のDP自己評価結果の共有、学生のDP達成に向けた教育について情報提供を行った。また、学生を対象とした教育に関するアンケート結果も改善に向けて共有を行った。教育の学習成果についてはホームページに掲載した。

2. 入学前教育

「生物学」を入学前学習の重点科目とし、必要な学習内容をまとめた「わかば通信」を合格者にWeb配信した。その成果を、入学直後に実施する「入学後テスト」の成績と、1学期終了後の入学者対象アンケートで測定した。今年度より経年変化を調べるため、入学後テストに業者テストを導入した。入学後テストの結果、受験で生物を選択した学生の平均点は67.6点、未履修者は54.3点と、10ポイント以上の差があった。また、生物履修者でも未履修者の平均点を下回る学生が9名いた。生物未履修者の入学時における得点差を縮小することが今後の課題である。アンケート調査では、入学前に「生物基礎」または「生物」を学習した学生の割合が昨年度より減少。一方で、その96.3%が入学前教育を役に立ったと評価し、一定の効果が認められた。1学期履修の「生命科学入門」、「生体構造・機能論Ⅰ」に対する困難感を訴える学生は昨年度より増加していたが、自由記載では、入学前学習が授業理解の助けになったとの意見があった。「わかば通信」は役立つ情報サイトとして評価されたが、一方で、他者の声を参考にしない学生も一定数おり、今後の課題となる。こうした課題を解決するため、次年度の「わかば通信」では、高校教員への相談をより推奨し、有料・無料の学習ツー

ルの活用を呼びかける方針とした。なお、「わかば通信」の周知やアクセス方法に特段の問題は見られなかった。

3. シラバス関連

令和7年度の学部シラバスを作成した。シラバス担当者および各領域担当者による2段階のチェック（書式や内容等）を実施し、修正が必要と判断した記載については、科目担当者にコメントを返却し、修正を依頼した。なお、令和7年度のシラバスから全学年が令和4年度改正カリキュラムに基づくものとなる。

4. 総合人間学

様々な分野で活躍されている県内外の講師による講義から構成される科目として運営した。教職員から講師を募り、教育研究委員会で検討し、計画、調整した。大分県内他大学との単位互換制度の科目として受講ができるよう他大学と連携した。84名が履修し、全員が合格した。本科目は令和4年度カリキュラム改正で廃止となるため、今年度で開講終了する。

5. 教育環境等

講義室のプロジェクターが一部故障し、部品の交換を行った。講義室のプロジェクターで使用年数が長く学習環境上の課題があり、新たなプロジェクターの導入を検討した。学内の感染防止対策を継続し、実習を予定通り実施することができた。

6. 卒業研究

令和6年度の卒業研究は、文献研究や二次データを活用した研究が、調査や実験研究が行われた。本年度も担当教員による卒業研究および原著講読のルーブリック評価を行い、一定レベルに到達し単位を修得できた。また、学生による自己評価も実施した。卒業研究発表優秀賞は、卒業研究発表会の3分科会から2名ずつ、合計6名の優秀賞を選出することとし、本年度は合計6名が選出された。

卒業研究発表会運営について、卒論の要旨・論文は、Googleフォームでの提出とし、発表会は、Zoomによるオンライン方式で実施した。3つの分科会を同時に進行させ、トラブルなく1日間で全演題の発表が終了した。

学生が国家試験の準備に早めに専念できるよう卒業研究の在り方について、目的や方法、期間等について継続的に検討を行った。卒業研究を終了する時期や卒業研究の進め方等について意見交換を行った。

7. 学生表彰

4年次生の学生表彰は学長賞1名、優秀賞3名、卒業研究発表優秀賞6名、学生賞1名の計11名を表彰した。2年次生と3年次生の学生表彰は各学年の学生2名に行った。

国家試験対策小委員会、看護実践力習得支援小委員会、進級試験WG、養護教諭養成部門の活動は、別途項目により記載しているため、ここでは省略する。

9-3-3 1) 養護教諭養成部門

部門長 吉村匠平

部門員 秋本慶子、小野治子、葛城奈穂、草野淳子、佐伯圭一郎、関根剛、中釜英里佳

教職課程（養護教諭一種養成）の運営を担当した。主な業務は、1～3年生対象の履修カルテ面談、1年生希望者を対象としたガイダンス、非常勤講師の時間割（教科書）調整、遠隔講義の実施対応、講義資料の配布、実習校選定業務（大分市教育委員会と連携）、実習校の巡回指導（養護実習Ⅰ、Ⅱ）、養護実習Ⅰ履修者選考（令和6年度は19名中12名に履修許可）、大分県内者（大分市の学生を除く）対象の母校実習（佐伯市1校で実施）調整業務、教員採用試験一次対策の遠隔配信での実施、教員採用試験二次対策講座（実技、場面指導）、採用試験終了後の就職活動の支援、教員免許の一括申請、教職課程変更届の文部科学省への提出、大分県教委が実施する教員育成ガイダンスへの参加（県内6校）、既卒者対象の就職相談、である。4年次希望学生5名が、4月に大学近隣の小中学校で健康診断ボランティアを実施した。ホームページに教職課程の運営状況、免許取得者数、教員就職率など、志願者が必要と思われる情報を開示した。12月に学内で卒業生が研修（交流会）を企画実施した（13名が参加）。

令和6年度卒業生は9名が養護教諭一種の免許状を取得した。教員採用試験の受験者は4名、1次試験合格者はいなかった。免許取得者の進路は、大分県非常勤講師（1名）、大分県非常勤講師（未定）長崎県臨時講師（1名）、沖縄県臨時講師（未定）、大学院等進学1名、医療機関就職者4名、教員就職率は50.0%、教員として勤務する卒業生の県内就職率は50.0%だった。

採用試験の実施時期の前倒し、3年次受験が可能になったことなど、採用試験の動向に合わせた学生の支援の充実が今後の課題である。

9-3-3 2) 看護実践力修得支援小委員会

委員長 石丸智子

委員 足立綾、荒木章裕、内倉佑介、後藤成人、妻木美香、徳丸由布子、堀裕子、森崎久美

看護実践力修得支援小委員会の主な活動目的と役割は、①1年次から4年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できるように、看護技術修得プログラム（統合科目）および看護スキルアップ演習を企画・運営・評価すること、②学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、研究室領域間で情報交換し、臨地および学内における実習に関する環境整備を行うこと、③臨地実習に関する指導指針、ガイドブック等の作成・見直しである。7月を除く月1回の定例会議を開催し、前述に基づき主に以下の活動を行った。

1. 看護技術修得プログラムの企画・運営・評価

第1～3段階看護技術演習（基礎看護援助技術演習：2年次3学期・新カリキュラム、臨床看護援

助技術：3 年次 1 学期・新カリキュラム、第 3 段階看護技術演習：4 年次前期・旧カリキュラム）を実施した。基礎看護援助技術演習では、課題事例に対して適切な技術適用を評価する内容である。そのため学生に、評価日に照準を合わせて、グループワークと実技練習を計画的に取り組ませた。臨床看護援助技術演習は救命救急処置技術に関連した実技講習や課題事例への取り組みを通して、病院内だけでなく普段の生活においても緊急時に必要な救急ケアが習得できる内容とした。両演習ともに学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと評価した。第 3 段階看護技術演習（4 年次前期）では、学生が主体的・計画的に学習する環境の提供として e ラーニングを行い、知識の習得やレポートを通して看護技術の習得を目指すことができていた。第 3 段階看護技術演習は今年度が最後の実施となり、応用看護援助技術演習へ移行となる。

2. 看護スキルアップ演習の企画・運営・評価

本演習は 4 年次生を対象に看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことをねらいとしている。今年度も発表会はオンラインで実施した。昨年度同様に、オンラインでの演習方法について、事前に動画または写真、パワーポイント資料等でコンテンツを作成し、事例に対して適切かつ安全安楽な看護技術をどのように提供しようと考えたかが伝わる発表にするよう指示した。その結果、実施後の学生からのアンケートではディスカッションの充実等の意見があり、教員からも見せ方の工夫により学生の学びがわかりやすかったなど好評であった。看護スキルアップ演習は今年度が最後の実施となる

3. 2022 年度改正のカリキュラムの看護技術演習検討

2022 年度改正のカリキュラムで本委員会が担当する 2 年次 3 学期『基礎看護援助技術演習（選択科目）』、3 年次 1 学期『臨床看護援助技術演習（必須科目）』、4 年次 2 学期『応用看護援助技術演習（選択科目）』に関する授業内容、および具体的な運用システムを検討・実施した。今年度、新たに臨床看護援助技術演習が開講となった。来年度、初開講となる応用看護援助技術演習に向けて、具体的な運用システム等について計画的に取り組んでいる。

4. 実習環境の整備

1) 南大分キャンパス

今年度は、南大分キャンパスの図書室を整備し、古くなった書籍の更新および回収を行った。また、ネットワーク環境整備の要望に対して、モバイル Wi-Fi を 9 台を用意し運用した。また、情報ネットワーク委員会と協力し、南大分キャンパスの Wi-Fi 環境を整備した。

2) その他実習施設環境整備

各実習終了後に担当研究室のメンバーから実習時の環境状況について報告してもらい、必要な環境整備を行った。また、看護実習記録のデジタル化（試行期間）に伴い、運用・導入への意見収集、トラブル対応等を担当した。今後も各研究室間で情報共有しながら必要な環境整備を行っていく。

3) 学内実習環境の整備

導入 3 年目の教育用電子カルテ (Medi-EYE) について、運用、導入への意見収集、トラブル対応、

継続活用意向調査、教材検討などを行った。臨地実習が学内実習に変更された場合や学内演習で活用されていたが、使用が限定される領域もあったため、今年度より、必要な領域のみの契約とした。また、看護技術修得支援のため e ラーニング教材（ナーシングスキル）においては、年度初めに新入学生及び教員の登録、変更および年度末削除を行った。さらに、相談窓口を担い、年度内トラブルに対応した。今後も安定した運営環境の保持が必要である。その他、学内実習・演習等で必要な消耗品、備品等の購入により演習環境の調整を行った。

5. 実習関連マニュアルの内容検討および整備

1) 看護技術習得確認シート

4 年間で計画的に技術修得が図れるように、1 年次生に看護技術修得確認シートの説明と配布を行った。また、4 年次生に対し卒業時看護技術確認アンケートを実施した(2024 年 7 月実施、回収人数 82 名/86 名中 回収率 95.3%)。卒業時まで全員が単独で実施できることが望ましい技術項目：20 項目のうち、8 割以上の学生が「単独で実施できる」と自己評価した項目数は 5 項目で、昨年度と変化なかった。新型コロナウイルス感染症による制限は緩やかとなっているものの、各臨地実習での基礎看護技術の実施状況を把握しながら、経験できる機会を増やすような支援を検討する必要がある。

2) 実習ガイドブック・実習指導指針の見直しと作成

実習ガイドブックの一部見直しを行った。実習記録のデジタル化に伴い、記載時の情報の匿名化についての内容を新たに追加した。実習ガイドブックは 500 部作成し、392 部を学生および実習施設へ配布した。来年度は内容の見直しに加え、Web 上での運用を予定している。

9-3-3 3) 国家試験対策小委員会

委員長 杉本圭以子

委員 岩下恵子、葛城奈穂、定金香里、佐藤愛、姫野綾

当小委員会は、教育研究委員会と連携・調整しながら国家試験受験に関する業務を担当し、学生が国家試験に向けて主体的に取り組めるよう支援し、高い合格率を目指して活動した。

学生委員とともに 4 月にガイダンスを行い、7 月と 12 月に国試対策への動機づけを高め学習の促進を促す企画を実施した。年間 7 回の業者模試を学生委員と連携して実施した。模試結果は自己採点することとし学生自身が現状の力を把握するとともに、必ず問題のやり直しをすることを求めた。模試結果から要支援学生をピックアップし、委員が個別支援を継続的に実施した。さらに模試の結果を全国の結果と比較し、本学学生の正答率が低い問題をチェックし全学教員に広報した。また、国家試験の過去問を中心に、対策してほしい問題を Google フォームを用いて全学年に配信し、低学年のうちから国家試験について意識付ける取り組みを行っている。

特に、前年度の課題として国試対策に早い時期から取り組めるような支援を行うことが挙げられたため、4 月のガイダンスと 7 月の対策開始を促す企画の内容について重点的に検討して実施した。その結果、学生の国試対策開始時期は本試験後のアンケート結果によると、2023 年度は「夏休み以

降開始」23%、「12月以降開始」40%に対し、2024年度は「夏休み以降開始」37%、「12月以降開始」39%であり、12月以降開始した学生の割合は微減であったが、夏休み以降開始した学生の割合は増加した。合格率は、全国の90.1%に対し、本学は98.8%であった。

残念ながら全員合格は達成できなかったため、次年度は引き続き学生が主体的に早期から国試対策に取り組めるための支援とともに、より個別の状況に合わせた支援を行っていく。

9-3-3 4) 進級試験 WG

リーダー 古賀雄二

メンバー 濱中良志、佐伯圭一郎、甲斐博美、田中佳子

進級試験の実施に関する一連の業務を担当している。

6月16日（火）に進級試験説明会を実施した。2月26日（水）に本試験を実施し、78名受験、63名合格、15名不合格であった。平均点は68.4点を例年並み（2023年度71.2点、2022年度65.9点）の点数であった。不合格者15名は3月5日（水）の再試験を受験し、全員が合格した。また、1名が本試験追試験対象となり、3月5日（水）に本試験追試験を実施し、合格した。

その後、本試験問題の正答率や解答分布などを分析した資料を学内に公開し、出題を担当した全教員にフィードバックした。今後は、ある程度の規模となったプール問題の活用法の検討や良問を作成するための学内教員への情報提供なども進めていく予定である。

9-3-4 研究科教育研究委員会

委員長 稲垣敦（研究科長）

副委員長 梅野貴恵

委員 川南公代、桑野紀子、藤内美保、福田広美、神崎正太

オブザーバー 麻原きよみ（学長）

大学院看護学研究科は、看護学及び関連領域の理論及び応用の教授研究を通して、より高い専門性を有し、看護の実践、教育及び研究において指導的役割を果たすことのできる人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の進展に寄与することを目指している（大分県立看護科学大学大学院学則第1条）。この大学院を所管する研究科教育研究委員会の分掌事項は、①アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの企画、調整及び教育の改善に関すること、②カリキュラムの編成(シラバスの作成を含む)に関すること、③大学院教育に関すること(講義・演習・実習を含む)、④教育環境の整備に関すること、⑤成績、進級及び修了に関すること、⑥修了認定、学位授与方針(ディプロマポリシー)に関すること、⑦大学院の入学選抜に関すること、⑧授業料減免及び大学院奨学金に関すること、⑨博士課程後期の進学に関すること、⑩他大学院との

単位互換に関すること、(11)研究生、聴講生に関すること、(12)大学院生のティーチングアシスタントに関すること、(13)大学院生の表彰に関すること、である（公立大学法人大分県立看護科学大学各種委員会規程別表1）。

今年度の課題であった研究指導体制の改善（主・副指導教員を教授・准教授のみとして指導水準を担保する）、大学院調整費と論文指導手当の改正、単位取得退学後の博士学位申請制度については、第11回教育研究審議会（3月13日）、第5回理事会・経営審議会（3月19日）に諮り、承認され、次年度4月から運用される。

今年度からの第4期中期計画に関しては、【2】大学院教育の「看護学の教育者・研究者及び実践者に必要な研究能力を有する人材を育成する。これらにより、看護職のリーダーとなりうる人材を大分県に供給する。」に関しては、今年度、博士課程後期にDNP（Doctor of Nurse Practice）コースを開設するために、学長が座長を務めるDNPタスクグループを立ち上げて検討した結果、第11回教育研究審議会（3月13日）でこの方針が承認され、次年度、DNPワーキンググループが開設の準備を進める。また、評価指標【2】-1「保健師国家試験、助産師国家試験、NP資格認定試験の合格率：100%（第4期中毎年度）」については、今年度は全て合格率100%であり、目標を達成した。また、【2】-2「博士号取得率：在学年限までに博士号を取得した者の割合80%以上（第4期中の通算）」については、直近の6年間の博士学位取得率が83.3%であり、現時点では目標を達成している。また、【5】授業評価と教育向上の評価指標【5】-1「授業評価の実施：全学生に対して年1回以上実施（第4期中毎年度）」については、既に大学院でもFD/SD委員会が実施しているが、次年度からより多くの科目で実施することとなった。さらに、【8】学生生活支援に関しては、問題がある場合には研究科長が学生と面談をしており、【10】経済支援に関しては、村嶋名誉学長より500万円の寄付があり、これを原資とした新しい奨学金制度「村嶋名誉学長学費支援奨学金」を委員会で策定し、第5回教育研究審議会（9月11日）、第3回理事会・経営審議会（9月18日）で承認され、次年度から運用する。

認証評価での指摘については、【改善を要する点①】大学院課程における収容定員の超過について、引き続き教育研究の質の保証・向上の観点から適切な研究指導体制の整備を図りつつ、定員管理についても組織的に検討することが求められる」については、上述のように研究指導体制の整備として研究指導教員（主・副指導教員）を教授・准教授のみとし、単位取得退学後3年以内に博士学位を申請できる制度を新設した。次年度以降、副論文等の修了要件を検討予定である。【改善を要する点②】「教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）」について、中央教育審議会のガイドラインを踏え、『学習成果を評価する方法に関する方針』を明示することが求められる。」については、「教育課程の編成方針」、「学修方法・学修過程」と共に、「学修成果の評価」をHP及び令和7年度の大学院学生便覧に掲載した。【今後の進展が望まれる点①】「大学院課程における収容定員の未充足について、引き続き定員充足に向けた取り組みを行うことが望まれる。」については、既に前年度に健康科学専攻の廃止、Zoomの活用の推進、開講曜日を調整、特別選抜制度等を導入したが、博士課程後期については、今年度、単位取得退学後の学位の申請の制度を策定した。次年度以降、副論文等の修了要件を検討予定である。また、上述のように、次年度、博士課程後期にDNP（Doctor of Nurse Practice）コースを開設する方向で準備を進めている。【今後の進展が望まれる点②】「シラバスの記載内容について、組織的な点検・確認の体制を整備することが望まれる。」に

については、学部シラバスの様式を踏襲することとし、研究科教育研究委員会でチェックすることとした。【今後の進展が望まれる点④】「卒業又は修了の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー）」と、「教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）」の関係を明確化し、学生に明示することが望まれる。」については、カリキュラム・ツリーやマップではなく、専攻・コース毎に「教育課程の編成方針」、「学修方法・学修過程」、「学修成果の評価」を HP 及び令和 7 年度の大学院学生便覧に掲載した。

今年度の学位授与者は、修士が 28 名、博士が 4 名であった。また、保健師・助産師の国家試験及び NP 資格認定試験は 100% 合格であった。次年度の入学予定者は、博士課程前期が 28 名（募集人員 37 名）、博士課程後期が 3 名（募集人員 4 名）である。

次年度は、博士課程前期健康科学専攻の在学生在がなくなったため、後期健康科学専攻の募集を停止して、この募集定員分を後期看護学専攻に加える。また、博士学位申請の要件（副論文等）、入学者選抜の基本方針、情報公開、学生の表彰等について検討し、また、引き続き DNP ワーキンググループが DNP コースを設置の準備を進める。

9-3-5 看護学実習委員会

委員長 梅野貴恵

副委員長 藤内美保

委員 小野美喜、影山隆之、加藤典子、川南公代、草野淳子、桑野紀子、古賀雄二、秦さと子、
濱耕子、福田広美、佐藤英

オブザーバー 麻原きよみ（学長）

①看護学実習委員会は、学部及び大学院の看護系実習の内容及び運営について協議し推進することを目的とした委員会である。令和 6 年度の主な計画は、「看護学実習記録のデジタル化への進捗を推進することと令和 7 年度の総合看護学実習要項や実習施設の修正および検討を行うこと」である。

② 1)第 4 期中期計画の目標値でもある「実習記録デジタルシステムの導入」は、看護学実習記録デジタル化 WG を中心に推進した。委員会で WG の報告を適宜行い、看護系教員に周知した。e ポートフォリオの試行に取り組み、看護アセスメント学実習でクラウド利用の承諾が得られなかった 1 施設を除く 2 施設で実習した学生と基礎看護学実習 9 施設のすべての学生を対象に実施した。また、前 2 科目の臨地実習前の情報倫理教育を教員・学生ともに実施した。看護学実習記録デジタル化 WG の項参照

2)令和 7 年度の総合看護学実習要項や実習施設の修正および検討は、担当委員 3 名で検討し、9 月から 12 月の委員会でディスカッションを重ね確定し、1 月に学生オリエンテーションを実施した。

3) 実習指導者・大学教員交流会は、7 月 16 日(火)に 5 年ぶりに対面での開催とした。講演とグループディスカッションを行った。ディスカッションの参加者は、実習施設 3 か所（アルメイダ病院、大分日赤病院、大分大学医学部附属病院、大分県立病院は感染対策のため当日不参加となった）から 16

名、大学教員 18 名の計 34 名で、今後の学生指導に「とても役立つ」7 割、「少し役に立つ」3 割と概ね良好な結果であった。

4) 大分県立病院の実習指導者短期教育プログラムは、10 月 24 日（木）から対面で開催された。講義と演習の後、各自で実習指導案作成を行った。参加者は、大分県立病院 4 名、本学教員 1 名で、4 名が指導案を提出し、本委員会の実習責任者が添削指導を実施した。

5) 講義・演習から実習への効果的な継続指導を一貫して図れるように、看護学実習指導の教員配置の方針について確認・検討を行った。

6) インシデント事例活用促進を図るため、学内サーバに匿名化した事例情報を収納し共有することとした。

7) 後援会から、R7 年度の 4 年次生が新カリキュラムの適用となることを契機とした実習交通費等補助金の見直しについて照会があり、R6 年度 4 年次生に対して実施した実態調査の結果をもとに、交通費や宿泊費の補助の増額を要望した。また、公共交通機関で通うため交通費が増額する 1 年次生の基礎看護学実習について、交通費の補助を要望した。2～3 年次生の一部の実習で実施していた駐車料金の補助は行わないことを確認した。

8) 感染症対策は、令和 5 年度の大学の方針の「アルバイト及び会食の禁止」は実習開始 7 日前からを引き続き維持し、実習施設の定めがある場合はそれに従って対策を実施した。

③活動の自己評価と今後の計画、展望

「学生の自律性、主体性を引き出す効果的な実習指導」に関する議論は具体的に行えていない。しかし、効果的な実習指導のひとつになり得る「実習記録デジタルシステムの導入」は本学の既存のシステムを使用して試行することはできた。次年度の e ポートフォリオの運用は、基礎看護学実習、看護アセスメント学実習で本始動、成人看護学実習で試行予定である。R8 年度以降は、実習記録デジタル化ワーキングを解散し、看護実践力修得支援小委員会に引継ぎを行えるように委員会として支援する。

9-3-5 1) 看護学実習記録デジタル化 WG

リーダー 秦さと子

メンバー 石田佳代子、石丸智子、梅野貴恵、佐藤栄治、品川佳満、小野逸郎

本 WG は、本学が進める教育の DX 化の一環として、看護学実習記録のデジタル化、電子ポートフォリオの導入を分掌とし、2023 年 10 月から活動を開始した。今年度は、電子化した看護学実習記録について、実習での運用方法、および学生の実習記録を電子ポートフォリオにする手順について検討したうえで、試行し、評価した。また、企業が開発している臨地実習記録に関するシステムのセミナーに 4 人参加し情報収集を行った。WG 会議は、対面 3 回、メール稟議 5 回開催し、そのほか、活動の進捗状況の報告や関連情報の共有などはメールで行った。

看護学実習記録のデジタル化は、基礎看護学実習、看護アセスメント学実習、成人看護学実習への導入を目標とし、そのほかの実習では随時検討する方針としている。対象とする 3 つの看護学実習

における看護学実習記録の記録媒体は、既にすべて電子化されていることを確認し、使用する文書作成ソフトを統一した。また、Google Classroom を利用した運用と個人用 Drive 上での電子ポートフォリオの作成について検討した。12 月に 2 年次生を対象に看護アセスメント学実習で、1 月に 1 年次生を対象に基礎看護学実習で試行した。各実習での試行後、教員および学生に看護学実習記録のデジタル化の意義や方法等に関する評価を目的にアンケートを行い、2 年次生の看護アセスメント学実習については対象学生 80 名中 16 名と対象教員 14 名中 10 名、1 年次生の基礎看護学実習については対象学生 78 名中 45 名と対象教員 11 名中 8 名に回答が得られ、各実習で概ね前向きな反応であった。使用中のトラブル対応や操作方法に関する意見に対しては、次年度マニュアル作成や学習会の開催を実施する予定である。

看護学実習記録のデジタル化にあたり、個人情報保護に関するシステム上の対策をとり、学生には記録上の対策を義務づけることとし、さらに個人情報保護のための行動化のため学生と教員について情報倫理に関する知識の定着を目的に e-learning 学習と確認テストを必須とした。このうえで、実習施設 10 施設に対し、本学の看護学実習における看護学実習記録のデジタル化、電子ポートフォリオの導入について説明を行い、了承の依頼をしたところ、9 施設から了承を得た。1 施設については、改めて説明を行い再検討の依頼をする予定である。なお、e-learning と課題テストについては、実習を履修した学生全員が取り組んだ。

以上より、今年度は計画通りに活動を進めることができた。次年度は、成人看護学実習で試行、基礎看護学実習と看護アセスメント学実習で本始動を行い、評価を行う。

9-3-6 学生生活支援委員会

委員長 小野美喜

副委員長 関根剛

委員 岩下恵子、内倉佑介、後藤成人、篠原彩、角渕直美、時松美香、永松いずみ

① 組織の分掌と活動目的

学生生活支援委員会は、一人ひとりの学生の生活を支援する体制を充実させ、大学での学修に向けた効果的な支援や健康面の支援（メンタルサポートを含む）を行っている。令和 6 年度の課題はポストコロナ以降に中止した学生行事を学生主体で催しができるようにサポートし大学生生活の学生満足度の向上をはかることであった。また学生の個別支援体制を強化することであった。

② 活動実績等の報告

i 学年担任による生活・学習支援と保健室を中心とした健康支援

各学年の担任と保健室と連携し学生生活、学習、健康面に関する相談に応じた。担任との面談件数はのべ 45 件（昨年 30 件）、保健室への健康相談はのべ 99 件（94 件）であった。また学内カウンセリングの活用は 7 件（のべ 40 件）であった。相談機会となるようにゴールデンウィーク明けに学生交流棟にて相談窓口を設け数件の相談があった。低学年の面談件数が増え、経済的問題を抱える学

生対応も増えており、教務学生グループと連携し保護者面談や奨学金情報等を継続する。

ii 新入生・全学オリエンテーション

4月9日に講堂に全学年集合し実施した。全学年が同一会場に集合するのは数年ぶりであったが、一体感ある年度スタートができた。4月10日は親睦オリエンテーションを実施し親睦が図ることができた。

iii コンタクトグループによる交流促進

4月9日オリエンテーション後に上学年による1年生の学内ツアー、全学年によるコンタクトグループの交流会を企画実施し、学生間の親睦交流ができた。

iv キャンパスクリーンデイの実施

教務学生グループと連携し5月17日に開催した。2,3年の参加学生が少なく課題となったため、次年度は実施日や方法を変更し運営する。

v 若葉祭・サークル活動など学生関連イベント支援

若葉祭実行委員会を中心に企画運営の支援・助言を行い、5月18,19日に開催され盛況に終了した。サークルの新旧の入れ替わりがあり、新入生へのサークル紹介の時間を確保した。サークル室の再配置等により一部のサークル活動は活発となってきたが、コロナ禍以前の活動は取り戻しておらず、引き続き支援を検討する。

vi 学生自治会活動の支援

自治会委員を支援し、コロナ禍以降中止していた新入生歓迎会を再開できた。また自治会発案によるクリスマスツリーの設置等、自治会の積極的活動につなげることができた

vii 学生生活安全のための研修会開催

全学年を対象に交通安全講習会、消費者生活講習会、防犯講習会を4月9日に実施した。また1年生を対象にデートDV研修会を7月14日に実施し、海外渡航を予定している学生には安全を確保するための情報提供を実施した。通学時の交通事故が生じてはいるが、必要届出や対応がとられ、重大事故は生じなかった。

viii 学生生活実態調査の実態

令和6年度調査を12月に実施した。コロナ禍以降、回収率が低迷していたが、調査時間の確保等の工夫により回収率は62.1%と上昇した。また学生生活への満足度は「満足」「まあまあ満足」と回答した学生が91.8%と、昨年度よりも大幅に向上した。学生からの大学生生活上の要望は各関係部署に伝え回答を得た。結果はキャンパススクエアの掲示板にて公開した。令和5年度調査で学生の要望にあった実習旅費への要望については、関係部署の検討により改善策が出され学生生活改善が図れた。今後も関係部署との連携により改善できる事項への対応をしていく。

ix 九州地区学生指導研究集会、九州地区公立部長会議の参加

九州地区公立部長会議は台風のため紙面開催となった。学生部長会議は9月20日（長崎県）で開催され委員が出席し、各大学との意見交換および承合事項について検討した。次年度会議は本学が当番校であり運営を検討していく。

③活動の自己評価と今後の計画、展望

学生による主体的な学生行事運営があり、学生交流のある大学生生活の促進にも成果があった。学生

生活の満足度も回復しており、学生の生活状況をとらえ継続支援していきたい。個々の学生への生活・学修サポートについては継続した取り組みを必要としており、学年担任、保健室、教務との連携支援体制を継続し、相談しやすい環境づくりを行っていく。

9-3-7 就職・進路支援委員会

委員長 藤内美保

副委員長 濱耕子

委員 阿部剛、佐藤愛、中釜英里佳、徳丸由布子、神崎正太、藤川桂子

就職・進路支援委員会は、学生の適性に応じた就職・進学、及びキャリア形成のために本学の社会的使命を考慮した支援を行うことを目的とした委員会である。主とする分掌は、①就職及び進学の支援の企画及び推進 ②就職広報 ③県内就職促進 ④就職後のフォローアップやUターン支援である。

今年度の活動で特に強化したことは、1) 中期計画である県内就職率 55%の達成、2) 就職試験の早期化に伴う対応 3) 低学年からのキャリアデザイン支援のための次年度新たな企画である。本年度の県内就職率は、58.6%であり（令和 7 年 3 月 31 日現在）、目標としていた 55%の目標を達成できた。今後も県や大分県看護協会、ナースセンターとの連携を図り県内就職の情報を学生に提供していく。

今年度の本委員会の活動内容については、以下の 1) ～4) の活動を行った。

1) 学生の就職・進路状況の確認と支援

卒業生 85 名であり、3 月 26 日現在、就職決定者名（看護師 68 名）、進学者 14 名であった。4 年次生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行い、メールや面談で対応を行った。また、就職面接試験に備えて模擬面接を希望者 50 名以上(1 名 20 分程度)の学生に対して 6 日間（4/17,4/19,4/25,4/26,6/3,6/7）実施した。進学面接試験に備えた模擬面接を 7/8 に相談員と事務局長が 13 名に対して実施した。推薦を実施している施設の情報を入手し、4 年次生にメールで周知、希望者を募り委員会で選考した。3 年次生に対しては、就職支援相談員による 3 年次生全員を対象とした進路面接を実施、学生の就職や進学に関する相談に対応した。

2) 県内就職促進及び就職状況の変化に対応する令和 7 年度の企画案の検討

以下の 2 点をコンセプトに、次年度の就職・進路の企画を計画した。①早期化する採用試験スケジュールに備え、就職に対する意識が高い学生に対して、低学年から就職に関する情報を得る機会を作る。②講座の中で具体的な県内施設名を提示していくことで就職先を検討する前に認識してもらうことで、県内就職促進を進める。

具体的には、水曜日の午後で年間 4 回、1～3 年次生が同時に参加できる企画を立て、1,2 年次生も希望者は参加できるようにする。新たな企画として「病院研究ワークショップ」、また今年度から開始し好評であった「就活スタートアップ講座」なども盛り込む。また 4 年次生の就活経験談（ビデオ）を 1～3 年次生の希望者が視聴できるように格納するなど、計画した。

3) 看護職キャリアガイダンスの開催

3 年次生対象に看護職キャリアガイダンスを 2024 年 7 月 1 日（月）と 2025 年 2 月 5 日（水）に講義室で開催した。7 月のガイダンスは、専門領域の看護学実習前に、自らの進路を考える機会となるよう、就職や進学の進路選択について説明を行い、県内に就職している卒業生が自らの進路選択や看護職としての活動を 3 年次生に伝えた。今年度は U ターンの卒業生にも依頼した。アンケートの結果、満足度の上位 2 項目の割合は 94.9%であった。また県内・県外の就職試験の早期化に向けて、3 年次生の夏季休暇中に県内施設の特徴を理解してもらう目的で 7 月 18 日（木）に就職活動スタートアップ講座を新規に企画し、25 名が参加し、さらに 14 名に録画視聴の機会を提供した。

3 年次生の 2 月のガイダンスは、就職や進学の際に必要な履歴書の書き方・面接について具体的な対策を行えるよう説明を行った。4 年次生 2 名に、就職活動の経験について発表してもらい、具体的な手続きや進め方について理解を深めた。また、本学の就職相談室の利用や各都道府県のナースセンター担当者による就職相談の紹介を行い、今後の就職活動に際し有料の転職サイトの利用をしないこと等など、留意点を伝えた。

また、2 年次生を対象に看護職キャリアガイダンスにて 2025 年 1 月 16 日（木）にキャリアデザインの説明を実施し、自己分析も行い自らの進路を考え始める機会となった。3 年次生になる直前の時期であり、進路を考え始めるうえでガイダンスを行う時期としては適切という意見が大部分であった。アンケートの結果、満足度の上位 2 項目の割合は 93.1%と目標値を超えた。

さらに 1 年次生を対象に、早期からの自己の看護職像を考えることを目的に大学ナビ講座を 7 月 5 日（金）に実施した。大分県福祉保健部医療政策課看護班の竹永祐子課長補佐及び杵築市立山香病院の池田文恵看護部長を招き、県内就職のメリット、県内医療機関の特徴、大分県の医療や看護の魅力や地域密着型病院の魅力や強みについて説明してもらった。

今後は、早期からのキャリアデザインを考える機会を増やすために、毎の企画だけではなく、1～3 年次生の希望者が参加できるよう水曜日の午後の時間を活用し、多様で实际的・具体的な企画を計画する予定である。また、卒業生のメッセージや 4 年次生の就職活動についても、学生がいつでも録画視聴できるように計画する予定である。

4) 県内施設就職情報の提供

県内施設に就職情報及び卒業生メッセージの情報を、就職相談コーナーに今年度、既年度に分けて最新情報をわかりやすく整理した。就職活動が早期化しているため、1 月に学生に周知した。また、3 年次ガイダンスの際に、救命救急センター・高度急性期病院、地域密着型病院、緩和ケア病棟をもつ病院、周産期センター、訪問看護ステーションなどの医療の特徴毎に県内施設を紹介した。

5) 県内施設就職者への対応及び卒業生・修了生の県内 U ターン支援

県内施設に就職している卒業生の活動状況を各施設から情報を得て把握した。大分県内の求人情報については、卒業生にもメールで情報提供し、就職先に悩んでいる学生には個別に情報提供を行った。今後も引き続き、県内施設に就職している卒業生の対応を行い、必要に応じてサポートを行う。U ターン支援については、県内の約 30 ヶ所の施設に対して 12 月に調査を行い、本学の卒業生・修了生の在籍状況、本学卒業生・修了生の U ターンの状況、また施設における U ターン就職受け入れ制度などについて調査した。今後も県内施設との連携を図り、情報発信していく予定である。

次年度は、県内就職促進及び就職状況の変化に対応する今年度計画した次年度企画（案）を円滑に行い、学生が満足できる就職・進路選択と活動ができ、また県内就職率 55%の達成ができるように推進する。

9-3-8 広報・公開講座委員会

委員長 小嶋光明

副委員長 森加苗愛

委員 石田佳代子、矢野亜紀子、矢野亜紀子、岡田悠希、廣瀬福美、神矢恵美、安部翼、那須龍則

1) 若葉祭教員企画

5月18,19日に開催された若葉祭において、教員企画の募集を行い、10企画を開催した。

2) オープンキャンパス

7月13日(土)に午前と午後の2部構成で開催した。学長挨拶、大学紹介、入試概要説明、授業料・奨学金等の説明、在校生による合格体験談・メッセージ、模擬授業、研究室ごとの体験企画、進学相談、大学・研究室紹介パネル展示を実施した。開催に先立ち、Instagram 広告及び Google ディスプレイ 広告に出稿し、広報活動を行った。当日は午前部に高校生 159 名、保護者 100 名、午後の部に高校生 115 名、保護者 70 名で合計 444 名の参加があった。昨年度より約 100 名の増加となった。参加者からは「合格体験談」や「在校生メッセージ」が進路を選ぶ際の参考になったという意見が多かった。また、今年度、新しい取り組みとして、約 60 名の在學生に協力を要請し、学生ツアーガイドを実施した。参加者は在學生と交流することで本学の魅力や大学生活がイメージできたようであった。来年度は今年度好評であったプログラムを継続していくとともに、当日参加できない方に向けて、キャンパスツアーは随時行っていることを、大学ホームページや SNS (Facebook、Instagram、LINE) で積極的に周知していく予定である。

3) 出前講義

高校からの依頼により、大学進学を希望する高校生を対象とした出前講義に講師を派遣した。県内の高校から 6 件の依頼があり、延べ 6 名の教員を講師として派遣した。

4) キャンパスツアー(大学見学)

高校生や保護者からの大学見学の申し込みに随時対応した。また、オープンキャンパスに参加できなかった方向けに、7月～8月で希望者を募集し、計5回のキャンパスツアーを実施した。令和6年度は32組79名の申し込みがあり、大学の概要説明、施設見学等を行った。

5) 大学 HP

本学の魅力や入試情報が伝わりやすい HP を目指し、今年度、大学 HP のトップページの一部を更新した。また、新たに「高校生・受験生の方」のページを作成し追加した。

6) 大学 HP、SNS およびマスメディアによる広報

大学 HP 大学のイベント案内を掲載（若葉祭、オープンキャンパス、公開講座、看護国際フォーラム、ホームカミングデイ、高校生対象公開講座など）し、それらの実施報告として大学アルバム

54 件を掲載した。また、本学公式 Facebook と Instagram を利用して大学のイベントの告知や活動・取り組みを卒業生、在校生、受験生、一般の方々などに発信した。今年度は、Facebook100 件、Instagram95 件を掲載した。さらに、今年度から夢ナビプログラムを活用し、大分県外の高校生にも本学の魅力を伝える取り組みを開始した（3 件の模擬講義動画を配信）。教員の研究紹介は、全教員の協力のもと毎月更新し 11 件を掲載した。大学 HP に掲載している大学 Q&A は、年 2 回(4 月、11 月)更新した。

7) 大学案内パンフレットの作成と活用

本委員会委員のうちの 5 名が大学案内パンフレット WG メンバーとして活動した。（途中でメンバーの欠員があり、委員 2 名補充した。）今年度は 2026 大学案内パンフレットの作成に加えて SNS 動画 3 本の作成も行ったので、パンフレットと動画の作成を並行させながら予定通りに完成、納品されるように、WG を支援した。2025 大学案内パンフレット約 3,000 部は、出前授業、進学相談時に本学に関心をもつ学生や保護者、高等学校に配布し、本学の認知度の向上や大学生活の具体的な説明などに活用した。

8) 公開講座

9 月 21 日（土）に対面（大分県立看護科学大学講堂）とオンラインで同時開催した。今年度のテーマは「医療的ケア児とその家族を取り巻く社会～医療的ケア児とその家族に対する法律の施行後の実態～」と題して、本学小児看護学研究室教授の草野淳子氏は「医療的ケア児を取り巻く社会的状況及び在宅でのケア体制」、大分県教育庁特別支援教育課指導班指導主事の首藤武範氏は「医療的ケア児の学校生活の充実に向けた体制づくり」についてそれぞれ講演した。告知のチラシは、県内の小学校、中学校、高等学校、保育施設、病院や各種施設等に配布した。参加者の年代は 10 代から 60 代以上と幅広かった。また、職業も医療従事者に限らず、高校生、会社員、大学教職員など様々で、総勢 104 名の参加があった。終了後のアンケートでは、「大変良かった」「良かった」が 94%と高い評価が得られた。参加理由は「テーマに興味があったから」が最も多く 95%であり、情報源は「大学からの案内」、「チラシ」、「本学の HP」、「知人・友人からの紹介」の 4 つで約 7 割を占めた。今後の開催方法としては、対面希望とオンライン希望でそれぞれ 50%と多かったため、次年度も対面とオンラインの同時開催を計画する。また、大分県民に関心の高いテーマを選定して開催できるよう企画する。

9) 大学オリジナルグッズの作成

進学相談会やイベント等で使用するため、大学のロゴが入ったテーブルクロスと椅子カバーを作成した。

10) 広報誌「風の広場」

広報誌「風の広場」は後援会と共同で年 2 回(7 月 Vol.24、12 月 Vol.25)作成した。県内高校、学部生の保護者、同窓生、県内の実習関連病院などに各号一部を配布した。掲載内容は、卒業生インタビュー、教員の研究紹介等であった。次年度も年 2 回のペースで作成し、本学の学部生や卒業生、教員の活動等について紹介していく。

11) 活動の課題

令和 7 年度の当委員会の継続課題は、以下の通りである。

- (1) 大学ホームページに掲載する情報を常時更新する。

- (2) 大学の教育研究活動の状況やその活動の成果に関する情報等を随時ホームページで広報する。
- (3) イベントの開催情報や学生の諸活動等を、メディア（テレビ、新聞）、ホームページ、SNS、広報誌等で発信する。
- (4) 一般県民(高校生含)、医療職者のニーズを満たすテーマの公開講座を開催する。
- (5) 7月にオープンキャンパスを開催する。
- (6) 進学説明会や出前講義を通して看護学の魅力を伝え、本学への進学希望につなげる。
- (7) 大学院の広報の充実を図る。

9-3-8 1) 大学案内パンフレットWG

リーダー 石田佳代子

メンバー 安部翼（12月～）、大矢七瀬（～8月）、神崎正太、坪内優太、永松いずみ、
那須龍則（～11月）、廣瀬福美（～12月）、矢野亜紀子（9月～）

本WGの役割は、大学案内パンフレットの制作を行う業者を選定し、内容構成等について検討して、大学案内パンフレットを完成させることである。広報・公開講座委員会と連携して活動する。

前年度分の納品完了後、5月より活動を開始した。まず、「大学案内パンフレット2026」（2025年度版）制作に向けた準備のために、「大学案内パンフレット2025」（2024年度版）に対するアンケート調査を行い、学内外から意見を求め、改善点などを確認した。次に、コンセプトについて検討した。学長との協議も含めて充分検討した結果、「さあ、夢に近づけ！」「プロフェッショナルとして生きる 第一歩を踏み出そう」とし、過年度までのコンセプトの変更を試みた。そして、9月にパンフレット制作委託業者を決定するためのプレゼンテーションを実施し、委託業者はいづみ印刷が選定された。なお、今回の契約では、パンフレット制作だけでなく、オープンキャンパス等のSNS動画3本も含まれることとなった。

制作過程では、本WGと業者との対面での合同打ち合わせ（1回／月 合計7回）を開催し、本学の特徴や長所の強化、写真の高画質化、表紙の構成や見やすさの工夫などについて、検討を重ねた。本学の特徴をわかりやすく伝えるために、①予防的家庭訪問実習、②健康科学実験、③養護教諭養成課程、④国際協力、⑤看護教育のDX化の5点を取り上げて特集企画とし、ライターによる取材、執筆とする方法を採用した。なお、デザインコンセプトは、入札時に業者から提案された「グラデーション」を採用した。「グラデーション」により4年間の成長を表現することができると考えた。12月頃より本格的な原稿執筆依頼・回収、写真撮影、動画撮影に入った。パンフレットや動画のモデル、原稿執筆者等は、WGや教職員からの推薦により決定した。なお、「写真・動画撮影および使用等に関する同意書」を作成し対応した。4月末に納品、学内への周知と配布を行った。

本年度は、業者選定期間が前年度よりも約2か月遅れとなり、前年度と比べて原稿依頼や写真撮影の時期が大幅に遅れたことから、予定された時期の完成を目指して、本WGメンバーと業者とが一体となり、全員が全力疾走で取り組んだ。合同打ち合わせを重ね、改善点などの議論を一定期間かけて話し合い、修正しながら進めることができたことや、学生及び教職員の多大な協力を得ることが

できたことで、魅力的なパンフレットが完成したと考える。今年度は通常のパンフレット制作業務に加えて、SNS 動画 3 本の制作業務の並行で、WG の負担の増大が懸念されたが、業者と連携できたことが、円滑な運営につながったと考えられる。

9-3-9 国際交流委員会

委員長 桑野紀子

副委員長 宮内信治

委員 久保紘子、篠原彩、坪内優太、堤恒貴、姫野綾、矢野亜紀子、

G.T. Shirley（国際交流アドバイザー）

国際交流委員会は、本学の教職員及び学部生・大学院生の国際的活動を推進し、グローバルな視点の育成を図ることを分掌している。今年度も例年通り姉妹校・MOU 締結校との国際交流事業と看護国際フォーラムを実施するとともに、昨年度から募集を開始した短期海外個人研修支援奨学金プログラムを初めて実施し、並行して海外渡航に関する安全管理体制の整備にも努めた。また、諸外国からの研修生や留学生を積極的に受け入れるための基盤づくりとして、英語版学外 Web の内容充実・整備をはかり、発信した。今年度は各達成目標について 100%を超えて達成することができた。

1. 学部生および教員間の国際交流促進事業

1) 韓国 蔚山大学との学生交流プログラム（双方向交流）

韓国の蔚山大学校医科大学看護課程から学部生 8 名と同行教員 2 名を 7 月 15 日から 7 月 19 日までの 5 日間受入れ、県内 3 カ所の施設訪問や学内での学生交流を実施した。学内交流では学生が日本の文化や看護教育についてプレゼンテーションする企画を立て、事前学習・事前準備を行い当日の交流に臨んだ。実施後の蔚山大学学生へのアンケートでは、施設見学や学生との交流について、全員が「満足」と回答した。また、8 月 19 日から 8 月 23 日までの 5 日間、本学の学部生 8 名が同行教員 2 名と共に韓国の蔚山大学校医科大学看護学部を訪問した。現地では大学での講義や周辺地域の施設見学等に参加し、プログラム全体を通しての経験について、全員が「満足」と回答した。参加学生は学生交流プログラムの目的、および派遣前に学生自身が立てた目標を達成できた。

2) インドネシア ムハマディア大学とのオンライン交流

インドネシア ムハマディア大学と、国際交流の一環として国際看護学演習の授業時間を活用し、9 月 26 日（木）にオンライン学生交流を実施した。本学から 2 年次生 50 名、UMY から 75 名が参加し、互いの文化や看護について発表し合い、学び合う貴重な機会を創出した。

3) 韓国 仁荷大学との学生交流（訪問受け入れ）

昨年度から開始した訪問受け入れを今年度も実施した。仁荷大学の学部生 7 名と教員 1 名を 2 月 9 日から 13 日の 5 日間受入れ、県内 3 箇所の施設訪問と学内での学生交流を実施した。本学からは 1～3 年次生計 7 名が交流に参加し、日本文化の紹介としてお茶会を開催する等して交流を深めた。双方の参加学生は交流内容について全員が「満足」と回答していた。

4) トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラム ダイバーシティコース派遣留学生の支援

本学学生を応募段階から支援し、今年度 4 年次生 1 名が派遣留学生として半年間イギリス（ロンドン）で学ぶ機会を得た。今後は当該学生の留学中の学びを発表する機会を設け、次につながるよう、学生らのチャレンジを支援していきたい。

2. 看護国際フォーラム

当フォーラムは、開学以来毎年 10 月最終土曜日に開催している。今年度で第 26 回を迎え、10 月 26 日（土）に Zoom ウェビナーで開催した。テーマを「診療看護師(NP)と拓く看護の未来 地域におけるシームレスな取り組み」とし、米国から 1 名の講師が録画プレゼンテーション、国内から 2 名の講師がライブプレゼンテーションをした。参加者は 240 名と大盛況であり、参加者背景は高校生、NP や看護管理者を含む看護職、教員等であった。参加者アンケートの結果では講演内容・総合討論の満足度は、それぞれ 99.1%、98.0%であり、全体として参加者の満足度は高かった。

3. 個人短期海外研修支援奨学金プログラム

短期海外研修を希望する学部学生への支援事業として創立し、令和 4 年に策定後 COVID-19 感染拡大の影響で実施を延期していたが、昨年度募集を開始、今年度 4 年次生 1 名を初めての研修生としてケニアに派遣した。現地への派遣と研修に際しては、大分県内の NGO の協力を得て実施することができた。国際看護比較論の講義時間を活用して報告会を実施し、3 年次生に海外研修体験を共有する機会を設けた。

4. 海外危機管理マニュアルの整備

学部生、大学院生及び教職員の海外渡航に関する安全管理の一環として、海外留学生安全対策協議会（JCSOS）に継続加入してマニュアルの整備を進め、学部生、大学院生及び教職員の海外渡航に関して情報収集した。学生らが海外渡航する機会が多い夏季休暇の前に、JCSOS から講師を招聘し、オンラインで安全管理研修を実施した。また、本学が実施・支援する国際交流に参加する学生に「海外留学危機管理ハンドブック」を配布、JCSOS のサポートについても説明し、渡航前に注意喚起した。

5. 英語版学外 Web の整備

諸外国からの研修生や留学生を積極的に受け入れるための基盤づくりとして、英語版学外 Web の内容の充実をはかった。大学院開講科目の英語名一覧の追加、情報のアップデート、本学の情報を集約した英語版パンフレット最新版をアップする等して整備を進め、公開した。また、姉妹校である蔚山大学、MOU 締結校である仁荷大学来学時、本学を紹介する際に英語版パンフレットと英語版学外 Web を活用した。

今年度は昨年に続き対面での国際交流事業を実施することができ、個人短期海外研修支援奨学金プログラムで初めて学生を海外に派遣し、実り多い一年となった。

今後も姉妹校や MOU 締結校との定期的な交流を積極的に進め、教員及び学生同士の国際交流を

促進していく予定である。

9-3-10 FD/SD 委員会

委員長 濱耕子

副委員長 古賀雄二

委員 秋本慶子、岡田悠希、小野逸郎、姫野雄太、藤本優子

FD/SD 委員会は、教職員の能力開発、教育・研究内容及び教育方法の改善、組織間の連携を推進することを目的とした委員会である。主とする分掌は、①FD/SD の研修、②教員の授業評価の実施及び授業内容・方法の改善及び向上、③教員の教育、研究等に関する資質向上、①～③の企画及び推進に関することである。令和 6 年度の本委員会の活動内容は、以下の 1)～9)である。

1) FD/SD 研修活動実績：

(1)新任教職員研修：4 月 1 日 14:15～17:20、4 月 2 日 9:30～12:20 に、新任教員 9 名、新任職員 7 名（年度途中転入者含む）を対象に実施した。内容は、大学組織の概要、カリキュラム等の概要など、8 領域に関する学内教職員による研修を実施した。

(2)科学研究費説明研修会・ピアレビュー：今年度は、科学研究費説明研修会は 6 月 19 日 9:30～11:30 で対面開催し、参加者は全教員 51 名（録画視聴含む）であった。科学研究費（以下、科研費）補助金申請の説明を申請事務担当者 1 名（久保絃子主任）から行い、学外講師（大分大学研究マネジメント機構 知的財産管理部門・部門長/URA 室・室長 総括 URA 松下幸之助教授）から「科研費獲得の方法とコツ：実例から学ぶより良い研究計画調書の書き方」のレクチャーを実施した。また、先立って 4 月に新採用教員 4 名に、科研費申請のインターネットサイト等の資料提供とサポート実施についてメールで案内した。ピアレビューは、令和 7 年度科研費申請分から研究室長か外部研究者が実施することを必須（教育研究審議会で決定）とし、28 名延べ 30 件が提出された。さらに、学外講師の松下幸之助教授からの添削指導を受講できるようなシステムや予算補助を整備し、5 名延べ 6 件が活用し、1 件が採択された。

(3)教育に関する研修：8 月 22 日 10:00～11:30 (Zoom) に開催した。参加者は全教員 65 名（録画視聴含む）、職員 2 名の計 67 名であった。テーマは「レポート課題における生成系 AI の考え方・対応方法」、講師は龍谷大学ライティングサポートセンター ライティングスーパーバイザーの島村健司先生であった。教員・学生の AI に対する認識の実態や大学教育に生成 AI を取り扱った動向の紹介、アカデミックライティングの観点からのレポート提示の留意点や生成系 AI を用いた論証型レポートの紹介がなされた。

(4)学生理解の研修：①新任教職員研修の 2 日目（4 月 2 日 9:30～9:50）に全教職員を対象に本学保健室職員より本学学生の保健室利用状況やカウンセラーとの連携等についてのミニレクチャーを実施した。②令和 7 年 1 月 16 日 10:30～11:30 (Zoom) に開催した。参加者は全教員 65 名と職員 9 名であった。理事からの推奨により事務職員へも録画視聴を周知した。テーマは「学生の特徴と相談対応の基本」、講師は本学カウンセラーの、おの心理臨床ルームとまり木 公認心理師 小野規子先

生であった。ポリヴェーガル理論（多重迷走神経理論）からみた学生対応の解説があった。事前事後アンケートにて「セクハラ被害のあった学生へのフォローや実習前教育」「学生指導がパワハラと受け取られる教員の不安と配慮」「担任がカウンセリングに繋ぐ方法」などの質問があり、講師より心理職の立場から回答を得た。

(5)人権に関する研修：12月24日10:30～11:30に対面で開催した。参加者は全教職員80名（動画視聴含む）。テーマは「インターネットによる人権侵害」、講師は大分県人権教育・啓発推進協議会人権啓発講師の進美保子氏であった。実際にあった様々な事例から分かりやすく説明された。「話題のSNS誹謗中傷から、何が問題なのかを説明され、自身はもちろん学生や自分の子どもたちへの注意喚起に役立つ」「自身の行動や他者からの見られ方を冷静に見直せた」などの感想があった。

(6)他委員会や教員の要望による研修：令和7年2月20日10:30～12:00（Zoom）に開催した。参加者は3月5日時点で録画視聴者含む教職員69名（教員55名、職員14名）、未視聴の教員7名であった。今年度はアンケートで要望の多かった内容とし、テーマは「性的マイノリティ（LGBTQ+）の支援」、講師は奈良女子大学研究院人文科学系人文社会学領域 三部倫子准教授に依頼した。事前事後アンケートにて「セクハラを受けた実習生への対応教員の性別」「マイノリティへの配慮を隠れ蓑にした犯罪防止」などの質問に回答を得た。

(7)職位・経験別の研修は自己の課題や関心が異なるため、自主的な活動にしている。研究・教育・大学運営に関わるような研修への参加を促進する目的で参加費の自己負担を軽減するため研修費用を補助することとし、今年度は教育に関して1名による参加1件あり、研修報告書が提出された。

2)学内競争的研究費の活用促進：

科研費の採択期日（2月末）後の令和5年度中の3月14日にメールにて学内競争的研究費の募集を開始した。3月27日締切までに奨励研究1件、先端研究2件、プロジェクト研究1件の新規応募があった。4月4日にFD/SD委員会主催の審査会（審査員7名：FD/SD委員会から4名、教育研究審議会メンバーから2名、担当理事1名）で審査し、審査結果により助成額を決定した。さらに、4月着任の新任者にむけて4月1日に募集案内を行い、4月30日締切までに奨励研究2件、先端研究1件の新規応募があった。5月8日にFD/SD委員会主催の審査会（同メンバー7名）で審査し、審査結果により助成額を決定した。しかし、令和6年度採択分のプロジェクト研究1件は、共同研究者の都合で辞退があり研究費は未使用となった。令和5年度採択分の2年目の研究課題2件と合わせて、令和6年度は、計8件への助成を行った。これらの研究成果（進捗状況）は、令和7年3月14日のアニュアルミーティングで報告された。

令和7年度の学内競争的研究費の募集は1月15日から開始した（締切3月26日）。

3)科学研究費補助金等外部研究費の獲得促進：

科研費申請の促進のために、全教職員対象に上記1)-(2)のとおり研修会を実施した。令和6年度の新規採択課題は6件（23.1%）で、学外講師からのピアレビューを受けていたのはそのうち1件であった。科研費継続課題も含めて奨学寄附金、受託研究、受託事業、共同研究等外部研究費獲得者は35名（64.8%）である。令和7年度科研費申請書の学外講師からのピアレビューは、新規申請29件のうち6件が受けていた。2月28日に採択結果が一部公表され、新規採択課題は8件（採択率27.6%、基盤研究B1件、基盤研究C7件）で、そのうち学外講師からのピアレビューを受けたのは1件（基盤研究C）であった。

4)国内/海外派遣研修の募集：

今年度は、応募申請者はなかった。

5)授業アンケート：

例年同様 Google フォームを使用した方法で実施した。アンケート対象科目は、1 年次生 37 科目、2 年次生 39 科目、3 年次生 40 科目、4 年次生 15 科目の全 131 科目（2 クラスのため、延べ 139 回）であった。担当教員は、Google Drive 上で結果を閲覧し、学生の自由記載への回答をキャンパススクエアの掲示板「授業アンケートの広場」に掲載するか、メールでの返答を促した。全体の科目ごとの回答数と平均値一覧は、年度末に FD/SD 委員会事務担当者が集計しホームページに掲載した。1 年次生の回答率は、1st は 8 割を超えており、3rd でも 6 割以上であった。2 年次生の回答率は、全体の傾向として、1st で 5 割前後、3rd になると 2 割前後と、減少していた。3 年次生の回答率は、科目によるばらつきがあり 2～4 割、4 年次生は 2 割程度であった。今年度は、昨年度に引き続き、入学時オリエンテーションや学年の初め、長期休暇後に、FD/SD 委員会のアンケート担当委員がアンケート協力の趣旨説明等メールを送付し学生へ依頼した。昨年度同様、科目担当教員が授業時間の最後にアンケート協力を口頭で伝えることで回収率が高まった科目があった。また、アンケートの実施状況をアンケート担当委員が適宜確認することで、確実な実施につなげた。次年度も学生が授業に対する意見を述べる機会として授業アンケートを継続する。大学院科目の授業アンケートは、今年度から Google フォームを用いた web アンケートに統一し、科目責任者に依頼した。授業アンケートは、前期開講は 5 科目、後期・通年開講は 8 科目の計 13 科目（11.8%）が実施した（前期課程のみ、例年並みの実施率）。大学の方針で次年度からの授業評価結果の公表に向けて、授業評価の運用を検討した。11 月の研究科教育研究委員会で聴取した意見をもとに非常勤講師の主な担当科目や履修が多いコースへの対応を再検討した。最終的に第 11 回教育研究審議会にて、特別研究、課題研究、非常勤講師担当の科目以外の博士前期課程において共通科目は毎年度、広域、助産、NP コースはできる限り毎年度、難しければ 1 年毎に授業評価の公表を必須とすることが承認された。次年度新学期に全院生に協力依頼のアナウンスを行う。

6)教員相互の授業参観に関する促進について

これまで非公式に行っていた授業参観や参観後の意見交換会の運用を検討した。最終的に第 10 回教育研究審議会にて、自律的な授業改善や教育での相互協力、人間科学と各看護学講座の科目間連動の一助を意識した教育を目指した肯定的なフィードバックを主とする基本方針により、Google フォームを用いた授業参観（講義と演習）の運用を行うことが承認された。次年度新学期に教員全体に説明会を開催し、運用を開始する。授業提供・参観者ともに教員評価にインセンティブを設ける方向（次年度に学長から提案）で実施を進めるが、運用の改善のため教育研究審議会に随時経過報告することになった。

7)アニュアルミーティングについて（令和 7 年 3 月 14 日、カレッジホールにて対面開催）

当日は教職員 47 名が参加し、学内競争的研究費の応募者による発表 8 題、一般演題 7 題が各 1 時間の持ち時間にて前日から掲示したポスターの前で発表し、自由討論形式による質疑応答を行った。

8)おおいた地域連携プラットフォーム教育プログラム開発部会 FD・SD 事業ワーキンググループ委員長がオンライン会議（メール稟議含む）に 3 回参加した。12 月 21～22 日開催のおおいた地域連携プラットフォーム主催 FD プログラム新任教員研修に本学から 1 名が参加した。

第7回大分合同FD・SDフォーラムは、「AI時代における高等教育の動向と教員の役割（愛媛大学教育・学生支援機構教授 中井俊樹氏）」のテーマで、8月2日に日本文理大学が担当し開催（対面とオンライン配信・オンデマンド配信）され、本学から6名の参加申し込みがあった。

9)学内全教職員へ他機関からのFD・SDに関する情報提供を随時行った。また、学協会等の外部資金（研究助成金）に関する募集案内を50件行った。

今後の課題

令和6年度以降、科研費等外部研究費獲得者の目標は教員の50%以上、科研費新規申請者における採択割合の目標は25%である。令和7年度科研費申請分から研究室長か外部研究者によるピアレビューを必須としたが、新規課題の採択率は27.6%であった。昨年度からの学外講師による科研費申請書の添削指導受講システムを継続活用する。

今年度は学部に加え大学院の授業アンケートも、Google フォームで統一的に実施した。学部では1年次生は、3rdでも6割以上の回答が得られた。特に2年次生以上は、科目担当教員が協力依頼の声掛けをすることにより、回答率を上げることが期待される。大学院の授業アンケート実施状況は現在11.8%であるが、次年度において授業評価の公表を検討することが承認され、教員、院生に対して一層の協力依頼に努める。

昨今のハラスメントや差別問題に対応できるよう、今年度は特に人権研修や対象理解のFD/SD研修を多く取り入れてきたが、次年度にも人権や対象理解をテーマとした研修のニーズがあり、理解醸成に努める。

2022年度新カリキュラムが定着した今、大学としてどのような看護師を育成したいのか、そのための教育の在り方を議論する。各科目群の目標達成のための授業設計の方法等を議論するFD研修（教育に関して）の企画を検討する。

今年度は、他の委員会や教員からの要望に関するFD研修には独自のアンケートをもとに企画してきた。各研修のアンケート結果からも多くの意見があり、例年の実績もふまえつつ企画を検討する。

次年度からは授業参観や参観後の意見交換の機会を持つことが承認された。学生への学習効果や効果的な取り組みの実際を知り自律的な授業改善に活かすことや、各科目群の考え方の相互理解の点から、授業参観の効果を把握する必要がある。必要時には運用の見直しも行っていく。

また、教育・研究・大学運営のための研修参加や国内・海外派遣研修費の利用者が少ないため、研修参加を促進するための方策についても検討する必要がある。

9-3-11 研究倫理安全委員会

委員長 濱中良志

副委員長 草野淳子

委員 小嶋光明、森加苗愛、川南公代、荒木章裕

外部委員 二宮孝富、野村文宏

事務局 吉野美穂

研究倫理安全委員会は令和 6 年度は 11 回開催した。1 月が休会であった。各月ごとに教員や大学院生等から申請された研究計画書の審査を行った。今年度の申請件数は 99 件で、そのうち 97 件が承認された。A 判定 13 件、B 判定 83 件、C 判定 2 件、審査前取り下げ 1 件であった。採択率の向上を目指すために、大学院生や教員からの記載要領の相談を受け入れた。大学院生の研究計画の記載内容が充実するように今後も申請時には「研究計画の申請の手引き」を熟読し、担当教員の指導を十分に受けることをアナウンスしたい。

研究倫理教育に関しては、一般社団法人公正研究推進協会の e ラーニング APRIN を導入して、教員全員が受講するように年度計画を立てた。毎年度 3 月末日までに教職員・大学院生が全員受講するよう依頼している。令和 6 年 3 月 31 日での修了者は教員 58 人、事務 5 人、大学院生 39 人であった。研究計画の提出時には、研究責任者・共同研究者の APRIN の修了書の提出を義務づけている。

令和 6 年度は新たに研究概要の公開データベースへの登録について教員及び大学院生へ周知した。来年度も基本的に令和 6 年度の方法で委員会運営を行う。

9-3-11 1) 動物実験小委員会

委員長 小嶋光明

委員 吉田成一、恵谷玲央、定金香里、岩下恵子、吉野美穂(事務局)

令和 6 年度の動物小委員会は含めて 5 回開催した。動物実験研究計画書 6 件の審査（新規審査件数 6 件;変更・追加件数 0 件）を行い、6 件が学長によって承認された。令和 6 年度では計画に沿った動物実験が 8 件実施され(うち 2 件は健康科学実験)、そのうち、安全を要する実験計画は 0 件、放射線を用いる実験 1 件であった。使用動物匹数はマウスが 312 匹、ラットが 68 匹で、総使用匹数は 380 匹であった。前年度の総使用匹数 315 匹に比べて今年度は 18%減少した。令和 6 年度に使用された動物実験おける「自己点検・自己評価」を実施すると共に、動物実験実施報告書を作成し学長に報告する。使用動物の慰霊祭は 2 月 26 日に実施した。動物実験教育訓練に関しては動物実験講習会(小嶋・恵谷)を令和 6 年 4 月 24 日(14 名)に、人獣共通感染症の教育訓練は外部講師を迎え令和 6 年 4 月 24 日(13 名)にオンラインで実施した。

今年度は飼育室に除湿機を新設した。残りの飼育室にも設置を検討する。

来年度も実験計画書の審査に加えて、実験実施中の状況や動物の健康状態について定期的に監視

を行い、必要に応じて修正を加えることで、動物の福祉を考えた実験が行われるよう継続的な取り組みを行っていく。

9-3-11 2) 遺伝子組換え実験安全小委員会

委員長 吉田成一

委員 小嶋光明

本小委員会は、遺伝子組換え実験の研究計画書の審査および必要に応じて教育訓練等を行う。

今年度は遺伝子改変動物等を使用する教員等がいなかった。

遺伝子組換え実験を行う教員等が生じた場合、必要な教育訓練等を行うとともに、研究計画書の審査が行える体制を維持する。

9-3-12 図書委員会

委員長 宮内信治

副委員長 堀裕子

委員 小野逸郎、甲斐史織、白川裕子、中野智子、藤本優子、森崎久美

図書館資料を収集・管理し、知（地）の拠点として職員の教育・研究及び学生の学修に資することを分掌とし、図書等の整備、図書館の運営及び図書館ホームページの整備・発信と図書館だよりの発行を行っている。

定常的な活動のほか、本年度の活動として、委員会選定及び学生リクエストによって新たに 1,647 冊の蔵書を整備した。広報誌「図書館だより」（発行回数 2 回<Vol.21(2024 年 7 月)、Vol.22(2025 年 1 月)>）の発行、図書企画展示（企画展示 6 回、オープンキャンパス特別展示 1 回）の実施、教職員の推薦図書を毎月紹介する「教職員おすすめの一冊」を継続し、教職員・学生の図書館利用拡大を図った。書庫狭隘化対策として、今年度は実習施設および研究室の図書 398 冊、視聴覚資料 45 点の除籍を行い、オープンキャンパス時には「図書リユースデー」を開催し、図書館の除籍図書及び学生・教職員の不要図書のリサイクルを行った。研究・教育がより効果的に行えるよう、文献デリバリーサービス「RepintsDesk」を継続し、新たに医学文献の検索・閲覧ができる株式会社メデオの「メディカルオンライン」の導入を行った（2024 年 4 月）。洋雑誌に関しては教員に購読希望のアンケートを実施し、選定雑誌を見直すとともに、購読形態を冊子体から電子ジャーナルへ移行することを決定した。学修支援としては、授業科目ごとに担当教員に参考図書の推薦を依頼し、「講義の理解を助ける図書・視聴覚資料」として案内を行い、リストを図書館 HP 上で公開している。

卒業生・修了生も利用できる休日開館を引き続き行い、新型コロナウイルスの影響が落ち着いてきたことから、学外利用者も増加傾向にある。卒業生・修了生や学外利用者の入館状況を次年度以降も

継続的に調査集計し、利用拡大のための方策を検討していく。

9-3-13 情報ネットワーク委員会

委員長 品川佳満

副委員長 佐伯圭一郎

委員 恵谷玲央、岡田悠希、佐藤栄治、久保紘子

本学のネットワーク、システム・クラウド系サービス（メール、グループウェアなど）、アプリケーション（SPSS、Zoom など）、共有機器（情報処理教室、教材作成室）の運用・管理、学生・教職員へのセキュリティ教育やユーザー支援などの定常的に行う業務を各委員が分担して行った。

定常的な業務に加え、本年度の活動としては、学内無線 LAN アクセスポイントの増設、実習センターの無線 LAN 整備、セキュリティ強化のための多要素認証の導入を行った。また、次年度の更新等の準備として、情報処理教室更新仕様書の作成、教務システム DB 更新に向けた準備、非常勤講師向け Google Workspace アカウント利用ための整備を行った。学生を対象とした情報セキュリティ講習会を 7～8 月にオンデマンド配信で実施し、対象とした 2～4 年次生・院生の 66%が受講した。教職員を対象とした情報セキュリティ講習会は、7/23 にオンライン形式（録画による後日視聴あり）で実施し、ほぼ全員が参加または後日視聴した。

今後も定常業務を継続しつつ、保守切れを迎えるシステムやサーバについては、計画的に更新を行っていく。また、セキュリティ対策を強化しつつ、保守やライセンス費用の増加などにも配慮して、契約内容等の見直しも検討する。

9-3-14 ハラスメント防止・対策委員会

委員長 阿部剛

委員 稲垣敦、小野美喜、久保紘子、田中保之（外部委員、弁護士）、矢野亜紀子、吉村匠平、関根剛（オブザーバー）、川島貴博（事務局）

令和 6 年度のハラスメント防止・対策委員会として 1)～2)の活動を行った。

1) 委員会の開催

6 月 20 日、2 月 3 日に委員会を開催した。

2) 教職員向けハラスメント研修会の開催

8 月 6 日に対面及び録画で、総務グループからハラスメント防止等に関する規程の概要説明と、社会保険労務士篠原事務所代表 篠原丈司氏を講師として「ハラスメントの基礎知識」の演題でハラスメント研修会を開催し、対面 53 名、録画視聴 24 名の計 77 名の参加があった。

次年度も委員の知識を深めるため、第 1 回委員会で弁護士の田中委員から最新の裁判例の紹介を行うとともに、ハラスメント相談員の体制整備を検討する。

9-3-15 衛生委員会

1 号委員 阿部剛

2 号委員 角匡幸（産業医）

3 号委員 小野治子

4 号委員 小嶋光明、川島貴博

オブザーバー 安東悦子、時松美香

事務局 吉野美穂

衛生委員会は、職場の労働災害及び健康障害を防止し、職員の安全及び健康の保持増進を図るために活動を行っている。本年度は、計 9 回の委員会を開催し、健康診断結果の把握や職場巡視等を行った。

1 職員の健康管理

- (1) 定期健康診断を 4 月 10 日に実施した。健康診断結果を確認し、精密検査の必要がある職員に当該精密検査受診を勧奨した。
- (2) 労働安全衛生法に基づくストレスチェックを 5 月 20 日から 5 月 31 日に実施し、集団分析結果から健康リスクの確認を行った（65 名受検、受検率 87.8%）。
- (3) インフルエンザ予防対策として、予防接種希望者を募り、11 月 18 日に学内接種を行った（希望者 32 名 接種者 29 名）。
- (4) 有機溶剤を使用する実験室の作業環境測定を 5 月 24 日と 11 月 12 日に実施した。また、局所排気装置（ドラフトチャンバー）の自主点検を 11 月 12 日に実施した。共に測定結果は適切であった旨委員会で報告した。
- (5) 夏季休暇、年次有給休暇の積極的な取得を教職員へ呼びかけ、取得状況を教育研究審議会等で報告した。
- (6) 公立学校共済組合が実施する人間ドックは 20 名、器官別健診は 13 名が受診した。
- (7) 長時間の時間外勤務を行った教員 5 名に対し、産業医の面接指導を行った。

2 健康増進活動支援事業

- (1) 教職員の健康管理への意識向上を図るため、職場ウォーキングラリーを開催し、教職員 52 名（14 チーム）が参加した。
- (2) 各種スポーツイベントへの参加負担金助成事業は 1 件 1 名の参加料を助成した。

3 職場巡視

12 月 13 日と 1 月 24 日に屋内を巡視した。その結果、壁の大量のカビ（雨漏りによる）や故障したまま放置された血圧計等を確認した。職場巡視の結果は事務局財務グループと共有し速やかに修繕等を依頼した。その他、照度、温度、CO₂（二酸化炭素）濃度について適正であることを確認した。

CO₂（二酸化炭素）濃度について、事務局内がやや高めの数値であったため、換気に注意することが必要である。

来年度も職場巡視を行い、必要な箇所において整備を行う。

9-3-16 教員評価委員会

構成員 稲垣敦（研究科長）、福田広美（学部長）、阿部剛（事務局長）、
影山隆之（学長が指名した職員）

教員評価委員会は、(1)大学の基本理念を実現する、(2)教員の研究・教育などの活動をより活性化するための目標を与える、(3)教員が自律的・主体的に活動の点検・評価をすることで今後の目標をより明確化するために、理事長及び理事以外の常勤教員の年間の活動に関する教員評価を行い、理事長・学長に報告する。また、評価方法の改善や昇任人事の提案及び準備も当委員会の分掌事項である（公立大学法人大分県立看護科学大学教員評価の実施に関する基本的な方針）。

本年度の委員は、学部長、研究科長、事務局長及び学長の指名（役員会：9月25日）による影山隆之教授（精神看護学研究室）が委員を務めた。また、昨年度の試行を継続し、学生による授業アンケートの結果を自己評価書に記載し、次年度の目標を記載する欄を継続したが、評価点には加えなかった。一方、記入方法に誤解が生じないように、説明を若干変更した。今年度は12月16日に自己評価書等の資料の提出（〆切：1月15日）をメールで教員に依頼したところ、事前に連絡のあった1名からの提出が遅れ、1月17日に45名からの提出が完了した。その後、所定の方式で評価を行い、その結果が適切であることを合議で確認し、学長に評価結果を報告した後、学長より差し戻しがあったため再検討し、修正し、3月3日に学長名での評価通知書を封筒に入れ、棚入れし、総合評価の役職カテゴリー別の頻度分布表をメールで送った。その後、3月7日に教員1名から評価結果に対する異議申立てがあり、学長と個人面談（3月10日）を行った。これにより、第4期中期計画の評価指標【21】-1「教員評価の実施：年1回以上（第4期中毎年度）」は達成した。この教員評価結果を受けて、令和6年度人事基本計画及び昇任基準に基づいて昇任の可能性を検討し、教授3名、准教授3名、講師1名、学内講師2名の合計9名の昇任案を理事長に提出した。この結果、全員の昇任について学長の承認が得られたため、推薦書や業績目録等の必要書類を準備し、教育研究審議会（3月13日）、理事会・経営審議会（3月19日）で理事長・学長が昇任案を諮り、承認された。

教員評価については、以前より煩雑さや教員の負担感、目標管理型への変更等が指摘されており、これが今年度の検討課題であった。そこで、昨年度、第4期中期計画【23】教職員の評価に「教職員の評価制度を継続して発展させる。」を入れ、評価指標として【23】-1「教員評価の方法の改善（第4期中）」を入れた。これについて委員会（10月2日）を開催し、他大学の教員評価を参考にし、それぞれのメリット・デメリットを明確にした上で検討した結果、現在の実績評価型・スコア型の教員評価を継続することとなった。

教員評価はこれまでの実績評価型・スコア型を継続することが決まったため、次年度は、授業アンケートの結果や授業参観の加点等について検討する予定である。

9-4-1 総務グループ

総務グループは、教育研究審議会、理事会及び経営審議会に関する業務、中期計画に関する業務、大学の組織・定数、理事長選考、教職員の採用・人事、給与、福利厚生、健康診断等に関する業務を行っている。

教育研究審議会は、大学の教育研究に関する重要事項の審議のため、8月を除く年11回開催し、理事会及び経営審議会は、法人の経営に関する重要事項の審議のため、4月、6月、9月、12月、3月の年5回開催した。

令和6年度は、第4期中期計画の初年度であり、第4期から新たに項目ごとの評価指標が加わったため、その進捗管理を行った。令和6年度の目標達成のための具体策の策定、その具体策の進捗状況、令和6年度の実績見込み及び令和7年度の具体策の策定について各項目の担当委員会等に照会し、取りまとめを行い、内部質保証推進会議の承認を得て、教育研究審議会及び理事会・経営審議会にて報告を行った。

教員の採用は、定年退職等によって空席となる研究室の教員補充のため、看護アセスメント学、成人看護学、小児看護学、NP、看護管理学、社会看護学、地域看護学、国際看護学の8研究室11名の公募を行い、選考を行った。選考の結果、9名の採用を決定し、採用が決まらなかった2名分については、臨時助手を採用することに決定した。

9-4-2 財務グループ

令和6年度、財務グループでは、教育研究環境の質的向上と大学経営の安定性を図るため、第4期中期計画の方針に沿って、自己収入の安定的確保、外部資金の獲得促進、経費の削減、資産の活用、施設・設備の計画的整備等の取組を進めた。

授業料収入については、納入の遅れが想定される学生や保護者に対して分割納付等の提案を行い、滞納の未然防止に努めた。施設貸出については、ホームページで施設貸出の情報を整理し、利用の流れや施設写真を分かりやすく掲載した。これまでの継続的な取り組みもあいまって、新たな利用者の獲得にもつながり、貸出件数は372件（前年度比144%）、財産貸付収入は961千円（同344%）と大幅に増加した。今後も債権管理の強化を継続しつつ、教育研究に支障のない範囲での施設貸出を進め、自己収入の確保を図る。

外部資金については、全学的に情報提供を行い、公募情報の早期共有に努めた。科研費申請に関する研修会では、制度変更点や不正使用の事例を取り上げ、教職員の理解を深めた。引き続き、教員の科研費申請等を支援し、助成金等の獲得を積極的に後押しする。

経費削減の観点では、廃棄予定の物品に関する情報共有を通じて再利用を促進し、無駄の削減とコスト意識の醸成に努めた。電力の使用に関しては、学内の照明器具や屋外街路灯のLED化の節電・省エネルギー対策、デマンド管理などにより最大需要電力の抑制を試みたものの、異常気象の影響により最大需要電力が上昇し、契約電力、電力使用量ともに前年をやや上回る結果となった。引き続き、契約内容や運用方法の見直しを進め、光熱水費全体の抑制に努める。

資産の管理においては、目的積立金を活用し、地域在宅・NP 実習室の無線アクセスポイントの増設や、南大分キャンパスの Wi-Fi 環境整備、ドラフトチャンバーの更新、講義棟等トイレの洋式化などを実施し、教育研究の質的向上を図るための設備の充実を図った。また、余裕資金は定期預金により堅実に運用し、中長期の資金計画に基づき適切な管理を徹底する。

施設・設備に関しては、県の 5 ヶ年保全計画に基づく補助金を活用し、管理棟送風機更新工事を行った。今後も、定期的な点検と計画的な修繕・更新により、安全性と機能性を維持し、学内環境の安定に寄与していく。

財務グループは今後も、限られた財源を最大限に活かす工夫をしながら、本学の教育・研究・組織運営を支えていく。

9-4-3 教務学生グループ

教務学生グループは、学部及び大学院の入学試験、入学手続き、入学式及び卒業式、授業料・入学料制度、シラバス、奨学金、教育システムの運用、学生生活の支援、学生及び職員の健康管理に関する業務を行っている。

入学式は、令和 6 年 4 月 8 日（月）に大学内の講堂で行われた。学部の入学生 80 名、大学院の入学生 34 名に対して、麻原学長から入学許可が行われた。

卒業式は、令和 7 年 3 月 18 日（火）に大学内の講堂で行われた。学部の卒業生 85 名、大学院の修了生 32 名ひとりひとりに、麻原学長から学位記が手渡された。

教育システムの運用では、令和 7 年度大学入学共通テストより、平成 30 年 3 月に告示された新しい高等学校学習指導要領に対応した出題教科及び科目になることに伴い、各種データの出力や取り込みが行えるように所要の改修を行った。

学生生活の支援では、円安や資源価格上昇に伴う物価の高騰が学生の生活に影響を与えていることから、学生が安心して修学していけるように、物価高に対する経済対策として、令和 6 年 5 月に学部生 330 名と大学院生（広域看護学コース及び助産コース）32 名の計 362 名に、食堂で利用できる 1,000 円分のチケットの配布を行った。

教務学生グループの業務は、教務関係の各委員会の業務を担っている側面もあるので、業務を通して必要な提案及び執行を行い、大学の諸目標を達成するために尽力していく。

9-5-1 図書館

・ 2024 年度利用者数	
図書館入館者数（延べ人数）	19,694 人
学外からの利用者数（実人数）	391 人
・ 2024 年度受入図書冊数	1,647 冊
うち購入数	1,637 冊
・ 2024 年度受入雑誌タイトル数	152 点
うち購入数	120 点
・ 図書等資料蔵書数（2025 年 3 月 31 日現在）	
蔵書冊数	88,329 冊
所蔵雑誌タイトル数	649 点
電子ジャーナル購読タイトル数	599 点
電子ブック購読タイトル数	15 点
視聴覚資料	2,336 点

9-5-2 看護研究交流センター

センター長 稲垣敦（研究科長）

副センター長 影山隆之

メンバー 加藤典子、草野淳子、定金香里、藤内美保（以上、推進会議メンバー）、
篠原彩（専任教員）、神崎純子（事務局）

看護研究交流センターの目的は、本学の教育・研究を通しての地域貢献、地域の看護職者の研究能力の開発と質的向上、並びに看護に関する国際協力・支援の拠点施設としての役割を果たすことである（公立大学法人大分県立看護科学大学看護研究交流センター規程第1条）。また、当センターの分掌事項は、(1)予防的家庭訪問実習の運営、(2)看護職者の研究支援、(3)看護職者を対象とした継続教育、(4)地域、産官学との連携、(5)知的財産の管理、啓発、保護及び活用等、(6)NP(診療看護師)の教育推進と社会貢献、(7)学術ジャーナルの編集・刊行、(8)健康増進に寄与する地域貢献、(9)その他である（公立大学法人大分県立看護科学大学看護研究交流センター規程第3条）。

今年度は、学術相談員の制度及び職務発明等における保証金に関する細則を策定した。また、学術ジャーナルチームは、インターネットジャーナル看護科学研究について国内の看護系学術雑誌では2番目となるプレプリントサーバー（Jxiv）やデータ公開（J-STAGEDData）の利用を開始し、また、25周年記念特別号を発刊した。NP教育・事業推進チームは、NP研究室を設置し、初めてNP資格を有する専任教員（講師）が着任し、NP教育に携わった。継続教育推進チームは、県内医療施設への看護研究支援、看護研究交流会、卒業生・修了生を対象としたホームカミングデイ等を実施し、健康増進プロジェクトチームでは、学生とともに15の地域のイベントでボランティアに参加した。その他については、各チームの項を参照。

次年度は、教員の退職に伴い、産学官連携推進チームとNP教育・事業推進チームのリーダーが交代し、事務局員も異動のため交替するため、スムーズに新体制に移行し、業務が滞らないようにすることが最重要課題である。また、地域交流チームでは予防的家庭訪問の協力者の減少、学術ジャーナルチームでは投稿の増加に伴う編集事務局の負担増が課題であり、それぞれの検討を進める。さらに継続教育チームは広報委員会とコラボして、高校生、卒業生・修了生、看護職を対象とした新しいイベントを開催予定である。

9-5-2 1) 地域交流チーム

リーダー 影山隆之

メンバー 荒木章裕、神矢恵美、神崎純子、篠原彩、妻木美香、福田広美

本チームは予防的家庭訪問実習を運営するとともに、おおいた地域連携プラットフォームに対する窓口となり、チーム会議を年11回開催した。

今年度も感染症の著しい流行はなかったことから、予防的家庭訪問実習では学生による家庭訪問

を、通年実施することができた。このための実習協力者への依頼、実習要項の作成と学生・教員へのオリエンテーション、本実習における感染対策の実施、進行状況の管理（学生・協力者・担当教員の調整）等を行った。ただし全 80 チームに 1 名ずつの協力者を確保することは困難で 72 名の確保にとどまったため、16 の学生チームが 2 つずつ合流して訪問する方式とした。その結果、協力者の同意が得られた場合には、学生数が増えても大きな問題を生じないことが確認できた。このように例年と異なり合同で訪問するチームも存在したが、本実習における学びの評価ではどの学年も 90%以上の A 評価が得られた。そのため、次年度以降もこの方法を部分的に常態化した場合の課題や運営方法について検討した。協力者の居住地域について学生が理解を深められるよう、市の支所長に学生講話を依頼した。年度末には各チームの担当教員が協力者を訪問した。

これらのために、地域ステークホルダーとの運営会議を 2 回開催し、実習報告、地域の状況についての情報共有、新規協力者開拓のための方法に関する協議等を行った。協力者の確保という点を除けば、実習全体としてはスムーズに進行した。担当教員の役割など、実習運営の細部について改善を検討し、次年度の実習要項を取りまとめた。

前年度、地域住民が本実習をどのように認知しているかについて住民調査を行った結果をまとめ、日本公衆衛生学会総会にて発表した。また新型コロナウイルス感染症パンデミック下における本実習の取り組みについてまとめた論文を、日本プライマリ・ケア連合学会誌に投稿して掲載された。

おおいた地域連携プラットフォームでは主に地域交流・課題検討部会と教育プログラム開発部会に参加し、県内の高等教育機関・地方自治体・産業界団体と交流・協議を行った。

次年度は、一部のチームで学生約 8 名が協力者 1 名を訪問する体制を常態化し、記録等のシステムを修正する予定である。引き続き感染症対策に留意しつつ予防的家庭訪問実習の活動を継続し、並行して協力者確保の戦略や実習運営方法の改善を検討し続けることが、課題である。

9-5-2 2) 継続教育推進チーム

リーダー 草野淳子

メンバー 宇留嶋佳子、神崎純子、後藤成人、堤恒貴

1. 目的

本チームの目的は卒業生、修了生、地域の看護師に教育機関卒業後の看護教育の継続支援を行うことである。具体的活動として、ホームカミングデイ、医療施設への看護研究支援、看護研究交流会がある。

2. 地域貢献としての看護研究支援

医療機関への看護研究支援の目的は、地域貢献の一助として、看護の質改善等を目指して看護研究への取り組みを促進することである。

2024 年度は、6 施設（大分県立病院、大分赤十字病院、大分医師会立アルメイダ病院、衛藤病院、

えとう内科病院、国立病院機構別府医療センター、国立病院機構大分医療センター）から研究支援の依頼があった。各施設に講師を2～3人派遣し、看護研究支援を実施した。支援内容は、研究計画の立案、データ収集方法、分析方法、抄録の作成方法などの指導、看護研究に関する講義であった。施設での面談やメールでの対応を行い、研究成果は院外の学会や院内で発表した。研究支援に関して、各施設からは次年度以降も継続の希望があった。

3. 看護研究交流会の開催

看護研究交流会の目的は、本学の看護研究支援を実施している医療施設を招集し、各施設で看護研究を行う上で情報交換、情報収集の場を提供することである。

7月5日（金）に看護研究交流会をオンラインで実施した。参加施設は、6施設（大分県立病院、大分赤十字病院、大分市医師会立アルメイダ病院、江藤病院、別府医療センター、大分医療センター、衛藤病院、えとう内科病院）であった。教員による研究倫理の講義の後、教員の研究紹介が行われた。協議では、派遣教員も参加して、意見交換が行われた。施設側が考える看護研究を行う人材育成として取り組んでいること、困難感についてご意見をいただいた。オンラインによる実施希望が多く、来年度もオンラインにて実施する。

4. ホームカミングデイの実施

ホームカミングデイの目的は、大学と卒業生、修了生とのつながりを強固にし、連帯意識の醸成、強化を目指すことである。

11月16日（土）に、ホームカミングデイを実施した。本年のテーマは「大分の医療を支える同窓生・アドバンス看護師への道のり、様々な現場での看護-」であった。麻原学長のスピーチの後、招聘した4人の卒業生、修了生に15分のスピーチをしていただいた。総合討論では、現在の立場になるまでの苦労などの質問があった。参加者は同窓生8人、学部生2人、現大学教職員11人、旧大学教員1人であった。ホームカミングデイ終了後は、食堂にて同窓会主催による懇親会が実施された。毎年のホームカミングデイ実施は参加者が少ないことが、問題として挙げられた。来年度以降は、ホームカミングデイは4年毎に行われる同窓会総会に合わせて行うことになった。他年については、卒業生、修了生、地域の看護師を対象とした継続教育に関する行事を検討する。

9-5-2 3) 産学官連携推進チーム

リーダー 加藤典子

メンバー 安部翼、神崎純子、佐藤栄治、篠原彩、樋口幸

産学官連携推進チームでは県内企業等との共同研究及び受託研究を促進し、地域企業の活性化を図ることを氏名としており、県内外の企業等からの研究以来・技術相談の窓口となっている。チーム会議は月1回開催し、企業等からの研究依頼や本学研究者からの相談等について情報共有を行うとともに、本学の強みを活かした産学官の連携を推進できるよう務めている。

本年度は、昨年度の取組であり県内の企業等のニーズと教員のシーズのマッチングをより推進するため、研究シーズ集を大学のホームページに掲載するほか、シーズ集にアクセスできる内容を含めたチラシを5月に県内の150か所に送付した。本年度は、1月には産業創造機構の情報誌「創造おいた」1月号に掲載し、さらなる周知の拡大を図った。また令和6年度大分県医療ロボット・機器産業協議会医療関連産業参入促進セミナーにも参加した。このような取組の結果、本年度のシーズ集へのアクセス件数は945件であった。また、本年度の企業等からの受託研究は1件、共同研究は1件、相談件数は1件であった。

産学官連携推進の体制基盤の強化として、昨年度から配置された知的財産アドバイザーの相談件数は、昨年度は10件であったが、今年度は12件と相談件数の増加が見られた。また、職務発明等における補償金に関する細則の策定及び学術相談規程の策定に向けて準備を行った。

人材育成の一環として、教職員及び大学院生を対象に7月に知的財産アドバイザーの松下幸之助先生を講師に、「アイデアは財産」をテーマに研修会を実施した。当日の受講者数は、教職員50名、大学院生22名の合計72名であった。終了後のアンケートでは、「とても理解できた」が49%、「理解できた」が47%であり、ほとんどすべての受講者が理解を深められた。

今度の活動としては、シーズ集の更なる周知のため、県庁の関係部署との連携を図るほか、今年度策定した規定を踏まえて企業等との連携を推進していきたい。

9-5-2 4) NP 教育・事業推進チーム

リーダー 藤内美保

サブリーダー 甲斐博美

委員 足立綾、石田佳代子、内倉佑介、大島操、加藤典子、神崎純子、草野淳子、濱中良志、
濱本房子、廣瀬福美、山田貴子、吉田成一

オブザーバー 麻原きよみ（学長）、阿部剛（事務局長）

NP コースの教育の充実と円滑な NP 教育を行うとともに、NP 活動が発展するために、外部機関との連携をとり事業を推進することを目的としている。以下、今年度の取り組みを記載する。

・大学院履修規程の一部改正

- 1) 8割の合格基準について、令和5年度からのカリキュラムにより科目名や専門科目の変更があったことから、見直しを行った。結果、共通科目は、生体科学特論、病態生理学特論、フィジカルアセスメント学特論、専門科目は全ての科目が合格基準8割であるとし、規程変更を行った。
- 2) 特定行為実習は、令和5年度のカリキュラムから1年生の1月からとしていたが、5症例を経験するためには期間が必要であることから、2年次前期の科目に履修学年の変更のため、規程変更を行った。

・新規実習施設の開拓

今年度は、①一般社団法人津久見市医師会介護老人保健施設つくみかん、②社会医療法人三愛会介護老人保健施設たばる、③社会医療法人三愛会たばるクリニックの3施設を新規実習施設で実習を

行った。

令和7年度は2年次の学生が12名と多いため、実習施設を開拓する必要があった。①社会医療法人敬和会介護老人保健施設豊寿苑、②社会医療法人三愛会介護老人保健施設わさだケアセンター、③おしうみファミリークリニックにご協力の承諾を得ており、次年度から実習を行う。

・特定行為実習及び特定行為補講実習

2年次生は、1年次の特定行為実習で経験できなかった特定行為を6月17日～8月30日の期間に豊後大野市民病院、大分岡病院、別府発達医療センターで補習実習を行った。さらに9月からのNP実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでも経験できなかった特定行為が3区分3行為（低圧胸腔内持続吸引、硬膜外カテーテルの鎮痛剤投与、持続点滴中の降圧剤）あった。厚生連鶴見病院の協力を得て、3名が令和7年2月3日～5日まで実習を行い、全員が5症例の特定行為を経験することができた。

1年次は、特定行為実習を行い、2月3日～2月28日までを予定している。豊後大野市民病院と大分岡病院で膀胱瘻や創傷管理の実習を行った。

・質担保の教育について（実習前試験、進級試験、口頭試問、修了試験など）

1)口頭試問の強化を今年度は行い、6月18日、9月3日、12月17日に3回実施した。目的はNPとしての判断力向上のための基本的知識を定着させること、口頭試問により断片的知識や暗記した知識ではなく、応用力や説明力を付けること、自己の学力をフィードバックしモチベーションに繋げることである。結果は、個人差が大きく順調に成果を上げる学生もいるが、時間をかけて支援する必要のある学生もいる。

2)2年次の実習前試験を6月11日に実施した。模擬患者の協力もあり、患者目線からのコメントももらった。受験者6名は全員合格した。

3)特定行為に係る試験では、1年次生に対して、2月4日に筆記試験、2月6日にOSCEを実施した。OSCEは第三者評価者としてNP修了生の原光明診療看護師が行った。今年度から評価表も改善を行った。結果は1名が再試験対象となったが最終的に合格となった。

4)進級試験は2月18日に実施した。11名が受験した。8割を合格基準としており、3名が2月25日に再試験を受験した。結果は1名が不合格のため、留年となる。

5)修了試験は、1月23日に実施したが、全員8割未満だったため、1月30日に再試験を実施した。

6名全員が8割以上の高得点であり、全員が日本NP教育大学院協議会が主催するNP資格認定試験を受験できることとなった。

6)NP資格認定試験は、3月2日に名古屋で開催された。小児1名、老年5名が受験した。

3月7日に合格発表があり、全員が合格した。

・地域枠確保の推進（リクルートなど）について

今年度も県内地域枠の確保のためにリクルート活動を実施した。中津市民病院、長門記念病院、杵築市立山香病院、国東市民病院、若宮病院（日田）、聖稜岩里病院、西別府病院、大久保病院、畑病院、大分こども病院に訪問した。今年度の地域枠の受験生は、6名が受験し5名が合格した。

・医療費確保基金：看護学生学習環境整備事業（補助金）採択

特定行為のためのシミュレーターや機材の整備のために、補助金の申請を行い、令和6年10月10日付で交付決定され、14,154,000円が補助された。これまで特定行為のための器材などは業者や実習施設が善意で提供してくれていたが、学生は十分な練習ができないなどの課題があった。今後、本

学が特定行為研修の拠点として地域貢献する役割を担うことも必要である。

- ・シミュレーターのシナリオ等の活用（臨床推論能力向上のための演習）

実習室に設置されたシナリオとふりかえ朗を活用し、M1 に対しては在宅事例を用いた演習を全員で実施し、実習を未経験の在学生にとって実例に向き合って検討したうえで演習することで理解が深まった。M2 に対しては、実習終了後の探究セミナーの科目の中で、倫理的意思決定に関する在宅事例を提示し、事前学習を含めた実例演習を実施した。実習経験を基にディスカッションが深まり各自の経験したケースの学びが更に深まった。両学年ともに実際の症例で展開することの学びの大きさを実感した。

- ・NP 実習室整備について

シミュレーターのシナリオとふりかえ朗、ポケットエコー、練習用ファントムを活用できるように実習室の整備をした。新しく入ったシミュレーターの安全かつ適正な使用ができるようにマニュアルを作成し、学生が頻繁に使用できるようにした。ポケットエコーは、実習に携帯し実習期間中継続して練習できるように物品管理運営を行った。

地域在宅 NP 実習室には、無線 LAN のアクセスポイントを設置していただいたことにより、講義や演習で実習室を活用できるようになった。

- ・実習施設合同会議

第 1 回は、7 月 25 日に実施した。今年度の実習計画は承認された。

第 2 回は、令和 7 年 2 月 13 日に実施した。実習施設の参加者は NP 実習 I の病院は、8 施設、実習 II の診療所は 5 施設、老健は 6 施設、障害児施設 1 施設である。また、令和 7 年度の新規実習施設も 2 施設の参加があり、外部の参加人数は 80 名以上であった。今年度の実習評価は、学生が主体的で目的をもって実習をしているという大半の実習施設からの意見があった。要望として、卒後研修プログラムを大学で考えてもらいたい、実習生からの要望があれば受け入れ側で改善したいといった意見があった。

- ・特定行為管理委員会

第 1 回は、7 月 23 日に実施した。外部委員は、犀川委員長、井上委員、大戸委員、薬剤師会からは新たに中芝会長が参加した。今年度の実習計画について承認された。

第 2 回は、3 月 7 日に実施した。今年度は事前に学内委員が、学生の特定行為に関するレポートなどを確認した。当日、外部委員に特定行為レポートを中心に確認してもらった。

結果、6 名全員が 17 区分 31 行為全てを認定の評価基準でよいとの評価があり、麻原理事長に報告した。

- ・NP 修了生活動推進施設交流会開催について

第 2 回の NP 実習施設合同会議（2 月 13 日）に続いて、「地域で輝く診療看護師（NP）を育成・支援する看護管理者の役割」というテーマで、津久見市医師会立津久見中央病院の戸田美穂子看護部長に講演いただき、23 名の参加があり、組織体制としてどのようにして診療看護師を増やすかの方針の確認、診療看護師が組織に与える影響による組織に成長等、有意義なディスカッションが出来た。交流会後の声から、看護管理者からの発信は参加施設の看護部や医師たちに有益なものとなり、活動推進を今後も継続してほしいとの要望も複数寄せられた。

・修了生と大学教員との交流会

本年度は「中小規模病院における診療看護師（NP）の活動と病院経営への有効性」というテーマで、令和 7 年 2 月 7 日（金）に、本学 23 講義室での現地開催（対面）とオンライン（Zoom）を併用して実施した。参加者数は 36 名だった。参加者アンケートの結果から、講演や質疑応答などを通して、プライマリ・ケア領域の診療看護師（NP）の活動について理解でき、また、交流会を継続して欲しいとの意見などが得られた。なお、本情報を大学アルバムに掲載し発信した。

・入学前オリエンテーション

令和 7 年 2 月 3 日に入学前オリエンテーションを実施し、合格者 10 名が参加した。在学中の全体スケジュールや時間割、試験や事前に学習しておくことなどについて説明した。

・厚労省関連（事務局との連携、報告書、施設等登録、変更手続き等）

特定行為研修実習協力施設について、新規 3 施設の追加登録を行った。結果、実習協力施設は、前年度登録の 24 施設と合わせて、27 施設となった。併せて、年次報告書の提出、指導者及び特定行為管理委員の変更登録を行った。看護研究交流センターの事務職が、教員と連携・協力しながら、特定行為研修実習に関する事務手続きを滞りなく行った。

・NP 教育や修了生の活動の発信

1)第 44 回日本看護科学学会が 12 月 7～8 日に熊本で開催された。草野、藤内が学会企画委員で、「プライマリケアの診療看護師が地域医療で果たす役割 ～医療資源が限られた地域への新たな戦略～」のテーマでシンポジウムを行った。山本則子氏（東京大学）と藤内が座長を務め、演者は本学修了生の管谷愛美氏（別府医療センター）、光根美保氏（中津胃腸病院訪問看護ステーションいちよう並木）、本学実習施設の大東よつば病院立川洋一院長、山口市徳地診療所診療看護師の中山法子氏が発表した。

2)日本 NP 学会では、草野が座長を務めた「医療的ケア児その人らしい生活を送るために生涯を見据えた成人移行支援」のセッションや、藤内が座長を務めた「患者さんが望む最期を叶えるために ICT を活用した看護師の死亡診断補助を進めていくにはー」その他、多くの修了生も研究発表し、優秀賞の受賞もあった。

3)看護国際フォーラムの来年度の企画で「診療看護師（NP）と拓く看護の未来 地域におけるシームレスな取り組み」において、谷山尚子氏（ヒカリノ診療所）、戸田看護部長（津久見中央病院）、エクランド・源・稚子 NP が講演し、甲斐講師と藤内が座長を務めた。

4)杵築市立山香病院が主催する杵築市地域医療フォーラムが 2025 年 3 月 22 日、杵築市健康福祉センターで、「MaaS によって新たに変わる暮らしを考える」のテーマで開催された。本学の NP 修了生の竹尾千恵診療看護師が実演発表を行った。本学から、藤内がシンポジストとして参加した。

医療 MaaS の NP 実習の提案の意見もあった。

以上、多岐にわたる活動を行ってきた。今年度リクルート活動を積極的に行ったが、小児 NP の受験者がいなかったのも、小児 NP の活動の推進や広報活動、積極的な募集活動を行う必要がある。

9-5-2 5) 学術ジャーナルチーム

リーダー 定金香里

メンバー 秋本慶子、恵谷玲央、神崎純子、白川裕子、田中佳子、徳丸由布子、中釜英里佳、
G.T.Shirley（学外）

本チームは、インターネットジャーナル「看護科学研究」の編集事務局として、投稿論文の受付、確認作業、編集担当委員の選定、査読者・著者・編集担当委員間の連絡、英文校正、編集作業、Webページの作成、J-STAGE へのデータ登載、運営費の管理といった業務を担当した。「看護科学研究」の運営自体は、外部組織である「看護科学研究」編集委員会が担っている。

1. 22 巻の発行

本年度は、原著 4 本、総説 1 本、研究報告 4 本、トピックス 1 本の計 10 本の論文を掲載した。そのうち、1 本は英語論文であった。

2. 論文の受付、編集業務

2024 年の新規投稿数は 21 件で、前年から継続して処理した論文は 11 件であった。新規投稿数は前年より 6 件、継続処理数は 1 件増加した。その結果、処理件数の増加に伴い作業負担が増大し、一部に作業ミスが発生した。

3. ジャーナルのオープンサイエンス化

J-STAGEData の運用を開始するための事務局体制を整備した。希望者は 6 名いたが、J-STAGEData が投稿論文の根拠データを登載するためのデータベースであることを十分に理解していないケースが多く、認識の誤りに基づく希望が大半だった。

4. 投稿規定の改定

J-STAGEData に関する規程、臨床試験事前登録に関する規定を追加した。また、人を対象とした臨床研究について、所定の登録サイトへの事前登録が必要であることを新たに追加した。J-STAGEData やプレプリントサーバーの利用を許諾したことに伴い、ダブルブラインド制査読の維持が困難であることを投稿規定に追加した。

5. 掲載論文の撤回

21 巻に掲載した論文一篇に関して、研究計画とは異なるプロトコルで収集されたデータが使用されていたことが判明したため、編集委員会の審議を経て J-STAGE に撤回記事を掲載した。また、医学中央雑誌、メディカルオンラインの各データベースにも撤回を通知した。

6. 25 周年記念特別号の発刊

歴代の編集委員長、看護研究交流センター長、幹事および大分県立看護科学大学学長にご寄稿いただき、創刊 25 周年を祝う特別号を 23 巻として発刊した。

今年度の課題と次年度の取り組み

本年度の大きな課題は、新規投稿数および継続投稿数の増加により、受付や編集作業の負担が大きくなったことである。それに伴い、一部に作業ミスも発生した。また、昨年度からの課題である投稿

者への結果報告の遅延については、査読者の査読結果提出の遅延が一因となっている。この対策として、査読が完了しなかった場合は、謝金を支払わないことを査読委員受諾の条件とし、大幅な遅延を防止する仕組みを導入することとした。これにより、査読の迅速化と受付担当者の負担軽減が期待される。

一方、投稿規定や執筆要項を十分に確認せずに投稿される不備の多い原稿が増加し、受付担当者の業務負担が増大している。対策として投稿チェックリストを導入しているものの、形骸化している側面がある。また、J-STAGEDataの利用は開始したものの、投稿者の認識不足により誤った形での登載希望が多く、十分に実用化されていない。さらに、この認識の相違による投稿者とのやり取りも、業務負担の増加要因となっている。

次年度は、第一に、受付業務の負担軽減に向けた取り組みを進める。具体的には、省略可能な作業の洗い出しを行い、投稿者との不要なやり取りを削減する。第二に、広報活動として、ジャーナルの特長を広く周知するため、J-STAGEの「看護科学研究」専用ページに本誌の特色を明記し、公開する。

9-5-2 6) 健康増進プロジェクトチーム

リーダー 稲垣敦

メンバー 荒木章裕、石丸智子、岩下恵子、小野治子、甲斐博美、桑野紀子、佐藤愛、篠原彩、秦さと子、田中佳子、濱中良志、樋口幸、姫野雄太、堀裕子、丸山加菜、森加苗愛、矢野亜紀子、山田貴子

当チームの目的は、本学の教育・研究を通しての地域貢献である（公立大学法人大分県立看護科学大学看護研究交流センター規程第1条）であり、分掌事項は、健康増進に寄与する地域貢献である（公立大学法人大分県立看護科学大学看護研究交流センター規程第3条）。

社会貢献・地域交流活動として、①横瀬地区社会福祉協議会主催「フリーマーケット」（6/2）、②大分市社会福祉協議会主催「世代間交流健康づくり事業」『スカットボール大会』（7/6、9/7、12/7、2/1）、③富士見が丘連合自治会主催「夏まつり」（7/20）、④富士見が丘団地わかば老人クラブ主催「わかば会サロン」（9/21）、⑤大分トリニータ「藤枝 MYFC 戦」（9/28）、⑥富士見が丘連合自治会主催「体育祭」、⑦大分県こころとからだの相談支援センター主催「大分アディクション（依存症）フォーラム」⑧野津原商工会・大分市主催「ななせの里まつり」（11/3）、⑨大分県教育委員会・大分県スポーツ協会主催「総合型地域スポーツクラブ交流会」（11/30）、⑩河川協力団体ななせ交流会主催「親子ふあげ大会」（1/25）、(11)九州陸上競技協会・大分県・大分県教育委員会・別府市・別府市教育委員会・大分市・大分市教育委員会・毎日新聞社・RKB 毎日放送・OBS 大分放送主催「別府大分毎日マラソン」（2/1）、(12)富士見が丘連合自治会・大分市主催「森林探検ウォーキング」（3/29）の12（15回）のイベントで学生延べ238名と共にイベントの運営や健康・体力チェック等の活動を行ない、本学の学外 HP、Facebook、Instagram に活動について掲載した。これらの活動は昨年よりも2イベント多く、参加学生も44名増加した。これにより、第4期中期計画の評価

指標【14】-2「県民の健康増進に資する活動の実施回数：年5回以上（第4期中毎年度）」は達成した。

第4期中期計画の【14】大分県民の健康増進に「公開講座、健康教室、健康相談、健康チェック等、県民の健康増進に資する活動を実施する。」とあり、次年度も自治体等と連携し、学生と教員が参加して、イベントの運営協力や健康・体力チェック等の活動を継続する。

9-5-2 7) 知的財産本部

本部長 稲垣敦

本部長 加藤典子、樋口幸、佐藤栄治、阿部剛、川島貴博（事務局）

知的財産本部の目的は、本学における発明等の研究成果の管理を行うとともに、これらの研究成果を法人の知的財産として保護育成及び活用することにより、社会の発展に寄与することを目的としており（公立大学法人大分県立看護科学大学知的財産本部規程第1条）、分掌事項は、(1)知的財産の管理に関すること、(2)知的財産の普及及び啓発に関すること、(3)知的財産の権利化に関すること、(4)知的財産の保護及び活用に関すること、(5)技術移転事業者その他の関係者との連携に関すること、(6)利益相反及び責務相反に関すること、(7)その他知的財産に関すること、である（公立大学法人大分県立看護科学大学知的財産本部規程第3条）。なお、本部の下に、発明審査委員会と利益相反委員会を設置している。

第4期中期計画【17】産学官連携の推進の中に「県内企業や行政との共同研究、受託研究を推進する。知的財産の管理や活用、共同研究の促進のための組織や仕組みを確立する。」という目標があるため、学術相談員取扱規程・学術相談約款、職務発明等における保証金に関する細則を策定し、第11回教育研究審議会（3月13日）に諮り、承認された。次年度6月の理事会・経営審議会に諮り、学術相談を開始する予定である。

次年度は、利益相反に関する申告について再検討する。

10 名簿

10-1 役員

理事長	学長	麻原きよみ
理事	事務局長	阿部剛
理事	学部長	福田広美
理事	研究科長	稲垣敦
理事（非常勤）	大分大学医学部附属病院長	三股浩光
理事（非常勤）	大分県立病院長	佐藤昌司
理事（非常勤）	富士甚醤油(株) 代表取締役社長	渡邊規生
監事（非常勤）	公益財団法人認知症の人と家族の会	
	大分県支部 代表	中野洋子
監事（非常勤）	公認会計士	福田安孝

10-2 審議会委員

経営審議会

学内委員	理事長	麻原きよみ
学内委員	理事	福田広美
学内委員	理事	稲垣敦
学内委員	理事	阿部剛
学内委員	理事（非常勤）	三股浩光
学内委員	理事（非常勤）	佐藤昌司
学内委員	理事（非常勤）	渡邊規生
学内委員	弁護士	千野博之
学内委員	日本文理大学学長室長	吉村充功
学内委員	大分合同新聞社取締役	小田圭之介
学内委員	大分県看護協会長	大戸朋子

教育研究審議会

学内委員	学長	麻原きよみ
学内委員	学部長	福田広美
学内委員	研究科長	稲垣敦
学内委員	事務局長	阿部剛
学内委員	生体科学教授	濱中良志
学内委員	生体反応学准教授	吉田成一
学内委員	人間関係学准教授	吉村匠平
学内委員	環境保健学准教授	小嶋光明

学内委員	健康情報科学教授	佐伯圭一郎
学内委員	言語学准教授	宮内信治
学内委員	基礎看護学教授	秦さと子
学内委員	看護アセスメント学教授	藤内美保
学内委員	成人看護学教授	古賀雄二
学内委員	老年看護学教授	小野美喜
学内委員	小児看護学教授	草野淳子
学内委員	母性看護学教授	濱耕子
学内委員	助産学教授	梅野貴恵
学内委員	精神看護学教授	影山隆之
学内委員	N P 講師	甲斐博美
学内委員	社会看護学教授	加藤典子
学内委員	地域看護学准教授	川南公代
学内委員	国際看護学教授	桑野紀子
学外委員	大分大学名誉教授	犀川哲典

10-3 教職員

10-3-1 専任教員

生体科学	教授	濱中良志	R6.4.1 採用
	助教	坪内優太	
生体反応学	准教授	吉田成一	
	准教授	定金香里	
健康運動学	教授	稲垣敦	
人間関係学	准教授	吉村匠平	
	准教授	関根剛	
環境保健学	非常勤助手	秋本慶子	
	准教授	小嶋光明	
健康情報科学	准教授	恵谷玲央	
	教授	佐伯圭一郎	
	准教授	品川佳満	
	助教	岡田悠希	
言語学	准教授	宮内信治	
基礎看護学	教授	秦さと子	
	准教授	石丸智子	
	助教	田中佳子	R6.4.1 採用
	助手	堤恒貴	
看護アセスメント学	臨時助手	神矢恵美	R7.3.31 退職
	教授	藤内美保	
	准教授	石田佳代子	R7.3.31 退職
	助教	山田貴子	
成人看護学	助教	内倉佑介	
	教授	古賀雄二	
	准教授	森加苗愛	
	助教	佐藤栄治	
	助教	岩下恵子	
	臨時助手	森崎久美	
老年看護学	教授	小野美喜	
	講師	堀裕子	
	助教	中釜英里佳	
	教授	草野淳子	
小児看護学	講師	足立綾	R6.6.1 採用
	臨時助手	阿万貴子	

母性看護学	教授	濱耕子	R6.4.1 採用
	助教	永松いずみ	
	助教	徳丸由布子	
助産学	教授	梅野貴恵	R6.4.1 採用
	准教授	樋口幸	
	助教	姫野綾	
精神看護学	臨時助手	宇留嶋佳子	R6.4.1 採用
	教授	影山隆之	
	准教授	杉本圭以子	
NP	助教	後藤成人	R6.4.1 採用 R7.3.31 退職
	講師	甲斐博美	
	講師	廣瀬福美	
看護管理学	非常勤助手	大島操	R7.1.1 採用
	非常勤助手	濱本房子	
	教授	福田広美	
社会看護学	講師	荒木章裕	R7.3.31 退職
	助教	姫野雄太	
	助教	矢野亜紀子	
地域看護学	教授	加藤典子	R7.3.31 退職
	准教授	川南公代	
	講師	小野治子	
国際看護学	講師	藤本優子	R7.3.31 退職
	助教	妻木美香	
	教授	桑野紀子	
看護研究交流センター	非常勤助手	大矢七瀬	R6.4.1 採用
	助教	篠原彩	

10-3-2 就職相談員

就職相談員	藤川桂子
-------	------

10-3-3 非常勤講師（学部）

小川伊作	音楽とところ
澤田佳孝	美術とところ
池田文恵	大学ナビ講座
竹永祐子	大学ナビ講座
Gerald Thomas Shirley	英語Ⅰ・B1、英語Ⅰ・B2、英語Ⅱ・B1、英語Ⅱ・B2 国際看護学演習
松田美香	言語表現法
黄昞峻	韓国語
平野亙	哲学入門、医療福祉と人権
大杉至	社会学入門
二宮孝富	法学入門（日本国憲法）
足立恵理	文化人類学入門
松本昂	微生物免疫論
林猪都子	母性看護学概論
松久美	災害看護学
麻生良太	教職概論、教育方法論
堀本フカエ	教職概論
横山秀樹	教職概論
赤星琴美	養護概論Ⅰ、養護概論Ⅱ
鈴木篤	教育学概論、道徳、総合的な学習及び特別活動
藤村晃成	生徒指導
飯田法子	教育相談
河野伸子	教育相談
中島暢美	教育相談
藤田文	学校教育心理学
今井航	教育課程論、教育制度論
手嶋康深	学校保健学
大渡文子	学校保健学
古賀精治	特別支援教育論

10-3-4 非常勤講師（大学院）

伊東朋子	基盤看護学演習
長谷川健美	NP 特論
村嶋幸代	NP 特論
庄山由美	NP 特論、NP 実践特論
光根美保	NP 特論、プライマリ NP 演習、NP 実践特論、 老年探究セミナー
岩崎正和	プライマリ NP 演習
小野智佳子	プライマリ NP 演習
清原小百合	プライマリ NP 演習
廣田真里	プライマリ NP 演習
上野聖子	プライマリ NP 演習
徳永尚子	プライマリ NP 演習、医療安全実践演習、老年探求セミナー
後藤愛	NP 実践特論
管谷愛美	NP 実践特論
高根利依子	NP 実践特論
伊東弘樹	臨床薬理学特論
龍田涼佑	臨床薬理学特論
松本康弘	臨床薬理学演習
大仲將美	臨床薬理学演習
高木繁薫	臨床薬理学演習
田中遼大	臨床薬理学特論
佐藤博	医療安全実践演習
田村委子	医療安全実践演習
古川雅英	医療安全実践演習
松久美	医療安全実践演習
山本真	医療安全実践演習
平井健一	医療安全実践演習、老年診察診断学特論
一万田正彦	老年疾病特論
糸永一朗	老年疾病特論
小坂聡太郎	老年疾病特論
木村成志	老年疾病特論
財前博文	老年疾病特論
佐分利能生	老年疾病特論
塩月成則	老年疾病特論
加隈哲也	診察診断学特論
中村雄介	診察診断学特論
安東優	診察診断学特論

永瀬公明	診察診断学特論
西水翔子	診察診断学特論
藤谷直明	診察診断学特論
溝口博本	診察診断学特論
宮崎美樹	診察診断学特論
宮川ミカ	老年アセスメント学演習
立川洋一	老年アセスメント学演習
糸永知代	小児疾病特論
井上真紀	小児疾病特論
井原健二	小児疾病特論
河野暢之	小児疾病特論
清田晃生	小児疾病特論
後藤洋徳	小児疾病特論
小林修	小児疾病特論
佐藤亮介	小児疾病特論
福永拙	小児疾病特論
保科隆之	小児疾病特論
前田知己	小児疾病特論
脇口宏之	小児疾病特論
原卓也	小児疾病特論、小児アセスメント演習
飯田浩一	周産期特論
後藤清美	周産期特論
小山尚子	周産期特論
豊福一輝	周産期特論
佐藤昌司	周産期特論、周産期診断技術演習
井上祥明	母子成育支援特論
上野桂子	母子成育支援特論
佐藤敬子	母子成育支援特論
平野互	母子成育支援特論、看護倫理学特論
宇津宮隆史	リプロダクティブ・ヘルス特論
大神達寛	リプロダクティブ・ヘルス特論
花田克浩	リプロダクティブ・ヘルス特論
穴井麻友美	リプロダクティブ・ヘルス特論
平川八大	リプロダクティブ・ヘルス特論
豆田ちかの	分娩期診断技術特論
生野末子	分娩期診断技術特論、助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
實崎美奈	ウイメンズヘルス特論

安部真紀	周産期診断技術演習、助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
川井梨沙	地域母子保健学特論、広域看護展開特論
内藤文子	地域母子保健学特論、広域看護展開特論
戸高佐枝子	助産マネジメント論
川崎涼子	広域看護学概論 I
藤内修二	広域看護学概論 I、疾病予防学特論
高波利恵	産業保健特論
吉田愛	産業保健特論
玉井文洋	健康危機管理論
本山秀樹	健康危機管理論
藤野里紗	広域看護アセスメント学演習
池邊淑子	疾病予防学特論
三浦源太	疾病予防学特論
井上真	薬剤マネジメント特論
黒川竜紀	病態生理学特論
黒木雪絵	フィジカルアセスメント学特論
大田えりか	看護科学研究、健康科学研究特論
甲斐仁美	看護管理学特論
山崎清男	看護教育学特論
竹村陽子	看護コンサルテーション論
小池智子	看護政策論
小山秀夫	看護政策論
立森久照	看護政策論
中西三春	看護政策論
江口春彦	診察診断学特論
長濱明日香	診察診断学特論
別府幹庸	診察診断学特論
中村朋子	診察診断学特論
Gerald Thomas Shirley	英語論文作成概論
甲斐倫明	放射線健康科学、特別演習
安部眞佐子	健康増進科学特論、健康増進技術演習、妊娠期診断技術特論

10-3-5 事務職員

総務グループ	局長	阿部剛	R6.4.1	採用
	主幹	川島貴博	R6.4.1	採用
	副主幹	吉野美穂		
	主任	安部翼		
	事務員	木下明美	R7.1.31	退職
	事務員	花木真弓		
	事務員	木村水紅		
国際交流アドバイザー				
Gerald Thomas Shirley				
知的財産アドバイザー				
財務グループ		松下幸之助		
	主幹	小野逸郎		
	副主幹	那須龍則	R6.4.1	採用
			R7.3.31	転出
教務学生グループ	主任	久保絃子		
	事務員	岸田美由紀		
	主幹	角渕直美	R6.4.1	採用
			R7.3.31	転出
	副主幹	佐藤英	R7.3.31	転出
	主査	神崎正太		
	主事	葛城奈穂	R6.4.1	採用
図書館管理グループ	事務員	久保友恵		
	保健室職員	安東悦子	R6.7.31	退職
	保健室職員	時松美香	R6.8.19	採用
	サブリーダー	白川裕子		
	非常勤司書	中野智子		
	非常勤司書	甲斐史織		
	事務員	神崎純子		